918.6-G34イウ
1200500759120

始

36.5.11

夏目漱石集

杉浦非水裝幀

改造社版

帝國圖書館藏
納本
918.6
G34k
(19)
昭和二、六、二九、内交

夏目漱石と
その筆蹟

555-43

「夏目漱石集」目次

卷頭寫眞（筆蹟・面影）

小傳

吾輩は猫である抄……三
倫敦塔……六〇
カーライル博物館……七一
薤露行……七六
坊つちやん……九一
草枕……一五三

文鳥……二一四
永日小品抄……二二三
元日……二二三
泥棒……二二四
火鉢……二二五
猫の墓……二二七
行列……二二八
下宿……二二九
過去の匂ひ……二三一
暖かい夢……二三三
霧……二三四
昔……二三五
クレイグ先生……二三六
修善寺日記……二四一
思ひ出す事など抄……二六九
ケーベル先生……二七七
硝子戸の中抄……二八〇
道草……二九五

「夏目漱石集」の後に……小宮豊隆……四〇八
著作年表……四一三

漱石先生小傳

先生は慶應三年正月五日牛込の馬場下で生れ大正五年十二月九日年五十で早稲田南町七番地で亡くなつた。その亡くなつた所と生れ且つ育つた所とは、僅か四五町の一筋道で繋がつてゐる、同じ牛込區内であつた。明治四十年の秋、先生が本郷の西片町から早稲田へ越して来た時にも、思ひなしか、先生にはある特別な感情が動いてゐるらしく見えた。亡くなる前年に、先生は『硝子戸の中』の中や『道草』の中で、自分の子供の時分の思ひ出を色々に書いてゐるが、是も先生がその牛込の然も生れた場所に近く住んでゐるといふ事實の意識が、さういふ事を思ひ出させる力強い機縁の一つにはなつてゐたに違ひない。

然し先生の幼年時代は、決して幸福だとは言はれなかつた。二女三男の後に生れて、先生は親からの愛情を人並に享受する事が出来なかつた。先生はすぐ里子に出された。また間もなく養子にやられた。是がどういふ印象を先生の心に與へ、また其後先生にどういふ因縁をつくつたかは、事細かに『道草』が我我に物語つてくれる。先生が生家に歸つて来たのは七つの年である。さうして籍がちやんと復つて来たのは、先生の二十二の年である。さうしてこの年の七月に先生は、第一高等中學校の豫科を卒業して、本科に入學する事になつた。

正岡子規は作家夏目漱石を作り上げる上に必要缺くべからざる存在であつた。春秋流に言へば、正岡子規がなかつたら作家夏目漱石は存在しなかつたかも知れない。先生がその正岡さんと知り合ひになつたのは、凡そ此時分の事の様である。

先生は大學を卒業してから松山に行つた、それから熊本へ行つた、熊本からロンドンへ行つた。ロンドンから歸つて東京に住む様になつてから、正岡さんの弟子の高濱さんと正岡さんの残して行つた雜誌「ホトトギス」とが、先生洋行中に亡くなつた正岡さんの代理を勤めて、先生に小説を書かせ出した。それが『吾輩は猫である』である。後に先生が、俺は何でも自分で進んでやつた事がない、發句を作るのも文章をかくのも小説を作るのも、みんな人から勧められてやり出した事だ、と言つてゐたが、まつたくそれに違ひないと思ふ。その點で先生ほど内氣な人はなかつた。さう言へば畫をかくのも、元はといふと、或は橋口さんなどから勧められて始めたものかも知れない。

先生が大學を止めて「朝日新聞」に這入つてからの事は、到る所で書かれ、誰でも知つてゐる事であるから、別に書かない。唯修善寺での大吐血は、先生の内生活に大回轉を與へた意味で、非常に重大な事件であつたといふ事丈を此所では注意するに止めて置きたいと思ふ。先生はその後殆んど毎年の様に胃潰瘍に見舞はれた。さうして最後にはその爲めに命をとられた。先生はその縁起を、天からの音づれの様にも感じてゐたのではないかとも想像される。先生は、人を責めるより前に自分を責めようとする様に、人を憎むよりも前に先づ人を愛さうとする様に、さうして、ひつくるめて人間を離れて自然に即かうとする様に、心持が段々に變つて行つた。その心持の光を最初に感じさせるものは、先生の修善寺の日記である。また『思ひ出す事など』である。

昭和二年五月　小宮豊隆

吾輩は猫である（抄）

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニャー〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くと、それは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考へもなかつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ〳〵した感じが有つた計りである。掌の上で少し落ち附いて書生の顔を見たが、所謂人間といふものゝ見始めであらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て装飾されべき筈の顔がつる〳〵して丸で薬罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會した事がない。加之顔の眞中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも咽つぽくて實に弱つた。是が人間の呑む煙草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫らくすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るが、あとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が附いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。はてな、何でも容子が可笑しいと、のそ〳〵這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つて、どうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫らくして泣いたら書生が又迎ひに来てくれるかと考へ附いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。其内池の上をさら〳〵と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて来た。泣き度くても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をして、そろり〳〵[illegible]廻り始めた。どうも[illegible]事で何[illegible]慢して無理やりに這[illegible]入つたらどとなく人間臭い所へ出た。[illegible]うにかなると思つて、[illegible]れた穴からとある邸内にもぐり込んだ。[illegible]不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偖邸へは忍び込んだもの丶、是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末で、もう一刻も猶豫が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つてたのだ。こゝで吾輩は

彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で、吾輩を見るや否や、いきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから、眼をねぶつて、運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上がつた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上がり、這ひ上がつては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偸んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、此家の主人が騷々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて、此宿なしの小猫がいくら出しても出してもお臺所へ上がつて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黑い毛を撚りながら吾輩の顏を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を利かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顏を合せる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆ど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寢をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黃色を帶びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ね附けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寢をするときは必ず其背中に乘る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから已むを得んのである。其後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は椽側へ寢る事とした。然し一番心持ちの好いのは夜に入つてこゝのうちの子供の寢床へもぐり込んで一所にねる事である。此子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寢る。吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。子供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が來た／＼といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て杯は物差で尻べたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いだら、細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君杯は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の樣な子猫を四疋産まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤もの議論と思ふ。又隣の三毛君抔は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鯔の臍でも一番先に見附けたものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日々々が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をしよう。元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつて「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を「明星」へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴァイオリン杯をブー／＼鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居らん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張り是は平の宗盛にて候を繰り返して居る。皆がそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考へになつたものか、吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと、水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で、今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日毎日書齋で晝寢もしないで繪許りかいて居る。然し其のかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に、下の樣な話しをして居るのを聞いた。

「どうも旨くかけないものだね。人のを見ると何でもない樣だが、自ら筆をとつて見ると今更の樣に六づかしく感ずる」是は主人の述懷である。成程詐りのない處だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顏を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ。第一室内の想像計りで畫がかける譯のものではない。昔以太利の大家アンドレア デル・サルトが言つた事がある。畫

をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も畫らしい畫をかかうと思ふなら、ちと寫生をしたら」「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲る樣な笑ひが見えた。

其翌日吾輩は例の如く椽側に出て心持善く晝寢をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て、吾輩の後で何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んで居る。吾輩は此有樣を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手始めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寢た。欠伸がしたくて堪らない。然し折角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思うてぢつと辛抱して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顏のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出來ではない。脊といひ毛並といひ顏の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある樣な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入の皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黑でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寢て居る所を寫生したのだから無理もないが、眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寢て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでも是では仕樣がないと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度いと思つたが、さつきから小便が催して居る。身内の筋肉はむづ〳〵する。最早一分も猶豫が出來ぬ仕儀となつたから、不得已失敬して兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壞したのだから、序に裏へ行つて用をたさうと思つてのそ〳〵這ひ出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた樣な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に惡口の言ひ樣を知らないのだから仕方がないが、今迄辛抱した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼ばはりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乘る時に少しは好い顏でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じてみんな増長して居る。少し人間より強いものが出て來て窘めてやらなくては此先どこ迄増長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが、吾輩は人間の不德について是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當たる所だ。うちの子供があまり騷いで樂々晝寢の出來ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折抔は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふの

が例である。ある小春の穩やかな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯後快く一睡した後、運動かた〴〵この茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本々々嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寢て居る。彼は吾輩の近附くのも一向心附かざる如く、又心附くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と體を横たへて眠つて居る。他の庭内に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かに其の大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黑猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら〳〵する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる樣に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が杉垣の上から出たる梧桐の枝を輕く誘つて、ばら〳〵と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奧から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえは一體何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが、何しろ其聲の底に犬をも挫ぐべき力が籠つて居るので、吾輩は少からず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平氣を裝つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臟は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大いに輕蔑せる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきれらあ。全てえ何處に住んでるんだ」隨分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事たらうと思つた。いやに瘠せてるぢやねえか」と大王丈に氣焔を吹きかける。言葉附から察すると、どうも良家の猫とも思はれない。然し其膏ぎつて肥滿して居る所を見ると、御馳走を食つてるらしい、豐かに暮らして居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一體誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己や車屋の黑よ」昂然たるものだ。車屋の黑は此近邊で知らぬ者なき亂暴猫である。然し車屋丈に強いばかりでちつとも教育がないから、あまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無學であるかを試して見ようと思つて、左の問答をして見た。

「一體車屋と教師とはどつちがえらいだらう」

「車屋の方が強いに極まつて居らあな、おめえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えるね」

「何おれなんざ、どこの國へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。おめえなんかも茶畠ばかりぐる〳〵廻つて居ねえで、ちつと己の後へくつ附いて來て見ねえ。一と月たたねえうちに見違へる樣に太れるぜ」

「追つてさう願ふ事にしよう。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る樣に思はれる」

「箆棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」

彼は大いに肝癪に障つた樣子で、寒竹をそいだ樣な耳を頻りとぴく附かせてあらゝかに立ち去つた。吾輩が車屋の黑と知己になつたのはこれからである。

其後吾輩は度々黑と邂逅する。邂逅する毎に

彼は車屋相當の氣燄を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不徳事件も實は黒から聞いたのである。

或日例の如く吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寢轉びながら色々雜談をして居ると、彼はいつもの自慢話を左も新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「おめえは今迄に鼠を何匹とつた事がある」知識は黒より餘程發達して居る積りだが、腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たもの丶、此問に接した時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらう〳〵と思つてまだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つて居る長い髭をびり〳〵と震はせて非常に笑つた。元來黒は自慢する丈にどこか足りない所があつて、彼の氣燄を感心した樣に咽喉をころ〳〵鳴らして謹聽して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近附になつてから直に此呼吸を飲み込んだから、此場合にもなまじひ己を辯護して益形勢をわるくするのも愚である。いつその事、彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君抔は年が年であるから大分とつたらう」とそゝのかして見た。果然彼は墻壁の缺所に吶喊して來た。「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつゞけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつて奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這ひ込んだらおめえ、大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども、何、鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生つて氣で追つかけてとう〳〵泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまく遣つたね」と喝采してやる。「所がおめえ、いざつてえ段になると奴め、最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて、夫からつてえものはいたちを見ると胸が惡くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻した。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を附けてやらうと思つて、「然し鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は餘り鼠を捕るのが名人で、鼠計り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとる爲の此質問は不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰まらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて――一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから其たんびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹圓五十錢位儲けて居やがる癖に、碌なものを食はせた事もありやしねえ。おい、人間てものあ體の善い泥棒だぜ」さすが無學の黒も此位の理窟はわかると見えて、頗る怒つた容子で背中の毛を逆立てゝ居る。吾輩は少々氣味が惡くなつたから善い加減に其場を胡魔化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寢て居た方が氣樂でいゝ。教師の家に居ると猫も教師の樣な性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩畫に於て望みのない事を悟つたものと見

えて、十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○と云ふ人に今日の會で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが、成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ質の人は女に好かれるものだから○○が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の細君は藝者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を惡くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は餘儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩畫に於けるが如きもので、到底卒業する氣づかひはない。然るにも關せず、自分丈は通人だと思つて澄まして居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩畫家になり得る理窟だ。吾輩の水彩畫の如きはかゝない方がましであると同じ樣に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又藝者の細君を羨ましい抔といふ所は教師としては口にすべからざる愚劣の考へであるが、自己の水彩畫に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも關せず、其自惚心は中々拔けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩畫をかいて到底物にならんと思つて、そこらに拋つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて呉れた夢を見た。偖て額になつた所を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと獨りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて、矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩畫の未練を背負つてあるいて居ると見える。是では水彩畫家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩畫を夢に見た翌日、例の金縁眼鏡の美學者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「畫はどうかね」と口を切つた。主人は平氣な顔をして「君の忠告に從つて寫生を力めて居るが、成程寫生をすると今迄氣のつかなかつた物の形や、色の精細な變化抔がよく分る樣だ。西洋では昔から寫生を主張した結果今日の樣に發達したものと思はれる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア・デル・サルトに感心する。美學者は笑ひながら「實は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ飜弄された事に氣がつかない。「何がつて君の頻りに感服して居るアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに眞面目に信じようとは思はなかつた、ハヽヽヽ」と大喜悦の體である。吾輩は椽側で此對話を聞いて、彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと豫め想像せざるを得なかつた。此美學者はこんな好い加減な事を吹き散らして人を擔ぐのを唯一の樂しみにして居る男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線に如何なる響を傳へたかを毫も顧慮せざるものゝ如く、得意になつて下の樣な事を饒舌つた。

「いや時々冗談を言ふと人が眞に受けるので、大いに滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達てある學生にニコラス・ニックルビーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる佛國革命史

を佛語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、其學生が又馬鹿に記憶のよい男で、日本文學會の演說會で眞面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。所が其時の傍聽者は約三百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聽して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達て或文學者の居る席でハリソンの歷史小說セオファーノの話が出たから、僕はあれは歷史小說の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲ふ樣だと評したら、僕の向うに坐つて居る知らんと云つた事のない先生が、さう〳〵あすこは實に名文だといつた。それで僕は此男も矢張り僕同樣此小說を讀んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして問ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が讀んで居たらどうする積りだ」恰も人を欺くのは差し支へない、只化の皮があらはれた時は困るぢやないかと感じたものゝ如くである。美學者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ許りさ」と云つてげら〳〵笑つて居る。此美學者は金縁の眼鏡は掛けて居るが、其性質が車屋の黑に似た所がある。主人は默つて「日の出」を輪に吹いて、吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顏をして居る。美學者はそれだから畫をかいても駄目だといふ目附で、「然し冗談は冗談だが、畫といふものは實際六づかしいものだよ。レオナルド・ダ・ヸンチは門下生に寺院の壁のしみを寫せと敎へた事があるさうだ。なる程雪隱抔に這入つて雨の漏る壁を餘念なく眺めて居ると、中々うまい模樣畫が自然に出來て居るぜ。君、注意して寫生して見給へ、屹度面白いものが出來るから」「又欺すのだらう」「いえ是丈は慥かだよ。實際奇警な語ぢやないか、ヸンチでもいひさうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降參をした。然し彼はまだ雪隱で寫生はせぬ樣だ。

車屋の黑は其後跛になつた。彼の光澤ある毛は漸々色が褪めて拔けて來る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著しく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈と其體格の惡くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら、「いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲り〳〵だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つて、つくばひに近く代る〳〵花瓣をこぼした紅白の山茶花も殘りなく落ち盡した。三間半の南向の椽側に冬の日脚が傾いて木枯の吹かない日は殆ど稀になつてから、吾輩の晝寢の時間も狹められた樣な氣がする。

主人は每日學校へ行く。歸ると書齋へ立て籠る。人が來ると、敎師が厭だ〳〵といふ。水彩畫も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも功能がないといつてやめて仕舞つた。子供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。歸ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先づ〳〵健康で跛にもならずに其日々々を暮らして居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまだつけて吳れないが、慾をいつても際限がないから生涯此敎師の家で無名の猫で終る積りだ。

二

吾輩は新年來多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の繪葉書が來た。是は彼の交友某畫家からの年始狀であるが、上部を赤、下部を深緑で塗つて、其の眞中に一の動物が蹲踞つて居る所をパステルでかいてある。主人は例の書齋で此繪を横から見たり、

竪から眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと、矢張り横から見たり、縱から見たりして居る。からだを拗ぢ向けたり、手を伸ばして年寄が三世相を見る樣にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて來たりして見て居る。早くやめて吳れないと膝が搖れて險呑でたまらない。漸くの事で動搖が餘り劇しくなくなつたと思つたら、小さな聲で一體何をかいたのだらうと云ふ。主人は繪端書の色には感服したが、かいてある動物の正體が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ繪端書かと思ひながら、寢て居た眼を上品に半ば開いて、落ち附き拂つて見ると紛れもない自分の肖像だ。主人の樣にアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、畫家丈に形體も色彩もちやんと整つて出來て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない、吾輩である事が判然とわかる樣に立派に描いてある。この位明瞭な事を分らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら其繪が吾輩であると云ふ事を知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であるといふ事丈は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫族の言語を解し得る位に天の惠に浴して居らん動物であるから、殘念ながら其儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに輕侮の口調を以て吾輩を評價する癖があるは甚だよくない。人間の糟から牛と馬が出來て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは、自分の無智に心附かんで高慢な顏をする敎師抔には有り勝ちの事でもあらうが、はたから見て餘り見つともいゝものぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出來ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別、どの猫も自家固有の特色抔はない樣であるが、猫の社會に這入つて見ると中々複雜なもので、十人十色といふ人間界の語は其儘こゝにも應用が出來るのである。目附でも、鼻附でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髭の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減に至る迄同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粹無粹の數を盡して千差萬別と云つても差し支へない位である。其樣に判然たる區別が存して居るにも關はらず、人間の眼は只向上とか何とかいつて、空ばかり見て居るものだから、吾等の性質は無論、相貌の末を識別する事すら到底出來ぬのは氣の毒だ。同類相求むとは昔からある語ださうだが、其通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事なら矢張り猫でなくては分らぬ。いくら人間が發達したつて是計りは駄目である。況んや實際をいふと彼等が自ら信じて居る如くえらくも何ともないのだから猶更六づかしい。又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を殘りなく解するといふが愛の第一義であるといふことすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の惡い牡蠣の如く書齋に吸ひ附いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分丈は頗る達觀した樣な面構へをして居るのは一寸可笑しい。達觀しない證據には、現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた樣子もなく、今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらう抔と氣の知れぬことをいつて澄まして居るのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら斯く考へて居ると、やがて下女が第二の繪端書を持つて來た。見ると活版で、舶來の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉强をして居る。その内の一疋は席を離れ

て机の角で西洋の猫ぢや猫ぢやを踊つて居る。其上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に、書を讀むや踊るや猫の春一日といふ俳句さへ認められてある。是は主人の舊門下生より來たので、誰が見たつて一見して意味がわかる筈であるのに、迂濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議さうに首を捻つて、はてな、今年は猫の年かなと獨り言をいつた。吾輩が是程有名になつたのを未だ氣が着かずに居ると見える。

所へ下女が又第三の端書を持つてくる。今度は繪端書ではない。恭賀新年とかいて、傍に乍恐縮かの猫へも宜しく御傳聲奉願上候とある。如何に迂遠な主人でも、から明らさまに書いてあれば分るものと見えて、漸く氣が附いた樣にフンと云ひながら吾輩の顏を見た。其眼附が今迄とは違つて多少尊敬の意を含んで居る樣に思はれた。今迄世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば、此位の眼附は至當だらうと考へる。

折柄門の格子がチリン、チリン、チリ、、、、ンと鳴る。大方來客であらう。來客なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めて居るのだから、平氣で、もとの如く主人の膝に坐つて居つた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれた樣に不安な顏附をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間も此位偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのに、夫程の勇氣も無い。愈牡蠣の根性をあらはして居る。しばらくすると下女が來て、寒月さんが御出でになりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに來る。來ると自分を戀つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、詰まらなさうな、凄い樣な、艶つぽい樣な文句許り並べては歸る。主人の樣なしなび懸けた人間を求めて、態々こんな話をしに來るからして合點が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのは猶面白い。

「暫らく御無沙汰をしました。實は去年の暮から大いに活動して居るものですから、出よう出ようと思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た樣な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は眞面目な顏をして、黒木綿の紋附羽織の袖口を引つ張る。此羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら物が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エヘ、、少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前齒が一枚缺けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を轉じた。「えゝ實はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて?」「其の、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前齒で噛み切らうとしたらぼろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前齒がかけるなんざ、何だか爺臭いね。俳句にはなるかも知れないが、戀にはならん樣だな」と平手で吾輩の頭を輕く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてるぢやありませんか、夫なら車屋の黒にだつて負けさうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大いに吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽか〳〵なぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏會をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで?」「どこでも、そりや御聞きならんでもよいでせう。ヴァイオリンが三挺とピヤノの伴奏で中々面白かつたです。ヴァイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるもの

ですね。二人は女で、私が其中へまじりましたが、自分でもよく彈けたと思ひました」「ふん、そして其女といふのは何者かね」と主人は羨ましさうに問ひかける。元來主人は平常枯木寒巖の樣な顏附はして居るものゝ實の所は決して婦人に冷淡な方ではない。嘗て西洋の或小説を讀んだら、其中にある一人物が出て來て、其が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には戀着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは眞理だと感心した位な男である。そんな浮氣な男が何故牡蠣的生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫抔には到底分らない。或人は失戀の爲だとも云ふし、或人は胃弱のせゐだとも云ふし、又或人は金がなくて臆病な性質だからだと云ふ。どつちにしたつて明治の歴史に關係する程な人物でもないのだから構はない。然し寒月君の女連れを羨まし氣に尋ねた事丈は事實である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挾んで半分前齒で食ひ切つた。吾輩は又缺けはせぬかと心配したが、今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令孃ですよ、御存じの方ぢやありません」と餘所々々しい返事をする。「ナール」と主人は引つ張つたが「程」を略して考へて居る。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか、「どうも好い天氣ですな、御閑なら御一所に散歩でもしませうか、旅順が落ちたので市中は大變な景氣ですよ」と促して見る。主人は旅順の陷落より女連れの身元を聞きたいと云ふ顏で、しばらく考へ込んで居たが、漸く決心をしたものと見えて、「それぢや出るとしよう」と思ひ切つて立つ。矢張り黒木綿の紋附羽織に、兄の記念とかいふ二十年來着古した結城紬の綿入を着たまゝである。いくら結城紬が丈夫だつて、から着つゞけではたまらない。所々が薄くなつて、日に透かして見ると裏からつぎを當てた針の目が見える。主人の服裝には師走も正月もない。ふだん着も餘所ゆきもない。出るときは懷手をしてぶらりと出る。外に着る物がないからか、有つても面倒だから着換へないのか、吾輩には分らぬ。但し此丈は失戀の爲とも思はれない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩は一寸失敬して寒月君の食ひ切つた蒲鉾の殘りを頂戴した。吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偸んだ猫位の資格は充分あると思ふ。車屋の黒抔は固より眼中にない。蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼此云はれる事もなからう。それに此の人目を忍んで間食するといふ癖は、何も吾輩猫族に限つた事ではない。うちのお三抔はよく細君の留守中に餅菓子抔を失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬して居る。お三許りぢやない。現に上品な仕附を受けつゝあると細君から吹聽せられて居る小兒ですら此傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の子供が馬鹿に早くから眼を覺まして、まだ主人夫婦の寢て居る間に、對ひ合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食ふ麺麭の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。いつもの樣に砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくひ出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。暫らく兩人は睨み合つて居たが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に加へた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見てる間に一杯一杯と重なつて、遂には兩人の皿には山盛

の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も餘つて居らん樣になつたとき、主人が寢ぼけ眼を擦りながら寢室を出て、切角しやくひ出した砂糖を元の如く壺の中へ入れて仕舞つた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る樣だ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めて仕舞へばいいにと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事抔は通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から默つて見物して居た。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、其晩遲く歸つて來て、翌日食卓についたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拜見して居ると、主人はだまつて雜煮を食つて居る。代へては食ひ、代へては食ふ。餅の切は小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切を椀の中へ殘して、もうよさうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、中々承知しないのであるが、主人の威光を振り廻して得意なる彼は、濁つた汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平氣で澄まして居る。細君が袋戸の奧からタカヂヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」といふ。「でもあなた、澱粉質のものには大變功能があるさうですから、召し上がつたらいゝでせう」と飲ませたがる。「澱粉だらうが何だらうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が獨り言の樣にいふ。「厭きつぽいのぢやない、藥が利かんのだ」「それだつて先達て中は大變によく利く〳〵と仰しやつて毎日々々上がつたぢやありませんか」「此間うちは利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と對句の樣な返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある藥でも利く氣遣ひはありません。もう少し辛抱が能くなくつちやあ胃弱なんぞは外の病氣たあ違つて直らないわねえ」と御盆を持つて控へたお三を顧る。「それは本當の所で御座います。もう少し召し上がつて御覽にならないと、とても善い藥か惡い藥かわかりますまい」とお三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいゝ、飲まんのだから飲まんのだ。女なんかに何がわかるものか、默つて居ろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカヂヤスターゼを主人の前へ突き附けて、是非詰腹を切らせようとする。主人は何も云はず立つて書齋へ這入る。細君とお三は顏を見合はせてにや〳〵と笑ふ。こんなときに後からくつ附いて行つて膝の上へ乘ると、大變な目に逢はされるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側へ上がつて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云ふ人の本を披いて見て居つた。もしそれが平常の通りわかるなら一寸えらい所がある。五六分すると其本を叩き附ける樣に机の上へ抛り出す。大方そんな事だらうと思ひながら猶注意して居ると、今度は日記帳を出して下の樣な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田邊を散歩、池の端の待合の前で藝者が裾模樣の春着をきて羽根をついて居た、衣裝は美しいが顏は頗るまづい。何となくうちの猫に似て居た。

何も顏のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よささうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顏さへ剃つて貰やあ、そんなに人間と異つた所はありやしない。人間はかう自惚れて居るから困る。

寶丹の角を曲がると、又一人藝者が來た。是は脊のすらりとした撫肩の恰好よく出來上がつた女で、着て居る薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひながら「源ちやん昨夕は——つ

い忙しかつたもんだから」と云つた。但し其聲は旅鴉の如く皺枯れて居つたので、折角の風采も大いに下落した樣に感ぜられたから、所謂源ちやんなるものの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懷手の儘御成道へ出た。寒月は何となくそは〳〵して居る如く見えた。

人間の心理程解し難いものはない。此主人の今の心は怒つて居るのだか、浮かれて居るのだか、又は哲人の遺書に一道の慰安を求めつゝあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑して居るのか、世の中へ交りたいのだか、くだらぬ事に肝癪を起こして居るのか、物外に超然として居るのだか、薩張り見當が附かぬ。猫抔はそこへ行くと單純なものだ。食ひ度ければ食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶體絶命に泣く。第一日記抔といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の樣に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行屎送尿、悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手數をして、己の眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寐て居る迄の事さ。

神田の某亭で晩餐を食ふ。久し振りで正宗を二三杯飲んだら今朝は胃の具合が大變いゝ。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカヂヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

無暗にタカヂヤスターゼを攻撃する。獨りで喧嘩をして居る樣だ。今朝の肝癪がちよつと此所へ尾を出す。人間の日記の本色は斯う云ふ邊に存するのかも知れない。

先達て○○は朝飯を廢すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが、腹がぐう〳〵鳴る許りで功能はない。△△は是非香の物を斷てと忠告した。彼の說によると凡て胃病の原因は漬物にある。漬物さへ斷てば胃病の源を涸らす譯だから本復は疑ひなしといふ論法であつた。夫から一週間許り香の物に箸を觸れなかつたが、別段の驗も見えなかつたから、近頃は又食ひ出した。××に聞くとそれは按腹揉療治に限る。但し普通のではゆかぬ。皆川流といふ古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出來る。安井息軒も大變此按摩術を愛して居た。坂本龍馬の樣な豪傑でも時々は治療をうけたと云ふから、早速上根岸迄出掛けて揉まして見た。所が骨を揉まなければ癒らぬとか、臟腑の位置を一度顚倒しなければ根治がしにくいとかいつて、それは〳〵殘酷な揉み方をやる。後で身體が綿の樣になつて昏睡病にかゝつた樣な心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形體を食ふなといふ。夫から、一日牛乳計り飲んで暮らして見たが、此時は腸の中でどぼりどぼり音がして大水でも出た樣に思はれて終夜眠れなかつた。B氏は横膈膜で呼吸して內臟を運動させれば自然と胃の働きが健全になる譯だから試しにやつて御覽といふ。是も多少やつたが何となく腹中が不安で困る。夫に時々思ひ出した樣に一心不亂にかゝりはするものゝ五六分立つと忘れて仕舞ふ。忘れまいとすると横膈膜が氣になつて本を讀む事も文章をかく事も出來ぬ。美學者の迷亭が此體を見て、產氣のついた男ぢやあるまいし、止すがいゝと冷かしたから、此頃は廢してしまつた。C先生は蕎

麥を食つたらよからうと云ふから、早速かけともりをかはる／＼食つたが、此は腹が下る計りで何等の功能もなかつた。余は年來の胃弱を直す爲に出來得る限りの方法を講じて見たが凡て駄目である。只昨夜寒月と傾けた三杯の正宗は慥かに利目がある。是からは毎晩二三杯宛飲む事にしよう。

これも決して長く續く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球の樣に間斷なく變化して居る。何をやつても永持ちのしない男である。其上日記の上で胃病をこんなに心配して居る癖に、表向は大いに痩我慢をするから可笑しい。先達て其友人で某といふ學者が尋ねて來て、一種の見地から凡ての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果に外ならないと云ふ議論をした。大分研究したものと見えて、條理が明晰で秩序が整然として立派な說であつた。氣の毒ながらうちの主人抔は到底之を反駁する程の頭腦も學問もないのである。然し自分が胃病で苦しんで居る際だから、何とかかんとか辯解をして自己の面目を保たうと思つた者と見えて、「君の說は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」と恰もカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つた樣な、見當違ひの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め附けたので主人は默然として居た。かくの如く虛榮心に富んで居るものゝ實際は矢張り胃弱でない方がいゝと見えて、今夜から晚酌を始める抔といふのは一寸滑稽だ。考へて見ると今朝雜煮をあんなに澤山食つたのも昨夜寒月君と正宗を引つくり返した影響かも知れない。吾輩も一寸雜煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫であるが大抵のものは食ふ。車屋の黑の樣に橫丁の肴屋迄遠征をする氣力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛の樣に贅澤は無論云へる身分でない。從つて存外嫌ひは少い方だ。子供の食ひこぼした麵麭も食ふし、餅菓子の餡もなめる。香の物は頗るまづいが經驗の爲め澤庵を二切許りやつた事がある。食つて見ると妙なもので大抵の物は食へる。あれは厭だ、是は厭だと云ふのは贅澤な我儘で、到底教師の家に居る猫抔の口にすべき所でない。主人の話しによると佛蘭西にバルザックといふ小說家があつたさうだ。此男が大の贅澤屋で——尤も是は口の贅澤屋ではない、小說家丈に文章の贅澤を盡したといふ事である。バルザックが或日自分の書いて居る小說中の人間の名をつけようと思つて色々つけて見たが、どうしても氣に入らない。所へ友人が遊びに來たので一所に散步に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼て自分の苦心して居る名を目附けようといふ考へだから、往來へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て步行いて居る。所が矢張り氣に入つた名がない。友人を連れて無暗にあるく。友人は譯がわからずにくつ附いて行く。彼等は遂に朝から晚迄巴理を探檢した。其歸りがけにバルザックは不圖ある裁縫屋の看板が目についた。見ると看板にマーカスといふ名がかいてある。バルザックは手を拍つて「是だ／＼是に限る。マーカスは好い名ぢやないか。マーカスの上へＺといふ頭文字をつける、すると申し分のない名が出來る。Ｚでなくてはいかん。Z. Marcus は實にうまい。どうも自分で作つた名はうまくつけた積りでも何となく故意とらしい所があつて面白くない。漸くの事で氣に入つた名が出來た」と、友人の迷惑は丸で忘れて、一人嬉しがつたといふが、小說中の人間の名前をつけるに一日巴理を探檢しなくてはならぬ樣では隨分手數のかゝる話だ。贅澤も此位出來れば結構なものだが、吾輩の樣に牡蠣的主人を

持つ身の上ではとてもそんな氣は出ない。何でもいゝ食へさへすれば、といふ氣になるのも境遇の然らしむる所であらう。だから今雜煮が食ひ度くなつたのも決して贅澤の結果ではない。何でも食へる時に食つて置かうといふ考へから、主人の食ひ剩した雜煮がもしや臺所に殘つて居はすまいかと思ひ出したからである。……

臺所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着して居る。白狀するが餅といふものは今迄一返も口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、又少しは氣味がわるくもある。前足で上にかゝつて居る菜つ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛かつてねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時の樣な香がする。食はうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰も居ない。おさんは暮も春も同じ樣な顏をして羽根をついて居る。子供は奥座敷で「何と仰しやる兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もし此機をはづすと來年迄は餅といふものゝ味を知らずに暮らして仕舞はねばならぬ。吾輩は此刹那に猫ながら一の眞理を感得した。「得難き機會は凡ての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ。」吾輩は實を云ふとそんなに雜煮を食ひ度くはないのである。否椀底の樣子を熟視すればする程氣味が惡くなつて、食ふのが厭になつたのである。此時もしお三でも勝手口を開けたなら、奥の子供の足音がこちらへ近附くのを聞き得たなら、吾輩は惜し氣もなく椀を見棄てたらう。しかも雜煮の事は來年迄念頭に浮ばなかつたらう。所が誰も來ない、いくら躊躇して居ても誰も來ない。早く食はぬか食はぬかと催促される樣な心持がする。吾輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か來てくれゝばいゝと念じた。矢張り誰も來てくれない。吾輩はとう／＼雜煮を食はなければならぬ。最後にからだ全體の重量を椀の底へ落とす樣にして、あぐりと餅の角を一寸許り食ひ込んだ。此位力を込めて食ひ附いたのだから、大抵なものなら噛み切れる譯だが、驚いた！　もうよからうと思つて齒を引かうとすると引けない。もう一返噛み直さうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと感づいた時は既に遲かつた。沼へでも落ちた人が足を拔かうと焦慮る度にぶく／＼深く沈む樣に、噛めば噛む程口が重くなる。齒が動かなくなる。齒答へはあるが、齒答へがある丈でどうしても始末をつける事が出來ない。美學者迷亭先生が曾て吾輩の主人を評して、君は割り切れない男だといつた事があるが、成程うまい事をいつたものだ。此餅も主人と同じ樣にどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割る如く盡未來際片のつく期はあるまいと思はれた。此煩悶の際吾輩は覺えず第二の眞理に逢着した。「凡ての動物は直覺的に事物の適不適を豫知す。」眞理は既に二つ迄發明したが、餅がくつ附いて居るので毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸收されて、脫ける樣に痛い。早く食ひ切つて逃げないとお三が來る。子供の唱歌もやんだ樣だ。乾度臺所へ馳け出して來るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐる／＼振つて見たが何等の功能もない。耳を立てたり寐かしたりしたが駄目である。考へて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寐かし損であると氣が附いたからやめにした。漸くの事是は前足の助けを借りて餅を拂ひ落とすに限ると考へ附いた。先づ右の方をあげて口の周圍を撫で廻す。撫でた位で割り切れる譯のものではない。今度は左の方を伸ばして口を中心として急劇に圓を劃して見る。そんな呪で魔は落ちない。辛抱が肝心だと思つて左右交る／＼に動かしたが、矢張り依然とし

て齒は餅の中にぶら下がつて居る。え丶面倒だと兩足を一度に使ふ。すると不思議な事に此時丈は後足二本で立つ事が出來た。何だか猫でない樣な感じがする。猫であらうが、あるまいが、斯うなつた日にやあ構ふものか、何でも餅の魔が落ちる迄やるべしといふ意氣込みで無茶苦茶に顏中引つ掻き廻す。前足の運動が猛烈なので動ともすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所に居る譯にも行かんので、臺所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つて居られたものだと思ふ。第三の眞理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能はざる所のものを爲し能ふ。之を天祐といふ。」幸ひに天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戰つて居ると、何だか足音がして奥より人が來る樣な氣合である。こゝで人に來られては大變だと思つて、愈躍起となつて臺所をかけ廻る。足音は段々近附いてくる。あゝ殘念だが天祐が少し足りない。とう〳〵子供に見附けられた。「あら猫がお雜煮を食べて踊を踊つて居る」と大きな聲をする。此聲を第一に聞きつけたのがお三である。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛び込んで來る。細君は縮緬の紋附で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書齋から出て來て「此馬鹿野郎」といつた。面白い〳〵といふのは子供計りである。さうしてみんな申し合はせた樣にげら〳〵笑つて居る。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる譯にゆかぬ、弱つた。漸く笑ひがやみさうになつたら、五つになる女の子が「おかあ樣、猫も隨分ね」といつたので狂瀾を既倒に何とかするといふ勢で又大變笑はれた。人間の同情に乏しい實例も大分見聞したが、此時程恨めしく感じた事はなかつた。遂に天祐もどつかへ消え失せて、在來の通り四つ這ひになつて、眼を白黑くするの醜態を演ずる迄に閉口した。さすが見殺しにするのも氣の毒と見えて「まあ餅をとつて遣れ」と主人がお三に命ずる。お三はもつと踊らせようぢやありませんかといふ眼附で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺して迄見る氣はないのでだまつて居る。「取つてやらんと死んで仕舞ふ、早くとつて遣れ」と主人は再び下女を顧る。お三は御馳走を半分食べかけて夢から起こされた時の樣に、氣のない顏をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君ぢやないが前齒がみんな折れるかと思つた。どうも痛いの痛くないのつて、餅の中へ堅く食ひ込んで居る齒を情容赦もなく引つ張るのだから堪らない。吾輩が「凡ての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云ふ第四の眞理を經驗して、けろ〳〵とあたりを見廻した時には、家人は既に奥座敷へ這入つて仕舞つて居つた。

　こんな失敗をした時には内に居てお三なんぞに顏を見られるのも何となくばつが惡い。いつその事氣を易へて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと臺所から裏へ出た。三毛子は此近邊で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情は一通り心得て居る。うちで主人の苦い顏を見たり、お三の險突を食つて氣分が勝れん時は必ず此異性の朋友の許を訪問して色々な話しをする。すると、いつの間にか心が晴々して今迄の心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ變つた樣な心持ちになる。女性の影響といふものは實に莫大なものだ。杉垣の隙から、居るかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから、首輪の新しいのをして行儀よく緣側に坐つて居る。其背中の丸さ加減が言ふに言はれん程美しい。曲線の美を盡して居る。尻尾の曲り加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよい〳〵振る氣色抔も到底形容が出來ん。ことによく日の當たる所に暖かさうに、

品よく控へて居るものだから、身體は靜肅端正の態度を有するにも關はらず、天鵞絨を欺く程の滑らかな滿身の毛は春の光を反射して風なきにむら〳〵と微動する如くに思はれる。吾輩はしばらく恍惚として眺めて居たが、やがて我に歸ると同時に、低い聲で「三毛子さん〳〵」といひながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と緣を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。おや正月になつたら鈴迄つけたな、どうもいゝ音だと感心して居る間に、吾輩の傍に來て「あら先生、御目出度う」と尾を左へ振る。吾等猫屬間で御互に挨拶をするときには尾を棒の如く立てて、それを左へぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んで呉れるのは此三毛子計りである。吾輩は前回斷つた通りまだ名はないのであるが、教師の家に居るものだから三毛子丈は尊敬して先生々々といつて呉れる。吾輩も先生と云はれて滿更惡い心持ちもしないから、はい〳〵と返事をして居る。「やあ御目出度う、大層立派に御化粧が出來ましたね」「えゝ去年の暮御師匠さんに買つて頂いたの、宜いでせう」とちやら〳〵鳴らして見せる。「成程善い音ですな、吾輩抔は生れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」と又ちやら〳〵鳴らす。「いゝ音でせう、あたし嬉しいわ」とちやら〳〵ちやら〳〵續け樣に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大變あなたを可愛がつて居ると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪氣なものである。「ほんとよ、丸で自分の子供の樣よ」とあどけなく笑ふ。猫だつて笑はないとは限らない。人間は自分より外に笑へるものが無い樣に思つて居るのは間違ひである。吾輩が笑ふのは鼻の孔を三角にして咽喉佛を震動させて笑ふのだから人間にはわからぬ筈である。「一體あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なのね。御師匠さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知つて居ますがね。その御身分は何なんです。何れ昔は立派な方なんでせう」「えゝ」

　　君を待つ間の姫小松……

障子の内で御師匠さんが二絃琴を彈き出す。「宜い聲でせう」と三毛子は自慢する。「宜い樣だが、吾輩にはよくわからん。全體何といふものですか」「あれ？　あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。隨分丈夫だわね」六十二で生きて居る位だから丈夫と云はねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間が拔けた樣だが別に名答も出て來なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大變よかつたんだつて。いつでも左樣仰しやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて？」「あの天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「成程。少し待つて下さい。天璋院樣の妹の御祐筆の……」「あらさうぢやないの、天璋院樣の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました、天璋院樣のでせう」「えゝ」「御祐筆のでせう」「さうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「さう〳〵間違つた。妹の御嫁に入つた先の」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「えゝ。分つたでせう」「いゝえ。何だか混雜して要領を得ないですよ。詰る所天璋院樣の何になるんですか」「あなたも餘つ程分らないのね。だから天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて、さつきから言つてるんぢやありませんか」「それはすつかり分つて居るんですがね」「夫が分りさへすればいゝでせう」

「えゝ」と仕方がないから降參をした。吾々は時とすると理詰めの虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱつたりやむと、御師匠さんの聲で「三毛や三毛や、御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しさうに「あら御師匠さんが呼んで入らつしやるから、私歸るわ、よくつて？」わるいと云つたつて仕方がない。「それぢや又遊びに入らつしやい」と鈴をちやら〳〵鳴らして庭先迄かけて行つたが、急に戻つて來て「あなた大變色が惡くつてよ、どうかしやしなくつて」と心配さうに問ひかける。まさか雜煮を食つて踊を踊つたとも云はれないから、「何、別段の事もありませんが、少し考へ事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだらうと思つて實は出掛けて來たのですよ」「さう、御大事になさいまし。左樣なら」少しは名殘惜し氣に見えた。是で雜煮の元氣も薩張りと回復した。いゝ心持ちになつた。歸りに例の茶園を通り拔けようと思つて霜柱の融けかゝつたのを踏みつけながら建仁寺の崩れから顏を出すと、又車屋の黑が枯菊の上に背を山にして欠伸をして居る。近頃は黑を見て恐怖する樣な吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知らぬ顏をして行き過ぎようとした。黑の性質として他が己を輕侮したと認むるや否や決して默つて居ない。「おい、名なしの權兵衞、近頃ぢや乙う高く留まつてるぢやあねえか。いくら敎師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面あするねえ。人つけ面白くもねえ」黑は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。說明して遣りたいが到底分る奴ではないから、先づ一應の挨拶をして出來得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。「いや黑君、御目出度う。不相變元氣がいゝね」と尻尾を立てゝ左へくるりと廻す。黑は尻尾を立てたぎり挨拶もしない。「何、御目出てえ？正月で御目出たけりや、御めえなんざあ年が年中御目出てえ方だらう。氣をつけろい、此吹子の向う面め」吹子の向うづらといふ句は罵詈の言語である樣だが、吾輩には了解が出來なかつた。「一寸伺ふが吹子の向うづらと云ふのはどう云ふ意味かね」「へん、手めえが惡體をつかれてる癖に、其譯を聞きや世話あねえ。だから正月野郎だつて事よ」正月野郎は詩的であるが、其意味に至ると吹子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。參考の爲め一寸聞いて置きたいが、聞いたつて明瞭な答辯は得られぬに極まつてゐるから、面と對つた儘無言で立つて居つた。聊か手持無沙汰の體である。すると突然黑のうちの神さんが大きな聲を張り揚げて、「おや棚へ上げて置いた鮭がない。大變だ。又あの黑の畜生が取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやしない。今に歸つて來たら、どうするか見て居やがれ」と怒鳴る。初春の長閑な空氣を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大いに俗了して仕舞ふ。黑は怒鳴るなら、怒鳴りたい丈怒鳴つて居ろと云はぬ許りに橫着な顏をして、四角な顋を前へ出しながら、あれを聞いたかと合圖をする。今迄は黑との應對で氣がつかなかつたが、見ると彼の足の下には一切二錢三厘に相當する鮭の骨が泥だらけになつて轉がつて居る。「君不相變やつてるな」と今迄の行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黑は其位な事では中々機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、此野郎。しやけの一切や二切で相變らずたあ何だ。人を見縊つた事をいふねえ。憚りながら車屋の黑だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆に肩の邊迄掻き上げた。「君が黑君だと云ふ事は、始めから知つてるさ」「知つてるのに、相變らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間なら胸倉をとられて小突き

廻される所である。少々當惑して、内心困つた事になつたと思つて居ると、再び例の神さんの大聲が聞こえる。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよ此人あ。牛肉を一斤すぐ持つて來るんだよ。いゝかい、分つたかい、牛肉の堅くない所を一斤だよ」と牛肉注文の聲が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂へると思つて、いやに大きな聲を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣近所へ自慢なんだから始末に終へねえ阿魔だ」と黑は嘲りながら四つ足を踏ん張る。吾輩は挨拶の仕樣もないから默つて見て居る。「一斤位ぢやあ承知が出來ねえんだが、仕方がねえ、いゝから取つときや、今に食つてやらあ」と自分の爲に誂へたものの如くいふ。「今度は本當の御馳走だ。結構々々」と吾輩は可成彼を歸さうとする。「おめつちの知つた事ぢやねえ。默つてゐろ。うるせえや」と云ひ乍ら突然後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚いて、からだの泥を拂つて居る間に黑は垣根を潛つて、どこかへ姿を隱した。大方西川の牛を覘ひに行つたものであらう。

家へ歸ると座敷の中がいつになく春めいて、主人の笑ひ聲さへ陽氣に聞こえる。はてなと明け放した椽側から上がつて主人の傍へ寄つて見ると、見馴れぬ客が來て居る。頭を綺麗に分けて、木綿の紋附の羽織に小倉の袴を着けて、至極眞面目さうな書生體の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗の卷烟草入と竝んで、越智東風君を紹介致候水島寒月といふ名刺があるので、此客の名前も、寒月君の友人であるといふ事も知れた。主客の對話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美學者迷亭君の事に關して居るらしい。

「それで面白い趣向があるから是非一所に來いと仰しやるので」と客は落ち附いて云ふ。「何ですか、其西洋料理へ行つて午飯を食ふのに就いて趣向があるといふのですか」と主人は茶を注ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ其趣向といふのが、其時は私にも分らなかつたんですが、何れあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「一所に行きましたか、なる程」「所が驚いたのです」主人はそれ見たかと云はぬ許りに、膝の上に乘つた吾輩の頭をぽかと叩く。少し痛い。「又馬鹿な茶番見た樣な事なんでせう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思ひ出す。「へゝー。君、何か變つたものを食はうぢやないかと仰しやるので」「何を食ひました」「先づ獻立を見ながら色々料理に就いての御話しがありました」「誂へない前にですか」「えゝ」「夫から」「夫から首を捻つてボイの方を御覽になつて、どうも變つたものもない樣だなと仰しやると、ボイは負けぬ氣で鴨のロースか小牛のチャップ抔は如何ですと云ふと、先生は、そんな月並を食ひにわざ〳〵こゝ迄來やしないと仰しやるんで、ボイは月並といふ意味が分らんものですから妙な顏をして默つて居ましたよ」「さうでせう」「夫から私の方を御向きになつて、君佛蘭西や英吉利へ行くと隨分天明調や萬葉調が食へるんだが、日本ぢやどこへ行つたつて版で押した樣で、どうも西洋料理へ這入る氣がしないと云ふ樣な大氣燄で――全體あの方は洋行なすつた事があるのですかな」「何、迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行かうと思へば何時でも行かれるんですがね。大方是から行く積りの所を、過去に見立てた洒落なんでせう」と主人は自分ながらうまい事を言つた積りで誘ひ出し笑ひをする。客は左迄感服した樣子もない。「さうですか、私は又いつの間に洋行なさつたかと思つて、つい眞面目に拜聽

して居ました。それに見て來た樣になめくぢのソップの御話しや鮭のシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでせう、うそをつく事は中々名人ですからね」「どうも左樣のやうで」と花瓶の水仙を眺める。少しく殘念の氣色にも取られる。「ぢや趣向といふのは、それなんですね」と主人が念を押す。「いえ、夫はほんの冒頭なので、本論は是からなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を插む。「夫から、とてもなめくぢや鮭は食はうつても食へやしないから、まあトチメンボー位な所で負けとく事にしようぢやないか君、と御相談なさるものですから、私はつい何の氣なしに、それがいゝでせう、といつて仕舞つたので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「えゝ全く妙なのですが、先生が餘り眞面目だものですから、つい氣がつきませんでした」と恰も主人に向つて疎忽を詫びて居る樣に見える。「夫からどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表して居らん。「それからボイに、おいトチメンボーを二人前持つて來いといふと、ボイがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生は益眞面目な貌でメンチボーぢやない、トチメンボーだと訂正されました」「なある。其トチメンボーといふ料理は一體あるんですか」「さあ私も少し可笑しいとは思ひましたが、如何にも先生が沈着であるし、其上あの通りの西洋通で入らつしやるし、ことに其時は洋行なすつたものと信じ切つて居たものですから、私も口を添へてトチメンボーだトチメンボーだとボイに敎へてやりました」「ボイはどうしました」「ボイがね、今考へると實に滑稽なんですがね、暫らく思案して居ましてね、甚だ御氣の毒樣ですが今日はトチメンボーは御生憎樣で、メンチボーなら御二人前すぐに出來ますと云ふと、先生は非常に殘念な樣子で、夫ぢや折角こゝ迄來た甲斐がない。どうかトチメンボーを都合して食はせてもらふ譯には行くまいかと、ボイに二十錢銀貨をやられると、ボイはそれでは兎も角も料理番と相談して參りませうと奧へ行きましたよ」「大變トチメンボーが食ひたかつたと見えますね」「しばらくしてボイが出て來て、眞に御生憎で、御誂へならこしらへますが少々時間がかかります、と云ふと迷亭先生は落ち附いたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待つて食つて行かうぢやないかと云ひ乍ら、ポッケットから葉卷を出してぷかり／＼吹かし始められたので、私も仕方がないから、懷から日本新聞を出して讀み出しました。するとボイは又奧へ相談に行きましたよ」「いやに手數が掛かりますな」と主人は戰爭の通信を讀む位の意氣込みで席を進める。「するとボイが又出て來て、近頃はトチメンボーの材料が拂底で龜屋へ行つても橫濱の十五番へ行つても買はれませんから、當分の間は御生憎樣でと氣の毒さうに云ふと、先生はそりや困つたな、折角來たのになあと、私の方を御覽になつて頻りに繰り返さるゝので、私も默つて居る譯にも參りませんから、どうも遺憾ですな、遺憾極まるですなと調子を合はせたのです」「御尤もで」と主人が贊成する。何が御尤もだか吾輩にはわからん。「するとボイも氣の毒だと見えて、其内材料が參りましたら、どうか願ひますつてんでせう。先生が材料は何を使ふかねと問はれると、ボイはへゝゝと笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人だらうと先生が押し返して聞くと、ボイはへえ左樣で、それだものだから近頃は橫濱へ行つても買はれませんので、まことに御氣の毒樣と云ひましたよ」「アハヽヽ夫が落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな聲で笑ふ。膝が搖れて吾輩は落ちかゝる。主人は夫にも頓着なく笑ふ。アンドレア・デル・

サルトに罹つたのは自分一人でないと云ふ事を知つたので、急に愉快になつたものと見える。「夫から二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたらう、橡面坊を種に使つた所が面白からうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れした樣なもの丶、實は午飯の時刻が延びたので大變空腹になつて弱りましたよ」「夫は御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表する。是には吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉を鳴らす音が主客の耳に入る。

東風君は冷たくなつた茶をぐつと飲み干して、「實は今日參りましたのに、少々先生に御願ひがあつて參つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに澄ます。「御承知の通り文學美術が好きなものですから」「結構で」と油を注す。「同志丈がよりまして先達てから朗讀會といふのを組織しまして、每月一回會合して此方面の研究を是から續け度い積りで、既に第一回は去年の暮に開いた位であります」「一寸伺つて置きますが、朗讀會と云ふと何か節奏でも附けて、詩歌文章の類を讀む樣に聞こえますが、一體どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々は同人の創作なんかもやる積りです」「古人の作といふと白樂天の琵琶行の樣なものでもあるんですか」「いゝえ」「蕪村の春風馬堤曲の種類ですか」「いゝえ」「それぢや、どんなものをやつたんです」「先達ては近松の心中物をやりました」「近松？あの淨瑠璃の近松ですか」近松に二人はない。近松といへば戲曲家の近松に極まつてゐる。夫を聞き直す主人は餘程愚だと思つて居ると、主人は何も分らずに吾輩の頭を丁寧に撫でて居る。藪睨みから惚れられたと自認して居る人間もある世の中だから、此位の誤謬は決して驚くに足らんと撫でらるゝが儘に澄まして居た。「えゝ」と答へて東風子は主人の顏色を窺ふ。「それぢや一人で朗讀するのですか、又は役割を極めてやるんですか」「役を極めて懸合でやつて見ました。其主意は可成作中の人物に同情を持つて其性格を發揮するのを第一として、夫に手眞似や身振りを添へます。白は可成其時代の人を寫し出すのが主で、御孃さんでも丁稚でも、其人物が出てきた樣にやるんです」「ぢや、まあ芝居見た樣なものぢやありませんか」「えゝ衣裳と書割がない位なものですな」「失禮ながらうまく行きましたか」「まあ第一回としては成功した方だと思ひます」「それで此前やつたと仰しやる心中物といふと」「其の、船頭が御客を乘せて芳原へ行く所なんで」「大變な幕をやりましたな」と敎師丈に一寸首を傾ける。鼻から吹き出した日の出の烟が耳を掠めて顏の橫手へ廻る。「なあに、そんなに大變な事もないんです、登場の人物は御客と、船頭と、花魁と仲居と遣手と見番丈ですから」と東風子は平氣なものである。主人は花魁といふ名をきいて一寸苦い顏をしたが、仲居、遣手、見番といふ術語に就いて明瞭の知識がなかつたと見えて先づ質問を呈出した。「仲居といふのは娼家の下婢にあたるものですかな」「まだよく研究はして見ませんが、仲居は茶屋の下女で、遣手といふのが女部屋の助役見た樣なものだらうと思ひます」東風子はさつき其人物が出て來る樣に假色を使ふと云つた癖に、遣手や仲居の性格をよく解して居らんらしい。「成程仲居は茶屋に隸屬するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云ふのは人間ですか、又は一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司どつて居るんですかな」「さあ、そこ迄はまだ調べが屆いて居りません。其内調べて見ませう」これで懸合をやつた日にや頓珍漢

なものが出來るだらうと、吾輩は主人の顔を一寸見上げた。主人は存外眞面目である。「それで朗讀家は君の外にどんな人が加はつたんですか」「色々居りました。花魁が法學士のK君でしたが、口髭を生やして、女の甘つたるいせりふを使ふのですから一寸妙でした。それに其花魁が癪を起こす所があるので……」「朗讀でも癪を起こさなくつちやいけないんですか」と主人は心配さうに尋ねる。「えゝ兎に角表情が大事ですから」と東風子はどこ迄も文藝家の氣で居る。「うまく癪が起こりましたか」と主人は警句を吐く。「癪丈は第一回には、些と無理でした」と東風子も警句を吐く。「所で君は何の役割でした」と主人が聞く。「私は船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるものなら僕にも見番位はやれると云つた樣な語氣を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辭のない所を打ち明ける。東風子は別段癪に障つた樣子もない。矢張り沈着な口調で「其船頭で折角の催しも龍頭蛇尾に終りました。實は會場の隣に女學生が四五人下宿して居ましてね、それがどうして聞いたものか、其日は朗讀會があるといふ事をどこかで探知して會場の窓下へ來て傍聽して居たものと見えます。私が船頭の假色を使つて、漸く調子づいて是なら大丈夫と思つて得意にやつて居ると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでせう、今迄耐へて居た女學生が一度にわつと笑ひだしたものですから、驚いた事も驚いたし、極りが惡い事も惡いし、それで腰を折られてから、どうしても後がつゞけられないので、とう〳〵其限りで散會しました」第一回としては成功だと稱する朗讀會がこれでは失敗はどんなものだらうと想像すると笑はずには居られない。覺えず咽喉佛がごろ〳〵鳴る。主人は愈柔らかに頭を撫でて呉れる。人を笑つて可愛がられるのは難有いが、聊か無氣味な所もある。「夫は飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞を述べて居る。「第二回からは、もつと奮發して盛大にやる積りなので、今日出ましたのも全く其爲で、實は先生にも一つ御入會の上御盡力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起こせませんよ」と消極的の主人はすぐに斷りかける。「いえ、癪抔は起こして頂かんでもよろしいので、こゝに贊助員の名簿が」と云ひながら紫の風呂敷から大事さうに小菊版の帳面を出す。「是へどうか御署名の上御捺印を願ひたいので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまゝ置く。見ると現今知名な文學博士、文學士連中の名が行儀よく勢揃ひをして居る。「はあ、贊成員にならん事もありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の體に見える。「義務と申して別段是非願ふ事もない位で、只御名前丈を御記入下さつて贊成の意さへ御表し下されば其で結構です」「そんなら這入ります」と義務のかゝらぬ事を知るや否や主人は急に氣輕になる。責任さへないと云ふ事が分つて居れば謀叛の連判狀へでも名を書き入れますと云ふ顏附をする。加之から知名の學者が名前を列ねて居る中に姓名丈でも入籍させるのは、今迄こんな事に出合つた事のない主人に取つては無上の光榮であるから返事の勢のあるのも無理はない。「一寸失敬」と主人は書齋へ印をとりに這入る。吾輩はぼたりと疊の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頰張る。モゴ〳〵しばらくは苦しさうである。吾輩は今朝の雜煮事件を一寸思ひ出す。主人が書齋から印形を持つて出て來た時は、東風子の胃の中にカステラが落ち附いた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切足りなくなつた事には氣が附かぬらしい。もし氣がつくとすれば第一に疑はれるものは吾輩であらう。

東風子が歸つてから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が來て居る。

「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が眞面目だと主人が思ふ。迷亭先生の手紙に眞面目なのは殆どないので、此間抔は「其後別に戀着せる婦人も無之、いづ方より艷書も參らず、先づ〳〵無事に消光罷り在り候間、乍憚御休心可被下候」と云ふのが來た位である。それに較べると此年始狀は例外にも世間的である。

「一寸參堂仕り度候へども、大兄の消極主義に反して、出來得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有の新年を迎ふる計畫故、毎日々々目の廻る程の多忙、御推察願上候。……」

成程あの男の事だから正月は遊び廻るのに忙しいに違ひないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「昨日は一刻のひまを偸み、東風子にトチメンボーの御馳走を致さんと存じ候處、生憎材料拂底の爲其意を果さず、遺憾千萬に存候。……」

そろ〳〵例の通りになつて來たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多會、明後日は審美學協會の新年宴會、其明日は鳥部教授歡迎會、其又明日は……」

うるさいなと、主人は讀みとばす。

「右の如く、謠曲會、俳句會、短歌會、新體詩會等、會の連發にて當分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候爲、不得已賀狀を以て拜趨の禮に易へ候段不惡御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光來の節は久し振りにて晩餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候へども、せめてはトチメンボーでもと只今より心掛居候。……」

まだトチメンボーを振り廻して居る。失敬なと主人は一寸むつとする。

「然しトチメンボーは近頃材料拂底の爲、ことに依ると間に合ひ兼候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

雨天秤をかけたなと主人は、あとが讀みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃嚢を充たす爲には……」

うそをつけと主人は打ち遣つた樣にいふ。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さゞる可からずと存候。然る所孔雀は動物園、淺草花屋敷等には、ちらほら見受け候へども、普通の鳥屋抔には一向見當り不申、苦心此事に御座候。……」

獨りで勝手に苦心して居るのぢやないかと主人は毫も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第、御諒察可被下候。……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人は頗る冷淡である。

「降つて十六七世紀の頃迄は全歐を通じて孔雀は宴席に缺くべからざる好味と相成居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候樣記憶致候。有名なるレンブラントが畫き候饗宴の圖にも孔雀が尾を廣げたる儘卓上に横たはり居候。……」

孔雀の料理史をかく位なら、そんなに多忙でもなささうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食へ続けにてはさすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」

大兄の如くは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三度も方丈の食饌に就き候へば如何なる健胃の人にても消化機能に不調を醸すべく、従つて自然は大兄の如く……」

又大兄の如くか、失敬な。

「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋味を貪ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、こゝに一の秘法を案出致し候……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嚥下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候、かくの如くすれば好物は貪り次第貪り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙両得とは此等の事を可申かと愚考致候……」

成程一挙両得に相違ない。主人は羨ましさうな顔をする。

「廿世紀の今日交通の頻繁、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄、吾人戦勝国の国民は、是非共羅馬人に倣つて此入浴嘔吐の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事と自信致候。左もなくば折角の大国民も近き将来に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃かに心痛罷りあり候……」

又大兄の如くか、癪に障る男だと主人が思ふ。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致し候はゞ所謂禍を未萌に防ぐの功徳にも相成り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候……」

何だか妙だなと首を捻る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉猟致し居候へども未だに発見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思ひ立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候へば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右発見次第御報道可仕候につき、左様御承知可被下候。就てはさきに申上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右発見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に悩み居らるゝ大兄の為にも御便宜かと存候。草々不備」

何だとう〳〵担がれたのか、あまり書方が真面目だものだからつい仕舞迄本気にして読んで居た。新年匆々こんな悪戯をやる迷亭は余つ程ひま人だなあと主人は笑ひながら云つた。

夫から四五日は別段の事もなく過ぎ去つた。白磁の水仙がだん〳〵凋んで、青軸の梅が瓶ながら漸々開きかゝるのを眺め暮らして許り居てもつまらんと思つて、一両度三毛子を訪問して見たが逢はれない。最初は留守だと思つたが、二返目には病気で寝て居るといふ事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをして居るのを手水鉢の葉蘭の蔭に隠れて聞いて居

るとからであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いゝえ今朝からまだ何も食べません、あつたかにして御炬燵に寝かして置きました」

何だか猫らしくない。丸で人間の取扱ひを受けて居る。一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛して居る猫がかく迄厚遇を受けて居ると思へば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体が疲れる許りだからね」「さうで御座いますとも、私共でさへ一日御膳を頂かないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物である様な返事をする。実際此家では下女よりも猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「えゝ、あの御医者は余程妙で御座いますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかつて私の脈をとらうとするんでせう。いえ病人は私では御座いません。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にや〳〵笑ひながら、猫の病気はわしにも分らん、抛つて置いたら今に癒るだらうつてんですもの、あんまり苛いぢゃ御座いませんか。腹が立つたから、それぢや見て戴かなくつてもよう御座います。是でも大事の猫なんですつて、三毛を懐へ入れてさつさと帰つて参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底吾輩のうち抔で聞かれる言葉ではない。矢張り天璋院様の何とかの何とかでなくては使へない、甚だ雅であると感心した。

「何だかしく〳〵云ふ様だが……」「えゝきつと風邪を引いて咽喉が痛むんで御座いますよ。風邪を引くと、どなたでも御咳が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女丈に馬鹿丁寧な言葉を使ふ。「それに近頃は肺病とか云ふものが出来てなう」「ほんとに此頃の様に肺病だのペストだのつて新しい病気計り殖えた日にや油断もなりやしませんので御座いますよ」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気をつけないといかんよ」「さうで御座いませうかねえ」

下女は大いに感動して居る。

「風邪を引くといつても余り出あるきもしない様だつたに……」「いえね、あなた、それが近頃は悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時の様に大得意である。

「悪い友達？」「えゝあの表通の教師の所に居る薄ぎたない雄猫で御座いますよ」「教師と云ふのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「えゝ顔を洗ふたんびに鵞鳥が絞め殺される様な声を出す人で御座んす」

鵞鳥が絞め殺される様な声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な声を無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにがあ〳〵やる。機嫌の好い時は元気づいて猶があ〳〵やる。つまり機嫌のいゝ時も悪い時も休みなく勢よくがあ〳〵やる。細君の話しではこゝへ引き越す前迄はこんな癖はなかつたさうだが、ある時不図やり出してから今日迄一日もやめた事がないといふ。一寸厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けて居るのか、吾等猫抔には到底想像もつかん。それも先づよいとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだと猶耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪になるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町抔で、あんな顔の洗ひ方

をするものは一人も居らなかつたよ」「さうで御座いませうともねえ」

下女は無暗に感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つて居る猫だから、どうせ野良猫さ。今度來たら少し叩いて御遣り」「叩いて遣りますとも、三毛の病氣になつたのも全くあいつの御蔭に相違御座いませんもの、此度讐をとつてやります」

飛んだ寃罪を蒙つたものだ。こいつは滅多に近寄れないと三毛子にはとう／＼逢はずに歸つた。

歸つて見ると主人は書齋の中で何か沈吟の體で筆を執つて居る。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだらうが、知らぬが佛とやらで、うん／＼云ひながら神聖な詩人になり濟まして居る。

所へ當分多忙で行かれないと云つて、態々年始狀をよこした迷亭君が飄然とやつて來る。「何か新體詩でも作つて居るのかね。面白いのが出來たら見せ給へ」と云ふ。「うん、一寸うまい文章だと思つたから今翻譯して見ようと思つてね」と主人は重たさうに口を開く。「文章？誰の文章だい」「誰のか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分いゝのがあるから中々馬鹿に出來ない。全體どこにあつたのか」と問ふ。「第二讀本」と主人は落ち附き拂つて答へる。「第二讀本？第二讀本がどうしたんだ」「僕の翻譯して居る名文と云ふのは第二讀本の中にあると云ふ事さ」「冗談ぢやない。孔雀の舌の讐を際どい所で討たうと云ふ寸法なんだらう」「僕は君の様な法螺吹きとは違ふさ」と口髭を捻る。泰然たるものだ。「昔ある人が山陽に、先生近頃名文は御座らぬかといつたら、山陽が馬子の書いた借金の催促狀を示して近來の名文は先づ是でせうと云つたといふ話があるから、君の審美眼も存外慥かかも知れん。どれ讀んで見給へ、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の本家の様な事を云ふ。主人は禪坊主が大燈國師の遺誡を讀む様な聲を出して讀み始める。「巨人引力」「何だい巨人引力と云ふのは」「巨人引力と云ふ題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云ふ名を持つて居る巨人といふ積りさ」「少し無理な積りだが表題だから先づ負けて置くとしよう。夫から早々本文を讀むさ、君は聲がいゝから中々面白い」「雜ぜかへしてはいかんよ」と豫め念を押して又讀み始める。

ケートは窓から外面を眺める。小兒が球を投げて遊んで居る。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとのぼる。暫らくすると落ちて來る。彼等は又球を高く擲つ。再び、三度。擲つ度に球は落ちてくる。何故落ちるのか、何故上へとのみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答へる。「彼は巨人引力である。彼は强い。彼は萬物を己の方へと引く。彼は家屋を地上に引く、引かねば飛んで仕舞ふ。小兒も飛んで仕舞ふ。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落とす事があらう。巨人引力が來いといふからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ、呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むゝ、甘いぢやないか」「いや是は恐れ入つた。飛んだ所でトチメンボーの御返禮に預かつた」「御返禮でもなんでもないさ。實際うまいから譯して見たのさ。君はさう思はんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚いたね。君にして此伎倆あらんとは。全く今度といふ今度は擔がれたよ。降參々々」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降參させる考へはないさ。只面白い文章だと思つたから譯して見た許り

さ」「いや實に面白い。さう來なくつちや本ものでない。凄いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩畫をやめたから、其代りに文章でもやらうと思つてね」「どうして、遠近無差別黑白平等の水彩畫の比ぢやない。感服の至りだよ」「さうほめてくれると僕も乘り氣になる」と主人は飽く迄も感違ひをして居る。

所へ寒月君が先日は失禮しましたと這入つて來る。「いや失敬。今大變な名文を拜聽してトチメンボーの亡魂を退治られた所で」と迷亭先生は譯のわからぬ事をほのめかす。「はあ、さうですか」と是も譯の分らぬ挨拶をする。主人丈は左のみ浮かれた氣色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云ふ人が來たよ」「あゝ上がりましたか、あの越智東風と云ふ男は至つて正直な男ですが、少し變つて居る所があるので、或は御迷惑かと思ひましたが、是非紹介して吳れといふものですから……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上がつても自分の姓名のことについて何か辯じて行きやしませんか」「いいえ、そんな話しもなかつた樣だ」「さうですか、どこへ行つても初對面の人には自分の名前の講釋をするのが癖でしてね」「どんな講釋をするんだい」と事あれかしと待ち構へた迷亭君は口を入れる。「あの東風と云ふのを音で讀まれると大變氣にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐革の煙草入から煙草をつまみ出す。「私の名は越智東風ではありません、越智こちですと必ず斷りますよ」「妙だね」と雲井を腹の底迄呑み込む。「それが全く文學熱から來たので、こちと讀むと遠近と云ふ成語になる、のみならず其姓名が韻を踏んで居ると云ふのが得意なんです。それだから東風を音で讀むと僕が折角の苦心を人が買つて吳れないといつて不平を云ふのです」「こりや成程變つてる」と迷亭先生は圖に乘つて腹の底から雲井を鼻の孔迄吐き返す。途中で烟が戸惑ひをして咽喉の出口へ引きかゝる。先生は煙管を握つてごほん／＼と咽び返る。「先日來た時は朗讀會で頭になつて女學生に笑はれたといつて居たよ」と主人は笑ひながら云ふ。「うむそれ／＼」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。吾輩は險呑になつたから少し傍を離れる。「其朗讀會さ。先達てトチメンボーを御馳走した時にね。其話が出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大會をやる積りだから、先生にも是非御臨席を願ひ度いつて。夫から僕が今度も近松の世話物をやる積りかいと聞くと、いえ此次はずつと新しいものを選んで金色夜叉にしましたと云ふから、君にや何の役が當たつてるかと聞いたら、私はお宮ですといつたのさ。東風のお宮は面白からう。僕は是非出席して喝采しようと思つてるよ」「面白いでせう」と寒月君が妙な笑ひ方をする。「然し、あの男はどこ迄も誠實で輕薄な所がないから好い。迷亭抔とは大違ひだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる。迷亭君は氣にも留めない樣子で、「どうせ僕抔は行德の俎と云ふ格だからなあ」と笑ふ。「まづそんな所だらう」と主人が云ふ。實は行德の俎と云ふ語を主人は解さないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化しつけて居るものだから、こんな時には教場の經驗を社交上にも應用するのである。「行德の俎といふのは何の事ですか」と寒月が眞率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の歸りがけに買つて來て插したのだが、よく持つぢやないか」と行德の俎を無理にねぢ伏せる。「暮といへば、去年の暮に僕は實に不思議な經驗をしたよ」と迷亭が煙管を大神樂の如く指の先で廻す。「どんな經驗か、聞かし給へ」と主人は行德の俎を遠く後に見捨てた氣で、ほつ

と息をつく。迷亭先生の不思議な經驗といふのを聞くと左の如くである。

「慥か暮の二十七日と記憶して居るがね。例の東風から參堂の上是非文藝上の御高話を伺ひたいから御在宿を願ふと云ふ先觸れがあつたので、朝から心待ちに待つて居ると先生中々來ないやね。晝飯を食つてストーヴの前でバリー・ペーンの滑稽物を讀んで居る所へ靜岡の母から手紙が來たから見ると、年寄丈にいつ迄も僕を子供の樣に思つてね。寒中は夜間外出をするなとか、冷水浴もいゝがストーヴを焚いて室を煖かにしてやらないと風邪を引くとか、色色の注意があるのさ。成程親は難有いものだ、他人ではとてもかうはいかないと、呑氣な僕も其時丈は大いに感動した。それにつけても、こんなにのらくらして居ては勿體ない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。母の生きて居るうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云ふ氣になつた。それから猶讀んで行くと御前なんぞは實に仕合せ者だ。露西亞と戰爭が始まつて若い人達は大變な辛苦をして御國の爲に働いて居るのに節季師走でもお正月の樣に氣樂に遊んで居ると書いてある。――僕はこれでも母の思つてる樣に遊んぢや居ないやね――其後へ持つて來て、僕の小學校時代の朋友で今度の戰爭に出て死んだり負傷したものの名前が列擧してあるのさ、其名前を一々讀んだ時には何だか世の中が味氣なくなつて、人間もつまらないと云ふ氣が起こつたよ。一番仕舞ひにね。私も取る年に候へば初春の御雜煮を祝ひ候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、猶の事氣がくさ〱して仕舞つて、早く東風が來れば好いと思つたが、先生どうしても來ない。其中とうとう晩飯になつたから、母へ返事でも書かうと思つて一寸十二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが、僕にはとてもそんな藝は出來んから、何時でも十行内外で御免蒙る事に極めてあるのさ。すると一日動かずに居つたものだから、胃の具合が妙に苦しい。東風が來たら待たせて置けと云ふ氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給へ。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我知らず出て仕舞つた。丁度其晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き附ける、非常に寒い。神樂坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大變淋しい感じがする。暮、戰死、老衰、無常迅速抔と云ふ奴が頭の中をぐる〱馳け廻る。よく人が首を縊ると云ふが斯んな時に不圖誘はれて死ぬ氣になるのぢやないかと思ひ出す。ひよいと首を上げて土手の上を見ると、何時の間にか例の松の眞下に來て居るのさ」

「例の松た何だい」と主人が斷句を投げ入れる。

「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

「首懸の松は鴻の臺でせう」寒月が波紋をひろげる。

「鴻の臺のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜ斯う云ふ名が附いたかと云ふと、昔からの言ひ傳へで誰でも此松の下へ來ると首が縊り度くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら首縊りだと來て見ると必ず此松へぶら下がつて居る。年に二三返は屹度ぶら下がつて居る。どうしても他の松では死ぬ氣にならん。見ると、うまい具合に枝が往來の方へ横に出て居る。あゝ好い枝振りだ。あの儘にして置くのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か來ないかしらと、四邊を見渡すと生憎誰も來ない。仕方がない、自分で下がらうか知らん。いや〱自分が下がつては命がない、危いからよさう。然し昔の希臘人は宴會の席で首縊りの眞似をして

餘興を添へたと云ふ話がある。一人が臺の上へ登つて繩の結び目へ首を入れる途端に、他のものが臺を蹴返す。首を入れた當人は臺を引かれると同時に繩をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれが事實なら別段恐るゝにも及ばん、僕も一つ試みようと枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓る、撓り按排が實に美的である。首がかゝつてふは〱する所を想像して見ると嬉しくて堪らん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が來て待つて居ると氣の毒だと考へ出した。それでは先づ東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直さうと云ふ氣になつて遂にうちへ歸つたのさ」

「それで市が榮えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにや〱しながら云ふ。

「うちへ歸つて見ると東風は來て居ない。然し今日は無據處差支へがあつて出られぬ。何れ永日御面晤を期すといふ端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる、嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る」と云つて主人と寒月の顏を見て澄まして居る。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「愈佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。

「見ると、もう誰か來て先へぶら下がつて居る。たつた一足違ひでねえ君、殘念な事をしたよ。今考へると何でも其時は死神に取りつかれたんだね。ゼームス抔に云はせると副意識下の幽冥界と、僕が存在して居る現實界が、一種の因果法によつて互に感應したんだらう。實に不思議な事があるものぢやないか」迷亭は澄まし返つて居る。

主人はまたやられたと思ひ乍ら何も云はずに空也餠を頰張つて口をもご〱云はして居る。

寒月は火鉢の灰を丁寧に掻き馴らして、俯向いてにや〱笑つて居たが、やがて口を開く。極めて靜かな調子である。

「成程伺つて見ると不思議な事で一寸有りさうにも思はれませんが、私抔は自分で矢張り似た樣な經驗をつい近頃したものですから、少しも疑ふ氣になりません」

「おや君も首を縊り度くなつたのかい」

「いえ私のは首ぢやないんで。是も丁度明ければ昨年の暮の事で、しかも先生と同日同刻位に起こつた出來事ですから、猶更不思議に思はれます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餠を頰張る。

「其日は向島の知人の家で忘年會兼合奏會がありまして、私もそれへヴイオリンを携へて行きました。十五六人令孃やら令夫人が集まつて中々盛會で、近來の快事と思ふ位に萬事が整つて居ました。晩餐も濟み合奏も濟んで、四方山の話が出て時刻も大分遲くなつたから、もう暇乞ひをして歸らうかと思つて居ますと、某博士の夫人が私のそばへ來て、あなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小聲で聞きますので、實は其兩三日前に逢つた時は平生の通り何所も惡い樣には見受けませんでしたから、私も驚いて精しく樣子を聞いて見ますと、私の逢つた其晩から急に發熱して色々な譫語を絶間なく口走るさうで、其丈なら宜いですが、其譫語のうちに私の名が時々出て來るといふのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安くないね」抔と云ふ月並は云はず。靜肅に謹聽して居る。

「醫者を呼んで見てもらふと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇しいので腦を侵して居るから、もし睡眠劑が思ふ樣に功を奏しないと危險であると云ふ診斷ださうで、私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起こつたのです。

丁度夢でうなされる時の樣な重くるしい感じで、周圍の空氣が急に固形體になつて四方から吾身をしめつける如く思はれました。歸り道にも其事ばかりが頭の中にあつて苦しくて堪らない。あの綺麗な、あの快活な、あの健康な〇〇子さんが……」

「一寸失敬だが待つて呉れ給へ。さつきから伺つて居ると〇〇子さんと云ふのが二返ばかり聞こえる樣だが、もし差支へがなければ承はりたいね、君」と主人を顧ると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれ丈は當人の迷惑になるかも知れませんから廢しませう」

「凡て曖々然として昧々然たるかたで行く積りかね」

「冷笑なさつてはいけません、極眞面目な話なんですから……兎に角あの婦人が急にそんな病氣になつた事を考へると、實に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、總身の活氣が一度にストライキを起こした樣に元氣がにはかに滅入つて仕舞ひまして、只踉々として吾妻橋へきかゝつたのです。欄干に倚つて下を見ると滿潮か干潮か分りませんが、黒い水がかたまつて只動いて居る樣に見えます。花川戸の方から人力車が一臺馳けて來て橋の上を通りました。其提灯の火を見送つて居ると、段々小さくなつて札幌ビールの處で消えました。私は又水を見る。すると遙かの川上の方で私の名を呼ぶ聲が聞こえるのです。はてな、今時分人に呼ばれる譯はないが誰だらうと水の面をすかして見ましたが、暗くて何も分りません。氣のせゐに違ひない、早々歸らうと思つて、一足二足あるき出すと、又微かな聲で遠くから私の名を呼ぶのです。私は又立ち留まつて耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に捕まつて居ながら膝頭ががく／＼慄へ出したのです。其聲は遠くの方か、川の底から出る樣ですが、紛れもない〇〇子の聲なんでせう。私は覺えず『はーい』と返事をしたのです。其返事が大きかつたものですから靜かな水に響いて自分で、自分の聲に驚かされて、はつと周圍を見渡しました。人も犬も月も何も見えません。其時に私は此夜の中に卷き込まれて、あの聲の出る所へ行きたいと云ふ氣がむらむらと起こつたのです。〇〇子の聲が又苦しさうに、訴へる樣に、救ひを求める樣に私の耳を刺し通したので、今度は『今直ぐに行きます』と答へて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ聲が浪の下から無理に洩れて來る樣に思はれましてね。此水の下だなと思ひながら私はとう／＼欄干の上に乘りましたよ。今度呼んだら飛び込まうと決心して流を見詰めて居ると又憐れな聲が絲の樣に浮いて來る。こゝだと思つて力を込めて一旦飛び上がつて置いて、そして小石か何ぞの樣に未練なく落ちて仕舞ひました」

「とう／＼飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問ふ。

「其所迄行かうとは思はなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭を一寸つまむ。

「飛び込んだ後は氣が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何もない、水を飲んだ樣な感じもしない。慥かに飛び込んだ筈だが實に不思議だ。こりや變だと氣が附いて其所いらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだ積りで居た所が、つい間違つて橋の眞中へ飛び下りたので、其時は實に殘念でした。前と後の間違ひ丈であの聲の出る所へ行く事が出來なかつたのです」寒月はにや／＼笑ひながら例の如く羽織の紐を荷厄介にして居る。

「ハヽヽヽ是は面白い。僕の經驗とよく似て居る所が奇だ。矢張りゼームス教授の材料になるね。人間の感應と云ふ題で寫生文にしたら屹度文壇を驚かすよ。……そして其〇〇子さんの病氣はどうなつたかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いて居ましたから病氣は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の體であつたが、此時漸く口を開いて、「僕にもある」と負けぬ氣を出す。

「あるつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人抔は無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑ふ。缺けた前齒のうちに空也餅が着いて居る。

「矢張り同日同刻ぢやないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違ふ樣だ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに攝津大掾を聞かして呉れろと云ふから、連れて行つてやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を參考して鰻谷だと云ふのさ。鰻谷は嫌ひだから今日はよさうと其日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持つて來て、今日は堀川だからいゝでせうと云ふ。堀川は三味線もので賑やかな許りで實がないからよさうと云ふと、細君は不平な顏をして引き下がつた。其翌日になると細君が云ふには今日は三十三間堂です。私は是非攝津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌ひか知らないが、私に聞かせるのだから一所に行つて下すつても宜いでせうと手詰めの談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜しい。然し一世一代と云ふので大變な大入だから到底突懸けに行つた所で這入れる氣遣ひはない。元來あゝ云ふ場所へ行くには茶屋と云ふものがあつて、それと交渉して相當の席を豫約するのが正當の手續きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、殘念だが今日はやめようと云ふと、細君は凄い眼附をして、私は女ですからそんな六づかしい手續きなんか知りませんが、大原のお母さんも、鈴木の君代さんも正當の手續きを踏まないで立派に聞いて來たんですから、いくらあなたが教師だからつて、さう手數のかゝる見物をしないでも濟みませう、あなたはあんまりだと泣く樣な聲を出す。それぢや駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行かうと降參をすると、行くなら四時迄に向うへ着く樣にしなくつちや行けません、そんなぐづ／＼しては居られませんと急に勢がいゝ。何故四時迄に行かなくては駄目なんだと聞き返すと、其位早く行つて場所をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さんから教へられた通りを述べる。それぢや四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、えゝ駄目ですともと答へる。すると君、不思議な事には其時から急に惡寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴん／＼して居らあね。僕がさ。何だか穴の開いた風船玉の樣に一度に萎縮する感じが起こると思ふと、もう眼がぐら／＼して動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釋を加へる。

「あゝ困つた事になつた。細君が年に一度の願ひだから是非叶へてやりたい。平生叱り附けたり、口を利かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、子供の世話をさせたりする計りで、何一つ酒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日は幸ひ時間もある、嚢中には四五枚の堵物もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだらう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやり度いが、から惡寒がして眼がくらんでは電車へ

乘る所か、沓脱へ降りる事も出來ない。あゝ氣の毒だ氣の毒だと思ふと猶惡寒がして猶眼がくらんでくる。早く醫者に見てもらつて服藥でもしたら四時前には全快するだらうと、それから細君と相談をして甘木醫學士を迎ひにやると生憎昨夜が當番でまだ大學から歸らない。二時頃にはお歸りになりますから、歸り次第すぐ上げますと云ふ返事である。困つたなあ、今杏仁水でも飲めば四時前には乾度癒るに極まつて居るんだが、運の惡い時には何事も思ふ樣に行かんもので、たまさか細君の喜ぶ笑顔を見て樂しまうと云ふ豫算も、がらりと外れさうになつて來る。細君は恨めしい顔附をして、到底入らつしやれませんかと聞く。行くよ、必ず行くよ。四時迄には乾度直つて見せるから安心して居るがいゝ。早く顔でも洗つて着物でも着換へて待つて居るがいゝ、と口では云つた樣なもの丶、胸中は無限の感慨である。惡寒は益劇しくなる、眼は愈ぐら〳〵する。もしや四時迄に全快して約束を履行する事が出來なかつたら、氣の狹い女の事だから何をするかも知れない。情ない仕儀になつて來た。どうしたらよからう。萬一の事を考へると今の内に有爲轉變の理、生者必滅の道を說き聞かして、もしもの變が起こつた時取り亂さない位の覺悟をさせるのも、夫の妻に對する義務ではあるまいかと考へ出した。僕は速かに細君を書齋へ呼んだよ。呼んでお前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云ふ西洋の諺位は心得て居るだらうと聞くと、そんな橫文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にからかふのだから、宜しう御座います、どうせ英語なんかは出來ないんですから。そんなに英語が御好きなら、何故耶蘇學校の卒業生かなんかをお貰ひなさらなかつたんです。あなた位冷酷な人はありはしない、と非常な權幕なんで、僕も折角の計畫の腰を折られて仕舞つた。君等にも辯解するが僕の英語は決して惡意で使つた譯ぢやない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻の樣に解釋されては僕も立つ瀨がない。それにさつきからの惡寒と眩暈で少し腦が亂れて居る所へもつて來て、早く有爲轉變、生者必滅の理を吞み込ませようと少し急き込んだものだから、つい細君の英語を知らないと云ふ事を忘れて、何の氣も附かずに使つて仕舞つた譯さ。考へると是は僕が惡い、全く手落ちであつた。此失敗で惡寒は益猛くなる、眼は愈ぐら〳〵する。細君は命ぜられた通り風呂場へ行つて兩肌を脫いで御化粧をして、簞笥から着物を出して着換へる。もう何時でも出掛けられますと云ふ風情で待ち構へて居る。僕は氣が氣でない。早く甘木君が來て吳れゝば善いがと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。『そろ〳〵出掛けませうか』と細君が書齋の開き戶を開けて顔を出す。自分の妻を褒めるのは可笑しい樣であるが、僕は此時程細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脫いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黑縮緬の羽織と反映して居る。其顔が石鹼と攝津大掾を聞かうと云ふ希望との二つで、有形無形の兩方面から輝いて見える。どうしても其希望を滿足させて出掛けてやらうと云ふ氣になる。それぢや奮發して行かうかな、と一ぷくふかして居ると漸く甘木先生が來た。うまい、注文通りに行つた。が容體をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺めて、手を握つて、胸を敲いて背を撫でて、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすつて、しばらく考へ込んで居る。『どうも少し險呑な樣な氣がしまして』と僕が云ふと、先生は落ち附いて『いえ格別の事も御座いますまい』と云ふ。『あの一寸位外出致しても差支

へは御座いますまいね』と細君が聞く。『左樣』と先生は又考へ込む。『御氣分さへ御惡くなければ……』『氣分は惡いですよ』と僕が云ふ。『ぢや兎も角も頓服と水藥を上げますから』『へえどうか、何だかちと、危い樣になりさうですな』『いや決して御心配になる程の事ぢや御座いません。神經を御起こしになるといけませんよ』と先生が歸る。三時は三十分過ぎた。下女を藥取りにやる。細君の嚴命で驅け出して行つて、驅け出して歸つてくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今迄何とも無かつたのに急に嘔氣を催して來た。細君は水藥を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲まうとすると、胃の中からゲーと云ふ物が吶喊して出てくる。不得已茶碗を下へ置く。細君は『早く御飲みになつたら宜いでせう』と逼る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が惡い。思ひ切つて飲んで仕舞はうと又茶碗へ唇をつけると、又ゲーが執念深く妨害をする。飲まうとしては茶碗を置き、飲まうとしては茶碗を置いて居ると、茶の間の時計がチン〳〵チン〳〵と四時を打つた。さあ四時だ、愚圖々々しては居られんと茶碗を又取り上げると、不思議だねえ君、實に不思議とは此事だらう、四時の音と共に吐き氣がすつかり留まつて、水藥が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名醫と云ふ事も始めて理解する事が出來たんだが、背中がぞく〳〵するのも、眼がぐら〳〵するのも夢の樣に消えて、當分立つ事も出來まいと思つた病氣が忽ち全快したのは嬉しかつた」

「それから歌舞伎座へ一所に行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云ふ顔附をして聞く。

「行きたかつたが、四時を過ぎちや這入れないと云ふ細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分許り早く甘木先生が來て吳れたら僕の義理も立つし、妻も滿足したらうに、僅か十五分の差でね、實に殘念な事をした。考へ出すとあぶない所であつたと今でも思ふのさ」

語り了つた主人は漸く自分の義務を濟ました樣な風をする。是で兩人に對して顔が立つと云ふ氣かも知れん。

寒月は例の如く缺けた齒を出して笑ひながら「それは殘念でしたな」と云ふ。迷亭はとぼけた顔をして「君の樣な親切な夫を持つた細君は實に仕合せだなあ」と獨り言の樣にいふ。障子の蔭でエヘンと云ふ細君の咳拂ひが聞こえる。

吾輩は大人しく三人の話しを順番に聞いて居たが、可笑しくも悲しくもなかつた。人間といふものは時間を潰す爲に强ひて口を運動させて、可笑しくもない事を笑つたり、面白くもない事を嬉しがつたりする外に能もない者だと思つた。吾輩の主人の我儘で偏狹な事は前から承知して居たが、平常は言葉數を使はないので何だか了解しかねる點がある樣に思はれて居た。その了解しかねる點に少しは恐ろしいと云ふ感じもあつたが、今の話しを聞いてから急に輕蔑したくなつた。彼はなぜ兩人の話しを沈默して聞いて居られないのだらう。負けぬ氣になつて愚にもつかぬ駄辯を弄すれば何の所得があるだらう。エピクテタスにそんな事を爲ろと書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は絲瓜の如く風に吹かれて超然と澄まし切つて居る樣なもの丶、其實は矢張り娑婆氣もあり慾氣もある。競爭の念、勝たう〳〵の心は彼等が日常の談笑中にもちら〳〵とほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て氣の毒の至りである。只其言語動作が普通の半可通の如く、紋切形の厭味を帶

びてないのは聊かの取得でもあらう。

から考へると急に三人の談話が面白くなくなつたので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りは既に取り拂はれて正月も早十日となつたが、うらゝかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮やかな活氣を呈して居る。椽側に座蒲團が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構はんが、三毛子は少しは宜い方か、それが氣掛りである。ひつそりして人の氣合もしないから、泥足の儘椽側へ上がつて座蒲團の眞中へ寝轉んで見るといゝ心持ちだ。ついうと〳〵として、三毛子の事も忘れてうたゝ寝をして居ると、急に障子のうちで人聲がする。

「御苦勞だつた。出來たかえ」御師匠さんは矢張り留守ではなかつたのだ。「はい遲くなりまして、佛師屋へ參りましたら丁度出來上がつた所だと申しまして」「どれお見せなさい。あゝ綺麗に出來た。是で三毛も浮ばれませう。金は剝げる事はあるまいね」「えゝ念を押しましたら上等を使つたから是なら人間の位牌よりも持つと申して居りました。……夫から猫譽信女の譽の字は崩した方が恰好がいゝから少し劃を變へたと申しました」「どれ〳〵早速御佛壇へ上げて御線香でも上げませう」

三毛子はどうかしたのかな、何だか様子が變だと蒲團の上へ立ち上がる。チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と御師匠さんの聲がする。

「御前も回向をしてお遣りなさい」

チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と今度は下女の聲がする。吾輩は急に動悸がして來た。座蒲團の上に立つた儘、木彫の猫の様に眼も動かさない。

「ほんとに殘念な事を致しましたね。始めはちよつと風邪を引いたんで御座いませうがねえ」

「甘木さんが藥でも下さると、よかつたかも知れないよ」「一體あの甘木さんが悪う御座いますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎますあね」「さう人様の事を悪く云ふものではない。是も壽命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰つたものと見える。

「つまる所表通の教師のうちの野良猫が無暗に誘ひ出したからだと、わたしは思ふよ」「えゝあの畜生が三毛のかたきで御座いますよ」

少し辯解したかつたが、こゝが我慢のし所と唾を呑んで聞いて居る。話しはしばし途切れる。

「世の中は自由にならんものでなう。三毛の様な器量よしは早死をするし。不器量な野良猫は達者でいたづらをして居るし……」「其通りで御座いますよ。三毛の様な可愛らしい猫は鉦と太鼓で探してあるいたつて、二人とは居りませんからね」

二匹と云ふ代りに二人といつた。下女の考へでは猫と人間とは同種族のものと思つて居るらしい。さう云へば此下女の顔は吾等猫屬と甚だ類似して居る。

「出來るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の野良が死ぬと御誂へ通りに參つたんで御座いますがねえ」

御誂へ通りになつては、ちと困る。死ぬと云ふ事はどんなものか、まだ經驗した事がないから好きとも嫌ひとも云へないが、先日餘り寒いので火消壺の中へもぐり込んで居たら、下女が吾輩の居るのも知らんで上から蓋をした事があつた。其時の苦しさは考へても恐ろしくなる程であつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し續くと死ぬのであるさうだ。三毛子の身

代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出來ないのなら、誰の爲でも死にたくはない。

「然し猫でも坊さんの御經を讀んでもらつたり、戒名をこしらへてもらつたのだから心殘りはあるまい」「さうで御座いますとも、全く果報者で御座いますよ。たゞ慾を云ふとあの坊さんの御經があまり輕少だつた様で御座いますね」「少し短か過ぎた様だつたから、大變御早う御座いますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、えゝ利目のある所をちよいとやつて置きました、なに猫だからあの位で充分淨土へ行かれますと仰しやつたよ」

「あらまあ……然しあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないと屢斷つて置くのに、此下女は野良々々と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくら難有い御經だつて浮ばれる事は御座いませんよ」

吾輩は其後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩は此の際限なき談話を中途で聞き棄てて、布團をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八萬八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震ひをした。其後二絃琴の御師匠さんの近所へは寄り附いた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから輕少な御回向を受けて居るだらう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵く感ぜらるゝ。主人に劣らぬ程の無性猫となつた。主人が書齋にのみ閉ぢ籠つて居るのを人が失戀だ失戀だと評するのも無理はないと思ふ様になつた。

鼠はまだ取つた事がないので、一時はお三から放逐論さへ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云ふ事を知つて居るものだから、吾輩は矢張りのらくらして此家に起臥して居る。此點に就いては、深く主人の恩を感謝すると同時に其活眼に對して敬服の意を表するに躊躇しない積りである。お三が吾輩を知らずして虐待するのは別に腹も立たない。今に左甚五郎が出て來て、吾輩の肖像を樓門の柱に刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカンヴスの上に描く様になつたら、彼等鈍瞎漢は始めて自己の不明を恥づるであらう。

三

三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸ひ人間に知己が出來たので左程退屈とも思はぬ。先達ては主人の許へ吾輩の寫眞を送つて呉れと手紙で依頼した男がある。此間は岡山の名產吉備團子を態々吾輩の名宛で屆けて呉れた人がある。段々人間から同情を寄せらるゝに從つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して來た様な心持ちになつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しよう抔と云ふ料簡は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは賴母しい。敢て同族を輕蔑する次第ではない、只性情の近き所に向つて一身の安きを置くは勢の然らしむる所で、之を變心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられては些と迷惑する。斯様な言語を弄して人を罵詈するものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多い様だ。から猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事計り荷厄介にして居る譯には行かん、矢張り人間同等の氣位で彼等の思想言行を評隲したくなる。是も無理はあるまい。只其位な見識を有して居る吾輩を矢張り一般猫児の毛の生えたもの位に思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備團子をわが物顔に喰ひ盡したのは殘念の次第である。寫眞もまだ撮つて送らぬ容子だ。是も不平と云へば不平だが、

主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこ迄も人間になり濟まして居るのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしても一寸筆に上りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判丈で御免蒙る事に致さう。

今日は上天氣の日曜なので、主人はのそ〳〵書齋から出て來て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を竝べて腹這ひになつて、しきりに何か唸つて居る。大方草稿を書き卸す序開きとして妙な聲を發するのだらうと注目して居ると、稍暫らくして筆太に「香一炷」とかいた。果てな、詩になるか、俳句になるか、香一炷とは、主人にしては少し洒落過ぎて居るがと思ふ間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかかうと考へて居る」と筆を走らせた。筆は夫丈ではたと止まつたぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻つたが別段名案もないものと見えて筆の穗を甞めだした。唇が眞黑になつたと見て居ると、今度は其下へ一寸丸をかいた。丸の中へ點を二つうつて眼をつける。眞中へ小鼻の開いた鼻をかいて、眞一文字に口を横へ引つ張つた、是では文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想が盡きたと見えて、そこ〳〵に顏を塗り消して仕舞つた。主人は又行を改める。彼の考へによると行さへ改めれば詩か賛か語か錄か何かになるだらうと、只宛もなく考へて居るらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を讀み、燒芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致體で一氣呵成に書き流した。何となくごた〳〵した文章である。夫から主人は之を遠慮なく朗讀して、いつになく「ハヽヽヽ面白い」と笑つたが、「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消さう」と其句丈へ棒を引く。一本で濟む所を二本引き、三本引き、綺麗な併行線を描く。線がほかの行迄食み出しても構はず引いて居る。線が八本竝んでもあとの句が出來ないと見えて、今度は筆を捨てて髭を捻つて見る。文章を髭から捻り出して御覽に入れますと云ふ見幕で猛烈に捻つてはねぢ上げ、ねぢ下ろして居る所へ、茶の間から細君が出て來てぴたりと主人の鼻の先へ坐る。「あなた一寸」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼を叩く樣な聲を出す。返事が氣に入らないと見えて、細君は又「あなた一寸」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと拔く。「今月はちつと足りませんが……」「足りん筈はない、醫者へも藥禮は濟ましたし、本屋へも先月拂つたぢやないか。今月は餘らなければならん」と澄まして拔き取つた鼻毛を天下の奇觀の如く眺めて居る。「夫でもあなたが御飯を召し上がらんで麵麭を御食べになつたり、ジャムを御舐めになるものですから」「元來ジャムを幾罐舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？ そんなに舐めた覺えはない」「あなた許りぢやありません、子供も舐めます」「いくら舐めたつて五六圓位なものだ」と主人は平氣な顏で鼻毛を一本々々丁寧に原稿紙の上へ植ゑ附ける。肉が附いて居るのでぴんと針を立てた如くに立つ。主人は思はぬ發見をして感じ入つた體で、ふつと吹いて見る。粘着力が强いので決して飛ばない。「いやに頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャム許りぢやないんです、外に買はなけりやならない物もあります」と細君は大いに不平な氣色を兩頰に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人は又指を突き込んでぐいと鼻毛を拔く。赤いのや、黑いのや、種々の色が交る中に一本眞白なのがある。大いに驚いた樣子で穴の開く程眺めて居た主人は指の股へ挾んだ儘、其鼻毛を細君の顏の前へ出す。「あら、いやだ」と細君は顏をしかめて、主人の手を突き戾す。「一

本見ろ、鼻毛の白髪だ」と主人は大いに感動した樣子である。さすがの細君も笑ひながら茶の間へ這入る。經濟問題は斷念したらしい。主人は又天然居士に取り懸かる。

鼻毛で細君を追ひ拂つた主人は、先づ是で安心と云はぬ許りに鼻毛を拔いては原稿をかかうと焦る體であるが、中々筆は動かない。「燒芋を食ふも蛇足だ、割愛しよう」と遂に此句も抹殺する。「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜し氣もなく筆誅する。餘す所は「天然居士は空間を研究し、論語を讀む人である」と云ふ一句になつて仕舞つた。主人は是では何だか簡單すぎる樣だなと考へて居たが、えゝ面倒臭い、文章は御廢しにして、銘丈にしろと、筆を十文字に揮つて原稿紙の上へ下手な文人畫の蘭を勢よくかく。折角の苦心も一字殘らず落第となつた。夫から裏を返して、「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」と意味不明な語を連ねて居る所へ例の如く迷亭が這入つて來る。迷亭は人の家も自分の家も同じものと心得て居るのか案内も乞はず、ずか〳〵上がつてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞ひ込む事もある。心配、遠慮、氣兼、苦勞を生れる時どこかへ振り落とした男である。

「又巨人引力かね」と立つた儘主人に聞く。「さう何時でも巨人引力許り書いては居らんさ。天然居士の墓銘を撰して居る所なんだ」と大袈裟な事を云ふ。「天然居士と云ふなあ矢張り偶然童子の樣な戒名かね」と迷亭は相變らず出鱈目を云ふ。「偶然童子と云ふのもあるのかい」「なに有りやしないが、先づ其見當だらうと思つて居らあね」「偶然童子と云ふのは僕の知つたものぢやない樣だが、天然居士と云ふのは君の知つてる男だぜ」「一體だれが天然居士なんて名を附けて澄まして居るんだい」「例の曾呂崎の事だ。卒業して大學院へ這入つて空間論と云ふ題目で研究して居たが、餘り勉强し過ぎて腹膜炎で死んで仕舞つた。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいゝさ、決して惡いとは云やしない。然し其曾呂崎を天然居士に變化させたのは一體誰の所作だい」「僕さ、僕がつけてやつたんだ。元來坊主のつける戒名程俗なものは無いからな」と天然居士は餘程雅な名の樣に自慢する。迷亭は笑ひながら「まあ其墓碑銘と云ふ奴を見せ給へ」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」と大きな聲で讀み上げる。「成程是あ善い、天然居士相當の所だ」主人は嬉しさうに「善いだらう」と云ふ。「此墓銘を澤庵石へ彫り附けて本堂の裏手へ力石の樣に抛り出して置くんだね。雅でいゝや、天然居士も浮ばれる譯だ」「僕もさうしようと思つて居るのさ」と主人は至極眞面目に答へたが「僕あ一寸失敬するよ、ぢき歸るから、猫にでもからかつて居て呉れ給へ」と迷亭の返事も待たず飄然と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顏もして居られないから、ニャー〳〵と愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這ひ上がつて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥つたな、どれ」と無作法にも吾輩の襟髪を攫んで宙へ釣るす。「あと足を斯うぶら下げては、鼠は捕れさうもない、……どうです奧さん、此猫は鼠を捕りますかね」と吾輩許りでは不足だと見えて、隣の室の細君に話しかける。「鼠所ぢや御座いません。御雜煮を食べて踊りををどるんですもの」と細君は飛んだ所で舊惡を訐く。吾輩は宙乘りをしながらも少々極りが惡かつた。迷亭はまだ吾輩を卸して呉れない。「成程踊りでもをどりさうな顏だ。奧さん此猫は油斷のならない相好ですぜ。昔の草雙紙にある猫又に似て居ますよ」と勝手な事を言ひ乍ら、頻りに細君に話しかける。

細君は迷惑さうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう歸りませう」と茶を注ぎ易へて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ參るにも斷つて行つた事の無い男ですから分りかねますが、大方御醫者へでも行つたんでせう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に捕まつちや災難ですな」「へえ」と細君は挨拶の仕様もないと見えて簡單な答へをする。迷亭は一向頓着しない。「近頃はどうです、少しは胃の加減がいゝんですか」「いゝか惡いか頓と分りません、いくら甘木さんにかゝつたつて、あんなにジャム計り嘗めては胃病の直る譯がないと思ひます」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを嘗めるんですか、丸で子供の樣ですね」「ジャム計りぢやないんで、此頃は胃病の藥だとか云つて大根卸しを無暗に嘗めますので……」「驚いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸しの中にはヂヤスターゼが有るとか云ふ話を新聞で讀んでからです」「成程、それでジャムの損害を償はうと云ふ趣向ですな。中々考へて居らあ、ハヽヽヽ」と迷亭は細君の訴へを聞いて大いに愉快な氣色である。「此間抔は赤ん坊にまで嘗めさせまして……」「ジャムをですか」「いゝえ大根卸しを……あなた。坊や御父樣がうまいものをやるから御出でてつて、——たまに子供を可愛がつて呉れるかと思ふと、そんな馬鹿な事計りをするんです。二三日前には中の娘を抱いて簞笥の上へ上げましてね……」「どう云ふ趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釋する。「なに趣向も何も有りやしません。只其上から飛び下りて見ろと云ふんですわ。三つや四つの女の子ですもの、そんな御轉婆が出來る筈がないです」「成程こりや趣向が無さ過ぎましたね。然しあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、辛抱は出來ませんわ」と細君は大いに氣燄を揚げる。「まあそんなに不平を云はんでも善いでさあ。斯うやつて不足なく其日々々が暮らして行かれゝば上の分ですよ。苦沙彌君抔は道樂はせず、服裝にも構はず、地味に世帶向きに出來上がつた人でさあ」と迷亭は柄にない說教を陽氣な調子でやつて居る。「所があなた大違ひで……」「何か内々でやりますかね。油斷のならない世の中だからね」と飄然とふは〳〵した返事をする。「ほかの道樂はないですが、無暗に讀みもしない本計り買ひましてね。それも善い加減に見計らつて買つて呉れると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何册でも取つて來て、月末になると知らん顏をして居るんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜つて大變困りました」「なあに書物なんか取つて來る丈取つて來て構はんですよ。拂ひをとりに來たら、今にやる〳〵と云つて居りや歸つて仕舞ひますさあ」「それでも、さう何時迄も引つ張る譯には參りませんから」と細君は憮然として居る。「それぢや譯を話して書籍費を削減させるさ」「どうして、そんな事を云つたつて、中々聞くものですか。此間抔は貴樣は學者の妻にも似合はん、毫も書籍の價値を解して居らん。昔羅馬に斯う云ふ話がある、後學の爲聞いて置けと云ふんです」「そりや面白い、どんな話ですか」迷亭は乘り氣になる。細君に同情を表して居るといふより寧ろ好奇心に驅られて居る。「何でも昔羅馬に樽金とか云ふ王樣があつて……」「樽金? 樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人の名なんか六づかしくて覺えられませんわ。何でも七代目なんださうです」「成程七代目樽金は妙ですな。ふん其七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなた迄冷かしては立つ瀨がありませんわ。知つていらつしやるなら敎へて下さればいゝぢやありません

か、人の惡い」と細君は迷亭へ食つて掛かる。「何、冷かすなんて、そんな人の惡い事をする僕ぢやない。只七代目樽金は振つてると思つてね……えゝお待ちなさいよ、羅馬の七代目の王樣ですね。かうつと、慥かには覺えて居ないがタークヰン・ゼ・プラウドの事でせう。まあ誰でもいゝ、その王樣がどうしました」「その王樣の所へ一人の女が本を九册持つて來て買つて呉れないかと云つたんださうです」「成程」「王樣がいくらなら賣るといつて聞いたら大變な高い事を云ふんですつて。餘り高いもんだから少し負けないかと云ふと其女がいきなり九册の内の三册を火にくべて焚いて仕舞つたさうです」「惜しい事をしましたな」「其本の内には豫言か何か外で見られない事が書いてあるんですつて」「へえー」「王樣は九册が六册になつたから少しは價も減つたらうと思つて六册でいくらだと聞くと、矢張り元の通り一文も引かないさうです。それは亂暴だと云ふと、其女は又三册をとつて火にくべたさうです。王樣はまだ未練があつたと見えて、餘つた三册をいくらで賣ると聞くと、矢張り九册分のねだんを呉れと云ふさうです。九册が六册になり、六册が三册になつても、代價は元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、殘つてる三册も火にくべるかも知れないので、王樣はとう〳〵高い御金を出して焚け餘りの三册を買つたんですつて……どうだ此話で少しは書物の難有味が分つたか、どうだと力むのですけれど、私にや何が難有いんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促す。さすがの迷亭も少し窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじやらして居たが、「然し奥さん」と急に何か考へ附いた樣に大きな聲を出す。「あんなに本を買つて矢鱈に詰め込むものだから人から少しは學者だとか何とか云はれるんですよ。此間ある文學雜誌を見たら苦沙彌君の評が出て居りましたよ」「ほんとに?」と細君は向き直る。主人の評判が氣にかゝるのは、矢張り夫婦と見える。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行許りですがね。苦沙彌君の文は行雲流水の如しとありましたよ」細君は少しにこ〳〵して「それぎりですか」「其次にね——出づるかと思へば忽ち消え、逝いては長しなへに歸るを忘るとありましたよ」細君は妙な顏をして「賞めたんでせうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でせうな」と迷亭は澄ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商賣道具で仕方も御座んすまいが、餘つ程偏屈でしてねえ」迷亭は又別途の方面から來たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、學問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合はせる樣な、辯護をする樣な、不即不離の妙答をする。「先達て抔は學校から歸つてすぐわきへ出るのに着物を着換へるのが面倒だものですから、あなた、外套も脫がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳を火燵櫓の上へ乘せまして——私は御櫃を抱へて坐つて見て居りましたが可笑しくつて……」「何だかハイカラ首實檢の樣ですな。然しそんな所が苦沙彌君の苦沙彌君たる所で——兎に角月並でない」と切ない褒め方をする。「月並か月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、餘り亂暴ですわ」「然し月並より好いですよ」と無暗に加勢すると、細君は不滿な樣子で、「一體月並々々と皆さんが、よく仰しやいますが、どんなのが月並なんです」と開き直つて月並の定義を質問する。「月並ですか、月並と云ふと——左樣、ちと說明し惡いのですが……」「そんな曖昧なものなら月並だつて好きさうなものぢやありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧ぢやありませんよ、ちやんと分つて居ます、只說明し惡い丈の事でさあ」「何でも

自分の嬉ひな事を月並と云ふんでせう」と細君は我知らず穿つた事を云ふ。迷亭もかうなると何とか月並の處置を附けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云ふのはね、先づ年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寐轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」「そんな連中があるでせうか」と細君は分らんものだから好い加減な挨拶をする。「何だかごた／＼して私には分りませんわ」と遂に我を折る。「それぢや馬琴の胴へメジョオ・ペンデニスの首をつけて、一二年歐洲の空氣で包んで置くんですね」「さうすると月並が出來るでせうか」迷亭は返事をしないで笑つて居る。「何、そんな手數のかかる事をしないでも出來ます。中學校の生徒に白木屋の番頭を加へて二で割ると立派な月並が出來上がります」「さうでせうか」と細君は首を捻つた儘納得し兼ねたと云ふ風情に見える。

「君まだ居るのか」と主人はいつの間にやら歸つて來て、迷亭の傍へ坐る。「まだ居るのかは些と酷だな、すぐ歸るから待つて居給へと言つたぢやないか」「萬事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧る。「今君の留守中に君の逸話を殘らず聞いて仕舞つたぜ」「女は兎角多辯でいかん、人間も此猫位沈默を守るといゝがな」と主人は吾輩の頭を撫でて吳れる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗めさしたさうだな」「ふむ」と主人は笑つたが、「赤ん坊でも近頃の赤ん坊は中々利口だぜ。其れ以來、坊や辛いのはどこと聞くと屹度舌を出すから妙だ」「丸で犬に藝を仕込む氣で居るから殘酷だ。時に寒月はもう來さうなものだな」「寒月が來るのかい」と主人は不審な顔をする。「來るんだ。午後一時迄に苦沙彌の家へ來いと端書を出して置いたから」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに、今日のはこつちの趣向ぢやない、寒月先生自身の要求さ。先生何でも理學協會で演說をするとか云ふのでね。其稽古をやるから、僕に聽いてくれと云ふから、そりや丁度いゝ、苦沙彌にも聞かしてやらうと云ふのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にして置いたのさ——なあに、君はひま人だから丁度いゝやね——差支へなんぞある男ぢやない、聞くがいゝさ」と迷亭は獨りで呑み込んで居る。「物理學の演說なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の專斷を憤つたものの如くに云ふ。「所が其問題がマグネ附けられたノッヅルに就いてなどと云ふ乾燥無味なものぢやないんだ。首縊りの力學と云ふ脫俗超凡な演題なのだから傾聽する價値があるさ」「君は首を縊り損なつた男だから傾聽するが好いが、僕なんざあ……」「歌舞伎座で惡寒がする位の人間だから聞かれないと云ふ結論は出さうもないぜ」と例の如く輕口を叩く。細君はホヽと笑つて主人を顧ながら次の間へ退く。主人は無言の儘吾輩の頭を撫でる。此時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分位すると注文通り寒月君が來る。今日は晩に演說をするといふので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての白襟を聳かして、男振りを二割方上げて、「少し後れまして」と落ち附き拂つて挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つた所なんだ。早速願はう、なあ君」と主人を見る。主人も已むを得ず「うむ」と生返事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しませう」と云ふ。「いよー本式にやるのか、次には拍手の請求と御出でなさるだらう」と迷亭は獨りで騷ぎ立てる。寒月君は內隱しから草稿を取り出して、徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願ひます」と前置をして、愈演說の御浚ひを始める。

「罪人を絞罪の刑に處すると云ふ事は重にアングロサクソン民族間に行はれた方法でありま

して、夫より古代に溯つて考へますと、首縊りは重に自殺の方法として行はれた者であります。猶太人中に在つては罪人を石を抛げ附けて殺す習慣であつたさうで御座います。舊約全書を研究して見ますと所謂ハンギングなる語は罪人の死體を釣るして野獸又は肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタスの說に從つて見ますと、猶太人はエジプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つた樣に思はれます。エジプト人は罪人の首を斷つて胴丈を十字架に釘附けにして夜中曝し物にしたさうで御座います。波斯人は……」「寒月君首縊りと緣が段々遠くなる樣だが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「是から本論に這入る所ですから、少々御辛抱を願ひます。偖て波斯人はどうかと申しますと是も矢張り處刑には磔を用ひた樣で御座います。但し生きて居るうちに張附けに致したものか、死んでから釘を打つたものか、其邊はちと分りかねます……」「そんな事は分らんでもいゝさ」と主人は退屈さうに欠伸をする。「まだ色々御話し致したい事も御座いますが、御迷惑であらつしやいませうから……」「あらつしやいませうより、入らしやいませうの方が聞きいゝよ、ねえ苦沙彌君」と又迷亭が咎め立てをすると、主人は「どつちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。「偖て愈本題に入りまして辯じます」「辯じますなんて講釋師の云ひ草だ。演舌家はもつと上品な詞を使つて貰ひ度いね」と迷亭先生又交ぜ返す。「辯じますが下品なら何と云つたらいゝでせう」と寒月君は少々むつとした調子で問ひかける。「迷亭のは聽いて居るのか、交ぜ返して居るのか判然しない。寒月君そんな彌次馬に構はず、さつさと遣るが好い」と主人は可成早く難關を切り拔けようとする。「むつとして辯じましたる柳かな、かね」と迷亭は不相變飄然たる事を云ふ。寒月は思はず吹き出す。「眞に處刑として絞殺を用ひましたのは、私の調べました結果によりますると、オヂセーの二十二卷目に出て居ります。即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するといふ條で御座います。希臘語で本文を朗讀しても宜しう御座いますが、ちと衒ふ樣な氣味にもなりますから已めに致します。四百六十五行から、四百七十三行を御覽になると分ります」「希臘語云々はよした方がいゝ、さも希臘語が出來ますと云はん許りだ、ねえ苦沙彌君」「それは僕も贊成だ。そんな物欲しさうな事は言はん方が奧床しくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加擔する。「それでは此兩三句は今晩拔く事に致しまして次を辯じ——えゝ申し上げます」

「此絞殺を今から想像して見ますと、之を執行するに二つの方法があります。第一は、彼のテレマカスがユーミアス及びフィリーシヤスの援けを藉りて繩の一端を柱へ括りつけます。そして其繩の所々へ結び目を穴に開けて此穴へ女の頭を一つ宛入れて置いて、片方の端をぐいと引つ張つて釣るし上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツの樣に女がぶら下がつたと見れば好いんだらう」「其通りで、それから第二は繩の一端を前の如く柱へ括り附けて、他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そして其の高い繩から何本か別の繩を下げて、夫に結び目の輪になつたのを附けて女の頸を入れて置いて、いざと云ふ時に女の足臺を取りはづすと云ふ趣向なのです」「たとへて云ふと繩暖簾の先へ提灯玉を釣るした樣な景色と思へば間違ひはあるまい」「提灯玉と云ふ玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすれば其邊の所かと思ひます。——夫で是から力學的に第一の場合は到底成立すべきも

のでないと云ふ事を證據立てて御覽に入れます」「面白いな」と迷亭が云ふと「うん面白い」と主人も一致する。

「先づ女が同距離に釣られると假定します。又一番地面に近い二人の女の首と首を繋いで居る繩はホリゾンタルと假定します。そこで$\alpha_1\ \alpha_2 \cdots\cdots \alpha_6$を繩が地平線と形づくる角度とし、$T_1\ T_2 \cdots\cdots T_6$を繩の各部が受ける力と見做し、$T_7=X$は繩の尤も低い部分の受ける力とします。Wは勿論女の體量と御承知下さい。どうです御解りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分つた」と云ふ。但し此大抵と云ふ度合は兩人が勝手に作つたのだから他人の場合には應用が出來ないかも知れない。「偖て多角形に關する御存じの平均性理論によりますと、下の如く十二の方程式が立ちます。$T_1\cos\alpha_1=T_2\cos\alpha_2$……(1) $T_2\cos\alpha_2=T_3\cos\alpha_3$……(2)……」「方程式は其位で澤山だらう」と主人は亂暴な事を言ふ。「實は此式が演説の首腦なんですが」と寒月君は甚だ殘り惜し氣に見える。「夫ぢや首腦丈は逐つて伺ふ事にしようぢやないか」と迷亭も少々恐縮の體に見受けられる。「この式を略して仕舞ふと折角の力學的研究が丸で駄目になるのですが」「何、そんな遠慮は入らんから、ずん〳〵略すさ」と主人は平氣で云ふ。「それでは仰せに從つて、無理ですが略しませう」「それがよからう」と迷亭が妙な所で手をぱち〳〵と叩く。

「夫から英國へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑は此時代から行はれたものに違ひないと思はれます。ブラクストーンの説に依ると、若し絞罪に處せられる罪人が、萬一繩の具合で死に切れぬ時は再度同樣の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には假令兇漢でも二度絞める法はないと云ふ句があるのです。まあどつちが本當か知りませんが、惡くすると一度で死ねない事が往々實例にあるので。千七百八十六年に有名なフイツゼラルドと云ふ惡漢を絞めた事があります。所が妙なはずみで一度目には臺から飛び降りるときに繩が切れて仕舞つたのです。又やり直すと今度は繩が長過ぎて足が地面へ着いたので矢張り死ねなかつたのです。とう〳〵三返目に見物人が手傳つて往生さしたと云ふ話です」「やれ〳〵」と迷亭はこんな所へくると急に元氣が出る。「本當に死損ひだな」と主人迄浮かれ出す。「まだ面白い事があります、首を縊ると脊が一寸許り延びるさうです。是は慥かに醫者が計つて見たのだから間違ひはありません」「それは新工夫だね。どうだい、苦沙彌抔はちと釣つて貰つちや、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外眞面目で「寒月君、一寸位脊が延びて生き返る事があるだらうか」と聞く。「それは駄目に極まつて居ます。釣られて脊髓が延びるからなんで、早く云ふと脊が延びると云ふより壞れるんですからね」「それぢや、まあ止めよう」と主人は斷念する。

演説の續きは、まだ中々長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及する筈で居たが、迷亭が無暗に風來坊の樣な珍語を挾むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をするので、遂に中途でやめて歸つて仕舞つた。其晩は寒月君が如何なる態度で如何なる雄辯を振つたか、遠方で起こつた出來事の事だから吾輩には知れよう譯がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或日の午後二時頃又迷亭先生は例の如く空々として偶然童子の如く舞ひ込んで來た。座に着くと、いきなり「君越智東風の高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の號外を知らせに來た程の勢を示す。「知らん、近頃は合はんから」と主人は平生の通り陰氣である。「けふは其の東風子の失策物語を御報道に及ばうと思つて忙しい所を態々來たんだよ」「またそんな仰山な事を云ふ。君は全體不埒な男だ」「ハヽヽヽ、不埒と云はんより寧ろ無埒の方だらう。それ丈は鳥渡區別して置いて貰はんと名譽に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いて居る。純然たる天然居士の再來だ。「此前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行つたんださうだ。此の寒いのによせばいゝのに。——第一今時泉岳寺抔へ參るのはさも東京を知らない、田舍者の樣ぢやないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める權利はない」「成程權利は正にない。權利はどうでもいゝが、あの寺内に義士遺物保存會と云ふ見世物があるだらう。君知つてるか」「うんにや」「知らない？だつて泉岳寺へ行つた事はあるだらう」「いゝや」「ない？こりや驚いた。道理で大變東風を辯護すると思つた。江戸つ子が泉岳寺を知らないのは情ない」「知らなくても敎師は務まるからな」と主人は愈天然居士になる。「そりや好いが、其展覽場へ東風が這入つて見物して居ると、そこへ獨逸人が夫婦連れで來たんだつて。それが最初は日本語で東風に何か質問したさうだ。所が先生例の通り獨逸語が使つて見度くて溜らん男だらう。そら二口三口べら〳〵遣つて見たとさ。すると存外うまく出來たんだ——後で考へるとそれが災の本さね」「それからどうした」と主人は遂に釣り込まれる。「獨逸人が大高源吾の蒔繪の印籠を見て、『之を買ひ度いが賣つてくれるだらうか』と聞くんださうだ。其時東風の返事が面白いぢやないか、日本人は淸廉の君子計りだから到底駄目だと云つたんだとさ。其邊は大分景氣がよかつたが、夫から獨逸人の方では恰好な通辯を得た積りで頻りに聞くさうだ」「何を？」「それがさ、何だか分る位なら心配はないんだが、早口で無暗に問ひ掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思ふと鳶口や掛矢の事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻譯して善いのか習つた事が無いんだから弱らあね」「尤もだ」と主人は敎師の身の上に引き較べて同情を表する。「所へ閑人が物珍しさうにぽつ〳〵集まつてくる。仕舞ひには東風と獨逸人を四方から取り卷いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易へて先生大弱りの體さ」「結局どうなつたんだい」「仕舞ひに東風が我慢出來なくなつたと見えてさいならと日本語で云つてぐん〳〵歸つて來たさうだ。さいならは少し變だ、君の國ではさよならをさいならと云ふかつて聞いて見たら、何、矢つ張りさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだつて、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいゝが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに取られて茫然と見て居たさうだ、ハヽヽヽ面白いぢやないか」「別段面白い事もない樣だ、それを態々報知に來る君の方が餘つ程面白いぜ」と主人は卷煙草の灰を火桶の中へはたき落とす。折柄格子戸のベルが飛び上がる程鳴つて「御免なさい」と鋭い女の聲がする。迷亭と主人は思はず顔を見合はせて沈默する。

主人のうちへ女客は稀有だなと見て居ると、かの鋭い聲の所有主は縮緬の二枚重ねを疊へ擦り附けながら這入つて來る。年は四十の上を少し越した位だらう。拔け上がつた生え際から前髪が堤防工事の樣に高く聳えて、少くとも顔の長さの二分の一丈天に向つてせり出して居る。眼が切通の坂位な勾配で、直線に釣るし上げられて左右に對立する。直線とは鯨より細いといふ形容である。鼻丈は無暗に大きい。人の鼻を盜んで來て顔の眞中へ据ゑ附けた樣に見える。

三坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、獨りで幅を利かして居るが、何となく落ち附かない。其鼻は所謂鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、是では餘りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかゝつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著しい鼻だから、此女が物を云ふときは口が物を言ふと云はんより、鼻が口をきいて居るとしか思はれない。吾輩は此の偉大なる鼻に敬意を表する爲、以來は此女を稱して鼻子鼻子と呼ぶ積りである。鼻子は先づ初對面の挨拶を終つて、「どうも結構な御住居ですこと」と座敷中を睨め廻す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言つた儘、ぷか／＼煙草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君、ありや雨洩りか、板の木目か、妙な模様が出て居るぜ」と暗に主人を促す。「無論雨の洩りさ」と主人が答へると、「結構だなあ」と迷亭が澄まして云ふ。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で憤る。しばらくは三人鼎坐の儘無言である。

「ちと伺ひたい事があつて、參つたんですが」と鼻子は再び話しの口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は「實は私はつい御近所で――あの向う横丁の角屋敷なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理であすこには金田と云ふ標札が出て居ますな」と主人は漸く金田の西洋館と金田の倉を認識した樣だが、金田夫人に對する尊敬の度合は前と同樣である。「實は宿が出まして御話しを伺ふんですが、會社の方が大變忙しいもんですから」と今度は少し利いたらうといふ眼附をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣ひが、初對面の女としては餘り存在過ぎるので既に不平なのである。「會社でも一つぢや無いんです。二つも三つも兼ねて居るんです。夫にどの會社でも重役なんで――多分御存知でせうが」是でも恐れ入らぬかと云ふ顏附をする。元來こゝの主人は博士とか大學教授とかいふと非常に恐縮する男であるが、妙な事には實業家に對する尊敬の度は極めて低い。實業家よりも、中學校の先生の方がえらいと信じて居る。よし信じて居らんでも融通の利かぬ性質として、到底實業家、金滿家の恩顧を蒙る事は覺束ないと諦めて居る。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込みのないと思ひ切つた人の利害には極めて無頓着である。夫だから學者社會を除いて他の方面の事には極めて迂濶で、ことに實業界抔では、どこに、だれが何をして居るか一向知らん。知つても尊敬崇服の念は毫も起らんのである。鼻子の方では天が下の一隅にこんな變人が矢張り日光に照らされて生活して居ようとは夢にも知らない。今迄世の中の人間にも大分接して見たが、金田の妻ですと名乘つて、急に取扱ひの變らない場合はない。どこの會へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる。況んやこんな燻り返つた老書生に於てをや、私の家は向う横丁の角屋敷ですとさへ云へば、職業抔は聞かぬ先から驚くだらうと豫期して居たのである。

「金田つて人を君知つてるか」と主人は無雜作に迷亭に聞く。「知つてるとも、金田さんは僕の伯父の友達だ。此間なんざ園遊會へ御出でになつた」と迷亭は眞面目な返事をする。「へえ君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵さ」と迷亭は愈眞面目である。主人が何か云はうとして云はぬ先に、鼻子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬に古渡更紗か何か重ねて澄まして居る。「おや、あなたが牧山樣の――何でいらつしやいますか、些とも存じませんで、甚だ失禮を致しました。牧山樣には始終御世話になると、宿で每々御噂を致して居ります」

と急に丁寧な言葉使ひをして、御まけに御辭儀迄する。迷亭は「へえ、何、ハヽヽヽ」と笑つて居る。主人はあつ氣に取られて無言で二人を見て居る。「慥か娘の縁邊の事に就きましても色色牧山さまへ御心配を願ひましたさうで……」「へえー、さうですか」と是計りは迷亭にも些と唐突過ぎたと見えて、一寸魂消た樣な聲を出す。「實は方々から呉れ／＼と申し込みは御座いますが、こちらの身分もあるもので御座いますから、滅多な所へも片附けられませんので……」「御尤もで」と迷亭は漸く安心する。「それに就いて、あなたに伺はうと思つて上がつたんですがね」と鼻子は主人の方を見て急に存在な言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月といふ男が度度上がるさうですが、あの人は全體どんな風な人でせう」「寒月の事を聞いて、何にするんです」と主人は苦々敷く云ふ。「やはり御令孃の御婚儀上の關係で、寒月君の性行の一斑を御承知になりたいといふ譯でせう」と迷亭が氣轉を利かす。「それが伺へれば大變都合が宜しいので御座いますが……」「それぢや、御令孃を寒月に御遣りになりたいと仰しやるんで」「遣りたいなんてえんぢや無いんです」と鼻子は急に主人を參らせる。「外にも段々口が有るんですから、無理に貰つて頂かないだつて困りやしません」「それぢや寒月の事なんか聞かんでも好いでせう」と主人も躍起となる。「然し御隱しなさる譯もないでせう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷亭は雙方の間に坐つて、銀煙管を軍配團扇の樣に持つて、心の裡で八卦よいやよいやと怒鳴つて居る。「ぢやあ寒月の方で是非貰ひたいとでも云つたのですか」と主人が正面から鐵砲を喰はせる。「貰ひたいと云つたんぢやないんですけれども……」「貰ひたいだらうと思つていらつしやるんですか」と主人は此婦人鐵砲に限ると覺つたらしい。「話しはそんなに運んでるんぢやありませんが――寒月さんだつて滿更嬉しくない事もないでせう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令孃に戀着したといふ樣な事でもありますか」あるなら云つて見ろと云ふ權幕で主人は反り返る。「まあ、そんな見當でせうね」今度は主人の鐵砲が少しも功を奏しない。今迄面白氣に行司氣取りで見物して居た迷亭も鼻子の一言に好奇心を挑發されたものと見えて、煙管を置いて前へ乘り出す。「寒月が御孃さんに附け文でもしたんですか、是や愉快だ、新年になつて逸話が又一つ殖えて話しの好材料になる」と一人で喜んで居る。「附け文ぢやないんです、もつと烈しいんでさあ、御二人とも御承知ぢやありませんか」と鼻子は乙にからまつて來る。「君知つてるか」と主人は狐附きの樣な顏をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿氣た調子で、「僕は知らん、知つて居りや君だ」と詰まらん所で謙遜する。「いえ御兩人共御存じの事ですよ」と鼻子丈大得意である。「へえー」と御兩人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私から御話しをしませう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏會があつて、寒月さんも出掛けたぢやありませんか。其晩歸りに吾妻橋で何かあつたでせう――詳しい事は言ひますまい、當人の御迷惑になるかも知れませんから――あれ丈の證據がありや充分だと思ひますが、どんなものでせう」と金剛石入りの指環の嵌まつた指を、膝の上へ竝べてつんと居ずまひを直す。偉大なる鼻が益異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きが如き有樣である。

主人は無論、さすがの迷亭も此不意撃には膽を拔かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘧の落ちた病人の樣に坐つて居たが、驚愕の箍がゆるんで漸々持前の本態に復すると共に、滑稽と云ふ感じが一度に吶喊してくる。兩人は申し合はせた如く「ハヽヽヽヽ」と笑ひ崩れ

る。鼻子計りは少し當てが外れて、此際笑ふのは甚だ失禮だと兩人を睨みつける。「あれが御孃さんですか。成程こりやいゝ、仰しやる通りだ、ねえ苦沙彌君、全く寒月は御孃さんを戀つてるに相違ないね……もう隱したつて仕樣がないから白狀しようぢやないか」「ウフン」と主人は言つた儘である。「本當に御隱しなさつても不可ませんよ、ちやんと種は上がつてるんですからね」と鼻子は又得意になる。「かうなりや仕方がない。何でも寒月君に關する事實は御參考の爲に陳述するさ。おい苦沙彌君、君が主人だのに、さう、にや〳〵笑つて居ては埒があかんぢやないか。實に祕密といふものは恐ろしいものだねえ。いくら隱しても、どこからか露見するからな。——然し不思議と云へば不思議ですねえ、金田の奧さん、どうして此祕密を御探知になつたんです、實に驚きますな」と迷亭は一人で喋舌る。「私の方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顏をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎる樣ですぜ。一體誰に御聞きになつたんです」「ぢき此裏に居る車屋の神さんからです」「あの黑猫の居る車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「えゝ、寒月さんの事ぢや、餘つ程使ひましたよ。寒月さんが、こゝへ來る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを賴んで一々知らせて貰ふんです」「そりや苛い」と主人は大きな聲を出す。「なあに、あなたが何をなさらうと仰しやらうと、夫に構つてるんぢやないんです。寒月さんの事丈ですよ」「寒月の事だつて、誰の事だつて——全體あの車屋の神さんは氣に食はん奴だ」と主人は一人怒り出す。「然しあなたの垣根のそとへ來て立つて居るのは向うの勝手ぢやありませんか。話しが聞こえてわるけりや、もつと小さい聲でなさるか、もつと大きなうちへ御這入んなさるがいいでせう」と鼻子は少しも赤面した樣子がない。「車屋計りぢやありません。新道の二絃琴の師匠からも大分色々な事を聞いて居ます」「寒月の事をですか」「寒月さん計りの事ぢやありません」と少し凄い事を云ふ。主人は恐れ入るかと思ふと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分丈人間らしい顏をして居る、馬鹿野郎です」「憚り樣、女ですよ。野郎は御門違ひです」と鼻子の言葉使ひは益御里をあらはして來る。是では丸で喧嘩をしに來た樣なものであるが、そこへ行くと迷亭は矢張り迷亭で、此談判を面白さうに聞いて居る。鐵枴仙人が軍鷄の蹴合ひを見る樣な顏をして平氣で聞いて居る。

惡口の交換では到底鼻子の敵でないと自覺した主人は、暫らく沈默を守るの已むを得ざるに至らしめられて居たが、漸く思ひ附いたか、「あなたは寒月の方から御孃さんに戀着した樣にばかり仰しやるが、私の聞いたんぢや、少し違ひますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救ひを求める。「うん、あの時の話しぢや、御孃さんの方が、始め病氣になつて——何だか譫語をいつた樣に聞いたね」「なに、そんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使ひをする。「それでも、寒月は慥かに○○博士の夫人から聞いたと云つて居ましたぜ」「それがこつちの手なんでさあ、○○博士の奧さんを賴んで寒月さんの氣を引いて見たんでさあね」「○○の奧さんは、夫を承知で引き受けたんですか」「えゝ、引き受けて貰ふたつて、只ぢや出來ませんやね、それやこれやで色々物を使つて居るんですから」「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなくつちや御歸りにならないと云ふ決心ですかね」と迷亭も少し氣持ちを惡くしたと見えていつになく手障りのあらい言葉を使ふ。「いゝや君、話したつて損の行く事ぢやなし、話さうぢやないか、苦沙彌君。——奧さん、私でも苦沙彌でも寒月君に關する事實で差支へのない事

は、みんな話しますからね、——さう、順を立てて段々聞いて下さると都合がいゝですね」

鼻子は漸く納得してそろ〳〵質問を呈出する。一時荒立てた言葉使ひも迷亭に對しては又もとの如く丁寧になる。「寒月さんも理學士ださうですが、全體どんな事を專門にして居るので御座います」「大學院では地球の磁氣の研究をやつて居ます」と主人が眞面目に答へる。不幸にして其意味が鼻子に分らんものだから「へえー」とは云つたが、怪訝な顏をして居る。「それを勉強すると博士になれませうか」と聞く。「博士にならなければ遣れないと仰しやるんですか」と主人は不愉快さうに尋ねる。「えゝ。只の學士ぢやね、いくらでもありますからね」と鼻子は平氣で答へる。主人は迷亭を見て愈いやな顏をする。「博士になるかならんかは僕等も保證する事が出來んから、ほかの事を聞いて頂く事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でも其地球の——何かを勉強して居るんで御座いませうか」「二三日前は首縊りの力學と云ふ研究の結果を理學協會で演說しました」と主人は何の氣も附かずに云ふ。「おやいやだ、首縊りだなんて餘つ程變人ですねえ。そんな首縊りや何かやつてたんぢや、とても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊つちやあ六づ箇敷いですが、首縊りの力學なら成れないとも限らんです」「さうでせうか」と今度は主人の方を見て顏色を窺ふ。悲しい事に力學と云ふ意味がわからんので落ち附き兼ねて居る。然し是しきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、只相手の顏色で八卦を立てて見る。主人の顏は澁い。「其外になにか、分り易いものを勉強して居りますまいか」「さうですな、先達て團栗のスタビリチーを論じて併せて天體の運行に及ぶと云ふ論文を書いた事があります」「團栗なんぞでも大學校で勉強するものでせうか」「さあ僕も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやる位なんだから、研究する價値があると見えますな」と迷亭は澄まして冷かす。鼻子は學問上の質問は手に合はんと斷念したものと見えて、今度は話頭を轉ずる。「御話しは違ひますが——此御正月に椎茸を食べて前齒を二枚折つたさうぢや御座いませんか」「えゝ其の缺けた所に空也餠がくつ附いて居ましてね」と迷亭は此質問こそ吾繩張り內だと急に浮かれ出す。「色氣のない人ぢや御座いませんか。何だつて楊子を使はないんでせう」「今度逢つたら注意して置きませう」と主人がくす〳〵笑ふ。「椎茸で齒がかける位ぢや、餘程齒の性が惡いと思はれますが、如何なものでせう」「善いとは言はれますまいな——ねえ迷亭」「善い事はないが一寸愛嬌があるよ。あれぎり、まだ塡めない所が妙だ。今だに空也餠引掛所になつてるなあ奇觀だぜ」「齒を塡める小遣がないので缺けなりにして置くんですか、又は物好きで缺けなりにして置くんでせうか」「何も永く前齒缺成を名乘る譯でもないでせうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌は段々回復してくる。鼻子は又問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ當人の書いたものでも御座いますなら一寸拜見したいもんで御座いますが」「端書なら澤山あります、御覽なさい」と主人は書齋から三四十枚持つて來る。「そんなに澤山拜見しないでも——其內の二三枚丈……」「どれ〳〵僕が好いのを選つてやらう」と迷亭先生は「是なざあ面白いでせう」と一枚の繪端書を出す。「おや繪もかくんで御座いますか、中々器用ですね、どれ拜見しませう」と眺めて居たが「あらいやだ、狸だよ。何だつて選りに選つて狸なんぞかくんでせうね——夫でも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「其文句を讀んで御覽なさい」と主人が笑ひながら云ふ。鼻子は下女が新聞を讀む樣に讀み出す。「舊暦の歲

の夜、山の狸が園遊會をやつて盛に舞踏します。其歌に曰く、來いさ、としの夜で、御山婦美も來まいぞ。スツポコポンノポン。何ですこりや、人を馬鹿にして居るぢや御座いませんか」と鼻子は不平の體である。「此天女は御氣に入りませんか」と迷亭が又一枚出す。見ると天女が羽衣を着て、琵琶を彈いて居る。「此天女の鼻が少し小さ過ぎる樣ですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を讀んで御覽なさい」文句にはかうある。「昔ある所に一人の天文學者がありました。ある夜いつもの樣に高い臺に登つて、一心に星を見て居ますと、空に美しい天女が現はれ、此世では聞かれぬ程の微妙な音樂を奏し出したので、天文學者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れて仕舞ひました。朝見ると其天文學者の死骸に霜が眞白に降つて居ました。是は本當の噺だと、あのうそつきの爺やが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もないぢやありませんか、是でも理學士で通るんですかね。ちつと文藝俱樂部でも讀んだらよささうなものですがねえ」と寒月君散々にやられる。迷亭は面白半分に「是やどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあつて、例の如く其下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寢覺の千鳥に泣いた、親は船乘り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるぢやありませんか」「話せますかな」「えゝ、是なら三味線に乘りますよ」「三味線に乘りや本物だ。是や如何です」と迷亭は無暗に出す。「いえ、もう是丈拜見すれば、ほかのは澤山で、そんなに野暮でないんだと云ふ事は分りましたから」と一人で合點して居る。鼻子は是で寒月に關する大抵の質問を卒へたものと見えて、「是は甚だ失禮を致しました。どうか私の參つた事は寒月さんへは內々に願ひます」と得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云ふ方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をすると、「いづれ其内御禮は致しますから」と念を入れて言ひながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や、迷亭が「ありや何だい」と云ふと、主人も「ありや何だい」と雙方から同じ問ひをかける。奧の部屋で細君が怺へ切れなかつたと見えてクツ〳〵笑ふ聲が聞こえる。迷亭は大きな聲を出して、「奧さん〳〵、月並の標本が來ましたぜ。月並もあの位になると中々振つて居ますなあ。さあ遠慮は入らんから、存分御笑ひなさい」

　主人は不滿な口氣で「第一氣に喰はん顏だ」と憎らしさうに云ふと、迷亭はすぐ引きうけて、「鼻が顏の中央に陣取つて乙に構へて居るなあ」とあとを附ける。「然も曲がつて居らあ」「少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇拔過ぎる」と面白さうに笑ふ。「夫を剋する顏だ」と主人は猶口惜しさうである。「十九世紀で賣れ殘つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ」と迷亭は妙な事ばかり云ふ。所へ細君が奧の間から出て來て、女丈に、「あんまり惡口を仰しやると、又車屋の神さんにいつけられますよ」と注意する。「少しいつける方が藥ですよ、奧さん」「然し顏の讒訴抔をなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる譯でもありませんから――夫に相手が婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻子の鼻を辯護すると、同時に自分の容貌も間接に辯護して置く。「何ひどいものか。あんなのは婦人ぢやない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、中々えら者だ。大分引き搔かれたぢやないか」「全體敎師を何と心得て居るんだらう」「裏の車屋位に心得て居るのさ。あゝ云ふ人物に尊敬されるには博士に成るに限るよ。一體博士になつて置かんのが君

の不了簡さ、ねえ奧さん、さうでせう」と迷亭は笑ひ乍ら細君を顧る。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君に迄見離される。「是でも今になるかも知れん、輕蔑するな。貴樣なぞは知るまいが昔アイソクラチスと云ふ人は九十四歲で大著述をした。ソフオクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、殆ど百歲の高齡だつた。シモニヂスは八十で妙詩を作つた。おれだつて……」「馬鹿々々しいわ、あなたの樣な胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちやんと主人の壽命を豫算して居る。「失敬な、――甘木さんへ行つて聞いて見ろ――元來御前がこんな皺苦茶な黑木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せて置くから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着て居るやうな奴を着るから出して置け」「出して置けつて、あんな立派な御召は御座んせんわ。金田の奧さんが迷亭さんに丁寧になつたのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎ぢや御座いません」と細君うまく責任を逃れる。

　主人は伯父さんと云ふ言葉を聞いて急に思ひ出した樣に、「君に伯父があると云ふ事は、今日始めて聞いた。今迄ついに噂をした事がないぢやないか。本當にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云はぬ許りに「うん、其伯父さ、其伯父が馬鹿に頑物でねえ――矢張りその十九世紀から連綿と今日迄生き延びて居るんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホヽヽヽ面白い事許り仰しやつて、どこに生きていらつしやるんです」「靜岡に生きてますがね、それが只生きてるんぢや無いです。頭にちよん髷を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被れつてえと、おれは此年になるが、まだ帽子を被る程寒さを感じた事がないと威張つてるんです――寒いからもつと寐て入らつしやいと云ふと、人間は四時間寐れば充分だ、四時間以上寐るのは贅澤の沙汰だつて朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには永年修業をしたもんだ、若いうちは何うしても眠たくて行かなんだが、近頃に至つて始めて隨處任意の庶境に入つて甚だ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寐られなくなるなあ當り前でさあ。修業も糸瓜も入つたものぢやないのに當人は全く克己の力で成功したと思つてるんですからね。それで外出する時には、屹度鐵扇をもつて出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、只持つて出るんだね。まあステツキの代り位に考へてるかも知れんよ。所が先達て妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合ひのない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云ふんです。一寸驚いたから、郵便で問ひ返した所が老人自身が着ると云ふ返事が來ました。二十三日に靜岡で祝捷會があるから夫迄に間に合ふ樣に、至急調達しろと云ふ命令なんです。所が可笑しいのは命令中にかうあるんです。帽子は好い加減な大きさのを買つて呉れ、洋服も寸法を見計らつて大丸へ注文して呉れ……」「近頃は大丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋と間違へたんだあね」「寸法を見計らつて呉れたつて無理ぢやないか」「そこが伯父の伯父たる所さ」「どうした？」「仕方がないから見計らつて送つてやつた」「君も亂暴だな。夫で間に合つたのかい」「まあ、どうにか、かうにか落ち附いたんだらう。國の新聞を見たら、當日牧山翁は珍しくフロックコートにて、例の鐵扇を持ち……」「鐵扇丈は離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鐵扇丈は入れてやらうと思つて居るよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かつた」「所が大間違ひ

さ。僕も無事に行つて難有いと思つてると、暫らくして國から小包が屆いたから、何か禮でも呉れた事と思つて開けて見たら、例の山高帽子さ。手紙が添へてあつてね、折角御求め被下候へども少々大きく候間、帽子屋へ御遣はしの上、御縮め被下度候。縮め賃は小爲替にて此方より御送可申上候とあるのさ」「成程、迂濶だな」と主人は己より迂濶なものの天下にある事を發見して大いに滿足の體に見える。やがて「それからどうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴して被つて居らあ」「あの帽子かあ」と主人がにや〱笑ふ。「其方が男爵で入らつしやるんですか」と細君が不思議さうに尋ねる。「誰がです」「其鐵扇の伯父さまが」「なあに漢學者でさあ、若い時聖堂で朱子學か何かに凝り固まつたものだから、電氣燈の下で恭しくちよん髷を頂いて居るんです、仕方がありません」とやたらに顋を撫で廻す。「それでも君は、さつきの女に牧山男爵と云つた樣だぜ」「さう仰しやいましたよ、私も茶の間で聞いて居りました」と細君も是丈は主人の意見に同意する。「さうでしたかな、アハヽヽヽ」と迷亭は譯もなく笑ふ。「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長位になつて居まさあ」と平氣なものである。「何だか變だと思つた」と主人は嬉しさうな、心配さうな顏附をする。「あらまあ、能く眞面目であんな嘘が附けますねえ。あなたも餘つ程法螺が御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上手でさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣ひはありません」「然し奧さん、僕の法螺は單なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂膽があつて、曰く附きの嘘ですぜ。たちが惡いです。猿智慧から割り出した術數と、天來の滑稽趣味と混同されちや、コメヂーの神樣も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる譯に立ち至りますからな」主人は俯目になつて「どうだか」と云ふ。細君は笑ひながら「同じ事ですわ」と云ふ。

吾輩は今迄向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構へか見た事は無論ない。聞いた事さへ今が始めてである。主人の家で實業家が話頭に上つた事は一返もないので、主人の飯を食ふ吾輩迄が此方面には單に無關係なるのみならず、甚だ冷淡であつた。然るに先刻圖らずも鼻子の訪問を受けて、餘所ながら其談話を拜聽し、其令孃の艷美を想像し、又其富貴、權勢を思ひ浮べて見ると、猫ながら安閑として縁側に寐轉んで居られなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に對して甚だ同情の至りに堪へん。先方では博士の奧さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院迄買收して知らぬ間に、前齒の缺けたのさへ探偵して居るのに、寒月君の方では只ニヤ〱して羽織の紐計り氣にして居るのは、如何に卒業したての理學士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つて、あゝ云ふ偉大な鼻を顏の中に安置して居る女の事だから、滅多な者では寄り附ける譯の者ではない。から云ふ事件に關しては主人は寧ろ無頓着で且餘りに錢がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを與へる便宜は尠からう。して見ると可哀相なのは首縊りの力學を演説する先生計りとなる。吾輩でも奮發して、敵城へ乘り込んで其動靜を偵察してやらなくては、あまりに不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを讀んで机の上へ叩きつける位な學者の家に寄寓する猫で、世間一般の癡猫、愚猫とは少しく撰を異にして居る。此冒險を敢てする位の義俠心は固より尻尾の先に疊み込んである。何も寒月君に恩になつたと云ふ譯もないが、是はたゞに個人の爲にする血氣躁狂の沙汰

ではない。大きく云へば公平を好み中庸を愛する天意を現實にする天晴な美擧だ。人の許諾を經ずして吾妻橋事件抔を到る處に振り廻す以上は、人の軒下に犬を忍ばして、其報道を得々として逢ふ人に吹聽する以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至る迄を使用して、國家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は――猫にも覺悟がある。幸ひ天氣も好い、霜解けは少々閉口するが道の爲には一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、縁側へ梅の花の印を押す位な事は、只お三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されない。翌日とも云はず是から出掛けようと勇猛精進の大決心を起こして臺所迄飛んで出たが「待てよ」と考へた。吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、腦力の發達に於ては敢て中學の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造丈はどこ迄も猫なので人間の言語は饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見屆けた所で、肝心の寒月君に敎へてやる譯に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、折角の知識も無用の長物となる。是は愚だ、やめようか知らんと上り口で佇んで見た。

然し一度思ひ立つた事を中途で已めるのは、白雨が來るかと待つて居る時黑雲共隣國へ通り過ぎた樣に、何となく殘り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、所謂正義の爲、人道の爲なら、たとひ無駄死をやる迄も進むのが、義務を知る男兒の本懷であらう。無駄骨を折り、無駄足を汚す位は猫として適當の所である。猫と生れた因果で寒月、迷亭、苦沙彌諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はないが、猫丈に忍びの術は諸先生より達者である。他人の出來ぬ事を成就するのは其自身に於て愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られて居るなと云ふ自覺を彼等に與ふる丈が愉快である。こんなに愉快が續々出て來ては行かずには居られない。矢張り行く事に致さう。

向う横町へ來て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顏に占領して居る。この主人も此西洋館の如く傲慢に構へて居るんだらうと、門を這入つて其建築を眺めて居たが、只人を威壓しようと、二階造りが無意味に突つ立つて居る外に何等の能もない構造であつた。迷亭の所謂月並とは是であらうか。玄關を右に見て、植込の中を通り拔けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は廣い。苦沙彌先生の臺所の十倍は慥かにある。先達て「日本新聞」に詳しく書いてあつた大隈伯の勝手にも劣るまいと思ふ位整然とぴか〱して居る。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪程の土間に、例の車屋の神さんが立ち乍ら、御飯焚と車夫を相手に頻りに何か辯じて居る。こいつは劍呑だと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云ふ。「知らねえ事があるもんか、此界隈で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」是は抱へ車夫の聲である。「なんとも云へないよ。あの教師と來たら、本より外に何も知らない變人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の子供の歳さへ知らないんだもの」と神さん。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐變木だ。構あ事あねえ、みんなで威嚇かしてやらうぢやねえか」「それが好いよ。奧樣の鼻が大き過ぎるの、顏が氣に喰はないのつて――そりやあ酷い事を云ふんだよ。自分の面あ今戸燒の

狸見た樣な癖に――あれで一人前だと思つて居るんだから遣り切れないぢやないか」「額ばかりぢやない、手拭を提げて湯に行く所からして、いやに高慢ちきぢやないか。自分位えらい者は無い積りで居るんだよ」と苦沙彌先生は飯焚にも大いに不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の傍へ行つて惡口を散々いつてやるんだね」「さうしたら屹度恐れ入るよ」「然し、こつちの姿を見せちやあ面白くねえから、聲丈聞かして、勉強の邪魔をした上に、出來る丈じらして遣れつて、さつき奥樣が言ひ附けて御出でなすつたぜ」「そりや分つて居るよ」と神さんは惡口の三分の一を引き受けると云ふ意氣を示す。成程この手合が苦沙彌先生を冷かしに來るなと三人の横を、そつと通り拔けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きが如し、どこを歩いても不器用な音のした試しがない。空を踏むが如く、雲を行くが如く、水中に磬を打つが如く、洞裏に瑟を鼓するが如く、醍醐の妙味を嘗めて言詮の外に冷暖を自知するが如し。月並な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、權助も、飯焚も、御孃さまも、仲働も、鼻子夫人も、夫人の旦那樣もない。行きたい所へ行つて聞き度い話しを聞いて、舌を出し尻尾を掉つて、髭をぴんと立てて悠々と歸るのみである。殊に吾輩は此道に掛けては日本一の堪能である。草雙紙にある猫又の血脈を受けて居りはせぬかと自ら疑ふ位である。蝦蟇の額には夜光の明珠があると云ふが、吾輩の尻尾には神祇釋教戀無常は無論の事、滿天下の人間を馬鹿にする一家相傳の妙藥が詰め込んである。金田家の廊下を人の知らぬ間に横行する位は、仁王樣が心太を踏み潰すよりも容易である。此時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、是も不斷大事にする尻尾の御蔭だなと氣が附いて見ると只置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を禮拜してニャン運長久を祈らばやと、一寸低頭して見たが、どうも少し見當が違ふ樣である。可成尻尾の方を見て三拜しなければならん。尻尾の方を見ようと身體を廻すと尻尾も自然と廻る。追ひ附かうと思つて首をねぢると尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳け出す。成程天地玄黄を三寸裏に收める程の靈物だけあつて、到底吾輩の手に合はない。尻尾を環る事七度半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこに居るのだか一寸方角が分らなくなる。構ふものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障子の裏で鼻子の聲がする。こゝだと立ち留まつて、左右の耳をはすに切つて、息を凝らす。「貧乏教師の癖に生意氣ぢやありませんか」と例の金切り聲を振りたてる。「うん、生意氣な奴だ。ちと懲らしめの爲にいぢめてやらう。あの學校にや國のものも居るからな」「誰が居るの？」「津木ピン助や福地キシャゴが居るから、頼んでからかはしてやらう」吾輩は金田君の生國は分らんが、妙な名前の人間計り揃つた所だと少々驚いた。金田君は猶語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話しでは英語のリードルか何か專門に教へるんだつて云ひます」「どうせ碌な教師ぢやあるめえ」あるめえにも尠からず感心した。「此間ピン助に逢つたら、私の學校にや妙な奴が居ります。生徒から先生番茶は英語で何と云ひますと聞かれて、番茶は savage tea であると眞面目に答へたんで、教員間の物笑ひとなつて居ます。どうもあんな教員があるから、ほかのものの迷惑になつて困りますと云つたが、大方あいつの事だぜ」「あいつに極まつて居まさあ、そんな事を云ひさうな面構へですよ、いやに髭なんか生やして」「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫杯は一疋だつて怪しかり樣がない。「それにあの迷亭とか、へゞれけとか云ふ奴は、まあ何

てえ癲狂な跳ねつ返りなんでせう。伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんざ、有る筈がないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものの言ふ事を眞に受けるのも惡い」「惡いつて、あんまり人を馬鹿にし過ぎるぢやありませんか」と大變殘念さうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句も出ない。吾輩の忍んで來る前に評判記は濟んだものか、又は既に落第と事が極まつて念頭にないのか、其邊は懸念もあるが仕方がない。しばらく佇んで居ると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬ先に、と其方角へ歩を向ける。

來て見ると女が獨りで何か大聲で話して居る。其聲が鼻子とよく似て居る所を以て推すと、是が即ち當家の令孃、寒月君をして未遂入水を敢てせしめたる代物だらう。惜哉障子越しで玉の御姿を拜する事が出來ない。從つて顔の眞中に大きな鼻を祭り込んで居るか、どうだか受け合へない。然し談話の模樣から鼻息の荒い所抔を綜合して考へて見ると、滿更人の注意を惹かぬ獅子鼻とも思はれない。女はしきりに喋舌つて居るが相手の聲が少しも聞こえないのは、噂にきく電話といふものであらう。「御前は大和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取つて置いて御呉れ、いゝかえ――分つたかい。――なに分らない？ おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。――なんだつて。――取れない？ 取れない筈はない、とるんだよ――へゝゝゝ御冗談をだつて――何が御冗談なんだよ――いやに人を御ひやらかすよ。全體御前は誰だい。長吉だ？ 長吉なんぞぢや譯が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云ひな――なに？ 私で何でも辨じます？――お前は失敬だよ。妾を誰だか知つてるのかい。金田だよ。――へゝゝゝ善く存じて居りますだつて。ほんとに馬鹿だよ此人あ。――金田だつてえばさ。――なに？――毎度御贔屓にあづかりまして難有う御座います？――何が難有いんだね。御禮なんか聞きたかあないやね――おや又笑つてるよ。御前は餘つ程愚物だね。――仰せの通りだつて？――あんまり人を馬鹿にすると電話を切つて仕舞ふよ。いゝのかい。困らないのかよ――默つてちや分らないぢやないか、何とか御云ひなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。令孃は癇癪を起こしてやけにベルをジャラ〳〵と廻す。足元で狆が驚いて急に吠え出す。是は迂闊に出來ないと、急に飛び下りて椽の下へもぐり込む。

折柄廊下を近づく足音がして障子を開ける音がする。誰か來たなと一生懸命に聞いて居ると、「御孃樣、旦那樣と奥樣が呼んで入らつしやいます」と小間使らしい聲がする。「知らないよ」と令孃は劍突を食はせる。「一寸用があるから孃を呼んで來いと仰しやいました」「うるさいね、知らないつてば」と令孃は第二の劍突を食はせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんださうで御座います」と小間使は氣を利かして機嫌を直さうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ――大嫌ひだわ、絲瓜が戸惑ひをした樣な顔をして」第三の劍突は、憐れなる寒月君が留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髮に結つたの」小間使はほつと一息ついて「今日」と可成單簡な挨拶をする。「生意氣だねえ、小間使の癖に」と第四の劍突を別方面から食はす。「さうして新しい半襟を掛けたぢやないか」「へえ、先達て御孃樣から頂きましたので、結構過ぎて勿體ないと思つて行李の中へ仕舞つて置きましたが、今迄のが餘り汚れましたから掛け易へました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「此御正月、白木屋へ入らつしやいまして、御求め遊ばしたので――鶯茶へ相撲の番附を染

め出したので御座います。妾には地味過ぎていやだから御前に上げようと仰しやつた、あれで御座います」「あらいやだ。善く似合ふのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんぢやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合ふものを、何故だまつて貰つたんだい」「へえ」「御前にさへ、其位似合ふなら、妾にだつて可笑しい事あないだらうぢやないか」「屹度よく御似合ひ遊ばします」「似合ふのが分つてる癖に何故默つてゐるんだい。さうして澄まして掛けて居るんだよ、人の惡い」劍突は留めどもなく連發される。此さき、事局はどう發展するかと謹聽して居る時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな聲で金田君が令孃を呼ぶ。令孃は已むを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狆が顏の中心に眼と口を引き集めた樣な面をして附いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往來へ出て、急いで主人の家に歸る。探檢は先づ十二分の成績である。

歸つて見ると、綺麗な家から汚い所へ移つたので、何だか日當りの善い山の上から薄黑い洞窟の中へ入り込んだ樣な心持ちがする。探檢中は、ほかの事に氣を奪はれて部屋の裝飾、襖、障子の具合抔には眼も留まらなかつたが、わが住居の下等なるを感ずると同時に彼の所謂月並が戀しくなる。教師よりも矢張り實業家がえらい樣に思はれる。吾輩も少し變だと思つて、例の尻尾に伺ひを立てて見たら、其通り其通りと尻尾の先から御託宣があつた。座敷へ這入つて見ると驚いたのは迷亭先生まだ歸らない、卷煙草の吸殼を蜂の巢の如く火鉢の中へ突き立てて、大胡坐で何か話し立てて居る。いつの間にか寒月君さへ來て居る。主人は手枕をして天井の雨洩りを餘念もなく眺めて居る。不相變太平の逸民の會合である。

「寒月君、君の事を譫語にまで言つた婦人の名は、當時祕密であつた樣だが、もう話しても善からう」と迷亭がからかひ出す。「御話しをしても、私丈に關する事なら差し支へないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに〇〇博士夫人に約束をして仕舞つたもんですから」「他言をしないと云ふ約束かね」「えゝ」と寒月君は例の如く羽織の紐をひねくる。其紐は賣品にあるまじき紫色である。「其紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寐ながら云ふ。主人は金田事件抔には無頓着である。「さうさ、到底日露戰爭時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の附いたぶつ割き羽織でも着なくつちや納まりの附かない紐だ。織田信長が聟入をするとき頭の髮を茶筅に結つたと云ふが其節用ひたのは、慥かそんな紐だよ」と迷亭の文句は不相變長い。「實際是は爺が長州征伐の時に用ひたのです」と寒月君は眞面目である。「もういゝ加減に博物館へでも獻納してはどうだ。首縊りの力學の演者、理學士水島寒月君ともあらうものが、賣れ殘りの旗本の樣な用立をするのはちと體面に關する譯だから」「御忠告の通りに致してもいゝのですが、此紐が大變よく似合ふと云つて吳れる人もありますので――」「誰だい、そんな趣味のない事を云ふのは」と主人は寐返りを打ちながら大きな聲を出す。「それは御存じの方なんぢやないんで――」「御存じでなくてもいゝや、一體誰だい」「去る女性なんです」「ハヽヽヽ餘程茶人だなあ。當てて見ようか、矢張り隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだらう、其羽織を着てもう一返御陀佛を極め込んぢやどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へヽヽヽヽヽもう水底から呼んでは居りません、こゝから乾の方角にあたる淸淨な世界で……」「あんまり淸淨でもなさゝうだ、毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顏をする。「向う橫丁の鼻がさつき押しかけて來たん

だよ、こゝへ。實に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙彌君」「うむ」と主人は寐ながら茶を飮む。「鼻つて誰の事です」「君の親愛なる久遠の女性の御母堂樣だ」「へえー」「金田の妻といふ女が君の事を聞きに來たよ」と主人が眞面目に說明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥づかしがるかと寒月君の樣子を窺つて見ると、別段の事もない。例の通り靜かな調子で、「どうか私に、あの娘を貰つて吳れと云ふ依賴なんでせう」と、又紫の紐をひねくる。「所が大違ひさ、其御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね……」迷亭が半ば言ひ懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻に就いて俳體詩を考へて居るんだがね」と木に竹を接いだ樣な事を云ふ。隣の室で細君がくすくす笑ひ出す。「隨分君も呑氣だなあ、出來たのかい」「少し出來た。第一句が此顏に鼻祭りと云ふのだ」「夫から？」「次が此鼻に神酒供へといふのさ」「次の句は？」「まだ夫ぎりしか出來て居らん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑ふ。「次へ穴二つ幽かなりと附けちやどうだ」と迷亭はすぐ出來る。すると寒月が「奧深く毛も見えずはいけますまいか」と各出鱈目を竝べて居ると、垣根に近く、往來で「今戶燒の狸」と四五人わいわい云ふ聲がする。主人も迷亭も一寸驚いて表の方を、垣の隙からすかして見ると、「ワハヽヽヽ」と笑ふ聲がして遠くへ散る足の音がする。「今戶燒の狸といふな何だい」と迷亭が不思議さうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答へる。「中々振つて居ますな」と寒月君が批評を加へる。迷亭は何を思ひ出したか急に立ち上がつて、「吾輩は年來美學上の見地から此鼻に就いて硏究した事が御座いますから、其一斑を披瀝して、御兩君の淸聽を煩はし度いと思ひます」と演舌の眞似をやる。主人は餘りの突然にぼんやりして、無言の儘迷亭を見て居る。寒月は「是非承はりたいものです」と小聲で云ふ。「色々調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審は、もし之を實用上の道具と假定すれば穴が二つで澤山である。何もこんなに橫風に眞中から突き出して見る必要がないのである。所がどうして段々御覽の如く斯樣にせり出して參つたか」と自分の鼻を抓んで見せる。「あんまりせり出しても居らんぢやないか」と主人は御世辭のない所を云ふ。「兎に角引つ込んでは居りませんからな。只二個の孔が併んで居る狀態と混同なすつては誤解を生ずるに至るかも計られませんから、豫め御注意をして置きます。――で愚見によりますと、鼻の發達は吾吾人間が鼻汁をかむと申す微細なる行爲の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したもので御座います」「佯りのない愚見だ」と又主人が寸評を插入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことに此局部丈に刺激を與へますと、進化論の大原則によつて、此局部は此刺激に應ずるが爲め他に比例して不相當な發達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬くなります。遂に凝つて骨となります」「それは少し――さう自由に肉が骨に一足飛びに變化は出來ますまい」と理學士丈あつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰はぬ顏で陳べ續ける。「いや御不審は御尤もですが、論より證據此通り骨があるから仕方がありません。既に骨が出來る。骨は出來ても鼻汁は出ますな。出ればかまずには居られません。此作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と變化して參ります――實に恐ろしい作用です。點滴の石を穿つが如く、賓頭盧の頭が自ら光明を放つが如く、不思議薫不思議臭の喩の如く、斯樣に鼻筋が通つて堅くなります」「それでも君のなんざ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部は回護の恐れがありますから、態と

論じません。かの金田の御母堂の持たせらるゝ鼻の如きは、尤も發達せる尤も偉大なる天下の珍品として御兩君に紹介して置きたいと思ひます」寒月君は思はず「ヒヤ〳〵」と云ふ。「然し物も極度に達しますと、偉觀には相違御座いませんが、何となく怖ろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁抔は素晴らしいには違ひ御座いませんが、少々峻嶮過ぎるかと思はれます。古人のうちにてもソクラテス、ゴールドスミス若しくはサッカレーの鼻抔は構造の上から云ふと隨分申し分は御座いませうが、其の申し分のある所に愛嬌が御座います。鼻高きが故に貴からず、奇なるが爲に貴しとは此故でも御座いませうか。下世話にも鼻より團子と申しますれば、美的價値から申しますと、先づ迷亭位の所が適當かと存じます」寒月と主人は「フヽヽ」と笑ひ出す。迷亭自身も愉快さうに笑ふ。「偖て只今迄辯じましたのは――」「先生辯じましたは少し講釋師の樣で下品ですから、よして頂きませう」と寒月君は先日の復讐をやる。「左樣、然らば顏を洗つて出直しませうかな。――えゝ――是から鼻と顏の權衡に一言論及したいと思ひます。他に關係なく單獨に鼻論をやりますと、かの御母堂抔はどこへ出しても恥づかしからぬ鼻――鞍馬山で展覽會があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有して入らせられますが、悲しいかなあれは眼、口、其他の諸先生と何等の相談もなく出來上がつた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものに相違御座いません。然しシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、當家の猫の顏へ安置したらどんな者で御座いませうか。喩にも猫の額と云ふ位な地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大佛を据ゑ附けた樣なもので、少しく比例を失するの極、其美的價値を落とす事だらうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれの如く、正しく英姿颯爽たる隆起に相違御座いません。然し其周圍を圍繞する顏面的條件は如何な者でありませう。無論當家の猫の如く劣等ではない。然し癲癇病みのおかめの如く眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるゝのは事實であります。諸君、此顏にして此鼻ありと歎ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話しをして居るんだよ。何てえ剛突く張りだらう」と云ふ聲が聞こえる。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭へ敎へてやる。迷亭は又やり始める。「計らざる裏手にあたつて、新たに異性の傍聽者のある事を發見したのは演者の深く名譽と思ふ所であります。殊に婉轉たる嬌音を以て、乾燥なる講筵に一點の艷味を添へられたのは實に望外の幸福であります。可成通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する譯でありますが、是からは少々力學上の問題に立ち入りますので、勢ひ御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛防を願ひます」寒月君は力學と云ふ語を聞いて又にや〳〵する。「私の證據立てようとするのは、此鼻と此顏は到底調和しない、ツアイシングの黃金律を失して居ると云ふ事なんで、夫れを嚴格に力學上の公式から演繹して御覽に入れようと云ふのであります。先づHを鼻の高さとします。αは鼻と顏の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云ふ。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困つたな。苦沙彌はとにかく、君は理學士だから分るだらうと思つたのに。此式が演說の首腦なんだから之を略しては今迄やつた甲斐がないのだが――まあ仕方がない。公式は略して結論丈話さう」「結論があるか」と主人が不思

議さうに聞く。「當り前さ、結論のない演說は、デザートのない西洋料理の樣なものだ。――いいか、兩君よく聞き給へ、是からが結論だぜ。――偖て以上の公式にウイルヒョウ、ワイスマン諸家の說を參酌して考へて見ますと、先天的形體の遺傳は無論の事許さねばなりません。又此形體に追隨して起る心意的狀況は、たとひ後天性は遺傳するものにあらずとの有力なる說あるにも關せず、ある程度迄は必然の結果と認めねばなりません。從つて斯くの如く身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、其鼻にも何か異狀ある事と察せられます。寒月君抔は、まだ年が御若いから金田令孃の鼻の構造に於て特別の異狀を認められんかも知れませんが、かゝる遺傳は潛伏期の長いものでありますから、いつ何時氣候の劇變と共に、急に發達して御母堂のそれの如く、咄嗟の間に膨脹するかも知れません。それ故に此御婚儀は、迷亭の學理的論證によりますと、今の內御斷念になつた方が安全かと思はれます。是には當家の御主人は無論の事、そこに寢て居らるゝ猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人は漸う起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰ふものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩も聊か贊成の意を表する爲に、にやーにやーと二聲許り鳴いて見せる。寒月君は別段騷いだ樣子もなく「先生方の御意向がさうなら、私は斷念してもいゝんですが、もし當人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから――」「ハヽヽヽ艷罪と云ふ譯だ」主人丈は大いにむきになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極まつてらあ、初めて人のうちへ來ておれを遣り込めに掛かつた奴だ。傲慢な奴だ」と獨りでぷん〳〵する。すると又垣根のそばで三四人が「ワハヽヽヽ」と云ふ聲がする。一人が「高慢ちきな唐變木だ」と云ふと、一人が「もつと大きな家へ這入りてえだらう」と云ふ。又一人が「御氣の毒だがいくら威張つたつて蔭辨慶だ」と大きな聲をする。主人は椽側へ出て負けない樣な聲で「八釜しい、何だわざ〳〵そんな塀の下へ來て」と怒鳴る。「ワハヽヽヽ、サヱジ・チーだ、サヱジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大いに逆鱗の體で突然起つてステッキを持つて、往來へ飛び出す。迷亭は手を拍つて「面白い、やれやれ」と云ふ。寒月は羽織の紐を撚つてにや〳〵する。吾輩は主人のあとを附けて垣の崩れから往來へ出て見たら、眞中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立つて居る。人通りは一人もない。一寸狐に抓まれた體である。

倫敦塔

二年の留學中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが斷つた。一度で得た記憶を二返目に打ち壞すのは惜しい、三たび目に拭ひ去るのは尤も殘念だ。「塔」の見物は一度に限ると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理杯は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された樣な心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此響、此群集の中に二年住んで居たら、吾が神經の纖維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべと〳〵になるだらうと、マクス・ノルダウの退化論を今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

しかも余は他の日本人の如く紹介狀を持つて世話になりに行く宛もなく、又在留の舊知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物の爲若しくは用達の爲出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乘らない、馬車へも乘れない、滅多な交通機關を利用しようとすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此の廣い倫敦を蜘蛛手十字に往來する汽車も馬車も電氣鐵道も鋼條鐵道も余には何等の便宜をも與へる事が出來なかつた。余は已むを得ないから四つ角へ出る度に地圖を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地圖で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時は又他の人に尋ねる、何人でも合點の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸くわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのは恰も此方法に依らねば外出の出來ぬ時代の事と思ふ。來るに來所なく去るに去所を知らずと云ふと禪語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したか又如何なる町を横ぎつて吾家に歸つたか未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出來る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稻妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の樣だ。

倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り殘されたるは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人か將た古への人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物靜かな日である。空は灰汁桶を攪き交ぜた樣な色をして低く塔の上に垂れ懸かつて居る。壁土を溶かし込んだ樣に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思はるゝ。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ

所に停まつて居る樣である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて櫓を漕ぐ、是も殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちら〳〵する、大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る。皆過去の感じである。さうして其中に冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つてゐるのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其偉大なるには今更の樣に驚かれた。此建築を俗に塔と稱へて居るが塔と云ふは單に名前のみで實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの、角張りたるもの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べてさうして其を蟲眼鏡で覗いたら或は此「塔」に似たものが出來上がりはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟の寐足らぬ夢の尾を曳く樣に感ぜらるゝ。暫らくすると向う岸から長い手を出して余を引つ張るかと怪しまれて來た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行き度くなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐい〳〵牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸收し了つた。門を入つて振り返つたとき、

「憂の國に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくゞれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくゞれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我前に物なし、只無窮あり、我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。」

といふ句がどこぞに刻んではないかと思つた。余は此時既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの狀をなして恰も巨人の門柱の如く左右に峙つて居る。其中間を連ねて居る建物の下を潜つて向うへ拔ける。中塔とは此事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の盾、黒鐵の冑が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落とす松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて犇き騷ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來から塔中に生きなが

ら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てて一度此門を通過するや否や娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に揺られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ附けられる。口を開けて鰯を吸ふ鯨の待ち構へて居る所迄来るや否やギーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光とを長しへに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか明後日食はれるか或は又十年の後に食はれるか鬼より外に知るものはない。此門に横附けにつく舟の中に坐して居る罪人の、途中の心はどんなであつたらう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴る時、漕ぐ人の手の動く時毎に吾が命をきざまるゝ様に思つたであらう。白き鬚を胸迄垂れて寛やかに黒の法衣を纏へる人がよろめきながら舟から上がる。是は大僧正クランマーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖帷子をつけた立派な男はワイアットであらう。是は会釈もなく舷から飛び上がる。はなやかな鳥の毛を帽に插して黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、軽げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向う側には石段を洗ふ波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以来全く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔の名残に其裾を洗ふ笹波の音を聞く便りを失つた。只向う側に存する血塔の壁上に大いなる鉄環が下がつて居るのみだ。昔は舟の纜を此鐶に繋いだといふ。

左へ折れて血塔の門を入る。今は昔し薔薇の乱に目に余る多くの人を幽閉したのは此塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があつて、其側に甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る真面目な顔をして居るが、早く当番を済まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかつて遊び度いといふ人相である。塔の壁は不規則な石を畳み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑らかではない。所々に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える。建物の大きい所為か下から見ると甚だ小さい。鉄の格子がはまつて居る様だ。番兵が石像の如く突つ立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居る傍に、余は眉を攅め手をかざして此高窓を見上げて佇む。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて烟の如き幕が開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣の室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切が設けられて居る。只其真中の六畳許りの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽はれて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸体の女神の像と、像の周囲に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寝台が横たはる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と、葡萄の葉が手足の触るる場所丈光を射返す。此寝台の端に二人の小児が見えて来た。一人は十三四、一人は十歳位と思はれる。幼き方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚せ、力なき両足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して、年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼き人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開けて、其のあけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔らかにしたる如く美しい手である。

る。二人とも烏の翼を欺く程の黒き上衣を着て居るが色が極めて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、偖ては眉根鼻附から衣装の末に至る迄両人共殆ど同じ様に見えるのは兄弟だからであらう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想ひ見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願へ。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るゝ……」

弟は世に憐れなる声にて「アーメン」と云ふ。折から遠くより吹く木枯の高き塔を撼がして、一度は壁も落つる許りにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に首をすり附ける。雪の如く白い蒲団の一部がほかと膨れ返る。兄は又読み始める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと頼むな。覚悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極みなる……」

弟又「アーメン」と云ふ。其声は顫へて居る。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見ようとする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持つて来て其上につまだつ。百里をつゝむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧る。弟は只「寒い」と答へる。「命さへ助けて呉るゝなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言の様につぶやく。弟は「母様に逢ひたい」とのみ云ふ。此時向うに掛かつて居るタペストリに織り出してある女神の裸体像が風もないのに二三度ふはりふはりと動く。

忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立つて居る。面影は青白く窶れては居るが、どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭しく婦人の前に礼をする。

「逢ふ事を許されてか」と女が問ふ。

「否」と気の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらんと思へど、公の掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情賣るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の内からかいつぶりがひよいと浮き上がる。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に与へて、「只束の間を垣間見んとの願ひなり。女人の頼み引き受けぬ君はつれなし」と云ふ。

男は鎖を指の先に巻きつけて思案の体である。かいつぶりはふいと沈む。やゝありていふ、「牢守は牢の掟を破りがたし。御子等は変る事なく、すこやかに月日を過ごさせ給ふ。心安く覚して帰り給へ」と金の鎖を押し戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかり敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋ねる。

「御気の毒なれど」と牢守が云ひ放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひながら女はさめざめと泣く。

舞台が又変る。

丈の高い黒装束の影が一つ中庭の隅にあらはれる。苔寒き石壁の中からスーと抜け出た様に思はれた。夜と霧との境に立つて朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黒装束の影が又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と脊の高いのが云ふ。「昼の世界に顔は出せぬ」と一人が答へる。「人殺しも多くしたが今日程寝覚めの悪い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて帰らうかと思うた」と低

いのが正直に云ふ。「絞める時、花の様な唇がぴり／＼と顫うた」――透き通る様な額に紫色の筋が出た」――「あの唸つた聲がまだ耳に附いて居る」。黒い影が再び黒い夜の中に吸ひ込まれる時櫓の上で時計の音ががあんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立つて居た番兵は銃を肩にしてコトリ／＼と敷石の上を歩いて居る。あるき乍ら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る。

血塔の下を抜けて向うへ出ると綺麗な廣場がある。其眞中が少し高い、其高い所に白塔がある。白塔は塔中の尤も古きもので昔の天主である。竪二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角樓が聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さへ見える。千三百九十九年國民が三十三ヶ條の非を擧げてリチャード二世に讓位をせまつたのは此塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立つて彼が天下に向つて讓位を宣告したのは此塔中である。爾時讓りを受けたるヘンリーは起つて十字を額と胸に畫して云ふ「父と子と聖靈の名によつて、我ヘンリーは此大英國の王冠と御代とを、わが正しき血、惠みある神、親愛なる友の援けを藉りて讓ぎ受く」と。偖て先王の運命は何人も知る者がなかつた。其死骸がポント・フラクト城より移されて聖ポール寺に着した時二萬の群集は彼の屍を繞つて其骨立せる面影に驚かされた。或は云ふ、八人の刺客がリチャードを取り巻いた時、彼は一人の手より斧を奪ひて一人を斬り二人を倒した。去れどもエクストンが背後より下せる一撃の爲に遂に恨を呑んで死なれたと。或者は天を仰いで云ふ「あらずあらず。リチャードは斷食をして自らと、命の根をたたれたのちや」と。何れにしても難有くない。帝王の歴史は悲慘の歴史である。

階下の一室は昔ヲルター・ロリーが幽囚の際萬國史の草を記した所だと云ひ傳へられて居る。彼がエリザ式の半ずぼんに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左の上へ乘せて鵞ペンの先を紙の上へ突いたまゝ首を少し傾けて考へて居る所を想像して見た。然し其部屋は見る事が出來なかつた。

南側から入つて螺旋狀の階段を上ると茲に有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆ぴか／＼光つて居る。日本に居つたとき歴史や小說で御目にかゝる丈で一向要領を得なかつたものが一々明瞭になるのは甚だ嬉しい。然し嬉しいのは一時の事で今では丸で忘れて仕舞つたから矢張り同じ事だ。只猶記憶に殘つて居るのが甲冑である。其中でも實に立派だと思つたのは慥かヘンリー六世の着用したものと覺えて居る。全體が鋼鐵製で所々に象嵌がある。尤も驚くのは其の偉大な事である。かゝる甲冑を着けたものは少くとも身の丈七尺位の大男でなくてはならぬ。余が感服して此甲冑を眺めて居るとコトリ／＼と足音がして、余の傍へ歩いて來るものがある。振り向いて見るとビーフ・イーターである。ビーフ・イーターと云ふと始終牛でも食つて居る人の様に思はれるがそんなものではない。彼は倫敦塔の番人である。絹帽を潰した様な帽子を被つて美術學校の生徒の様な服を纏うて居る。太い袖の先を括つて腰の所を帶でしめて居る。服にも模様がある。模様は蝦夷人の着る半纏について居る様な頗る單純の直線を並べて角形に組み合はしたものに過ぎぬ。彼は時として槍をさへ携へる事がある。穗の短い柄の先に毛の下がつた三國志にでも出さうな槍をもつ。其ビーフ・イーターの一人が余の後に止まつた。彼はあまり脊の高くない、肥り肉の白髯の多いビーフ・イーターであつた。「あなたは日本人では有りませんか」と微笑しながら尋ねる。余は現今の英國

人と話しをして居る氣がしない。彼が三四百年の昔から一寸顏を出したか、又は余が急に三四百年の古へを覗いた様な感じがする。余は默して輕くうなづく。こちらへ來給へと云ふから尾いて行く。彼は指を以て日本製の古き具足を指して、見たかと云はぬ許りの眼附をする。余は又だまつてうなづく。是は蒙古よりチャーレス二世に獻上になつたものだとビーフ・イーターが說明をして呉れる。余は三たびうなづく。

白塔を出てボーシャン塔に行く。途中に分捕の大砲が並べてある。其前の所が少しばかり鐵柵で圍ひ込んで、鎖の一部に札が下がつて居る。見ると仕置場の跡とある。二年も三年も長いのは十年も日の通はぬ地下の暗室に押し込められたものが、或日突然地上に引き出さるゝかと思ふと地下よりも猶恐ろしき此場所へ只据ゑらるゝ爲であつた。久しぶりに青天を見て、やれ嬉しやと思ふ間もなく、目がくらんで物の色さへ定かには眸中に寫らぬ先に、白き斧の刃がひらりと三尺の空を切る。流れる血は生きて居るうちから既に冷たかつたであらう。烏が一疋下りて居る。翼をすくめて黒い嘴をとがらせて人を見る。百年碧血の恨が凝つて化鳥の姿となつて長く此の不吉な地を守る様な心地がする。吹く風に楡の木がざわ／＼と動く。見ると枝の上にも烏が居る。暫らくすると又一羽飛んでくる。何處から來たか分らぬ。傍に七つ許りの男の子を連れた若い女が立つて烏を眺めて居る。希臘風の鼻と、珠を溶いた様にうるはしい目と、眞白な頸筋を形づくる曲線のうねりとが少からず余の心を動かした。子供は女を見上げて「烏が、烏が」と珍しさうに云ふ。それから「烏が寒さうだから、麵麭をやりたい」とねだる。女は靜かに「あの烏は何もたべたがつて居やしません」と云ふ。子供は「なぜ」と聞く。女は長い睫の奥に漾うて居る様な眼で烏を見詰めながら「あの烏は五羽居ます」と云つたぎり子供の問には答へない。何か獨りで考へて居るかと思はるゝ位澄まして居る。余は此女と此烏の間に何か不思議の因緣でもありはせぬかと疑つた。彼は烏の氣分をわが事の如くに云ひ、三羽しか見えぬ烏を五羽居ると斷言する。あやしき女を見捨てて余は獨りボーシャン塔に入る。

倫敦塔の歴史はボーシャン塔の歴史であつて、ボーシャン塔の歴史は悲酸の歴史である。十四世紀の後半にエドワード三世の建立にかゝる此三層塔の一階室に入るものは、其の入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無數の記念を周圍の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲とは此怨、此憤、此の憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に九十一種の題辭となつて今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷やかなる鐵筆に無情の壁を彫つてわが不運と定業とを天地の間に刻み附けたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつ迄も娑婆の光を見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といふて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち自ら知らずして後世に殘す反語程猛烈なるはまたと有るまい。墓碣と云ひ、記念碑といひ、賞牌と云ひ、綬章と云ひ、此等が存在する限りは、空しき物質に、ありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。われは去る、われを傳ふるものは殘ると思ふは、去るわれを傷ましむる媒介物の殘る意にて、われ其者の殘る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未來の世迄反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建ててもらふまい。肉は燒き骨は粉にして西風の強く吹く日大空に向つて撒き散らし

てもらはう杯と入らざる取越苦勞をする。

　題辭の書體は固より一樣でない。あるものは閑に任せて丁寧な楷書を用ひ、あるものは心急ぎてか口惜し紛れかがり／＼と壁を掻いて擲り書きに彫り附けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで其中に古雅な文字をとゞめ、或は盾の形を描いて其內部に讀み難き句を殘して居る。書體の異なる樣に言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、以太利語も羅甸語もある。左側に「我が望は基督にあり」と刻されたのはパスリユといふ坊樣の句だ。此パスリユは千五百三十七年に首を斬られた。其傍にJOHAN DECKERと云ふ署名がある。デッカーとは何者だか分らない。階段を上つて行くと戸の入口にT. C.といふのがある。是も頭文字丈で誰やら見當がつかぬ。其から少し離れて大變綿密なのがある。先づ右の端に十字架を描いて心臟を飾り附け、其脇に髑骨と紋章を彫り込んである。少し行くと盾の中に下の樣な句をかき入れたのが目につく。「運命は空しく我をして心なき風に訴へしむ。時も摧けよ。わが星は悲しかれ、われにつれなかれ」次には「一凡ての人を尊べ。衆生をいつくしめ。神を恐れよ。王を敬へ」とある。

　斯んなものを書く人の心の中はどの樣であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に何が苦しいと云つて所在のない程の苦しみはない。意識の內容に變化のない程の苦しみはない。使へる身體は眼に見えぬ繩で縛られて動きのとれぬ程の苦しみはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながら此活動を抑へらるゝのは生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたを自覺する丈が死よりも一層の苦痛である。此壁の周圍をかく迄に塗抹した人々は皆此死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるゝ限り堪へらるゝ限りは此苦痛と戰つた末、居ても起つてもたまらなく爲つた時、始めて釘の折や鋭き爪を利用して無事の內に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等が題せる一字一畫は、號泣、涕涙、其他凡て自然の許す限りの排悶的手段を盡した後、猶飽く事を知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であらう。

　又想像して見る。生れて來た以上は生きねばならぬ。敢て死を怖るゝとは云はず、只生きねばならぬ。生きねばならぬと云ふは耶蘇孔子以前の道で、又耶蘇孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。凡ての人は生きねばならぬ。此獄に繋がれたる人も亦此大道に從つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何にせば生き延びらるゝだらうかとは時々刻々彼等の胸裏に起こる疑問であつた。一度此室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかない。彼等は遲かれ早かれ死なねばならぬ。去れど古今に亙る大眞理は彼等に誨へて生きよと云ふ、飽く迄も生きよと云ふ。彼等は已むを得ず彼等の爪を磨いだ。尖れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一をかける後も眞理は古への如く生きよと叫く、飽く迄も生きよと叫く。彼等は剝がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二とかいた。斧の刃に肉飛び骨摧ける明日を豫期した彼等は冷やかなる壁の上に只一となり二となり線となり字となつて生きんと願つた。壁の上に殘る橫縱の疵は生を欲する執着の魂魄である。余が想像の絲を茲迄たぐつて來た時、室內の冷氣が一度に背の毛穴から身の內に吹き込む樣な感じがして覺えずぞつとした。さう思つて見ると何だか壁が濕つぽい。指先で撫でて見るとぬらりと露にすべる。指先を見ると眞赤だ。壁の隅

からぽたり／＼と露の珠が垂れる。床の上を見ると其滴りの痕が鮮やかな紅の紋を不規則に連ねる。十六世紀の血がにじみ出したと思ふ。壁の奧の方から唸り聲さへ聞こえる。唸り聲が段々と近くなると其が夜を洩るゝ凄い歌と變化する。こゝは地面の下に通ずる穴倉で其內には人が二人居る。鬼の國から吹き上げる風が石の壁の破れ目を通つて小やかなカンテラを煽るから、只さへ暗い室の天井も四隅も煤色の油煙で渦卷いて動いて居る樣に見える。幽かに聞こえた歌の音は窖中に居る一人の聲に相違ない。歌の主は腕を高くまくつて大きな斧を轆轤の砥石にかけて一生懸命に磨いで居る。其傍には一挺の斧が抛げ出してあるが、風の具合で其白い刃がぴかり／＼と光る事がある。他の一人は腕組をした儘立つて砥の轉るのを見て居る。髯の中から顏が出て居て其半面をカンテラが照らす。照らされた部分が泥だらけの人參の樣な色に見える。「かう毎日の樣に舟から送つて來ては、首斬り役も繁昌だなう」と髯がいふ。「左樣さ、斧を磨ぐ丈でも骨が折れるわ」と歌の主が答へる。是は脊の低い眼の凹んだ煤色の男である。「昨日は美しいのをやつたなあ」と髯が惜しさうにいふ。「いや顏は美しいが頸の骨は馬鹿に堅い女だつた。御蔭で此通り刃が一分許りかけた」とやけに轆轤を廻す、シユ／＼／＼と鳴る間から火花がピチ／＼と出る。磨ぎ手は聲を張り揚げて歌ひ出す。

　　切れぬ筈だよ女の頸は戀の恨みで刃
　　が折れる。

シユ／＼／＼と鳴る音の外には聽こえるものもない。カンテラの光が風に煽られて磨ぎ手の右の頰を射る。煤の上に朱を流した樣だ。「あすは誰の番かな」と稍ありて髯が質問する。「あすは例の婆樣の番さ」と平氣に答へる。

　　生える白髮を浮氣が染める、首を斬
　　られりや血が染める。

と高調子に歌ふ。シユ／＼／＼と轆轤が廻る。ピチ／＼と火花が出る。「アハヽヽ、もう善からう」と斧を振り翳して灯影に刃を見る。「婆樣ぎりか、外に誰も居ないか」と髯が又問をかける。「それから例のがやられる」「氣の毒な、もうやるか、可哀相になう」といへば、「氣の毒ぢやが仕方がないわ」と眞黑な天井を見て嘯く。

　忽ち窖も首斬りもカンテラも一度に消えて余はボーシャン塔の眞中に茫然と佇んで居る。ふと氣が附いて見ると傍に先刻鴉に麵麭をやりたいと云つた男の子が立つて居る。例の怪しい女ももとの如くついて居る。男の子が壁を見て「あすこに犬がかいてある」と驚いた樣に云ふ。女は例の如く過去の權化と云ふべき程の屹とした口調で、「犬ではありません。左が熊、右が獅子で、是はダッドレー家の紋章です」と答へる。實の所余も犬か豚だと思つて居たのであるから、今此女の說明を聞いて益不思議な女だと思ふ。さう云へば今ダッドレーと云つたとき其言葉の內に何となく力が籠つて、恰も己の家名でも名乘つた如くに感ぜらるゝ。余は息を凝らして兩人を注視する。

　女は猶說明をつゞける。「此紋章を刻んだ人はジョン・ダッドレーです」恰もジョンは自分の兄弟の如き語調である。「ジョンには四人の兄弟があつて、其兄弟が熊と獅子の周圍に刻み附けられてある草花でちやんと分ります」見ると成程四通りの花だか葉だかが油繪の枠の樣に熊と獅子を取り卷いて彫つてある。「こゝにあるのはAcornsで是はAmbroseの事です。こちらにあるのがRoseでRobertを代表するのです。下の方に忍冬が描いてありませう。忍冬はHoneysuckleだからHenryに當たるのです。左の上に塊まつて居るのがGeraniumで是はG…」と云つたぎり默つて居る。見ると珊瑚

の様な唇が電氣でも懸けたかと思はれる迄にぶる〳〵と顫へて居る。蝮が鼠に向つたときの舌の先の如くだ。しばらくすると女は此紋章の下に書き附けてある題辭を朗かに誦した。

Yow that the beasts do wel be-
 [hold and se,
May deme with ease wherefore
 [here made they be
Withe borders wherein............
 [......
4 brothers' names who list to
 [serche the grovnd.

女は此句を生れてから今日迄毎日日課として諳誦した様に一種の口調を以て誦し了つた。實を云ふと壁にある字は甚だ見惡い。余の如きものは首を捻つても一字も讀めさうにない。余は益此女を怪しく思ふ。

氣味が惡くなつたから通り過ぎて先へ拔ける。銃眼のある角を出ると滅茶苦茶に書き綴られた、模様だか文字だか分らない中に、正しき畫で、小く「ジェーン」と書いてある。余は覺えず其前に立ち留まつた。英國の歴史を讀んだものでジェーン・グレーの名を知らぬ者はあるまい。又其薄命と無殘の最期に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは義父と所天の野心の爲めに十八年の春秋を罪なくして惜し氣もなく刑場に賣つた。蹂み躙られたる薔薇の蕊より消え難き香の遠く立ちて、今に至る迄史を繙く者をゆかしがらせる。希臘語を解しプレートーを讀んで一代の碩學アスカムをして舌を捲かしめたる逸事は、此詩趣ある人物を想見するの好材料として何人の腦裏にも保存せらるゝであらう。余はジェーンの名の前に立ち留まつたぎり動かない。動かないと云ふより寧ろ動けない。空想の幕は既にあいて居る。

始めは兩方の眼が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一點にパッと火が點ぜられる。其火が次第々々に大きくなつて內に人が動いて居る様な心持ちがする。次にそれが漸々明るくなつて丁度雙眼鏡の度を合はせる様に判然と眼に映じて來る。次に其景色が段々大きくなつて遠方から近づいて來る。氣がついて見ると眞中に若い女が坐つて居る、右の端には男が立つて居る様だ。兩方共どこかで見た様だなと考へるうち、瞬く間にズッと近づいて余から五六間先で果と停まる。男は前に穴倉の裏で歌をうたつて居た、眼の凹んだ、煤色をした、脊の低い奴だ。磨ぎすました斧を左手に突いて腰に八寸程の短刀をぶら下げて身構へて立つて居る。余は覺えずギョッとする。女は白き手巾で目隱しをして兩の手で首を載せる臺を探す様な風情に見える。首を載せる臺は日本の薪割臺位の大きさで前に鐵の鐶が着いて居る。臺の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要愼と見えた。背後の壁にもたれて二三人の女が泣き崩れて居る、侍女でもあらうか。白い毛裏を折り返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を臺の方角へ導いてやる。女は雪の如く白い服を着けて、肩にあまる金色の髮を時々雲の様に搖らす。ふと其顏を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉の形、細き面、なよやかなる頸の邊りに至る迄、先刻見た女其儘である。思はず馳け寄らうとしたが足が縮んで一歩も前へ出る事が出來ぬ。女は漸く首斬り臺を探り當てて兩の手をかける。唇がむづ〳〵と動く。最前男の子にダッドレーの紋章を說明した時と寸分違はぬ。やがて首を少し傾けて「わが夫ギルドフォード・ダッドレーは既に神の國に行つてか」と聞く。肩を搖り越した一握りの髮が輕くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答へて「まだ眞の道に入り玉ふ心はなきか」と問ふ。女屹として「まこととは吾と吾

夫の信ずる道をこそ言へ。御身達の道は迷ひの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何も言はずに居る。女は稍落ち附いた調子で「吾夫が先なら追ひ附かう、後ならば誘うて行かう。正しき神の國に、正しき道を踏んで行かう」と云ひ終つて落つるが如く首を臺の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、脊の低い首斬り役が重た氣に斧をエイと取り直す。余の洋袴の膝に二三點の血が迸ると思つたら、凡ての光景が忽然と消え失せた。

あたりを見廻すと男の子を連れた女はどこへ行つたか影さへ見えない。狐に化かされた様な顏をして茫然と塔を出る。歸り道に又鐘塔の下を通つたら高い窓からガイフォークスが稻妻の様な顏を一寸出した。「今一時間早かつたら……。此三本のマッチが役に立たなかつたのは實に殘念である」と云ふ聲さへ聞こえた。自分ながら少々氣が變だと思つてそこ〳〵に塔を出る。塔橋を渡つて後を顧たら、北の國の例か此日もいつの間にやら雨となつて居た。糠粒を針の目からこぼす様な細かいのが滿都の黃塵と煤烟を溶かして濛々と天地を鎖す裏に地獄の影の様にぬつと見上げられたのは倫敦塔であつた。

無我夢中に宿に着いて、主人に今日は塔を見物して來たと話したら、主人が鴉が五羽居たでせうと云ふ。おや此主人もあの女の親類かなと內心大いに驚くと主人は笑ひながら「あれは奉納の鴉です。昔からあすこに飼つて居るので、一羽でも數が不足すると、すぐあとをこしらへます、夫だからあの鴉はいつでも五羽に限つて居ます」と手もなく說明するので、余の空想の一半は倫敦塔を見た其日のうちに打ち壞されて仕舞つた。余は又主人に壁の題辭の事を話すと、主人は無造作に「えゝあの落書ですか、詰まらない事をしたもんで、折角綺麗な所を臺なしにして仕舞ひましたねえ、なに罪人の落書だなんて當てになつたもんぢやありません、贋も大分ありまさあね」と澄ましたものである。余は最後に美しい婦人に逢つた事と其婦人が我々の知らない事や到底讀めない字句をすら〳〵讀んだ事抔を不思議さうに話し出すと、主人は大いに輕蔑した口調で「そりや當り前でさあ、皆あすこへ行く時にや案內記を讀んで出掛けるんでさあ、其位の事を知つてたつて何も驚くにやあたらないでせう、何頗る別嬪だつて？――倫敦にや大分別嬪が居ますよ、少し氣を附けないと險呑ですぜ」と飛んだ所へ火の手が揚がる。是で余の空想の後半が又打ち壞された。主人は二十世紀の倫敦人である。

夫からは人と倫敦塔の話をしない事に極めた。又再び見物に行かない事に極めた。

此篇は事實らしく書き流してあるが、實の所過半想像的の文字であるから見る人は其心で讀まれん事を希望する。塔の歴史に關して時々戲曲的に面白さうな事柄を選んで綴り込んで見たが、旨く行かんので所々不自然の痕迹が見えるのは已むを得ない。其中エリザベス（エドワード四世の妃）が幽閉中の二王子に逢ひに來る場と、二王子を殺した刺客の述懷の場は沙翁の歴史劇リチャード三世のうちにもある。沙翁はクラレンス公爵の塔中で殺さるゝ場を寫すには正筆を用ひ、王子を絞殺する模様をあらはすには仄筆を使つて刺客の語を藉り裏面から其様子を描出して居る。嘗て此劇を讀んだとき、其所を大いに面白く感じた事があるから、今其趣向を其儘用ひて見た。然し對話の內容周圍の光景等は無論余の空想から捏出したもので沙翁とは何等の關係もない。夫から斷頭吏の歌をうたつて

斧を磨ぐ所に就いて一言して置くが、此趣向は全くエーンズウォースの「倫敦塔」と云ふ小説から來たもので、余は之に對して些少の創意をも要求する權利はない。エーンズウォースには斧の刃のこぼれたのをソルスベリ伯爵夫人を斬る時の出來事の樣に敍してある。余が此書を讀んだとき斷頭場に用ふる斧の刃のこぼれたのを首斬り役が磨いで居る景色抔は僅かに一二頁に足らぬ所ではあるが非常に面白いと感じた。加之磨ぎながら亂暴な歌を平氣でうたつて居ると云ふ事が、同じく十五六分の所作ではあるが、全篇を活動せしむるに足る程の戯曲的出來事だと深く興味を覺えたので、今其趣向其儘を踏襲したのである。但し歌の意味も文句も、二三の對話も、暗窖の光景も一切趣向以外の事は余の空想から成つたものである。序だからエーンズウォースが獄門役に歌はせた歌を紹介して置く。

The axe was sharp, and heavy
[as lead,
As it touched the neck, off
[went the head!
Whir—whir—whir—whir!
Queen Anne laid her white
[throat upon the block,
Quietly waiting the fatal shock;
The axe it severed it right in
[twain,
And so quick — so true — that
[she felt no pain.
Whir—whir—whir—whir!
Salisbury's countess, she would
[not die
As a proud dame should—deco-
[rously.
Lifting my axe, I split her
[skull,
And the edge since then has
[been notched and dull.
Whir—whir—whir—whir!
Qeen Catherine Howard gave
[me a fee—
A chain of gold—to die easily:
And her costly present she did
[not rue,
For I touched her head and
[away it flew!
Whir—whir—whir—whir!

此全章を譯さうと思つたが到底思ふ樣に行かないし、且餘り長過ぎる恐れがあるから已めにした。

二王子幽閉の場と、ジェーン所刑の場に就いては有名なるドラロッシの繪畫が尠からず余の想像を助けて居る事を一言して聊か感謝の意を表する。

舟より上がる囚人のうちワイアットとあるは有名なる詩人の子にてジェーンの爲め兵を擧げたる人、父子同名なる故紛れ易いから記して置く。

塔中四邊の風致景物を今少し精細に寫す方が讀者に塔其物を紹介して其地を踏ましむる思ひを自然に引き起こさせる上に於いて必要な條件とは氣が附いて居るが、何分かゝる文を草する目的で遊覽した譯ではないし、且年月が經過して居るから判然たる景色がどうしても眼の前にあらはれ惡い。從つて動ともすると主觀的の句が重複して、ある時は讀者に不愉快な感じを與へはせぬかと思ふ所もあるが、右の次第だから仕方がない。

カーライル博物館

公園の片隅に通り掛りの人を相手に演説をして居る者がある。向うから來た釜形の尖つた帽子を被いて古ぼけた外套を猫脊に着た爺さんがそこへ歩みを佇めて演説者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつか〳〵と此村夫子のたずめる前に出て來る。二人の視線がひたと行き當たる。演説者は濁りたる田舍調子にて御前はカーライルぢやないかと問ふ。如何にもわしはカーライルぢやと村夫子が答へる。チェルシーの哲人と人が言ひ囃すのは御前の事かと問ふ。成程世間ではわしの事をチェルシーの哲人と云ふ樣ぢや。セージと云ふは鳥の名だに、人間のセージとは珍しいなと演説者はから〳〵と笑ふ。村夫子は成程猫も杓子も同じ人間ぢやのに殊更に哲人抔と異名をつけるのは、あれは鳥ぢやと渾名すると同じ樣なものだなう。人間は矢張り當り前の人間で善かりさうなものだのに。と答へて是もから〳〵と笑ふ。

余は晩餐前に公園を散歩する度に川縁の椅子に腰を卸して向う側を眺める。倫敦に固有なる濃霧は殊に岸邊に多い。余が櫻の杖に顋を支へて眞正面を見て居ると、遙かに對岸の往來を這ひ廻る霧の影は次第に濃くなつて、五階立の町續きの下から漸々此の搖曳くものゝ裏に薄れ去つて來る。仕舞ひには遠き未來の世を眼前に引き出だしたる樣に窈然たる空の中に取り留めのつかぬ鳶色の影が殘る。其時此鳶色の奥にぽたり〳〵と鈍き光が滴る樣に見え初める。三層四層五層共に瓦斯を點じたのである。余は櫻の杖をついて下宿の方へ歸る。歸る時必ずカーライルと演説使ひの話を思ひだす。彼の溟濛たる瓦斯の霧に混ずる所が往時此村夫子の住んで居つたチェルシーなのである。

カーライルは居らぬ。演説者も死んだであらう。然しチェルシーは以前の如く存在して居る。否彼の多年住み古した家屋敷さへ今猶儼然と保存せられてある。千七百八年チェイン・ロウが出來てより以來、幾多の主人を迎へ幾多の主人を送つたかは知らぬが、兎に角今日迄昔の儘で殘つて居る。カーライルの歿後は有志家の發起で彼の生前使用したる物調度圖書典籍を蒐めて之を各室に按排し好事のものには何時でも縱覽せしむる便宜さへ謀られた。

文學者でチェルシーに縁故のあるものを擧げると昔トマス・モア、下つてスモレット、猶下つてカーライルと同時代にはリ・ハント抔が尤も著名である。ハントの家はカーライルの直き近傍で、現にカーライルが此家に引き移つた晩尋ねて來たといふ事がカーライルの記錄に書いてある。又ハントがカーライルの細君にシェレーの蝋像を贈つたといふ事も知れて居る。此外にエリオットの居つた家とロセッチの住んだ邸がすぐ傍の川端に向いた通にある。然し是等は皆既に代がかはつて現に人が這入つて居るから見物は出來ぬ。只カーライルの舊廬のみは六ペンスを拂へば何人でも又何時でも隨意に觀覽が出來る。

チェイン　ローは河岸端の往來を南に折れる小路でカーライルの家は其の右側の中頃に在る。番地は二十四番地だ。

毎日の樣に川を隔てて霧の中にチェルシーを眺めた余はある朝遂に橋を渡つて其の有名なる庵を叩いた。

庵といふと物寂びた感じがある。少くとも

瀟洒とか風流とかいふ念と伴なふ。然しカーライルの庵はそんな脂つこい華奢なものではない。往來から直ちに戸が敲ける程の道傍に建てられた四階造りの眞四角な家である。
　出張つた所も引き込んだ所もないのぺつに眞直に立つて居る。丸で大製造場の烟突の根本を切つてきて之に天井を張つて窓をつけた樣に見える。
　是が彼が北の田舍から始めて倫敦へ出て來て探しに探し拔いて漸々の事で探し宛てた家である。彼は西を探し南を探しハンプステッドの北迄探して終に恰好の家を探し出す事が出來ず、最後にチェイン・ローへ來て此家を見ても、まだすぐに取極める程の勇氣がなかつたのである。四千萬の愚物と天下を罵つた彼も住家には閉口したと見えて、其愚物の中に當然勘定せらるべき細君へ向けて委細を報知して其意向を確めた。細君の答へに「御申越の借家は二軒共不都合もなき樣被存候へば私倫敦へ上り候迄双方共御明け置願度若し又それ迄に取極め候必要相生じ候節は御一存にて如何とも御取計らひ被下度候」とあつた。カーライルは書物の上でこそ自分獨りわかつた樣な事をいふが、家を極めるには細君の助けに依らなくては駄目と覺悟をしたものと見えて、夫人の上京する迄手を束ねて待つて居た。四五日すると夫人が來る。そこで今度は二人して又東西南北を馳け廻つた揚句の果矢張チェイン・ローが善いといふ事になつた。兩人がこゝに引き越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に下女の持つて居たカナリヤが籠の中で囀つたといふ事迄知れて居る。夫人が此家を選んだのは大いに氣に入つたものか外に相當なのがなくて已むを得なんだのか、いづれにもせよ此の烟突の如く四角な家は年に三百五十圓の家賃を以て此新世帶の夫婦を迎へたのである。カーライルは此のクロムエルの如きフレデリック大王の如き又製造場の烟突の如き家の中でクロムエルを著はしフレデリック大王を著はしヂスレリーの周旋にかゝる年給を擯けて四角四面に暮らしたのである。
　余は今此四角な家の石階の上に立つて鬼の面のノッカーをコツ〱と敲く。暫らくすると内から五十恰好の肥つた婆さんが出て來て御這入りと云ふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんはやがて名簿の樣なものを出して御名前をといふ。余は倫敦滯留中四たび此家に入り四たび此名簿に余が名を記錄した覺えがある。此時は實に余の名の記入初であつた。可成丁寧に書く積りであつたが例に因つて甚だ見苦しい字が出來上がつた。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でこゝへ來たのは余が始めてだなと下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云ふから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。是は昔客間であつたさうだ。色々なものが竝べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像の樣だ。後の部屋にカーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。夫に書物が澤山詰まつて居る。下らぬ本がある。古びた本がある。六づかしい本がある。讀めさうもない本がある。其外にカーライルの八十の誕生日の記念の爲に鑄たといふ銀牌と銅牌がある。金牌は一つもなかつた樣だ。凡ての牌と名のつくものが無暗にかち〱して何時迄も平氣に殘つて居るのを、もらうた者の煙の如き壽命と對照して考へると妙な感じがする。夫から二階へ上がる。こゝに又大きな本棚が有つて、本が例の如く一杯詰まつて居る。矢張り讀めさうもない本、聞いた事のなささうな本、入りさうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。此部屋も一時は客間になつて居つたさうだ。ビ

スマークがカーライルに送つた手紙と普露西の勳章がある。フレデリック大王傳の御蔭と見える。細君の用ひた寐臺がある。頗る不器用な飾り氣のないものである。
　案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々說明を與へる。五十年間案内者を專門に修業したものでもあるまいが、非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたかうしたと恰も口から出任せに喋舌つて居る樣である。然も其流暢な辯舌に抑揚があり節奏がある。調子が面白いから其方ばかり聽いて居ると何を言つて居るのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問ひ返したりして見たが仕舞ひには面倒になつたから、御前は御前で勝手に口上を述べなさい。わしはわしで自由に見物するからといふ態度をとつた。婆さんは人が聞かうが聞くまいが口上丈は必ず述べますといふ風で、何年何月何日を別段厭きた氣色もなく怠る樣子もなく何年何月何日をやつて居る。
　余は東側の窓から首を出して一寸近所を見渡した。眼の下に十坪程の庭がある。右も左も又向うも石の高塀で仕切られて其形は矢張り四角である。四角はどこ迄も此家の附屬物かと思ふ。カーライルの額は決して四角ではなかつた。彼は寧ろ懸崖の中途が陷落して草原の上に伏しかゝつた樣な容貌であつた。細君は上出來の辣韮の樣に見受けらるゝ。今余の案内をして居る婆さんはあんぱんの如く丸い。余が婆さんの顏を見て成程丸いなと思ふとき婆さんは又何年何月何日を誦し出した。余は再び窓から首を出した。
　カーライル云ふ。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株、碧なる野原、及びその間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此頃の眺めはいと晴れやかに心地よし。
　余は茂る葉を見ようと思ひ、青き野を眺めようと思うて、實は裏の窓から首を出したのである。首は既に二返許り出したが青いものも何も見えぬ。右に家が見える。左に家が見える。向うにも家が見える。其上には鉛色の空が一面に胃病やみの樣に不精無精に垂れかゝつて居るのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の續きを朗かに讀誦して居る。
　カーライル又云ふ。倫敦の方を見れば眼に入るものはエストミンスター・アベーとセント・ポールズの高塔の頂のみ。其他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隙見す。
　「倫敦の方」とは既に時代後れの話である。今日チェルシーに來て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めると云ふのと大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舍に閑居して都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積りであつた。余は三度首を出した。そして彼の所謂「倫敦の方」へと視線を延ばした。然しエストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。千八百三十四年のチェルシーと今日のチェルシーとは丸で別物である。余は又首を引き込めた。婆さんは默然として余の背後に佇立して居る。
　三階に上がる。部屋の隅を見ると冷やかにカーライルの寐臺が橫たはつて居る。青き戸帳が物靜かに垂れて空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが細工は只無器用で素朴であるといふ外に何等の特色もない。其上に身を橫たへた人の身の上も思ひ合はさるゝ。傍には彼が平生使用した風呂桶が九鼎の如く

尋げに置かれてある。

　風呂桶とはいふものゝバケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此大鍋の中で倫敦の煤を洗ひ落したかと思ふと益其人となりが偲ばるゝ。不圖首を上げると壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此顏だなと思ふ。此炬燵櫓位の高さの風呂に入つて此質素な寐臺の上に寐て四十年間八釜敷い小言を吐き續けに吐いた顏は是だなと思ふ。婆さんの淀みなき口上が電話口で横濱の人の挨拶を聞く樣に聞こえる。

　宜しければ上がりませうと婆さんがいふ。余は既に倫敦の塵と音を遙かの下界に殘して五重の塔の天邊に獨坐する樣な氣分がして居るのに耳の元で「上がりませう」といふ催促を受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思つた。さあ上がらうと同意する。上がれば上がる程怪しい心持ちが起こりさうであるから。

　四階へ來た時は縹緲として何事とも知らず嬉しかつた。嬉しいといふよりはどことなく妙であつた。こゝは屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣の如き形をして其一番高い脊筋を通して硝子張りの明り取りが着いて居る。此アチックに洩れて來る光線は皆頭の上から眞直に這入る。さうして其頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空である。眼に遮るものは微塵もない。カーライルは自分の經營で此室を作つた。作つて此を書齋とした。書齋としてこゝに立籠つた。立籠つて見て始めてわが計畫の非なる事を悟つた。夏は暑くて居りにくく、冬は寒くて居りにくい。案内者は朗讀的にこゝ迄述べて余を顧た。眞丸な顏の底に笑の影が見える。余は無言の儘うなづく。

　カーライルは何の爲に此の天に近き一室の經營に苦心したか。彼は彼の文章の示す如く電光的の人であつた。彼の癇癖は彼の身邊を圍繞して無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見える。洋琴の聲、犬の聲、鷄の聲、鸚鵡の聲、一切の聲は悉く彼の鋭敏なる神經を刺激して懊惱已む能はざらしめたる極、遂に彼をして天に最も近く人に尤も遠ざかれる住居を此四階の天井裏に求めしめたのである。

　彼のエイトキン夫人に與へたる書翰にいふ

「此夏中は開け放ちたる窓より聞こゆる物音に惱まされ候事一方ならず色々修繕も試み候へども寸毫も利目無之夫より篤と熟考の末家の眞上に二十尺四方の部屋を建築致す事に取極め申候是は壁を二重に致し光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもつて差支なき樣致す仕掛に候へば出來上り候上は假令天下の鷄共一時に鬨の聲を揚げ候とも閉口仕らざる積りに御座候」

　斯くの如く豫期せられたる書齋は二千圓の費用にて先づ〳〵思ひ通りに落成を告げて豫期通りの效果を奏したが、之と同時に思ひ掛けなき障害が又も主人公の耳邊に起こつた。成程洋琴の音もやみ、犬の聲もやみ、鷄の聲、鸚鵡の聲も案の如く聞こえなくなつたが、下層に居るときは考へだに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛、偖ては何とも知れず遠きより來る下界の聲が呪の如く彼を追ひかけて舊の如くに彼の神經を苦しめた。

　聲。英國に於てカーライルを苦しめたる聲は獨逸に於てショペンハウアを苦しめたる聲である。ショペンハウア云ふ「カントは活力論を著はせり、余は反つて活力を弔ふ文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、物の轉がる音は皆活力の濫用にして余は之が爲に日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何等の感をも起こさざる多數の人我說をきかば笑ふべし。去

れど世に理窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌をも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正に此輩なる事を忘るゝ勿れ。彼等の頑腦の組織は麁獷にして覺り鈍き事其原因たるは疑ふべからず」カーライルとショペンハウアとは實に十九世紀の好一對である。余が此の如く回想しつゝあつた時に、例の婆さんがどうです下りませうかと促す。

　一層を下る每に下界に近づく樣な心持ちがする。冥想の皮が剝げる如く感ぜらるゝ。階段を降り切つて最下の欄干に倚つて通りを眺めた時には遂に依然たる一個の俗人となり了つて仕舞つた。案内者は不氣な顏をして厨を御覽なさいといふ。厨は往來よりも下にある。今余が立ちつゝある所より又五六段の階を下らねばならぬ。是は今案内をして居る婆さんの住居になつて居る。隅に大きな竈がある。婆さんは例の朗讀調を以て「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカーライルを訪問した時彼等兩人は此竈の前に對坐して互に烟草を燻らすのみにて二時間の間一言も交へなかつたのであります」といふ。天上に在つて音響を厭ひたる彼は地下に入つても沈默を愛したるものか。

　最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話しによると昔は櫻もあつた、葡萄もあつた、胡桃もあつたさうだ。カーライルの細君はある年二十五錢許りの胡桃を得たさうだ。婆さん云ふ「庭の東南の隅を去る五尺餘の地下にはカーライルの愛犬ニロが葬られて居ります。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も當時は存して居りましたが惜しいかな其後取り拂はれました」と中々精しい。

　カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて寢卷姿の儘啣へ烟管で逍遙したのは此庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上にさゝやかなる天幕を張り其下に机をさへ出して餘念もなく述作に從事したのは此庭園である。星明らかなる夜最後の一ぷくをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼余が最後に汝を見るの時は瞬刻の後ならん。全能の神が造れる無邊大の劇場、眼に入る無限、手に觸るゝ無限、是も亦我が眉目を掠めて去らん。而して余は遂にそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虛ならず、知らんと欲するや切なり。而もわが知識は只此の如く微なり」と叫んだのも此庭園である。

　余は婆さんの勞に酬ゆる爲に婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた。難有うと云ふ聲さへも朗讀的であつた。一時間の後倫敦の塵と煤と車馬の音とテームス河とはカーライルの家を別世界の如く遠き方へと隔てた。

薤露行

世に傳ふるマロリーのアーサー物語は簡淨素樸と云ふ點に於て珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小說として見ると散漫の譏りは免れぬ。況して材を其一局部に取つて纏まつたものを書かうとすると到底萬事原著による譯には行かぬ。從つて此篇の如きも作者の隨意に事實を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりして可也小說に近いものに改めて仕舞うた。主意はこんな事が面白いから書いて見ようといふので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しようと云ふのではない。其の積りで讀まれん事を希望する。

實を云ふとマロリーの寫したランスロットは或點に於て車夫の如く、ギニギアは車夫の情婦の樣な感じがある。此一點丈でも書き直す必要は充分あると思ふ。テニソンのアイヂルスは優麗都雅の點に於て古今の雄篇たるのみならず性格の描寫に於ても十九世紀の人間を古代の舞臺に躍らせる樣なかきぶりであるから、かゝる短篇を草するには大いに參考すべき長詩であるは云ふ迄もない。元來なら記憶を新たにする爲一應讀み返す筈であるが、讀むと冥々のうちに眞似がしたくなるからやめた。

一　夢

百、二百、簇がる騎士は數をつくして北の方なる試合へと急げば、石に古りたるカメロットの館には、只王妃ギニギアの長く牽く衣の裾の響のみ殘る。

薄紅の一枚をむざとばかりに肩より投げ懸けて、白き二の腕さへ明らさまなるに、裳のみは輕く捌く珠の履をつゝみて、猶餘りあるを後ざまに石階の二級に垂れて登る。登り詰めたる階の正面には大いなる花を鈍色の奧に織り込める戶帳が、人なきをかこち顔なる樣にてそよとも動かぬ。ギニギアは幕の前に耳押し附けて一重向うに何事をか聽く。聽き了りたる横顔を又眞向うに反して石段の下を鋭き眼にて窺ふ。濃やかに斑を流したる大理石の上は、こゝかしこに白き薔薇が暗きを洩れて和らかき香を放つ。君見よと宵に贈れる花輪のいつ摧けたる名殘か。しばらく吾が足に纏はる絹の音にさへ心置ける人の、何の思案か、屹と立ち直りて、繊き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩ゆき光矢の如く向ひ側なる室の中よりギニギアの頭に戴ける冠を照らす。輝けるは眉間に中る金剛石ぞ。

「ランスロット」と幕押し分けたる儘にて云ふ。天を憚り、地を憚る中に、身も世も入らぬ迄力の籠りたる聲である。戀に敵なければ、わが戴ける冠を畏れず。

「ギニギア！」と應へたるは室の中なる人の聲とも思はれぬ程優しい。廣き額を半ば埋めて又捲き返る髮の、黑きを誇る許り亂れたるに、頰の色は釣り合はず蒼白い。

女は幕をひく手をつと放して內に入る。裂目を洩れて斜に大理石の階段を横切りたる日の光は、一度に消えて、薄暗がりの中に戶帳の模樣のみ際立ちて見える。左右に開く廻廊には圓柱の影の重なりて落ちかゝれども、影なれば音もせず。生きたるは室の中なる二人のみと

思はる。

「北の方なる試合にも參り合はせず。亂れたるは額にかゝる髮のみならじ」と女は心ありげに問ふ。晴れかゝりたる眉に晴れがたき雲の蟠りて、弱き笑の強ひて憂の裏より洩れ來る。

「贈りまつれる薔薇の香に醉ひて」とのみにて男は高き窓より表の方を見やる。折からの五月である。館を繞りて緩く逝く江に千本の柳が明かに影を蘸して、空に崩るゝ雲の峯さへ水の底に流れ込む。動くども見えぬ白帆に、人あらば節面白き舟歌も興がらう。河を隔てて木の間隱れに白く拖く筋の、一縷の糸となつて烟に入るは、立ち上る朝日影に蹄の塵を揚げて、けさアーサーが圓卓の騎士と共に北の方へと飛ばせたる本道である。

「うれしきものに罪を思へば、罪長かれと祈る憂き身ぞ。君一人館に殘る今日を忍びて、今日のみの縁とならばうからまし」と女は安からぬ心の程を口元に見せて、珊瑚の脣をぴりぴりと動かす。

「今日のみの縁とは？　瀨に堰かるゝあの世迄も渝らじ」と男は黑き瞳を返して女の顔を眤と見る。

「左ればこそ」と女は右の手を高く擧げて廣げたる掌を竪にランスロットに向ける。手頸を纏ふ黃金の腕輪がきらりと輝くときランスロットの瞳は吾知らず動いた。「左ればこそ！」と女は繰り返す。「薔薇の香に醉へる病を、病と許せるは我等二人のみ。このカメロットに集まる騎士は、五本の指を五十度繰り返すとも數へ難きに、一人として北に行かぬランスロットの病を疑はぬはなし。束の間に危きを貪りて、長き逢ふ瀨の淵と變らば……」と云ひながら擧げたる手をはたと落とす。かの腕輪は再びきらめいて、玉と玉と擊てる音か、戛然と瞬時の響を起こす。

「命は長き賜物ぞ、戀は命よりも長き賜物ぞ。心安かれ」と男は流石に大膽である。

女は兩手を延ばして、戴ける冠を左右より抑へて「此冠よ、此冠よ。わが額の燒ける事は」と云ふ。願ふ事の叶はば此黃金、此珠玉の飾りを脫いで窓より下に投げ附けて見ばやといへる樣である。白き腕のすらりと絹をすべりて、抑へたる冠の光の下には、渦を卷く髮の毛の、珠の輪には抑へ難くて、頰のあたりに靡きつゝ洩れかゝる。肩にあつまる薄紅の衣の袖は、腕を過ぎてより豐かなる襞を描いて、裾は強けれども剛からざる線を三筋程床の上迄引く。ランスロットは只窈窕として眺めて居る。前後を截斷して、過去未來を失念したる間に只ギニギアの形のみがあり〳〵と見える。

機微の邃きを照らす鏡は、女の有てる凡てのうちにて、尤も明らかなるものと云ふ。苦しきに堪へかねて、われとわが頭を抑へたるギニギアを打ち守る人の心は、飛ぶ鳥の影の疾きが如くに女の胸にひらめき渡る。苦しみは拂ひ落とす蜘蛛の巢と消えて剩すは嬉しき人の情ばかりである。「かくてあらば」と女は危き間に際どく擦り込む石火の樂しみを、長しへに續けかしと念じて兩頰に笑を滴らす。

「かくてあらん」と男は始めより思ひ極めた態である。

「されど」と少時して女は又口を開く。「かくてあらん爲め——北の方なる試合に行き給へ。けさ立てる人々の蹄の痕を追ひ懸けて病癒えぬと申し給へ。此頃の蔭口、二人をつゝむ疑ひの雲を晴らし給へ」

「左程に人が怖くて戀がなろか」と男は亂るゝ髮を廣き額に拂つて、わざと乍らから〳〵と笑ふ。高き室の靜かなる中に、常ならず快からぬ響が傳はる。笑へるははたと已めて「此帳の

風なきに動くさうな」と室の入口迄歩を移して
ことさらに厚き幕を揺り動かして見る。あやし
き響は收まつて寂寞の故に歸る。
「宵見し夢の――夢の中なる響の名殘か」と女
の顔には忽ち紅落ちて、冠の星はきら／＼と
震ふ。男も何事か心躁ぐ様にて、ゆうべ見し
と云ふ夢を、女に物語らする。
「薔薇咲く日なり。白き薔薇と、赤き薔薇と、
黄なる薔薇の間に臥したるは君とわれのみ。樂
しき日は落ちて、樂しき夕暮の薄明りの、盡く
る限りはあらじと思ふ。その時に戴けるは此
冠なり」と指を擧げて眉間をさす。冠の底を
二重にめぐる一疋の蛇は黄金の鱗を細かに身
に刻んで、擡げたる頭には青玉の眼を嵌めて
ある。
「わが冠の肉に喰ひ入る許り燒けて、頭の上
に衣擦る如き音を聞くとき、此黄金の蛇はわが
髪を繞りて動き出す。頭は君の方へ、尾はわが
胸のあたりに、波の如くに延びるよと見る間に、
君とわれは腥き繩にて、斷つべくもあらぬ迄に
纒はるゝ。中四尺を隔てゝ近寄るに力なく、離
るゝに術なし。たとひ忌はしき絆なりとも、此
繩の切れて二人離れ／＼に居らんよりはとは、
其時苦しきわが胸の奥なる心遣りなりき。嚙ま
るゝとも、口繩の朽ち果つる迄斯
くてあらんと思ひ定めたるに、あら悲し。薔薇
の花の紅なるが、めら／＼と燃え出して、繫
げる蛇を燒かんとす。しばらくして君とわれの
間にあまれる一尋餘りは、眞中より青き烟を
吐いて金の鱗の色變り行くと思へば、あやし
き臭を立ててふすと切れたり。身も魂もこ
れ限り消えて失せよと念ずる耳元に、何者かか
ら／＼と笑ふ聲して夢は醒めたり。醒めたるあ
とにも猶耳を襲ふ聲はありて、今聞ける君が
笑も、宵の名殘かと骨を撼がす」と落ち附かぬ
眼を長き睫の裏に隱してランスロットの氣色
を窺ふ。七十五度の闘技に、馬の背を滑るは無
論、鐙さへはづせる事なき勇士も、此夢を奇し
とのみは思はず。快からぬ眉根は自ら逼りて、
結べる口の奥には齒さへ喰ひ締るならん。
「さらば行かう。後れ馳せに北の方へ行かう」
と拱いたる手を振りほどいて、六尺二寸の軀
をゆらりと起こす。
「行くか？」とはギニヸアの半ば疑へる言葉で
ある。疑へる中には、今更ながら別れの惜しま
るゝ心地さへほのめいて居る。
「行く」と云ひ放つて、つか／＼と戸口にかゝる
幕を半ば掲げたが、やがてするりと踵を回らし
て、女の前に、白き手を執りて、發熱かと怪し
まるゝ程のあつき唇を、冷やかに柔らかき甲
の上につけた。曉の露しげき百合の花瓣をひ
たふるに吸へる心地である。ランスロットは後
をも見ずして石階を馳け降りる。
　やがて三たび馬の嘶く聲がして中庭の石の
上に堅き蹄が鳴るとき、ギニヸアは高殿を下り
て、騎士の出づべき門の眞上なる窓に倚りて、
かの人の出づるを遲しと待つ。黑き馬の鼻面が
下に見ゆるとき、身を半ば投げだして、行く
人の爲に白き絹の尺ばかりなるを振る。頭に
戴ける金冠の、美しき髪を滑りてか、からり
と馬の鼻を掠めて碎くる許りに石の上に落つ
る。
　槍の穗先に冠をかけて、窓近く差し出した
る時、ランスロットとギニヸアの視線がはたと
行き合ふ。「忌まはしき冠よ」と女は受けとり
乍ら云ふ。「さらば」と男は馬の太腹をける。白
き兜の插毛のさと靡くあとに、殘るは漠々たる
塵のみ。

二　鏡

　有りの儘なる浮世を見ず、鏡に寫る浮世のみ
を見るシャロットの女は高き臺の中に只一人

住む。活ける世を鏡の裡にのみ知る者に、面
を合はす友のあるべき由なし。
　春戀し、春戀しと囀る鳥の數々に、耳欹てて
木の葉隱れの翼の色を見んと思へば、窓に向は
ずして壁に切り込む鏡に向ふ。鮮やかに寫る
羽の色に日の色さへも其儘である。
　シャロットの野に麥刈る男、麥打つ女の歌
にやあらん、谷を渡り水を渡りて、幽かなる音
の高き臺に他界の聲の如く綫と細りて響く時、
シャロットの女は傾けたる耳を掩うて又鏡
に向ふ。河のあなたに烟る柳の、果は空とも野
とも覺束なき間より洩れ出づる悲しき調と思
へばなるべし。
　シャロットの路行く人も亦悉くシャロット
の女の鏡に寫る。あるときは赤き帽の首打ち
振りて馬追ふさまも見ゆる。あるときは白き髯
を括しつけながら行く巡禮姿も見える。又ある
ときは頭より只一枚と思はるゝ眞白の上衣被
りて、眼口も手足も確と分かちかねたるが、け
たゝましげに鉦打ち鳴らして過ぎるも見ゆる。
是は癩をやむ人の前世の業を自ら世に告ぐる、
むごき仕打ちなりとシャロットの女は知るす
べもあらぬ。
　旅商人の背に負へる包みの中には赤きリボン
のあるか、白き下着のあるか、珊瑚、瑪瑙、水
晶、眞珠のあるか、包める中を照らさねば、中
にあるものは鏡には寫らず。寫らねばシャロッ
トの女の眸には映ぜぬ。
　古き幾世を照らして、今の世のシャロットに
ありとある物を照らす。悉く照らして擇ぶ所
なければシャロットの女の眼に映るものも亦
限りなく多い。只影なれば寫りては消え、消え
ては寫る。鏡のうちに永く停まる事は天に懸
かる日と雖も難い。活ける世の影なれば斯く果
敢なきか、あるひは活ける世が影なるかとシャ
ロットの女は折々疑ふ事がある。明らさまに
見ぬ世なれば影ともまこととも斷じ難い。影な
れば果敢なき姿を鏡にのみ見て不足はなから
う。影ならずば？――時にはむら／＼と起こ
る一念に窓際に馳けよりて思ふさま鏡の外な
る世を見んと思ひ立つ事もある。シャロットの
女の窓より眼を放つときはシャロットの女に
呪ひのかゝる時である。シャロットの女は鏡
の限る天地のうちに跼蹐せねばならぬ。一重隔
て、二重隔てて、廣き世界を四角に切るとも、
自滅の期を寸時も早めてはならぬ。
　去れど有りの儘なる世は罪に濁ると聞く。住
み倦めば山に遁るゝ心安さもあるべし。鏡の
裏なる狹き宇宙の小さければとて、憂き事の降
りかゝる十字の街に立ちて、行き交ふ人に氣を
配る辛さはあらず。何者か因果の波を一たび起
こしてより、萬頃の亂れは永劫を極めて盡きざ
るを、渦捲く中に頭をも、手をも、足をも攫は
れて、行く吾の果は知らず。かゝる人を賢しと
云はば、高き臺に一人を住み古りて、しろかね
の白き光の、表とも裏とも分かち難きあたり
に、幻の世を尺に縮めて、あらん命を土さ
へ踏まで過ごすは阿呆の極みであらう。わが見
るは動く世ならず、動く世を動かぬ物の助けに
て餘所ながら窺ふ世なり。活殺生死の乾坤を
定裏に拈出して、五彩の色相を靜中に描く世
なり。かく觀ずればこの女の運命もあながち
に嘆くべきにあらぬを、シャロットの女は何
心を躁がして窓の外なる下界を見んとする。
　鏡の長さは五尺に足らぬ。黑鐵の黑きを磨
いて本來の白きに歸すマーリンの術になると
か。魔法に名を得し彼の云ふ。――鏡の表に霧
こめて秋の日の上れども晴れぬ心地なるは不吉
の兆なり。曇る鏡の露を含みて、芙蓉に滴る音
を聽くとき、對へる人の身の上に危き事あり。
砉然と故なきに響を起こして、白き筋の横縱に

鏡に浮くとき、其人末期の覺悟せよ。――シャロットの女が幾年月の久しき間此鏡に向へるかは知らぬ。朝に向ひ、夕に向ひ、日に向ひ月に向ひて、厭くてふ事のあるをさへ忘れたるシャロットの女の眼には截立つ事も、露置く事もあらざれば、況して裂けんとする虞ありとは夢にだも知らず。湛然として音なき秋の水に臨むが如く、瑩朗たる面を過ぐる森羅の影の、繽紛として去るあとは、太古の色なき境をまのあたりに現はす。無限上に徹する大空を鑄固めて、打てば音ある五尺の裏に壓し集めたるを――シャロットの女は夜毎日毎に見る。

夜毎日毎に鏡に向へる女は、夜毎日毎に鏡の傍に坐りて、夜毎日毎の機を織る。ある時は明るき機を織り、ある時は暗き機を織る。

シャロットの女の投ぐる梭の音を聽く者は、淋しき皐の上に立つ、高き臺の窓を恐る〳〵見上げぬ事はない。親も逝き子も逝きて、新しき代に只一人取り殘されて、命長き吾を恨み顏なる年寄の如く見ゆるが、岡の上なるシャロットの女の住居である。蔦鎖す古き窓より洩るゝ梭の音の、絶間なき振子の如く、日を刻み月を刻むに急なる樣なれど、其音はあの世の音なり。靜かなるシャロットには、空氣さへ重たげにて、常ならば動くべしとも思はれぬを、只此梭の音のみにそゝのかされて、幽かにも震ふか。淋しさは音なき時の淋しさにも勝る。恐る恐る高き臺を見上げたる行人は耳を掩うて走る。

シャロットの女の織るは不斷の機である。草むらの萌草の厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める樣を織るときは、花の影のいつ浮くべしとも見えぬ程の濃き色である。うな原のうねりの中に、雪と散る浪の花を浮かすときは、底知れぬ深さを一枚の薄きに疊む。あるときは黑き地に、燃ゆる焔の色にて十字架を描く。濁世にはびこる罪障の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織れる經緯の目にも入ると覺しく、焔のみは緯を離れて飛ばんとす。――薄暗き女の部屋は焚け落つるかと怪しまれて明るい。

戀の糸と誠の糸を橫縱に梭くぐらせば、手を肩に組み合はせて天を仰げるマリヤの姿となる。狂ひを經に怒りを緯に、霰ふる木枯の夜を織り明かせば、荒野の中に白き髯飛ぶリアの面影が出る。恥づかしき紅と恨めしき鐵色をより合はせては、逢うて絶えたる人の心を讀むべく、溫和しき黃と思ひ上がれる紫を交る交るに疊めば、魔に誘はれし乙女の、我は顏に高ぶれる態を寫す。長き袂に雲の如くにまつはるは人に言へぬ願の糸の亂れなるべし。

シャロットの女は眼深く、額廣く、唇さへも女には似で薄からず。夏の日の上りてより、刻を盛る砂時計の九たび落ち盡したれば、今ははや午過ぎなるべし。窓を射る日の眩き迄明らかなるに、室のうちは夏知らぬ洞窟の如くに暗い。輝けるは五尺に餘る鐵の鏡と、肩に漂ふ長き髪のみ。右手より投げたる梭を左手に受けて、女は不圖鏡の裡を見る。研ぎ澄ましたる劍よりも寒き光の、例ながらうぶ毛の末をも照らすよと思ふうちに――底事ぞ！ 音なくて颯と曇るは霧か、鏡の面は巨人の息をまともに浴びたる如く光を失ふ。今迄見えたシャロットの岸に連なる柳も隱れる。柳の中を流るゝシャロットの河も消える。河に沿うて往きつ來りつする人影は無論さゝぬ。――梭の音ははたと已んで女の瞼は黑き睫と共に微かに顫へた。「凶事か」と叫んで鏡の前に寄ると、曇は一刷に晴れて、河も柳も人影も元の如くに見はれる。梭は再び動き出す。

女はやがて世にあるまじき悲しき聲にて歌ふ。

うつせみの世を、

うつゝに住めば、
住みうからまし、
むかしも今も。
うつくしき戀、
うつす鏡に、
色やうつろふ、
朝な夕なに。

鏡の中なる遠柳の枝が風に靡いて動く間に、忽ち銀の光がさして、熱き埃を薄く揚げ出す。銀の光は南より北に向つて眞一文字にシャロットに近づいてくる。女は小羊を覘ふ鷲の如くに、影とは知りながら瞬きもせず鏡の裏を見詰むる。十丁にして盡きた柳の木立を風の如くに驅け拔けたものを見ると、鍛へ上げた鋼の鎧に滿身の日光を浴びて、同じ兜の鉢金よりは尺に餘る白き毛を、飛び散れとのみ靡々と靡かして居る。栗毛の駒の逞しきを、頭も胸も革に裹みて飾れる鋲の數は篩ひ落とせし秋の夜の星宿を一度に集めたるが如き心地である。女は息を凝らして眼を据ゑる。

曲がれる堤に沿うて、馬の首を少し左へ向け直すと、今迄は橫にのみ見えた姿が、眞正面に鏡にむかつて進んでくる。太き槍をレストに收めて、左の肩に盾を懸けたり。女は領を延ばして盾に描ける模樣を確と見分けようとする體であつたが、かの騎士は何の會釋もなく此鐵鏡を突き破つて通り拔ける勢で、愈目の前に近づいた時、女は思はず梭を擲げて、鏡に向つて高くランスロットと叫んだ。ランスロットは兜の廂の下より耀く眼を放つて、シャロットの高き臺を見上げる。爛々たる騎士の眼と、針を束ねたる如き女の鋭き眼とは鏡の裡にてはたと出合つた。此時シャロットの女は再び「サー・ランスロット」と叫んで、忽ち窓の傍に馳け寄つて蒼き顏を半ば世の中に突き出だす。人と馬とは、高き臺の下を、遠きに去る地震の如くに馳け拔ける。

ぴちりと音がして皓々たる鏡は忽ち眞二つに割れる。割れたる面は再びぴち〳〵と氷を碎くが如く粉微塵になつて室の中に飛ぶ。七卷八卷織りかけたる布帛はふつ〳〵と切れて風なきに鐵片と共に舞ひ上がる。紅の糸、綠の糸、黃の糸、紫の糸はほつれ、千切れ、解け、もつれて土蜘蛛の張る網の如くにシャロットの女の顏に、手に、袖に、長き髪毛にまつはる。「シャロットの女を殺すものはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロットの女。わが末期の呪ひを負うて北の方へ走れ」と女は兩手を高く天に擧げて、朽ちたる木の野分を受けたる如く、五色の糸と氷を欺く碎片の亂るゝ中に轟と仆れる。

三　袖

可憐なるエレーンは人知らぬ菫の如く、アストラットの古城を照らして、ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を經たり。訪ふ人は固よりあらず。共に住むは二人の兄と眉さへ白き父親のみ。

「騎士はいづれに去る人ぞ」と老人は穩やかなる聲にて問ふ。

「北の方なる仕合に參らんと、是迄は鞭うつて追ひ懸けたれ。夏の日の永きにも似ず、いつしか暮れて、暗がりに路さへ岐れたるを。――乘り捨てし馬も恩に嘶かん。一夜の宿の情深きに酬いまつるものなきを恥づ」と答へたるは、具足を脫いで、黃なる袍に姿を改めたる騎士なり。シャロットを馳せる時何事とは知らず、岩の凹みの秋の水を浴びたる心地して、かりの宿りを求め得たる今に至る迄、頰の蒼きが殊更の如く日に立つ。

エレーンは父の後に小さき身を隱して、此ア

ストラットに、如何なる風の誘ひてか、かく凜凜しき壯夫を吹き寄せたると、折々は鶴と痩せたる老人の肩をすかして、恥づかしの睫の下よりランスロットを見る。粟の花、豆の花ならば戯るゝ術もあらう。偃蹇として澗底に嘯く松が枝には舞ひ寄る路のとてもなければ、白き胡蝶は薄き翼を收めて身動きもせぬ。

「無心ながら宿貸す人に申す」と稍ありてランスロットが云ふ。明日と定まる仕合の催しに、後れて乘り込む我の、何の誰よと人に知らるゝは興なし。新しきを嫌はず、古きを辭せず、人の見知らぬ盾あらば貸し玉へ」

老人ははたと手を拍つ。望める盾を貸し申さう。――長男チアーは去ぬる騎士の闘技に足を痛めて今猶蓐を離れず。其時彼が持ちたるは白地に赤く十字架を染めたる盾なり。只の一度の仕合に傷つきて、其創口はまだ癒えざれば、赤き血架は空しく壁に古りたり。是を翳して思ふ如く人々を驚かし給へ」

ランスロットは腕を拖して「夫こそは」と云ふ。老人は猶言葉を繼ぐ。

「次男ラヴンは健氣に見ゆる若者にてあるを、アーサー王の催しにかゝる晴れの仕合に參り合はせずば、騎士の身の口惜しかるべし。只君が栗毛の蹄のあとに倶し連れよ。翌日を急げと彼に申し聞かせん程に」

ランスロットは何の思案もなく「心得たり」と心安げに云ふ。老人の頬に疊める皺のうちには、嬉しき波がしばらく動く。女ならずばわれも行かんと思へるはエレーンである。

木に倚るは蔦、まつはりて幾世を離れず。宵に逢ひて朝に分かるゝ君と我の、われにはまつはるべき月日もあらず。繊き身の寄り添はば、幹吹く嵐に、根なしかづらと倒れもやせん。寄り添はずば、人知らずひそかに括る戀の絲、振り切つて君は去るべし。愛溶けて瞼に餘る、露の底なる光を見ずや。わが住める館こそ古けれ、春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲るは、鎖せる雲の自ら晴れて、麗らかなる日影の大地を渡るに異ならず。野をうづめ、谷を埋めて千里の外に暖かき光をひく。明らかなる君が眉目にはたと行き逢へる今の思ひは、坑を出でて天下の春風に吹かれたるが如きを――言葉さへ交はさず、あすの別れとはつれなし。

燭盡きて更を惜しめども、更盡きて客は寢ねたり。寢ねたるあとにエレーンは、合はぬ瞼の間より男の姿の無理に瞳の奥に押し入らんとするを、幾たびか拂ひ落さんと力めたれど詮なし。強ひて合はぬ目を合はせて、此影を追はんとすれば、いつの間にか其人の姿は既に瞼の裏に潛む。苦しき夢に襲はれて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂消える物の怪の話にをのゝきて、眠らぬ耳に鷄の聲をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願ふ心の反響に過ぎず。われと云ふ可愛き者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟りを据ゑての恐れと苦しみである。今宵の惱みは其等にはあらず。我と云ふ個靈の消え失せて、求むれども遂に得難きを、驚きて迷ひて、果ては情なくて斯くは亂るゝなり。我を司どるものの我にはあらで、先に見し人の姿なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩ふなり。いつの間に我はランスロットと變りて常の心はいづこへか喪へる。エレーンと吾名を呼ぶに、應ふるはエレーンならず、中庭に馬乘り捨てて、廂深き兜の奥より、高き槍を見上げたるランスロットである。再びエレーンと呼ぶにエレーンはランスロットぢやと答へる。エレーンは亡せてかと問へば在りと云ふ。いづこにと聞けば知らぬと云ふ。エレーンは微かなる毛孔の末に潛みて、いつか昔の樣に歸らん。エレーンに八萬

四千の毛孔あり、エレーンが八萬四千壺の香油を注いで、日に其膚を滑らかにするとも、潛めるエレーンは遂に出現し來る期はなからう。

やがてわが部屋の戸帳を開きて、エレーンは壁に釣る長き衣を取り出だす。燭にすかせば燃ゆる眞紅の色なり。室にはびこる夜を呑んで、一枚の衣に眞晝の日影を集めたる如く鮮やかである。エレーンは衣の領を右手につるして、暫らくは眩きものと眺めたるが、やがて左に握る短刀を鞘ながら二三度振る。から〳〵と床に音さして、すはと云ふ間に閃めきは目を掠めて紅深きうちに隱れる。見れば美しき衣の片袖は惜し氣もなく斷たれて、殘るは鞘の上にふはりと落ちる。途端に裸ながらの手燭は、風に打たれて颯と消えた。外は片破月の空に更けたり。

右手に捧ぐる袖の光をしるべに、暗きをすりぬけてエレーンはわが部屋を出る。右に折れると兄の住居、左を突き當れば今宵の客の寢所である。夢の如くなよやかなる女の姿は、地を踏まざるに歩めるか、影よりも静かにランスロットの室の前にとまる。――ランスロットの夢は成らず。

聞くならくアーサー大王のギニヸアを娶らんとして心憂へる折、居ながらに世の成行を知るマーリンは、首を掉りて慶事を肯んぜず。此女後に思はぬ人を慕ふ事あり、娶る君に悔あらん。と只管に諫めしとぞ。聞きたる時の我に罪なければ思はぬ人の誰なるかは知るべくもなく打ち過ぎぬ。思はぬ人の誰なるかを知りたる時、天が下に數多く生れたるもののうちにて、この悲しき命に廻り合はせたる我を恨み、このうれしき幸を享けたる己を悦びて、樂しみと苦しみの綯りたる繩を斷たんともせず、此年月を經たり。心疚しきは願はず。疚しき中に蜜あるはうれし。疚しければこそ蜜をも釀せと思ふ折さへあれば、卓を共にする騎士の我を疑ふ此日に至る迄王妃を棄てず。只疑ひの積もりて證據と凝らん時――此時を思へばランスロットの夢は未だ成らず。

眠られぬ戸に何物かちよと障つた氣合である。枕を離るゝ頭の、音する方に、しばらくは振り向けるが、又元の如く落ち附いて、あとは古城の亡骸に脈も通はず。静かである。

再び障つた音は、殆ど敲いたと云ふべくも高い。慥かに人ありと思ひ極めたるランスロットは、やをら身を臥床に起こして、「たぞ」と云ひつゝ戸を半ば引く。差しつくる蠟燭の火のふき込められしが、取り直して今度は戸口に立てる乙女の方にまたゝく。乙女の顏は翳せる赤き袖の影に隱れて居る。面映ゆきは灯火のみならず。

「此の深き夜を……迷へるか」と男は驚きの舌を途切れ〳〵に動かす。

「知らぬ路にこそ迷へ。年古く住みなせる家のうちを――鼠だに迷はじ」と女は微かなる聲ながら、思ひ切つて答へる。

男は只怪しとのみ女の顏を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹の衝立に、花よりも美しき顏をかくす。常に勝る豐頰の色は、湧く血潮の疾く流るゝか、あざやかなる絹のたすけか。たゞ隱しかねたる鬢の毛の肩に亂れて、頭には白き薔薇を輪に貫きて三輪挿したり。

白き香の鼻を撲つて、絹の影なる花の數さへ見分けたる時、ランスロットの胸には忽ちギニヸアの夢の話が湧き返る。何故とは知らず、悉く身は痿えて、手に持つ燭を取り落とせるかと驚きて我に歸る。乙女はわが前に立てる人の心を讀む由もあらず。

「紅に人のまことはあれ。恥づかしの片袖を、乞はれぬに參らする。兜を捲いて勝負せよと

の顔なり」とかの袖を押し遣る如く前に出だす。

男は容易に答へぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴ふる如くに下よりランスロットの顔を覗く。覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んで、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたる儘、當惑の眉を思案に刻む。やゝありて云ふ。「戰に臨む事は大小六十餘度、闘技の場に登つて槍を交へたる事は其數を知らず。未だ佳人の贈り物を、身に帶びたる試しなし。情あるあるじの子の、情深き賜物を辭むは禮なけれど……」

「禮とも云へ、禮なしとも云ひてやみね。禮の爲に、夜を冒して參りたるにはあらず。思ひの籠る此片袖を天が下の勇士に贈らん爲に參りたり。切に受けさせ給へ」とこゝ迄踏み込みたる上は、かよわき乙女の、却て一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑ふ。

カメロットに集まる騎士は、弱きと强きを通じてわが盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。又わが腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あすの試合に後るゝは、始めより出づる筈ならぬを、半途より思ひ返しての仕業故である。闘技の塲に馬乘り入れてランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳はるゝ丈ならば其迄の浮名である。去れど後れたるは病のため、後れながらも參りたるはまことの病にあらざる證據よと云はば何と答へん。今幸ひに知らざる人の盾を借りて、知らざる人の袖を纏ひ、二十三十の騎士を斃す迄深くわが面を包まば、ランスロットと名乘をあげて人驚かす夕暮に、――誰彼共にわざと後れたる我を肯はん。病と臥せる我の作略を面白しと感ずる者さへあらう。――ランスロットは漸くに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具である。鎧の胴に立て懸けたるわが盾を輕々と片手に提げて、女の前に置きたるランスロットは云ふ。

「嬉しき人の眞心を兜にまくは騎士の譽れ。難有し」とかの袖を女より受け取る。

「うけてか」と片頬に笑める様は、谷間の姫百合に朝日影さして、しげき露の痕なく晞けるが如し。

「あすの勝負に用なき盾を、逢ふ迄の形見と殘す。試合果てて再びこゝを過ぎる迄守り給へ」

「守らでやは」と女は跪いて兩手に盾を抱く。ランスロットは長き袖を眉のあたりに揭げて、「赤し、赤し」と云ふ。

此時櫓の上を烏鳴き過ぎて、夜はほのぼのと明け渡る。

四　罪

アーサーを嫌ふにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニギアの己にのみ語る胸のうちである。

北の方なる試合果てて、行けるものは皆館に歸れるをランスロットのみは影さへ見えず。歸れかしと念ずる人の便りは絶えて、思はぬものの鎧を連ねてカメロットに入るは、見るも益なし。一日には二日を數へ、二日には三日を數へ、遂に兩手の指を悉く折り盡して十日に至る今日迄猶歸るべしとの願を掛けたり。

「遲き人のいづこに繫がれたる」とアーサーは左迄に心を惱ませる氣色もなく云ふ。

高き室の正面に、石にて築く段は二級、半ばは厚き毛氈にて蔽ふ。段の上なる、大いなる椅子に豐かに倚るがアーサーである。

「繫ぐ日も、繫ぐ月もなきに」とギニギアは答ふるが如く答へざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、床几の上に、纎き指を組み合はせて、膝より下は長き裳にかくれて履の在りかさへ定かならず。

よそよそしくは答へたれ、心は其人の名を聞きてさへ躍るを。話の種の思ふ坪に生えたるを、寒き息にて吹き枯らすは口惜し。ギニギアは又口を開く。

「後れて行くものは後れて歸る掟か」と云ひ添へて片頬に笑ふ。女の笑ふときは危い。

「後れたるは掟ならぬ戀の掟なるべし」とアーサーも穩やかに笑ふ。アーサーの笑にも特別の意味がある。

戀といふ字の耳に響くとき、ギニギアの胸は、錐に刺されし痛みを受けて、すはやと躍り上がる。耳の裏には颯と音して熱き血を注す。アーサーは知らぬ顔である。

「あの袖の主こそ美しからん。……」

「あの袖とは？　袖の主とは？　美しからんとは？」とギニギアの呼吸ははずんで居る。

「白き挿毛に、赤き鉢卷ぞ。去る人の贈り物とは見たれ。繫がるゝも道理ぢや」とアーサーは又からからと笑ふ。

「主の名は？」

「名は知らぬ。只美しき故に美しい少女と云ふと聞く。過ぐる十日を繫がれて、殘る幾日を繫がるゝ身は果報なり。カメロットに足は向くまじ」

「美しい少女！　美しい少女！」と續け樣に叫んでギニギアは薄き履に三たび石の床を踏みならす。肩に負ふ髮の時ならぬ波を描いて、二尺餘りを一筋毎に末迄渡る。

夫に二心なきを神の道との敎へは古し。神の道に從ふの心易きも知らずと云はじ。心易きを自ら捨てて、捨てたる後の苦しみを嬉しと見しも君が爲なり。春風に心なく、花自ら開く。花に罪ありとは下れる世の言の葉に過ぎず。戀を寫す鏡の明らかなるは鏡の德なり。かく觀ずる裡に、人にも世にも振り棄てられたる時の慰藉はあるべし。かく觀ぜんと思ひ詰めたる今頃を、わが乘れる足臺は覆へされて、踵を支ふるに一塵だになし。引き附けられたる鐵と磁石の、自然に引き附けられたれば咎も恐れず、世を憚りの關一重あなたへ越せば、生涯の落ち附はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吸はれし鐵は無限の空裏を冥府へ陷つる。わが乘る壇の床崩れて、わが坐る床几の底拔けて、わが踏む大地の殼裂けて、己を支ふる者は悉く消えたるに等し。ギニギアは組める手を胸の前に合はせたる儘、右左より骨も摧けよと壓す。片手に餘る力を、片手に拔いて、苦しき胸の悶えを人知れぬ方へ洩らさんとするなり。

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答へたるは、アーサーを欺けるにもあらず、又己を誣ひたるにもあらず。知らざるを知らずと云へるのみ。まことはわが口にせる言葉すら知らぬ間に咽を轉び出でたり。

ひく浪の返す時は、引く折の氣色を忘れて、逆しまに岸を嚙む勢の前よりは凄じきを、浪自らさへ驚くかと疑ふ。はからざる便りの胸を打ちて、度を失へるギニギアの、己を忘るゝ迄われに遠ざかれる後には、沖然として常よりも切なき吾に復る。何事も解せぬ風情に、驚きの眉をわが額の上にあつめたるアーサーを、わが夫と悟れる時のギニギアの眼には、アーサーは少らく前のアーサーにあらず。

人を傷つけたるわが罪を悔ゆるとき、傷負へる人の傷ありと心附かぬ時程悔の甚だしきはあらず。聖徒に向つて鞭を加へたる非の恐ろしきは、鞭うてるものの身に跳ね返る罰なきに、自らと其非を悔いたればなり。吾を疑ふアーサーの前に恥づる心は、疑はぬアーサーの前に、わが罪を心のうちに鳴らすが如く痛からず。ギニギアは悚然として骨に徹する寒さを

知る。

「人の身の上はわが上とこそ思へ。人戀はぬ昔は知らず、嫁ぎてより幾夜か經たる。赤き袖の主のランスロットを思ふ事は、御身のわれを思ふ如くなるべし。贈り物あらば、吾も十日を、二十日を、歸るを忘るべきに、罷るは卑し」とアーサーは王妃の方を見て不審の顏附である。

「美しき少女！」とギニヸアは三たびエレーンの名を繰り返す。このたびは銳き聲にあらず。去りとては憐れを寄せたりとも見えず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回らして云ふ。「御身とわれと始めて逢へる昔を知るか。丈に餘る石の十字を深く地に埋めたるに蔦這ひかゝる春の頃なり。路に迷ひて御堂にしばし憩はんと入れば、銀に鏤む祭壇の前に、空色の衣を肩より流して、黃金の髮に雲を起こせるは誰ぞ」

女はふるへる聲にて「あゝ」とのみ云ふ。床しからぬにもあらぬ昔の、今は忘るゝをのみ心易しと念じたる矢先に、忽然と容赦もなく描き出されたるを堪へ難く思ふ。

「安からぬ胸に、捨てゝ行ける人の歸るを待つと、凋れたる聲にてわれに語る御身の聲をきく迄は、天つ下れるマリヤの此寺の神壇に立てりとのみ思へり」

逝ける日は追へども歸らざるに逝ける事は長しへに暗きに葬る能はず。思ふまじと誓へる心に發矢と中たる古き火花もあり。

「伴なひて館に歸し參らせんと云へば、黃金の髮を動かして、何處へともとうなづく……」と途中に句を切つたアーサーは、身を起こして、兩手にギニヸアの頰を抑へながら上より妃の額を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、一しきり打ち返したのであらう。――王妃の頰は屍を抱くが如く冷たい。アーサーは覺えず抑へたる手を放す。折から迴廊を遠く人の踏む音がして、罵る如き幾多の聲は次第にアーサーの室に逼る。

入口に掛けたる厚き幕は總に絞らず。長く垂れて床をかくす。かの足音の戸に近くしばらくとまる時、垂れたる幕を二つに裂いて髮多く丈高き一人の男があらはれた。モードレッドである。

モードレッドは會釋もなく室の正面迄つかつかと進んで、王の立てる壇の下にとゞまる。續いて入るはアグラヹン、逞しき腕の、寬き袖を洩れて、赭き頸の、かたく衣の襟に括られて、色さへ變る程肉づける男である。二人の後には物色する遑なきに、どやどやと我勝ちに亂れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと並ぶ、數は凡てにて十二人。何事かなくては叶はぬ。

モードレッドは、王に向つて會釋せる頭を擡げて、そこ力のある聲にて云ふ。「罪あるを罰するは王者の事か」

「問はずもあれ」と答へたアーサーは今更と云ふ面持ちである。

「罪あるは高きをも辭せざるか」とモードレッドは再び王に向つて問ふ。

アーサーは我とわが胸を敲いて「黃金の冠は邪の頭に戴かず。天子の衣は惡を隱さず」と壇上に延び上がる。肩に括る緋の衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓はば、君が傍に坐せる女をも許さじ」とモードレッドは臆する氣色もなく、一指を擧げてギニヸアの眉間を指す。ギニヸアは屹と立ち上がる。

茫然たるアーサーは雷火に打たれたる啞の如く、わが前に立てる人――地を拔き出でし巖とばかり立てる人――を見守る。口を開けるはギニヸアである。

「罪ありと我を誣ひるか。何を證に、何の

罪を數へんとはする。詐りは天も照覽あれ」と纖き手を拔け出でよと空高く擧げる。

「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹の眼を後に投ぐれば、並びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつゝ、「神も知る、罪は逃れず」と口々に云ふ。

ギニヸアは倒れんとする身を、危く壁掛に扶けて「ランスロット！」と幽かに叫ぶ。王は迷ふ。肩に纏はる緋の衣の裏を半ば返して、右手の掌を十三人の騎士に向けたる儘にて迷ふ。

此時館の中に「黑し、黑し」と叫ぶ聲が石堞に響を反して、窈然と遠く鳴る木枯の如く傳はる。やがて河に臨む水門を、天にひゞけと錆びたる鐵鎖に軋らせて開く音がする。室の中なる人々は顏と顏を見合はす。只事ではない。

五　舟

「兜に卷ける絹の色に、槍突き合はす敵の目も眩むべし。ランスロットは其日の試合に、二十餘人の騎士を仆して、引き擧ぐる間際に始めて吾名をなのる。驚く人の醒めぬ間を、ラヹンと共に埒を出でたり。行く末は勿論アストラットぢや」と三日過ぎてアストラットに歸れるラヹンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉を張る。女は「あな」とのみ髮に插す花の色を顫はす。

「二十餘人の敵と渡り合へるうち、何者の槍を受け損じてか、鎧の胴を二寸下がりて、左の股に創を負ふ……」

「深き創か」と女は固唾を呑んで、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪へぬ程にはあらず。夏の日の暮れ難きに暮れて、蒼き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。……二人は一言も交はさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、われは晝の試合のまたあるまじき派手やかさを偲ぶ。風渡る梢もなければ馬の沓の地を鳴らす音のみ高し。……路は分かれて二筋となる」

「左へ切ればこゝ迄十哩ぢや」と老人が物知り顏に云ふ。

「ランスロットは馬の頭を右へ立て直す」

「右？　右はシャロットへの本街道、十五哩は確かにあらう」是も老人の說明である。

「其シャロットの方へ――後より呼ぶ吾を顧みもせで轡を鳴らして去る。已むなくて吾も從ふ。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶ける事なり。嘶く聲の果知らぬ夏野に、末廣に消えて、馬の足搔の常の如く、わが手綱の思ふ儘に運びし時は、ランスロットの影は、夜と共に微かなる奧に消えたり。――われは鞍を敲いて追ふ」

「追ひ附いてか」と父と妹は聲を揃へて問ふ。

「追ひ附ける時は既に遲くあつた。乘る馬の息の、闇押し分けて白く立ち上がるを、いやがうへに鞭うつて長き路を一散に驅け通す。黑きものの夫かとも見ゆる影が、二丁許り先に現はれたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黑きものは聞かざる眞似して行く。幽かに聞こえたるは轡の音か。怪しきは差して急げる樣もなきに容易くは追ひ附かれず。漸くの事間一丁程に逼りたる時、黑きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合點行かぬわれは益追ふ。シャロットの入口に渡したる石橋に、蹄も碎けよと乘り懸けしと思へば、馬は何物にか躓きて前足を折る。騎るわれは鬣をさかに扱いて前にのめる。戛と打つは石の上と心得しに、われより先に斃れたる人の鎧の袖なり」

「あぶない！」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

一あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロットの事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消ゆる程の聲に、椅子の端を握る。椅子の足は折れたるにあらず。

「橋の袂の柳の裏に、人住むとしも見えぬ庵室あるを、試みに敲けば、世を逃れたる隱士の居なり。幸ひと冷たき人を擔き入るゝ。兜を脫げば眼さへ氷りて……」

「藥を掘り、草を煮るは隱士の常なり。ランスロットを蘇してか」と父は話し半ばに我句を投げ入るゝ。

「よみ返しはしたれ。よみに在る人と擇ぶ所はあらず。吾に歸りたるランスロットはまことの吾に歸りたるにあらず。魔に襲はれて夢に物云ふ人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪々と叫び、あるときは王妃――ギニギア――シャロットと云ふ。隱士が心を込むる草の香も、煮えたる頭には一點の涼氣を吹かず。……」

「枕邊にわれあらば」と少女は思ふ。

「一夜の後たぎりたる腦の漸く平ぎて、靜かなる昔の影のちら〳〵と心に映る頃、ランスロットはわれに去れと云ふ。心許さぬ隱士は去るなと云ふ。兎角して二日を經たり。三日目の朝、われと隱士の眠り覺めて、病む人の顏色の、今朝如何あらんと臥床を窺へば――在らず。劒の先にて古壁に刻み殘せる句には罪は吾を追ひ吾は罪を追ふとある」

「逃れしか」と父は聞き、「いづこへ」と妹はきく。

「いづこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々と吹く夏野の風の限りは知らず。西東日の通ふ境は極めがたければ、獨り歸り來ぬ。――隱士は云ふ、病怠らで去る、かの人の身は危し。狂ひて走る方はカメロットなるべし。とうつゝのうちに口走れる言葉にてそれと察せしと見ゆれど、われは否と、さは思はず」と語り終つて盃に盛る苦き酒を一息に飲み干して虹の如き氣を吹く。妹は立つてわが室に入る。

花に戲むるゝ蝶のひるがへるを見れば、春に憂ありとは天下を擧げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月さへ闇に隱るゝ宵を思へ。――ふる露のしげきを思へ。――薄き翼のいかばかり薄きかを思へ。――廣き野の草の陰に、琴の爪程小さきものの潛むを思へ。――疊む翼に置く露の重きに過ぎて、夢さへ苦しかるべし。果知らぬ原の底に、あるに甲斐なき身を縮めて、誘ふ風にも碎くる危きを恐るゝは淋しからう。エレーンは長くは持たぬ。

エレーンは盾を眺めて居る。ランスロットの預けた盾を眺め暮らして居る。其盾には丈高き女の前に、一人の騎士が跪いて、愛と信とを誓へる模樣が描かれて居る。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地は黑に近き紺を敷く。赤き女のギニギアなりとは憐れなるエレーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を己と見立てて、跪けるをランスロットと思ふ折さへある。斯くあれと念ずる思ひの、いつか心の裏を拔け出でて、斯くの通りと盾の表にあらはれるのであらう。斯くありて後と、あらぬ礎を一度築ける上には、そら事を重ねて、其そら事の未來さへも想像せねば已まぬ。

重ね上げたる空想は、又崩れる。兒戲に積む小石の塔を蹴返す時の如くに崩れる。崩れたるあとの吾に歸りて見ればランスロットは在らぬ。氣を狂ひてカメロットの遠きに走れる人の、吾が傍にあるべき所謂はなし。離るゝとも、誓さへ渝らずば、千里を繋ぐ牽き綱もあらう。ランスロットとわれは何を誓へる？　エレーンの眼には淚が溢れる。

淚の中に又思ひ返す。ランスロットこそ誓はざれ。一人誓へる吾の渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とは云はじ。われとわが心にちぎるも誓には洩れず。此誓だに破らずばと思ひ詰める。エレーンの頰の色は褪せる。

死ぬ事の恐ろしきにあらず、死したる後にランスロットに逢ひ難きを恐るゝ。去れど此世にての逢ひ難きに比ぶれば未來に逢ふの却て易きかとも思ふ。罌粟散るを憂しとのみ眺むべからず、散ればこそ又咲く夏もあり。エレーンは食を斷つた。

衰へは春野燒く火と小さき胸を侵して、愁は衣に堪へぬ玉骨を寸々に削る。今迄は長き命とのみ思へり。よしやいつ迄もと貪る願ひはなくとも、死ぬと云ふ事は夢にさへ見しためしあらず。束の間の春と思ひあたれる今日となりて、つら〳〵世を觀ずれば、日に開く蕾の中にも恨はあり。圓く照る明月のあすをと問はば淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人である。

今は是迄の命と思ひ詰めたるとき、エレーンは父と兄とを枕邊に招きて「わが爲にランスロットへの文かきて玉はれ」と云ふ。父は筆と紙を取り出でて、死なんとする人の言の葉を一一に書き附ける。

「天が下に慕へる人は君ひとりなり。君一人の爲に死ぬるわれを憐れと思へ。陽炎燃ゆる黑髮の、長き亂れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星變る後の世迄も消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水の因果を受くる理なしと思へば。睫に宿る露の珠に、寫ると見れば碎けたる、君の面影の脆くもあるかな。わが命もしかく脆きを、淚あらば濺げ。基督も知る、死ぬる迄清き乙女なり」

書き終りたる文字は怪しげに亂れて定かならず。年寄の手の顫へたるは、老の爲とも悲しみの爲とも知れず。

女又云ふ。「息絕えて、身の暖かなるうち、右の手に此文を握らせ給へ。手も足も冷え盡したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ。隙間なく黑き布しき詰めたる小船の中にわれを載せ給へ。山に野に白き薔薇、白き百合を採り盡して舟に投げ入れ給へ。――舟は流し給へ」

かくしてエレーンは眼を眠る。眠りたる眼は開く期なし。父と兄とは唯々として遺言の如く、憐れなる少女の亡骸を舟に運ぶ。

古き江に漣さへ死して、風吹く事を知らぬ顏に平かである。舟は今綠罩むる陰を離れて中流に漕ぎ出づる。櫂操るは只一人、白き髮の白き鬚の翁と見ゆ。ゆるく搔く水は、物憂げに動いて、一櫂ごとに鉛の如き光を放つ。舟は波に浮ぶ睡蓮の睡れる中に、音もせず乘り入りては乘り越して行く。蕚傾けて舟を通したるあとには、輕く曳く波足と共にしばらく搖れて、花の姿は常の靜けさに歸る。押し分けられた葉の再び浮き上がる表には、時ならぬ露が珠を走らす。

舟は杳然として何處ともなく去る。美しき亡骸と、美しき衣と、美しき花と、人とも見えぬ一個の翁とを載せて去る。翁は物をも云はぬ。只靜かなる波の中に長き櫂をくゞらせては、くゞらす。木に彫る人を鞭うつて起たしめたるか、櫂を動かす腕の外には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、收めたる翼に波を裂いて、王者の如く悠然と水を練り行く。長き頸の高く伸したるに、氣高き姿はあたりを拂つて、恐るゝものありとしも見えず。うねる流を傍目もふらず、舳に立つて舟を導く。舟はいづく迄もと、鳥の羽に裂けたる波の合は

ぬ間を鎖ふ。兩岸の柳は青い。

シャロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき聲が、左の岸より古き水の寂寞を破つて、動かぬ波の上に響く。「うつせみの世を、……うつゝ……に住めば……」絶えたる音はあとを引いて、引きたる糸又しばらくに絶えんとす。聞くものは死せるエレーンと、艫に坐る翁のみ。翁は耳さへ借さぬ。只長き櫂をくゞらせてはくゞらする。思ふに聾なるべし。

空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挾む左右の柳は、一本毎に緑をこめて濛々と烟る。娑婆と冥府の界に立ちて迷へる人のあらば、其人の靈を並べたるが此氣色である。畫に似たる少女の、舟に乗りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあらう。

舟はカメロットの水門に横附けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙てる樓閣の黑く水に映るのが物凄い。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニギアを前に、城中の男女が悉く集まる。

エレーンの屍は凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき顔を、雲と亂るゝ黄金の髮に埋めて、笑へる如く横たはる。肉に附着するあらゆる肉の不淨を拭ひ去つて、霊其物の面影を口鼻の間に示せるは朗らかにも又極めて清い。苦しみも、憂ひも、恨みも、憤りも——世に忌はしきものの痕なければ土に歸る人とは見えず。

王は厳かなる聲にて「何者ぞ」と問ふ。櫂の手を休めたる老人は唖の如く口を開かぬ。ギニギアはつと石階を下りて、亂るゝ百合の花の中より、エレーンの右の手に握る文を取り上げて何事と封を切る。

悲しき聲は又水を渡りて、「……うつくしき……戀、色や……うつろふ」と細き糸ふつて波うたせたる時の如くに人々の耳を貫く。

讀み終りたるギニギアは、腰をのして舟の中なるエレーンの額——透き徹るエレーンの額に、顫へたる唇をつけつゝ「美しき少女！」と云ふ。同時に一滴の熱き涙はエレーンの冷たき頬の上に落つる。

十三人の騎士は目と目を見合はせた。

坊っちやん

一

親譲りの無鐵砲で子供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出來まい。弱蟲やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして、二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて綺麗な刃を日に翳して、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ろと注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ひナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に附いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと、南上がりに聊か許りの菜園があつて、眞中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、學校で食ふ。菜園の西側が山城屋と云ふ質屋の庭續きで、此質屋に勘太郎といふ十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱蟲である。弱蟲の癖に四つ目垣を乘りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とう〳〵勘太郎を捕まへてやつた。其時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかゝつて來た。向うは二つ許り年上である。弱蟲だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐい〳〵押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中に這入つた。邪魔になつて手が使へぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、左右へぐら〳〵靡いた。仕舞ひに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食ひ附いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足搦をかけて向うへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ眞逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。其晩母が山城屋に詫びに行つた序に袷の片袖も取り返して來た。

此外いたづらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人參の芽が出揃はぬ處へ藁が一面に敷いてあつたから、其上で三人が半日相撲をとりつゞけに取つたら、人參がみんな踏みつぶされて仕舞つた。古川の持つて居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲に水がかゝる仕掛であつた。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎう〳〵井戸の中へ押し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ歸つて飯を食つて居たら、古川が眞赤になつて怒鳴り込んで來た。慥か罰金を出して濟んだ様である。

おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつ

た。母は兄計り贔屓にして居た。此兄は、やに色が白くつて、芝居の眞似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度に、こいつはどうせ碌なものにはならない、とおやぢが云つた。亂暴で亂暴で行く先が案じられると母が云つた。成程碌なものにはならない。御覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る計りである。

母が病氣で死ぬ二三日前臺所で宙返りをして、へつつひの角で肋骨を撲つて大いに痛かつた。母が大層怒つて、御前の樣なものの顔は見たくないと云ふから、親類へ泊りに行つて居た。するととう／＼死んだと云ふ報知が來た。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲に、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮らして居た。おやぢは何もせぬ男で、人の顔さへ見れば貴樣は駄目だ駄目だと口癖の樣に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやぢが有つたもんだ。兄は實業家になるとか云つて頻りに英語を勉強して居た。元來女の樣な性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割で喧嘩をして居た。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言附けた。おやぢがおれを勘當すると言ひ出した。

其時はもう仕方がないと觀念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。それにも拘らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。却て此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもと由緒のあるものだつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公迄する樣になつたのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云ふ因縁か、おれを非常に可愛がつて呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした――おやぢも年中持て餘してゐる――町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする――此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端の樣に取扱はれるのは何とも思はない、却て此清の樣にちやほやしてくれるのを不審に考へた。清は時々臺所で人の居ない時に「あなたは眞直でよい御氣性だ」と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分らなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌ひだと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つてる樣に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清は愈おれを可愛がつた。時々は子供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廢せばいゝのにと思つた。氣の毒だと思つた。夫でも清は可愛がつてくれる。折々は自分の小遣で金鍔や紅梅燒を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間にか寐て居る枕元へ蕎麥湯を持つて來てくれる。時には鍋燒饂飩さへ買つてくれた。只食ひ物計りではない。靴足袋を貰つた。鉛筆も貰つた。帳面も貰つた。是はずつと後の事であるが金を三圓許り貸してくれた

事さへある。何も貸せと云つた譯ではない。向うで部屋へ持つて來て御小遣がなくて御困りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。實は大變嬉しかつた。其三圓を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行つたら、すぽりと後架の中へ落として仕舞つた。仕方がないから、のそ／＼出て來て實は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して來て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあ／＼音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引つ懸けたのを水で洗つて居た。夫から口をあけて壹圓札を改めたら茶色になつて模樣が消えかゝつて居た。清は火鉢で乾かして、是でいゝでせうと出した。一寸かいで見て臭いやと云つたら、それぢや御出しなさい、取り換へて來て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三圓持つて來た。此三圓は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたきり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくつても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌ひだと云つて人に隱れて自分丈得をする程嫌ひな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隱して清から菓子や色鉛筆を貰ひたくはない。なぜ、おれ一人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄ましたもので御兄樣は御父樣が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。是は不公平である。おやぢは頑固だけれども、そんな依怙贔屓はせぬ男だ。然し清の眼から見るとさう見えるのだらう。全く愛に溺れて居たに違ひない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。單に是計りではない。贔屓目は恐ろしいものだ。清はおれを以て將來立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。其癖勉強をする兄は色計り白くつて、迚も役には立たないと一人できめて仕舞つた。こんな婆さんに逢つては叶はない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌ひなひとは屹度落ち振れるものと信じて居る。おれは其時から別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなる／＼と云ふ者だから、矢つ張り何にか成れるんだらうと思つて居た。今から考へると馬鹿々々しい。ある時抔は清にどんなものになるだらうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考へもなかつた樣だ。只手車へ乘つて、立派な玄關のある家をこしらへるに相違ないと云つた。

夫から清はおれがうちでも持つて獨立したら、一所になる氣で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てる樣な氣がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、あなたはどこが御好き、麹町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらへ遊ばせ、西洋間は一つで澤山です抔と勝手な計畫を獨りで竝べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答へた。すると、あなたは慾がすくなくつて、心が綺麗だと云つて又賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間此狀態で暮らして居た。おやぢには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰ふ、時々賞められる。別に望みもない、是で澤山だと思つて居た。ほかの子供も一概にこんなものだらうと思つて居た。只清が何かにつけて、あなたは御可哀相だ不仕合せだと無暗に云ふものだから、それぢや可哀相で不仕合せなんだらうと思つた。其外に苦にな

る事は少しもなかつた。只おやぢが小言を喫れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。其年の四月におれはある私立の中學校を卒業する。六月に兄は商業學校を卒業した。兄は何とか會社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ學問をしなければならない。兄は家を賣つて財産を片附けて任地へ出立すると云ひ出した。おれはどうでもするが宜からうと返事をした。どうせ兄の厄介になる氣はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向うでも何とか云ひ出すに極まつて居る。なまじひ保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで來て、先祖代々の瓦落多を二束三文に賣つた。家屋敷はある人の周旋である金滿家に譲つた。此は大分金になつた樣だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ケ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに殘念がつたが、自分のものでないから、仕樣がなかつた。あなたがもう少し年をとつて入らつしやれば、こゝが御相續が出來ますものをとしきりに口說いて居た。もう少し年を取つて相續が出來るものなら、今でも相續が出來る筈だ。婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

兄とおれは斯樣に分かれたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ附いて九州下り迄出掛ける氣は毛頭なし、と云つて此時のおれは四疊半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引き拂はねばならぬ始末だ。どうする事も出來ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたら、あなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は仕方がないから、甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮らして居たから、今迄も清に來るなら來いと二三度勸めたのだが、清は假令下女奉公はしても年來住み馴れた方がいゝと云つて應じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易へをして入らぬ氣兼を仕直すより甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰への、來て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ來て金を六百圓出して是を資本にして商賣をするなり、學資にして勉強をするなり、どうでも隨意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ。何の六百圓位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な處置が氣に入つたから、禮を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十圓出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分かれたきり兄には其後一遍も逢はない。

おれは六百圓の使用法に就いて寐ながら考へた。商賣をしたつて面倒くさくつて旨く出來るものぢやなし、ことに六百圓の金で商賣らしい商賣がやれる譯でもなからう。よしやれるとしても、今の樣ぢや人の前へ出て教育を受けたと威張れないから詰り損になる計りだ。資本抔はどうでもいゝから、これを學資にして勉強してやらう。六百圓を三に割つて一年に二百圓宛使へば三年間は勉強が出來る。三年間一生懸命にやれば何か出來る。夫からどこの學校へ這入らうと考へたが、學問は生來どれもこれも好きでない。ことに語學とか文學とか云ふものは

眞平御免だ。新體詩などと來ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌ひなものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸ひ物理學校の前を通り掛かつたら生徒募集の廣告が出て居たから何も緣だと思つて規則書をもらつてすぐ入學の手續をして仕舞つた。今考へると是も親譲りの無鐵砲から起こつた失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいゝ方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。然し不思議な者で、三年立つたらとう〳〵卒業して仕舞つた。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ譯もないから大人しく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに來たから、何か用だらうと思つて、出掛けて行つたら、四國邊のある中學校で數學の教師が入る。月給は四十圓だ[illegible]行[illegible]はどうだと云ふ相談である。おれは三年[illegible]したが實を云ふと教師になる氣も、田舍[illegible]考へも何もなかつた。尤も教師以外に[illegible]しようと云ふあてもなかつ[illegible]から、此相談[illegible]けた時、行きませうと即[illegible]是も親譲りの無鐵砲が祟つたので[illegible]引[illegible]以上は赴任せねばならぬ。此三年間は四疊半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに濟んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑氣な時節であつた。然しかうなると四疊半も引き拂はねばならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時計りである。今度は鎌倉所ではない。大變な遠くへ行かねばならぬ。地圖で見ると海濱で針の先程小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んで居るか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く計りである。尤も少々面倒臭い。

家を疊んでからも清の所へは折々行つた。清の甥と云ふのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさへすれば、何くれと款待して呉れた。清はおれを前へ置いて、色々おれの自慢を甥に聞かせた。今に學校を卒業すると麴町邊へ屋敷を買つて役所へ通ふのだ抔と吹聽した事もある。獨りで極めて一人で喋舌るからこつちは困つて顔を赤くした。夫も一度や二度ではない。折々おれが小さい時寐小便をした事迄持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞い[illegible]らぬ。只清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主從の樣に考へて居た。自分の主人なら甥の爲にも主人に相違ないと合點したものらしい。甥こそいゝ面の皮だ。

愈約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、北向の三疊に風邪を引いて寐て居た。おれの來たのを見て起き直るが早いか、坊つちやん何時家を御持ちなさいますと聞いた。卒業さへすれば金が自然とポッケットに湧いて來ると思つて居る。そんなに偉い人をつらまへて、まだ坊つちやんと呼ぶのは愈馬鹿氣て居る。おれは單簡に當分うちは持たない。田舍へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻鹽の鬢の亂れを頻りに撫でた。餘り氣の毒だから「行く事は行くがぢき歸る。來年の夏休みには屹度歸る」と慰めてやつた。夫でも妙な顔をして居るから「何を見やげに買つて來てやらう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違ふ。「おれの行く田舍には笹飴はなささうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見當です」と聞き返した。「西の方だよ」と云ふと「箱根のさきですか手前です」と問ふ。隨分持てあました。

[illegible]には朝から來て、色々世話をやい

た。来る途中小間物屋で買つて来た歯磨と楊子と手拭をズックの革鞄に入れて呉れた。そんな物は入らないと云つても中々承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな聲で云つた。目に涙が一杯溜まつて居る。おれは泣かなかつた。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が餘つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居た。何だか大變小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、艀が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は眞裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蠻な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼が眩む。事務員に聞いて見るとおれは此所へ降りるのださうだ。見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしてゐらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。續いて五六人は乘つたらう。外に大きな箱を四つ許り積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して来た。陸へ着いた時もいの一番に飛び上がつていきなり、磯に立つて居た鼻つたれ小僧をつらまへて中學校はどこだと聞いた。小僧は茫やりして、知らんがのと云つた。氣の利かぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に、中學校のありかも知らぬ奴があるものか。所へ妙な筒つぽうを着た男がきて、こつちへ来いと云ふから、尾いて行つたら、港屋とか云ふ宿屋へ連れて来た。やな女が聲を揃へてお上がりなさいと云ふので上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中學校を教へろと云つたら、中學校は是から汽車で二里許り行かなくちやいけないと聞いて、猶上がるのがいやになつた。おれは、筒つぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくつて、のそ〱あるき出した。宿屋のものは變な顔をして居た。

停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買つた。乘り込んで見るとマッチ箱の様な汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。夫から車を傭つて、中學校へ来たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教へた。随分氣樂な宿直がゐるものだ。校長でも尋ねようかと思つたが、草臥れたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云ひ附けた。車夫は威勢よく山城屋と云ふうちへ横附けにした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋號と同じだから一寸面白く思つた。

何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたら、生憎みんな塞がつて居りますからと云ひながら、革鞄を抛り出した儘出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかいて我慢して居た。やがて湯に入れと云ふから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつた。歸りがけに覗いて見ると涼しさうな部屋が澤山空いてゐる。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持つて来た。部屋は熱かつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらから御出でになりましたと聞くから、東京から来たと答へた。すると東京はよい所で御座いませうと云つたから當り前だと答へてやつた。膳を下げた下女が臺所へ行つた時分、大きな笑ひ聲が聞こえた。くだらないから、すぐ寐たが、中々寐られない。熱い許りではない。騒々しい。下宿の五倍位八釜

しい。うと〱したら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしや〱食つて居る。笹は毒だからよしたらよからうと云ふと、いえ此笹が御藥で御座いますと云つて旨さうに食つて居る。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハヽヽと笑つたら眼が覺めた。下女が雨戸を明けてゐる。相變らず空の底が突き抜けた様な天氣だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所爲だらう。見すぼらしい服装をして、ズックの革鞄と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやらう。おれは是でも學資の餘りを三十圓程懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四圓程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰ふんだから構はない。田舎者はしみつたれだから五圓もやれば驚いて眼を廻すに極まつて居る。どうするか見ろと澄まして顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、昨夕の下女が膳を持つて来た。盆を持つて給仕をしながらにや〱笑つてる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。是でも此下女の面より餘つ程上等だ。飯を済ましてからにしようと思つて居たが、癪に障つたから、中途で五圓札を一枚出して、あとで是を帳場へ持つて行けと云つたら、下女は變な顔をして居た。夫から飯を濟ましてすぐ學校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

學校は昨日車で乘りつけたから、大概の見當は分つて居る。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄關迄は御影石で敷きつめてある。きのふ此敷石の上を車でがら〱と通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒に澤山逢つたが、みんな此門を這入つて行く。中にはおれより脊が高くつて強さうなのが居る。あんな奴を教へるのかと思つたら何だか氣味が惡くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、色の黒い、眼の大きな狸の様な男である。やに勿體ぶつて居た。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺さつた辭令を渡した。此辭令は東京へ歸るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々其人に此辭令を見せるんだと言つて聞かした。餘計な手數だ。そんな面倒な事をするより此辭令を三日間教員室へ張り附ける方がましだ。

教員が控所へ揃ふのは一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積りだが、先づ大體の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から教育の精神について長い御談義を聞かした。おれは勿論いゝ加減に聞いて居たが途中から是は飛んだ所へ来たと思つた。校長の云ふ様にはとても出来ない。おれ見た様な無鐵砲なものをつらまへて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、學問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で遙々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば誰でも喧嘩の一つ位はするだらうと思つてたが、此様子ぢや滅多に口も利けない、散歩も出来ない。そんな六づかしい役なら雇ふ前にこれ〱だと話すがいゝ。おれは嘘をつくのが嫌ひだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思ひ切りよく、こゝで斷つて歸つちまはうと思つた。宿屋へ五圓やつたから財布の中には九圓なにがしかない。九圓ぢや東京迄は歸

れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。然し九圓だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたの仰しやる通りにや出來ません、此辭令は返しますと云つたら、校長は狸の樣な眼をぱちつかせておれの顏を見て居た。やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出來ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいゝと云ひながら笑つた。その位よく知つてるなら、始めから威嚇かさなければいゝのに。

さう、かうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがや／＼する。もう教員も控所へ揃ひましたらうと云ふから、校長に尾いて教員控所へ這入つた。廣い細長い部屋の周圍に机を竝べてみんな腰をかけて居る。おれが這入つたのを見て、みんな申し合はせた樣におれの顏を見た。見世物ぢやあるまいし。夫から申し附けられた通り一人々々の前へ行つて辭令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかゞめる許りであつたが、念の入つたのは差し出した辭令を受け取つて一應拜見をして夫を恭しく返却した。丸で宮芝居の眞似だ。十五人目に體操の教師へと廻つて來た時には同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で濟む、こつちは同じ所作を十五返繰り返して居る。少しはひとの了見も察して見るがいゝ。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云ふのが居た。是は文學士ださうだ。文學士と云へば大學の卒業生だからえらい人なんだらう。妙に女の樣な優しい聲を出す人だつた。尤も驚いたのは此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極まつてる。文學士丈に御苦勞な服裝をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる。あとで聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病氣があつた者だ。當人の說明では赤は身體に藥になるから、衞生の爲にわざ／＼誂へるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいゝ。夫から英語の教師に古賀とか云ふ大變顏色の惡い男が居た。大概顏の蒼い人は瘠せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔小學校へ行く時分、淺井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此淺井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。淺井は百姓だから、百姓になるとあんな顏になるかと淸に聞いて見たら、さうぢやありません、あの人はうらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふくれるんですと教へて吳れた。それ以來蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬いだと思ふ。此の英語の教師もうらなり許り食つてるに違ひない。尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。淸に聞いて見た事はあるが、淸は笑つて答へなかつた。大方淸も知らないんだらう。夫からおれと同じ數學の教師に堀田と云ふのが居た。是は逞しい毬栗坊主で、叡山の惡僧と云ふべき面構である。人が丁寧に辭令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、些と遊びに來給へアハヽヽと云つた。何がアハヽヽだ。そんな禮儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれは此時から此坊主に山嵐と云ふ渾名をつけてやつた。漢學の先生は流石に堅いものだ。昨日御着きで、嘸御疲れで、夫でもう授業を御始めで、大分御勵精で、——とのべつに辯じたのは愛嬌のある御爺さんだ。畫學の教師は全く藝人風だ。べら／＼した透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、御國はどちらでげす、え？東京？夫りや嬉しい、御仲間が出來て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。こんなのが江戸つ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考へた。其ほか一人々々に就いてこんな事を書けばいくらでもある。然し際限がないからやめる。

挨拶が一通り濟んだら、校長が今日はもう引き取つてもいゝ、尤も授業上の事は數學の主任と打ち合せをして置いて、明後日から課業を始めてくれと云つた。數學の主任は誰かと聞いて見たら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおや／＼と失望した。山嵐は「おい君どこに泊まつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云ひ殘して白墨を持つて教場へ行つた。主任の癖に向うから來て相談するなんて不見識な男だ。然し呼び附けるよりは感心だ。

夫から學校の門を出て、すぐ宿へ歸らうと思つたが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散步してやらうと思つて、無暗に足の向く方をあるき散らした。縣廳も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神樂坂を半分に狹くした位な道幅で町並はあれより落ちる。二十五萬石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に御城下だ抔と威張つてる人間は可哀相なものだと考へながらくると、いつしか山城屋の前に出た。廣い樣でも狹いものだ。是で大抵は見盡したのだらう。歸つて飯でも食はうと門口を這入つた。帳場に坐つて居たかみさんが、おれの顏を見ると急に飛び出して來て御歸り……と板の間へ頭をつけた。靴を脫いで上がると、御座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五疊の表二階で大きな床の間がついて居る。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へ這入つた事はない。此後いつ這入れるか分らないから、洋服を脫いで浴衣一枚になつて座敷の眞中へ大の字に寐て見た。いゝ心持ちである。

晝飯を食つてから早速淸へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまづい上に字を知らないから手紙をかくのが大嫌ひだ。又やる所もない。然し淸は心配して居るだらう。難船して死にやしないか抔と思つちや困るから、奮發して長いのを書いてやつた。其文句はかうである。

「きのふ着いた。つまらん所だ。十五疊の座敷に寐て居る。宿屋へ茶代を五圓やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。昨夜は寐られなかつた。淸が笹飴を笹ごと食ふ夢を見た。來年の夏は歸る。今日は學校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた、校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、數學は山嵐、畫學はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。左樣なら」

手紙をかいて仕舞つたら、いゝ心持ちになつて眠氣がさしたから、最前の樣に座敷の眞中へのび／＼と大の字に寐た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寐た。この部屋かいと大きな聲がするので眼が覺めたら、山嵐が這入つて來た。最前は失敬君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちを聞いて見ると別段六づかしい事もなささうだから承知した。此位の事なら、明後日は愚、明日から始めろと云つたつて驚かない。授業上の打ち合せが濟んだら、君はいつ迄こんな宿屋に居る積りでもあるまい、僕がいゝ下宿を周旋してやるから移り玉へ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出來る。早い方がいゝから、今日見て、あす移つて、あさつてから學校へ行けば極りがいゝと一人で吞み込んで居る。成程十五疊敷にいつ迄居る譯にも行くまい。月給をみんな宿料に拂つても追つつかないかもしれぬ。五圓の茶代を奮發してすぐ移るのはちと殘念だがどうせ移る者なら、早く引き越して落ち附く方が便利だから、そこの所はよろしく山嵐に賴む事にした。すると山嵐は兎も角一所

に来て見ろと云ふから、行つた。町はづれの岡の中腹にある家で至極閑靜だ。主人は骨董を賣買するいか銀と云ふ男で、女房は亭主よりも四つ許り年嵩の女だ。中學校に居た時キッチと云ふ言葉を習つた事があるが此女房は正にキッチに似て居る。キッチだつて人の女房だから構はない。とう／＼明日から引き移る事にした。歸りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。學校で逢つた時はやに橫風な失敬な奴だと思つたが、こんなに色々世話をしてくれる所を見ると、わるい男でもなさそうだ。只おれと同じ樣にせつかちで肝癪持ちらしい。あとで聞いたら此男が一番生徒に人望があるのださうだ。

三

愈學校へ出た。初めて敎場へ這入つて高い所へ乘つた時は、何だか變だつた。講釋をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒は八釜しい。時々圖抜けた大きな聲で先生と云ふ。先生には應へた。今迄物理學校で毎日先生々々と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむづむづする。おれは卑怯な人間ではない、臆病な男でもないが、惜しい事に膽力が缺けて居る。先生と大きな聲をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いた樣な氣がする。最初の一時間は何だかいゝ加減にやつて仕舞つた。然し別段困つた質問も掛けられずに濟んだ。控所へ歸つて來たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと簡單に返事をしたら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乘り込む樣な氣がした。敎場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸つ子で華奢に小作りに出來て居るから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるが、こんな大僧を四十人も前へ並べて、只一枚の舌をたゝいて恐縮させる手際はない。然しこんな田舍者に弱身を見せると癖になると思つたから、成るべく大きな聲をして、少々卷き舌で講釋してやつた。最初のうちは生徒も煙に捲かれてぼんやりして居たから、それ見ろと益得意になつて、べらんめい調を用ひてたら、一番前の列の眞中に居た、一番強さうな奴が、いきなり起立して先生と云ふ。そら來たと思ひながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分らんけれ、もちつと、ゆる／＼遣つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生溫い言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸つ子だから君等の言葉は使へない、分らなければ、分る迄待つてるがいゝと答へてやつた。此調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。只歸りがけに生徒の一人が一寸此問題を解釋をしておくれんかなもし、と出來さうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。仕方がないから、何だか分らない、此次敎へてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囃した。其中に出來ん／＼と云ふ聲が聞こえる。箆棒め、先生だつて、出來ないのは當り前だ。出來ないのを出來ないと云ふのに不思議があるものか。そんなものが出來る位なら、四十圓でこんな田舍へくるもんかと控所へ歸つて來た。今度はどうだと又山嵐が聞いた。うんと云つたが、うん丈では氣が濟まなかつたから、此學校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顏をして居た。

三時間目も、四時間目も、晝過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た敎は、孰れも少々づゝ失敗した。敎師ははたで見る程樂ぢやないと思つた。授業は一通り濟んだがまだ歸

れない、三時迄ぽつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の敎室を掃除して報知にくるから檢分をするんださうだ。夫から、出席簿を一應調べて漸く御暇が出る。いくら月給で買はれた身體だつて、あいた時間迄學校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。然しほかの連中はみんな大人しく御規則通りやつてるから新參のおればかり、だゝを捏ねるのも宜しくないと思つて我慢をして居た。歸りがけに、君何でも蚊んでも三時過迄學校にゐさせるのは愚だぜと山嵐に訴へたら、山嵐はさうさアハヽヽと笑つたが、あとから眞面目になつて、君餘り學校の不平を云ふと、いかんぜ。云ふなら僕丈に話せ、隨分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分かれたから詳しい事は聞くひまがなかつた。夫からうちへ歸つてくると、宿の亭主が御茶を入れませうと云つてやつて來る。御茶を入れると云ふから御馳走をするのかと思ふと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。此樣子では留守中も勝手に御茶を入れませうを一人で履行して居るかも知れない。亭主が云ふには手前は書畫骨董がすきで、とうとうこんな商賣を內々で始める樣になりました。あなたも御見受け申す所大分御風流でいらつしやるらしい。ちと道樂に御始めなすつては如何ですと、飛んでもない勸誘をやる。二年前ある人の使に帝國ホテルへ行つた時は錠前直しと間違へられた事がある。ケットを被つて、鎌倉の大佛を見物した時は車屋から親方と云はれた。其外今日迄見損なはれた事は隨分あるが、まだおれをつらまへて大分御風流でいらつしやると云つたものはない。大抵はなりや樣子でも分る。風流人なんて云ふものは、畫を見ても、頭巾を被るか短冊を持つてるものだ。このおれを風流人だ抔と眞面目に云ふのは只の曲者ぢやない。おれはそんな呑氣な隱居のやる樣な事は嫌ひだと云つたら、亭主はへゝゝゝと笑ひながらいえ始めから好きなものは、どなたも御座いませんが、一旦此道に這入ると中々出られませんと一人で茶を注いで妙な手附をして飲んで居る。實はゆうべ茶を買つてくれと賴んで置いたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に答へる樣な氣がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたと又一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がつてから、あしたの下讀をしてすぐ寐て仕舞つた。

それから毎日々々學校へ出ては規則通り働く、毎日々々歸つて來ると主人が御茶を入れませうと出てくる。一週間許りしたら學校の樣子も一通りは飮み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。他の敎師に聞いて見ると辭令を受けた一週間から一ケ月位の間は自分の評判がいゝだらうか、惡いだらうか非常に氣に掛かるさうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。敎場で折々しくじると其時丈はやな心持ちだが三十分許り立つと綺麗に消えて仕舞ふ。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出來ない男だ。敎場のしくじりが生徒にどんな影響を與へて、其影響が校長や敎頭にどんな反應を呈するか丸で無頓着であつた。おれは前に云ふ通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思ひ切りは頗るいゝ人間である。此學校がいけなければすぐどつかへ行く覺悟で居たから、狸も赤シャツも些とも恐ろしくはなかつた。まして敎場の小僧共なんかには愛嬌も御世辭も使ふ氣になれなかつた。學校はそれでいゝのだが下宿の方はさうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに來る丈なら我慢もするが、色々な物を持つてくる。始めに持つて來たのは何でも印材で、十許り並べて置いて、みんなで三圓な

ら安い物だ御買ひなさいと云ふ。田舍巡りのヘボ繪師ぢやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云ふ男の花鳥の掛物をもつて來た。自分で床の間へかけて、いゝ出來ぢやありませんかと云ふから、さうかなと好い加減に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、此幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釋をしたあとで、どうですあなたなら十五圓にして置きます。御買ひなさいと催促をする。金がないと斷ると、金なんか、いつでも宜う御座いますと中々頑固だ。金があつても買はないんだと、其時は追つ拂つちまつた。其次には鬼瓦位な大硯を擔ぎ込んだ。是は端溪です、端溪ですと二遍も三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたら、すぐ講釋を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、是は慥かに中層です、此眼を御覽なさい。眼が三つあるのは珍しい。溌墨の具合も至つて宜しい、試めして御覽なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から、持つて歸つて來て是非賣りたいと云ひますから、御安くして三十圓にして置きませうと云ふ。此男は馬鹿に相違ない。學校の方はどうかかうか無事に勤まりさうだが、かう骨董責めに逢つてはとても長く續きさうにない。

其うち學校もいやになつた。ある日の晩大町と云ふ所を散歩して居たら郵便局の隣に蕎麥とかいて、下に東京と注を加へた看板があつた。おれは蕎麥が大好きである。東京に居つたときでも蕎麥屋の前を通つて藥味の香をかぐと、どうしても暖簾がくゞりたくなつた。今日迄は數學と骨董で蕎麥を忘れて居たが、かうして看板を見ると素通りが出來なくなる。序だから一杯食つて行かうと思つて上がり込んだ。見ると看板程でもない。東京と斷る以上はもう少し綺麗にしさうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか滅法きたない。疊は色が變つて御負けに砂でざら／＼して居る。壁は煤で眞黑だ。天井はランプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思はず首を縮める位だ。只麗々と蕎麥の名前をかいて張り附けたねだん附け丈は全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日前から開業したに違ひなからう。ねだん附けの第一號に天麩羅とある。おい天麩羅を持つてこいと大きな聲を出した。すると此時迄隅の方に三人かたまつて、何かつる／＼ちゆう／＼食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、一寸氣がつかなかつたが顏を合はせると、みんな學校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。其晩は久し振に蕎麥を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の氣もなく教場へ這入ると、黑板一杯位な字で天麩羅先生とかいてある。おれの顏を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿々々しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、然し四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食はうが五杯食はうが、おれの錢でおれが食ふのに文句があるもんかと、さつさと講義を濟まして控所へ歸つて來た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯也、但し笑ふ可からず。と黑板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪に障つた。冗談も度を過ごせばいたづらだ。燒餠の黑焦げの樣なもので誰も賞め手はない。田舍者は此呼吸が分らないからどこまで押して行つても構はないと云ふ量見だらう。一時間あるくと見物する町もない樣な狹い都に住んで、外に何も藝がないから天麩羅事件を日露戰爭の樣に觸れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。子

供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た樣な小人が出來るんだ。無邪氣なら一所に笑つてもいゝが、こりやなんだ。子供の癖に乙に毒氣を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたづらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云ふ意味を知つてるか、と云つたら、自分がした事を笑はれて怒るのが卑怯ぢやらうがな、もしと答へた奴がある。やな奴だ。わざ／＼東京からこんな奴を教へに來たのかと思つたら情なくなつた。餘計な減らず口を利かないで勉强しろと云つて授業を始めて仕舞つた。夫から次の教場へ出たら天麩羅を食ふと減らず口が利き度くなるものなりと書いてある。どうも始末に終へない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教へないと云つてすた／＼歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜んださうだ。かうなると學校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麥もうちへ歸つて、一晩寐たらそんなに肝癪に障らなくなつた。學校へ出て見ると、生徒も出てゐる。何だか譯が分らない。夫から三日許りは無事であつたが、四日目の晩に住田と云ふ所へ行つて團子を食つた。此の住田と云ふ所は溫泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いて三十分で行かれる、料理屋も溫泉宿も、公園もある上に遊廓がある。おれの這入つた團子屋は遊廓の入口にあつて、大變うまいと云ふ評判だから、溫泉に行つた歸りがけに一寸食つて見た。今度は生徒にも逢はなかつたから、誰も知るまいと思つて、翌日學校へ行つて、一時間目の教場へ這入ると團子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢拂つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にも屹度何かあると思ふと遊廓の團子旨い／＼と書いてある。あきれ返つた奴等だ。團子が夫で濟んだと思つたら今度は赤手拭と云ふのが評判になつた。何の事だと思つたら、詰らない來歷だ。おれはこゝへ來てから、毎日住田の溫泉へ行く事に極めて居る。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが溫泉丈は立派なものだ。折角來た者だから毎日這入つてやらうと云ふ氣で晩飯前に運動旁出掛ける。所が行く時は必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。此手拭が湯に染まつた上へ、赤い縞が流れ出したので一寸見ると紅色に見える。おれは此手拭を行きも歸りも、汽車に乘つてもあるいても、常にぶら下げて居る。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云ふんださうだ。どうも狹い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。溫泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八錢で濟む。其上女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へ這入つた。すると四十圓の月給で毎日上等へ這入るのは贅澤だと云ひ出した。餘計な御世話だ。まだある。湯壺は花崗石を疊み上げて、十五疊敷位の廣さに仕切つてある。大抵は十三四人漬かつてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の處まであるから、運動の爲に、湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは人の居ないのを見濟ましては十五疊の湯壺を泳ぎ巡つて喜んで居た。所がある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかとざくろ口を覗いて見ると大きな札へ黑々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまり有るまいから、此貼札はおれの爲に特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは斷念した。泳ぐのは斷念したが、學校へ出て見ると、例の通り黑板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚いた。何だか生徒全體がおれ一人を探偵して居る樣に思はれた。くさくさした。生徒が何を云つたつて、やらうと思つ

た事をやめる樣なおれではないが、何でこんな狹苦しい鼻の先がつかへる樣な所へ來たのかと思ふと情なくなつた。それでうちへ歸ると相變らず骨董責めである。

四

學校には宿直があつて、職員が代る〳〵これをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何で此兩人が當然の義務を免れるのかと聞いて見たら奏任待遇だからと云ふ。面白くもない。月給は澤山とる、時間は少い、夫で宿直を逃れるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらへて、それが當り前だと云ふ樣な顏をしてゐる。よくまああんなに圖迂々々しく出來るものだ。これに就いては大分不平であるが、山嵐の說によると、いくら一人で不平を竝べたつて通るものぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさうなものだ。山嵐は might is right といふ英語を引いて說諭を加へたが、何だか要領を得ないから、聞き返して見たら強者の權利と云ふ意味ださうだ。強者の權利位なら昔から知つて居る。今更山嵐から講釋をきかなくつてもいゝ。強者の權利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論として此宿直が愈おれの番に廻つて來た。一體疳性だから夜具蒲團抔は自分のものへ樂に寐ないと寐た樣な心持ちがしない。子供の時から、友達のうちへ泊まつた事は殆どない位だ。友達のうちでさへ厭なら學校の宿直は猶更厭だ。厭だけれども、是が四十圓のうちへ籠つてゐるなら仕方がない。我慢して勤めてやらう。

教師も生徒も歸つて仕舞つたあとで、一人ぽかんとして居るのは隨分間が拔けた者だ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舍の西はづれの一室だ。一寸這入つて見たが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たゝまれない。田舍丈あつて秋がきても、氣長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を濟ましたが、まづいには恐れ入つた。よくあんなものを食つて、あれ丈に暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片附けて仕舞ふんだから豪傑に違ひない。飯は食つたが、まだ日が暮れないから寐る譯に行かない。一寸溫泉に行きたくなつた。宿直をして外へ出るのはいゝ事だか、惡い事だかしらないが、かうつくねんとして重禁錮同樣な憂目に逢ふのは我慢の出來るもんぢやない。始めて學校へ來た時當直の人はと聞いたら、一寸用達に出たと小使が答へたのを妙だと思つたが、自分に番が廻つて見ると思ひ當たる。出る方が正しいのだ。おれは小使に一寸出てくると云つたら、何か御用ですかと聞くから、用ぢやない、溫泉へ這入るんだと答へて、さつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて來たのが殘念だが今日は先方で借りるとしよう。

夫から可也ゆるりと、出たり這入つたりして、漸く日暮方になつたから、汽車へ乘つて古町の停車場迄來て下りた。學校迄は是から四丁だ。譯はないとあるき出すと、向うから狸が來た。狸は是から此汽車で溫泉へ行かうと云ふ計畫なんだらう。すた〳〵急ぎ足にやつてきたが、擦れ違つた時おれの顏を見たから、一寸挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと眞面目くさつて聞いた。無かつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。御苦勞さま。と禮を云つたぢやないか。校長なんかになるといやに曲がりくねつた言葉を使ふもんだ。おれは腹が立つたから、えゝ宿直です、宿直ですから、是から歸つて泊まる事は慥かに泊まりますと云ひ捨てて澄まして步き出した。堅

町の四つ角迄くると今度は山嵐に出喰はした。どうも狹い所だ。出てあるきさへすれば必ず誰かに逢ふ。「おい君は宿直ぢやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答へたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合ぢやないか」と云つた。「些とも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張つて見せた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢ふと面倒だぜ」と山嵐に似合はない事を云ふから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散步でもしないと宿直も骨でせうと校長が、おれの散步をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと學校へ歸つて來た。

夫から日はすぐくれる。暮れてから二時間許りは小使を宿直部屋へ呼んで話しをしたが夫も飽きたから、寐られない迄も床へ這入らうと思つて、寐卷に着換へて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、頓と尻持を突いて仰向けになつた。おれが寐る時に頓と尻持をつくのは子供の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律學校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が辯者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寐る時にどん〳〵音がするのはおれの尻がわるいのぢやない。下宿の建築が粗末なんだ。掛け合ふなら下宿へ掛け合へと凹ましてやつた。此宿直部屋は二階ぢやないから、幾ら、どしんと倒れても構はない。成る可く勢よく倒れないと寐た樣な心持ちがしない。あゝ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか兩足へ飛び附いた。ざら〳〵して蚤の樣でもないからこいつあと驚いて、足を二三度毛布の中で振つて見た。するとざら〳〵と當たつた物が、急に殖え出して脛が五六ケ所、股が二三ケ所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所迄飛び上がつたのが一つ——愈驚いた。早速起き上がつて、毛布をぱつと後へ拋ると、蒲團の中から、バッタが五六十飛び出した。正體の知れない時は多少氣味が惡かつたが、バッタと相場が極まつて見たら急に腹が立つた。バッタの癖に人を驚かしやがつて、どうするか見ろといきなり括り枕を取つて二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目がない。仕方がないから、又蒲團の上へ坐つて、煤掃の時に蓙を丸めて疊を叩く樣に、そこら近邊を無暗にたゝいた。バッタが驚いた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの頭だの鼻の先だのへくつ附いたり、ぶつかつたりする。顏へ附いた奴は枕で叩く譯に行かないから、手で摑んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふはりと動く丈で少しも手答へがない。バッタは擲きつけられた儘蚊帳へつらまつて居る。死にもどうもしない。漸くの事に三十分許りでバッタは退治た。箒を持つて來てバッタの死骸を掃き出した。小使が來て何ですかと云ふから、何ですかもあるもんか、バッタを床の中に飼つとく奴がどこの國にある。間拔め。と叱つたら、私は存じませんと辯解をした。存じませんで濟むかと箒を椽側へ拋り出したら、小使は恐る〳〵箒を擔いで歸つて行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり總代に呼び出した。すると六人出て來た。六人だらうが十人だらうが構ふものか。寐卷の儘腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバッタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バッタた何ぞな」と眞先の一人がいつた。やに落ち附いて居やがる。此學校ぢや校長ばかりぢやない生徒迄曲がりくねつた言葉を使ふんだらう。

「バッタを知らないのか、知らなけりや見せてやらう」と云つたが、生憎掃き出して仕舞つて一匹も居ない。又小使を呼んで、「さつきのバッタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜へ棄てゝしまひましたが、拾つて参りませうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云ふと小使は急いで駆け出したが、やがて半紙の上へ十匹許り載せて来て「どうも御気の毒ですが、生憎夜で是丈しか見当たりません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云ふ。小使迄馬鹿だ。おれはバッタの一つを生徒に見せて「バッタた是だ、大きなづう體をして、バッタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「篦棒め、イナゴもバッタも同じもんだ。第一先生を捕まへてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食ふもんぢやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違ふぞな、もし」と云つた。いつ迄行つてもなもしを使ふ奴だ。

「イナゴでもバッタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつバッタを入れて呉れと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きぢやけれ、大方一人で御這入りたのぢやあろ」

「馬鹿あ云へ。バッタが一人で御這入りになるなんて――バッタに御這入りになられてたまるもんか。――さあなぜこんないたづらをしたか、云へ」

「云へてゝ、入れんものを説明しやうがないがな」

けちな奴等だ、自分のした事が云へない位なら、てんで仕ないがいゝ。証拠さへ挙がらなければ、しらを切る積りで図太く構べて居やがる。おれだつて中学に居た時分は少しはいたづらもしたもんだ。然しだれがしたと聞かれた時に、尻込みをする様な卑怯な事は只の一度もなかつた。仕たものは仕たので、仕ないものは仕ないに極まつてる。おれなんぞはいくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるものか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る。いたづら丈で罰は御免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事は御免だと云ふ連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全體中学校へ何しに這入つてるんだ。学校へ這入つて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせ／＼生意気な悪いたづらをして、さうして、大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癇違ひをして居やがる。話せない雑兵だ。

おれはこんな腐つた了見の奴等と談判するのは胸糞が悪いから、「そんなに云はれなきや、聞かなくつていゝ。中学校へ這入つて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放してやつた。おれは言葉や様子こそ余り上品ぢやないが、心はこいつらよりも遙かに上品な積りだ。六人は悠々と引き揚げた。上部丈は教師のおれより余つ程えらく見える。実は落ち附いて居る丈猶悪い。おれには到底是程の度胸はない。

夫から又床へ這入つて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶん／＼唸つて居る。手燭をつけて一匹宛焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはづして、長く畳んで置いて部屋の中で横竪十文字に振つたら、鐶が飛んで手の甲をいやと云ふ程撲つた。三度目に床へ這入つた時は少々落ち附いたが中々寝られない。時計

を見ると十時半だ。考へて見ると厄介な所へ来たものだ。一體中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。余つ程辛抱強い朴念仁がなるんだらう。おれには到底やり切れない。それを思ふと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊い。今迄はあんなに世話になつて別段難有いとも思はなかつたが、かうして一人で遠国へ来て見ると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食ひたければ、わざわざ越後迄買ひに行つて食はしてやつても、食はせる丈の価値は充分ある。清はおれの事を慾がなくつて、真直な気性だと云つてほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢ひたくなつた。

清の事を考へながら、のつそつして居ると、突然おれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあらうか、二階が落つこちる程どん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の声が起こつた。おれは何事が持ち上がつたのかと驚いて飛び起きた。飛び起きる途端に、はゝあさつきの意趣返しに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪かつたと言つて仕舞はないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚えがあるだらう。本来なら寝てから後悔してあしたの朝でも詫りに来るのが本筋だ。たとひ、あやまらない迄も恐れ入つて、静粛に寝て居るべきだ。それを何だ此騒ぎは。寄宿舎を建てて豚でも飼つて置きやあしまいし。気狂ひじみた真似も大抵にするがいゝ。どうするか見ろと、寝巻の儘宿直部屋を飛び出して、梯子段を三股半に二階迄躍り上がつた。すると不思議な事に、今迄頭の上で、慥かにどたばた暴れて居たのが、急に静まり返つて、人声所か足音もしなくなつた。是は妙だ。ランプは既に消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人気のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れて居ない。廊下のはづれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、己れは子供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云つて、人に笑はれた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくり立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと非常な勢で尋ねた位だ。其時は三日ばかりうち中の笑ひ草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。然し慥かにあばれたに違ひないがと、廊下の真中で考へ込んで居ると、月のさして居る向うのはづれで、「一二三わあ」と、三四十人の声がかたまつて響いたかと思ふ間もなく、前の様に拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。夫見ろ夢ぢやない矢張り事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けん位な声を出して、廊下を向うへ駆けだした。おれの通る路は暗い、只はづれに見える月あかりが目標だ。おれが駆け出して、二間も来たかと思ふと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身體はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつて見たが、駆けられない。気はせくが、足丈は云ふ事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森として居る。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来る者ぢやない。まるで豚だ。からなれば隠れて居る奴を引きずり出してあやまらせてやる迄はひかないぞと、心を極めて寝室の一つを開けて中を検査しようと思つたが、開かない。錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるの

か、押しても押しても、決して開かない。今度は向ふ合せの北側の室を試みた。開かない事は矢つ張り同然である。おれが戸をあけて中に居る奴を引つ捕まへてやらうと焦慮つてると、又東のはづれで鬨の聲と足拍子が始まつた。此野郎申し合せて、東西相應じておれを馬鹿にする氣だな、とは思つたが偖てどうしていゝか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇氣のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていゝか薩張りわからない。わからないけれども、決して負ける積りはない。此儘に濟ましてはおれの顏にかゝはる。江戸つ子は意氣地がないと云はれるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ様がなくつて、仕方がないから泣き寢入りにしたと思はれちや一生の名折れだ。是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の滿仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。只智慧のない所が惜しい丈だ。どうしていゝか分らないのが困る丈だ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていゝか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考へて見ろ。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から辨當を取り寄せて勝つ迄こゝに居る。おれはかう決心をしたから、廊下の眞中にあぐらをかいて夜のあけるのを待つて居た。蚊がぶん〳〵來たけれども何ともなかつた。さつき、ぶつけた向脛を撫でて見ると、何だかぬら〳〵する。血が出るんだらう。血なんか出たければ勝手に出るがいゝ。其うち最前からの疲れが出て、ついうとうと寢て仕舞つた。何だか騒がしいので、眼が覺めた時はえつ糞しまつたと飛び上がつた。おれの坐つてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人おれの前に立つて居る。おれは正氣に返つて、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたらそいつは、どたりと仰向けに倒れた。ざまを見ろ。残る一人が一寸狼狽した所を、飛びかかつて、肩を抑へて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱち〳〵させた。さあおれの部屋へ來いと引つ立てると、弱蟲だと見えて、一も二もなく尾いて來た。夜はとうにあけて居る。

おれが宿直部屋へ連れて來た奴を詰問し始めると、豚は打つても擲いても豚だから、只知らんがなで、どこ迄も通す了見と見えて、決して白状しない。其うち一人來る、二人來る、段々二階から宿直部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠さうに瞼をはらして居る。けちな奴等だ。一晩位寢ないで、そんな面をして、男と云はれるか。面でも洗つて議論に來いと云つてやつたが、誰も面を洗ひに行かない。

おれは五十人餘りを相手に約一時間許り押問答をして居ると、ひよつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が學校に騒動がありますつて、わざ〳〵知らせに行つたのださうだ。是しきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。夫だから中學校の小使なんぞをしてるんだ。

校長は一通りおれの説明を聞いた、生徒の言草も一寸聞いた。追つて處分する迄は、今迄通り學校へ出ろ。早く顏を洗つて、朝飯を食はないと時間に間に合はないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免した。手温い事だ。おれなら即席に寄宿生を悉く退校して仕舞ふ。こんな悠長なことをするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。其上おれに向つて、あなたも嘸御心配で御疲れでせう、今日は御授業に及ばんと云ふから、おれはかう答へた。「いえ、ちつとも心配ぢやありません。こんな事が毎晩あつ

ても命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩位寢なくつて授業が出來ない位なら、頂戴した月給を學校の方へ割戻します」校長は何と思つたものか、暫らくおれの顏を見詰めて居たが、然し顏が大分はれて居ますよと注意した。成程何だか少々重たい氣がする。其上べた一面痒い。蚊が餘つ程刺したに相違ない。おれは顏中ぼり〳〵掻きながら、顏はいくら脹れたつて、口は慥かにきけますから、授業には差し支へませんと答へた。校長は笑ひながら、大分元氣ですねと賞めた。實を云ふと賞めたんぢやあるまい、ひやかしたんだらう。

五

君釣に行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは氣味の惡い様に優しい聲を出す男である。丸で男だか女だか分りやしない。男なら男らしい聲を出すもんだ。ことに大學卒業生ぢやないか。物理學校でさへおれ位な聲が出るのに、文學士がこれぢや見つともない。

おれはさうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣つた事がある。夫から神樂坂の毘沙門の縁日で八寸許りの鯉を針で引つ懸けて、しめたと思つたら、ぽちやりと落として仕舞つたが、是は今考へても惜しいと云つたら、赤シャツは顋を前の方へ突き出してホヽヽヽと笑つた。何もさう氣取つて笑はなくつても、よささうな者だ。「夫ぢや、まだ釣の味は分らんですな。御望みならちと傳授しませう」と頗る得意である。だれが御傳授をうけるものか。一體釣や獵をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ譯がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が樂に極まつてる。釣や獵をしなくつちや活計がたゝないなら格別だが、何不足なく暮らして居る上に、生き物を殺さなくつちや寢られないなんて贅澤な話だ。かう思つたが向うは文學士丈に口が達者だから、議論ぢや叶はないと思つて、だまつてた。すると先生此おれを降參させたと勘違ひして、早速傳授しませう。御ひまなら、今日どうです、一所に行つちや。吉川君と二人ぎりぢや、淋しいから、來給へとしきりに勸める。吉川君と云ふのは畫學の教師で例の野だいこの事だ。此野だは、どういふ了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも隨行して行く。丸で同類ぢやない。主從見た樣だ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極まつて居るんだから、今更驚きもしないが、二人で行けば濟む所を、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだらう。大方高慢ちきな釣道樂で、自分の釣る所をおれに見せびらかす積りかなんかで誘つたに違ひない。そんな事で見せびらかされるおれぢやない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて絲さへ卸しや、何かかゝるだらう、こゝでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌ひだから行かないんぢやないと邪推するに相違ない。おれはかう考へたから、行きませうと答へた。それから、學校を仕舞つて、一應うちへ歸つて、支度を整へて、停車場で赤シャツと野だを待ち合はせて濱へ行つた。船頭は一人で、舟は細長い東京邊では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出來るものか、どうする量見だらうと野だに聞くと、沖釣には竿は用ひません、絲丈でげすと顋を撫でて黒人じみた事を云つた。かう遣り込められる位ならだまつて居れば宜かつた。

船頭はゆつくり／＼漕いでゐるが熟練は恐ろしいもので、見返ると、濱が小さく見える位もう出てゐる。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針の樣に尖がつてる。向う側を見ると青島が浮いてゐる。是は人の住まない島ださうだ。よく見ると石と松ばかりだ。成程石と松ばかりぢや住めつこない。赤シャツは、しきりに眺望していゝ景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてる。絶景だか何だか知らないが、いゝ心持ちには相違ない。ひろ／＼とした海の上で、潮風に吹かれるのは藥だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見給へ、幹が眞直で、上が傘の樣に開いてターナーの畫にありさうだね」と赤シャツが野だに云ふと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそつくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから默つて居た。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。是で海だとは受け取りにくい程平だ。赤シャツの御蔭で甚だ愉快だ。出來る事なら、あの島の上へ上がつて見たいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いて見た。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸ぢやいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは默つてた。すると野だがどうです教頭、是からあの島をターナー島と名づけようぢやありませんかと餘計な發議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々は是からさう云はうと賛成した。此吾々のうちにおれも這入つてるなら迷惑だ。おれには青島で澤山だ。あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちや。いゝ畫が出來ますぜと野だが云ふと、マドンナの話しはよさうぢやないかホヽヽと赤シャツが氣味の惡い笑ひ方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、一寸おれの方を見たが、わざと顏をそむけてにやにやと笑つた。おれは何だかいやな心持ちがした。マドンナだらうが、小旦那だらうが、おれの關係した事でないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんて云ふ樣な風をする。下品な仕草だ。是で當人は私も江戸つ子でげす抔と云つてる。マドンナと云ふのは何でも赤シャツの馴染の藝者の渾名か何かに違ひないと思つた。なじみの藝者を無人島の松の木の下に立たして眺めて居れば世話はない。夫を野だが油繪にでもかいて展覽會へ出したらよからう。

此所らがいゝだらうと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋位だと云ふ。六尋位ぢや鯛は六づかしいなと、赤シャツは絲を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る氣と見える、豪膽なものだ。野だは、なに教頭の御手際ぢやかゝりますよ。それになぎですからと御世辭を云ひながら、是も絲を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘の樣な鉛がぶら下がつてる丈だ。浮がない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかる樣なものだ。おれには到底出來ないと見てゐると、さあ君もやり玉へ絲はありますかと聞く。絲はあまる程あるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出來ないのは素人ですよ。かうしてね、絲が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食ふとすぐ手に答へる。そらきた、と先生急に絲をたぐり始めるから、何がかゝつたかと思つたら何もかからない、餌がなくなつてた許りだ。いゝ氣味だ。教頭、殘念な事をしましたね、今のは慥かに大ものに違ひなかつたんですが、どうも教頭の御手際でさへ逃げられちや、今日は油斷が出來ませんよ。然し逃げられても何ですね。浮と睨めくらをしてゐる連中よりはましですね。丁度齒どめがなくつちや自轉車へ乘れないのと同程度ですからねと、野だは妙な事ばかり喋舌る。よつぽど撲りつけてやらうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海ぢやあるまいし。廣い所だ。鰹の一匹位義理にだつてかゝつて呉れるだらうと、どぼんと錘と絲を抛り込んでいゝ加減に指の先であやつつてゐた。

しばらくすると、何だかピク／＼と絲にあたるものがある。おれは考へた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくちや、かうピクつく譯はない。しめた、釣れたとぐい／＼手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、絲はもう大概手繰り込んで只五尺ばかり程しか、水に浸いて居らん。船縁から覗いて見たら、金魚の樣な縞のある魚が絲にくつついて左右に漂ひ乍ら、手に應じて浮き上がつてくる。面白い。水際から上げるとき、ボチャリと跳ねたから、おれの顏は潮水だらけになつた。漸くつらまへて針をとらうとするが中々取れない。捕まへた手はぬるぬるする。大いに氣味がわるい。面倒だから絲を振つて胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んで仕舞つた。赤シャツと野だは驚いて見てゐる。おれは海の中で手をざぶ／＼と洗つて、鼻の先へあてがつて見た。まだ腥臭い。もう懲り／＼だ、何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られたくなからう。さう／＼絲を捲いて仕舞つた。

一番槍は御手柄だがゴルキぢや、と野だが又生意氣を云ふと、ゴルキと云ふと露西亞の文學者見た樣な名だねと赤シャツが洒落た。さうですね、丸で露西亞の文學者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文學者で、丸木が芝の寫眞師で、米のなる木が命の親だらう。一體此赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まへても片假名の唐人の名を竝べたがる。人には夫々專門があつたものだ。おれの樣な數學の教師にゴルキだか車力だか見當がつくものか、少しは遠慮するがいゝ。云ふならフランクリンの自傳だとかプッシング・ツー・ゼ・フロントだとか、おれでも知つてる名を使ふがいゝ。赤シャツは時々帝國文學とか云ふ眞赤な雜誌を學校へ持つて來て難有さうに讀んでゐる。山嵐に聞いて見たら、赤シャツの片假名はみんなあの雜誌から出るんださうだ。帝國文學も罪な雜誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命に釣つて居たが、約一時間許りのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキ許りだ。鯛なんて藥にしたくてもありやしない。今日は露西亞文學の大當りだと赤シャツが野だに話してゐる。あなたの手腕でゴルキなのは仕方がありません。當り前ですなと野だが答へてゐる。船頭に聞くと此小魚は骨が多くつて、まづくつて、とても食べられないんださうだ。只肥料には出來るさうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣つて居るんだ。氣の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めて居た。釣をするより此方が餘程洒落て居る。

すると二人は小聲で何か話しを始めた。おれにはよく聞こえない、又聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があつて、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに來たら嘸愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ抔と一所ぢや詰まらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持ちはしない。野だの樣なのは、馬車に乘らうが、船に乘らうが、凌雲閣へのらうが、到底寄り附けたものぢやない。おれが教頭で赤

シャツがおれだつたら、矢つ張りおれにへけつけ御世辭を使つて赤シャツを冷かすに違ひない。江戸つ子は輕薄だと云ふが成程こんなものが田舍巡りをして、私は江戸つ子でげすを澡り返して居たら、輕薄は江戸つ子で、江戸つ子は輕薄の事だと田舍者が思ふに極まつてる。こんな事を考へて居ると、何だか二人がくすくす笑ひ出した。笑ひ聲の間に何か云ふが、途切れ途切れで頓と要領を得ない。「え？どうだか——」「——全くです。知らないんですから罪ですね」「まさか……」「バッタを……本當ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バッタと云ふ野だの語を聽いた時は、思はず屹となつた。野だは何の爲かバッタと云ふ言葉丈ことさら力を入れて、明瞭におれの耳に這入る樣にして、其あとをわざとぼかして仕舞つた。おれは動かないで矢張り聞いて居た。

「又例の堀田が……」「さうかも知れない……」

「天麩羅……ハヽヽヽ」「……煽動して……」

「團子も？」

言葉は斯樣に途切れ途切れであるけれども、バッタだの、天麩羅だの、團子だのと云ふ所を以て推し測つて見ると、何でもおれのことに就いて内所話しをして居るに相違ない。話すならもつと大きな聲で話すがいゝ、又内所話しをする位なら、おれなんか誘はなければいゝ。いけ好かない連中だ。バッタだらうが雪踏だらうが、非はおれにある事ぢやない。校長が一先つあづけろと云つたから、狸の顔にめんじて只今の所は控へて居るんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしやぶつて引つ込んでるがいゝ。おれの事は遲かれ早かれ、おれ一人で片附けて見せるから差支へはないが、又例の堀田がとか煽動してとか云ふ文句が氣にかゝる。堀田がおれを煽動して騷動を大きくしたと云ふ意味なのか、或は堀田が生徒を煽動しておれをいぢめたと云ふのか方角がわからない。青空を見て居ると、日の光が段々弱つて來て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香の烟の樣な雲が、透き徹る底の上を靜かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、うすくもやを掛けた樣になつた。

もう歸らうかと赤シャツが思ひ出した樣に云ふと、えゝ丁度時分ですね。今夜はマドンナの君に御逢ひですかと野だが云ふ。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違ひになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エヘヽヽ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿の樣な眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやつた。野だはまぼしさうに引つ繰り返つて、や、こいつは降參だと首を縮めて、頭を掻いた。何といふ猪口才だらう。

船は靜かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、えゝ寐て居て空を見る方がいゝですと答へて、吸ひかけた卷煙草を海の中へたゝき込んだら、ジュと音がして櫂の足で搔き分けられた浪の上を揺られながら漾つていつた。「君が來たんで生徒も大いに喜んで居るから、奮發してやつて呉れ給へ」と今度は釣には丸で縁故もない事を云ひ出した。「あんまり喜んでも居ないでせう」「いえ、御世辭ぢやない。全く喜んで居るんです、ね、吉川君」「喜んでる所ぢやない。大騷ぎです」と野だはにやにやと笑つた。こいつの云ふ事は一々癪に障るから妙だ。「然し君注意しないと、險呑ですよ」と赤シャツが云ふから「どうせ險呑です。かうなりや險呑は覺悟です」と云つてやつた。實際おれは免職になるか、寄宿生を悉くあやまらせるか、どつちか一つにする了見で居た。「さう云つちや、取りつき所もないが——實は僕も教頭として君の爲を思ふから云ふんだから、わるく取つちや困る。教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸つ子だから、成可長く御在校を願つて、御互に力にならうと思つて、是でも蔭ながら盡力して居るんですよ」と野だが人間並の事を云つた。野だの御世話になる位なら首を縊つて死んぢまはあ。

「夫でね、生徒は君の來たのを大變歡迎して居るんだが、そこには色々の事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだらうが、こゝが我慢だと思つて、辛抱してくれ玉へ。決して君の爲にならない樣な事はしないから」

「色々の事情た、どんな事情です」

「夫が少し込み入つてるんだが、まあ段々分りますよ。僕が話さないでも自然と分つて來るです、ね吉川君」

「えゝ中々込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。然し段々分ります、僕が話さないでも自然と分つて來るです」と野だは赤シャツと同じ樣な事を云ふ。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいゝんですが、あなたの方から話し出したから伺ふんです」

「そりや御尤もだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。夫ぢや是丈の事を云つて置きませう。あなたは失禮ながら、まだ學校を卒業したてで、教師は始めての經驗である。所が學校と云ふものは中々情實のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はさう率直だから、まだ經驗に乏しいと云ふんですがね……」

「どうせ經驗には乏しい筈です。履歴書にも書いときましたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思はぬ邊から乘ぜられる事があるんです」

「正直にして居れば誰が乘じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乘ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、氣を附けないといけないと云ふんです」

野だが大人しくなつたなと氣が附いてふり向いて見ると、いつしか艫の方で船頭と釣の話しをして居る。野だが居ないんで餘つ程話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰に乘ぜられたんです」

「だれと指すと、其人の名譽に關係するから云へない。又判然と證據のない事だから云ふと此方の落度になる。とにかく、折角君が來たもんだから、こゝで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない、どうか氣を附けてくれ玉へ」

「氣をつけろつたつて、是より氣の附け樣はありません。わるい事をしなけりや好いんでせう」

赤シャツはホヽヽヽと笑つた。別段おれは笑はれる樣な事を云つた覺えはない。今日只今に至る迄是でいゝと堅く信じて居る。考へて見ると世間の大部分の人はわるくなる事を奬勵して居る樣に思ふ。わるくならなければ社會に成功はしないものと信じて居るらしい。たまに正直な純粹な人を見ると、坊つちやんだの小僧だのと難癖をつけて輕蔑する。夫ぢや小學校や中學校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教へない方がいゝ。いつそ思ひ切つて學校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乘せる策を教授する方が、世の爲にも當人の爲にもなるだらう。赤シャツがホヽヽヽと笑つたのは、おれの單純なのを笑つたのだ。單純や眞率が笑はれる世の中ぢや仕樣がない。淸はこんな時に決して笑つた事はない。大いに感心し

て聞いたもんだ。清の方が赤シャツより餘つ程上等だ。

「無論惡い事をしなければ好いんですが、自分丈惡い事をしなくつても、人の惡いのが分らなくつちや、矢つ張りひどい目に逢ふでせう。世の中には磊落な様に見えても、淡泊な様に見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、油斷の出來ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、濱の方は靄でセピヤ色になつた。いゝ景色だ。おい、吉川君どうだい、あの濱の景色は……」と大きな聲を出して野だを呼んだ。「なあるほどこりや奇絕ですね。時間があると寫生するんだが、惜しいですね、此儘にしておくのは」と野だは大いにたゝく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がピューと鳴るとき、おれの乘つて居た舟は磯の砂へざぐりと、舳をつき込んで動かなくなつた。御早う御歸りと、かみさんが、濱に立つて赤シャツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛聲をして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌ひだ。こんな奴は澤庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の爲だ。赤シャツは聲が氣に食はない。あれは持前の聲をわざと氣取つてあんな優しい様に見せてるんだらう。いくら氣取つたつて、あの面ぢや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナ位なものだ。然し教頭丈に野だより六づかしい事を云ふ。うちへ歸つて、彼奴の申し條を考へて見ると一應尤もの様でもある。判然とした事は云はないから、見當がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云ふのらしい。それならさうと確乎斷言するがいゝ、男らしくもない。さうして、そんな惡い教師なら、早く免職さしたらよからう。教頭なんて文學士の癖に意氣地のないもんだ。蔭口をきくのでさへ、公然と名前が云へない位な男だから、弱蟲に極まつてる。弱蟲は親切なものだから、あの赤シャツも女の様な親切ものなんだらう。親切は親切、聲は聲だから、聲が氣に入らないつて、親切を無にしちや筋が違ふ。夫にしても世の中は不思議なものだ、蟲の好かない奴が親切で、氣の合つた友達が惡漢だなんて、人を馬鹿にして居る。大方田舍だから萬事東京のさかに行くんだらう。物騒な所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐になるかも知れない。然し、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたづらをしさうもないがな。一番人望のある教師だと云ふから、やらうと思つたら大抵の事は出來るかも知れないが、――第一そんな廻りくどい事をしないでも、ぢかにおれを捕まへて喧嘩を吹き懸けりや手數が省ける譯だ。おれが邪魔になるなら、實は是々だ、邪魔だから辭職してくれと云や、よささうなもんだ。物は相談づくでどうでもなる。向うの云ひ條が尤もなら、明日にでも辭職してやる。こゝ許り米が出來る譯でもあるまい。どこの果へ行つたつて、のたれ死はしない積りだ。山嵐も餘つ程話せない奴だな。

こゝへ來た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顏に關はる。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか拂はしちやない。然し一錢だらうが五厘だらうが、詐欺師の恩になつては、死ぬ迄心持ちがよくない。あした學校へ行つたら、一錢五厘返して置かう。おれは清から三圓借りて居る。其三圓は五年經つた今日迄まだ返さない。返せないんぢやない、返さないんだ。清は今に返すだらう抔と、苟めにもおれの懷中をあてにはして居ない。おれも今に返さう抔と他人がましい義理立てはしない積りだ。こつちがこんな心配をすれ

ばする程清の心を疑ぐる様なもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのぢやない、清をおれの片破れと思ふからだ。清と山嵐とは固より比べ物にならないが、たとひ氷水だらうが、甘茶だらうが、他人から恵を受けて、だまつて居るのは向うを一角の人間と見立てて、其人間に對する厚意の所作だ。割前を出せば夫丈の事で濟む所を、心のうちで難有いと恩に着るのは錢金で買へる返禮ぢやない。無位無官でも一人前の獨立した人間だ。獨立した人間が頭を下げるのは百萬兩より尊い御禮と思はなければならない。

おれは是でも山嵐に一錢五厘奮發させて、百萬兩より尊い返禮をした氣で居る。山嵐は難有いと思つて然るべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一錢五厘返して仕舞へば借も貸もない。さうして置いて喧嘩をしてやらう。

おれはこゝ迄考へたら、眠くなつたからぐうぐう寐て仕舞つた。あくる日は思ふ仔細があるから、例刻より早目に出校して山嵐を待ち受けた。所が中々出て來ない。うらなりが出て來る。漢學の先生が出て來る。野だが出て來る。仕舞ひには赤シャツ迄出て來たが山嵐の机の上は白墨が一本竪に寐て居る丈で閑靜なものだ。おれは、控所へ這入るや否や返さうと思つて、うちを出る時から、湯錢の様に手の平へ入れて一錢五厘、學校迄握つて來た。おれは膏つ手だから、開けて見ると一錢五厘が汗をかいて居る。汗をかいてる錢を返しちや山嵐が何とか云ふだらうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いて又握つた。所へ赤シャツが來て昨日は失敬、迷惑でしたらうと云つたから、迷惑ぢやありません、御蔭で腹が減りましたと答へた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤臺面をおれの鼻の側面へ持つて來たから、何をするかと思つたら、君昨日歸りがけに船の中で話した事は、祕密にしてくれ玉へ。まだ誰にも話しやしますまいねと云つた。女の様な聲を出す丈に心配性な男と見える。話さない事は慥かである。然し是から話さうと云ふ心持ちで、既に一錢五厘手の平に用意して居る位だから、こゝで赤シャツから口留めをされちや、些と困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれ程推察の出來る謎をかけて置きながら、今更其謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思へぬ無責任だ。元來ならおれが山嵐と戰爭をはじめて鎬を削つてる眞中へ出て堂々とおれの肩を持つべきだ。夫でこそ一校の教頭で、赤シャツを着て居る主意も立つと云ふもんだ。

おれは教頭に向つて、まだ誰にも話さないが、是から山嵐と談判する積りだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽して、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事に就いて、別段君に何も明言した覺えはないんだから――君がもし茲で亂暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は學校に騷動を起こす積りで來たんぢやなからうと妙に常識をはづれた質問をするから、當り前です、月給をもらつたり、騷動を起こしたりしちや、學校の方でも困るでせうと云つた。すると赤シャツはそれぢや昨日の事は君の參考丈にとめて、口外してくれるなと汗をかいて依賴に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしませうと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこ迄女らしいんだか奧行がわからない。文學士なんて、みんなあんな連中なら詰まらんものだ。辻褄の合はない、論理に缺けた注文をして恬然として居る。然も此おれを疑ぐつてる。憚りながら男だ。受け合つた事を翻

へ廻つて反古にする樣なさもしい了見は持つてるもんか。

所へ兩隣の机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩き方から氣取つてる。部屋の中を往來するのでも、音を立てない樣に靴の底をそつと落とす。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、此時から始めて知つた。泥棒の稽古ぢやあるまいし、當り前にするがいゝ。やがて始業の喇叭がなつた。山嵐はとう〳〵出て來ない。仕方がないから、一錢五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ歸つたら、ほかの教師はみんな机を控へて話しをして居る。山嵐もいつの間にか來て居る。缺勤だと思つたら遲刻したんだ。おれの顏を見るや否や今日は君の御蔭で遲刻したんだ。罰金を出し玉へと云つた。おれは机の上にあつた一錢五厘を出して、是をやるから取つて置け。先達て通町で飮んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑ひかけたが、おれが存外眞面目で居るので、詰まらない冗談をするなと錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこ迄も奢る氣だな。

「冗談ぢやない本當だ。おれは君に氷水を奢られる因緣がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が氣になるなら取つてもいいが、なぜ思ひ出した樣に、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのがいやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顏を見てふんと云つた。赤シャツの依賴がなければ、こゝで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに眞赤になつてるのにふんと云ふ理窟があるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出て呉れ」

「一錢五厘受け取れば夫でいゝ。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「所が勝手でない、昨日、あすこの亭主が來て君に出て貰ひたいと云ふから、其譯を聞いたら亭主の云ふのは尤もだ。夫でももう一應慥かめる積りで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云ふ事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもんか。さう自分丈で極めたつて仕樣があるか。譯があるなら譯を話すが順だ。てんから亭主の云ふ方が尤もだなんて失敬千萬な事を云ふな」

「うん、そんなら云つてやらう。君は亂暴であの下宿で持て餘されて居るんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ふぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうだか知らないが、兎に角向うぢや、君に困つてるんだ。下宿料の十圓や十五圓は懸物を一幅賣りや、すぐ浮いてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郞だ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置く事は置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云ふんだらう。君出てやれ」

「當り前だ。居てくれと手を合はせたつて、居るものか。一體そんな云ひ懸りを云ふ樣な所へ周旋する君からしてが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どつちかだらう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌ひな大きな聲を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顋を長くしてぼんやりして居る。おれは、別に恥づかしい事をした覺えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡してやつた。みんなが驚いてるなかに野だ丈は面白さうに笑つて居た。おれの大きな眼が、貴樣も喧嘩をする積りかと云ふ權幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然眞面目な顏をして、大いにつゝしんだ。少し怖かつたと見える。其うち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに對して無禮を働いた寄宿生の處分法に就いての會議だ。會議と云ふものは生れて始めてだから頓と容子が分らないが、職員が寄つてたかつて自分勝手な說をたてて、夫を校長が好い加減に纏めるのだらう、纏めると云ふのは黑白の決しかねる事柄に就いて云ふべき言葉だ。この場合の樣な、誰が見たつて不都合としか思はれない事件に會議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釋したつて異說の出よう筈がない。こんな明白なのは即座に校長が處分して仕舞へばいゝに。隨分決斷のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚圖の異名だ。

會議室は校長室の隣にある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黑い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周圍に並んで一寸神田の西洋料理屋位な格だ。其テーブルの端に校長が坐つて、隣に赤シャツが構へる。あとは勝手次第に席に着くんださうだが、體操の教師丈はいつも席末に謙遜すると云ふ話だ。おれは樣子が分らないから、博物の教師と漢學の教師の間へ這入り込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顏はどう考へても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやぢの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかゝつて居た懸物は此顏によく似て居る。坊主に聞いて見たら韋駄天と云ふ怪物ださうだ。今日は怒つてるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされて堪るもんかと、おれも負けない氣で、矢つ張り眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやつた。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事に於ては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になると屹度似合ひますと清がよく云つた位だ。

もう大抵御揃ひでせうかと校長が云ふと、書記の川村と云ふのが一つ二つと頭數を勘定して見る。一人足りない。一人不足ですがと考へてゐたが、是は足りない筈だ。唐茄子のうらなり君が來て居ない。おれとうらなり君とはどう云ふ宿世の因緣かしらないが、此人の顏を見て以來どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼につく、途中をあるいて居ても、うらなり先生の樣子が心に浮ぶ。溫泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顏をして湯壺のなかに膨れて居る。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから氣の毒になる。學校へ出てうらなり君程大人しい人は居ない。滅多に笑つた事もないが、餘計な口をきいた事もない。おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知つて居るが、是は字引にある許りで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢つ張り正體のある文字だと感心した位だ。

此位關係の深い人の事だから、會議室へ這入るや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ氣がついた。實を云ふと、此男の次へでも坐らうかと、ひそかに目標にして來た位だ。校長はもうやがて見えるでせうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版の樣な物を

讀んで居る。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。此男は是が道樂である。赤シャツ相當の所だらう。ほかの連中は隣同志で何だか私語き合つて居る。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いて居る、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いて居る。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向應じない。只うんとかあゝと云ふばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

所へ待ちかねた、うらなり君が氣の毒さうに這入つて來て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では會議を開きますと狸は先づ書記川村に蒟蒻版を配附させる。見ると最初が處分の件、次が生徒取締の件、其他二三ケ條である。狸は例の通り勿體ぶつて、教育の生靈と云ふ見えでこんな意味の事を述べた。「學校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡德の致す所で、何か事件がある度に、自分はよく是で校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪へんが、不幸にして今回も亦かゝる騷動を引き起こしたのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。然し一たび起こつた以上は仕方がない、どうにか處分をせんければならん、事實は既に諸君の御承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を參考の爲に御述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、成程校長だの狸だのと云ふものはえらい事を云ふもんだと感心した。かう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不德だとか云ふ位なら、生徒を處分するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたらよささうなもんだ。さうすればこんな面倒な會議なんぞを開く必要もなくなる譯だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が亂暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない。生徒丈に極まつてる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治れば、夫で澤山だ。人の尻を自分で背負ひ込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの國にあるもんか、狸でなくつちや出來る藝當ぢやない。彼はこんな條理に適はない議論を吐いて、得意氣に一同を見廻した。所が誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に烏がとまつてるのを眺めて居る。漢學の先生は蒟蒻版を疊んだり、延ばしたりしてる。山嵐はまだおれの顏をにらめて居る。會議と云ふものがこんな馬鹿氣たものなら、缺席して晝寢でもして居る方がましだ。

おれは、じれつたく成つたから、一番大いに辯じてやらうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云ひ出したから、やめにした。見るとパイプを仕舞つて、縞のある絹ハンケチで顏をふきながら、何か云つて居る。あの手巾は屹度マドンナから巻き上げたに相違ない。男は白い麻を使ふもんだ。「私も寄宿生の亂暴を聞いて甚だ教頭として不行屆であり、且平常の德化が少年に及ばなかつたのを深く慚づるのであります。でかう云ふ事は、何か缺陷があると起こるので、事件其物を見ると何だか生徒丈がわるい樣であるが、其眞相を極めると責任は卻て學校にあるかも知れない。だから表面上に現はれた所丈で嚴重な制裁を加へるのは、卻て未來の爲によくないかとも思はれます。且少年血氣のものであるから活氣があふれて、善惡の考へはなく、半ば無意識にこんな惡戲をやる事はないとも限らん。で固より處分法は校長の御考へにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうか其邊を御斟酌になつて、なるべく寛大な御取計ひを願ひたいと思ひます」

成程狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生

徒があばれるのは、生徒がわるいんぢやない教師が惡いんだと公言して居る。氣狂が人の頭を撲り附けるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂がなぐるんださうだ。難有い仕合せだ。活氣にみちて困るなら運動場へ出て相撲でも取るがいゝ、半ば無意識に床の中へバッタを入れられて堪るもんか。此樣子ぢや寢頸をかゝれても、半ば無意識だつて放免する積りだらう。

おれはかう考へて何か云はうかなと考へて見たが、云ふなら人を驚かす樣に滔々と述べたてなくつちや詰まらない、おれの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞まつて仕舞ふ。狸でも赤シャツでも人物から云ふと、おれよりも下等だが、辯舌は中々達者だから、まづい事を喋舌つて揚足を取られちや面白くない。一寸腹案を作つて見ようと、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚いた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「實に今回のバッタ事件及び吶喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校將來の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものは此際奮つて自ら省みて、全校の風紀を振肅しなければなりません。それで只今校長及び教頭の御述べになつた御説は、實に肯綮に中つた剴切な御考へで私は徹頭徹尾贊成致します。どうか成るべく寛大の御處分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云ふ事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで譯が分らない。分つたのは徹頭徹尾贊成致しますと云ふ言葉だけだ。

おれは野だの云ふ意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出來ないうちに起ち上がつて仕舞つた。「私は徹頭徹尾反對です……」と云つたがあとが急に出て來ない。「……そんな頓珍漢な處分は大嫌ひです」とつけたら、職員が一同笑ひ出した。「一體生徒が全然惡いです。どうしても詫らせなくつちやあ、癖になります。退校さしても構ひません。……何だ失敬な、新しく來た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣に居る博物が「生徒がわるい事もわるいが、あまり嚴重な罰抔をすると卻て反動を起こしていけないでせう。矢つ張り教頭の仰しやる通り、寛大な方に贊成します」と弱い事を云つた。左隣の漢學は穩便説に贊成と云つた。歴史も教頭と同説と云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ黨だ。こんな連中が寄り合つて學校を立てて居りや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辭職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覺悟でゐた。どうせ、こんな手合を辯口で屈伏させる手際はなし、させた所でいつ迄御交際を願ふのは、此方で御免だ。學校に居ないとすればどうなつたつて構ふもんか。また何か云ふと笑ふに違ひない。だれが云ふもんかと澄まして居た。

すると今迄默つて聞いて居た山嵐が奮然として起ち上がつた。野郎又赤シャツ贊成の意を表するな、どうせ、貴樣とは喧嘩だ、勝手にしろと見てゐると山嵐は硝子窓を振はせる樣な聲で「私は教頭及び其他諸君の御説には全然不同意であります。と云ふものは此事件はどの點から見ても五十名の寄宿生が新來の教師某氏を輕侮して之を翻弄しようとした所爲とより外には認められんのであります。教頭は其原因を教師の人物如何に御求めになる樣でありますが失禮ながら夫は失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、未だ生徒に接せられてから二十日に滿たぬ頃であります。此の短かい二十日間に於て生徒は君の學問人物を

[illegible]價し得る餘地がないのであります。侮辱されべき至當な理由があつて、輕侮を受けたのなら生徒の行爲に斟酌を加へる理由もありませうが、何等の原因もないのに新來の先生を愚弄する樣な輕薄な生徒を寛假しては學校の威信に關はる事と思ひます。教育の精神は單に學問を授ける許りではない、高尚な、正直な、武士的な元氣を鼓吹すると同時に、野卑な、輕躁な、暴慢な惡風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐ろしいの、騷動が大きくなるのと姑息な事を云つた日には此弊風はいつ矯正出來るか知れません。かゝる弊風を杜絶する爲にこそ吾々は此學校に職を奉じて居るので、之を見逃す位なら始めから教師にならん方がいゝと思ひます。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰に處する上に、當該教師の面前に於て公に謝罪の意を表せしむるのを至當の所置と心得ます」と云ひながら、どんと腰を卸した。一同はだまつて何も言はない。赤シャツは又パイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかつた。おれの云はうと思ふ所をおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれた樣なものだ。おれはかう云ふ單純な人間だから、今迄の喧嘩は丸で忘れて、大いに難有いと云ふ顏を以て、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしてゐる。

しばらくして山嵐は又起立した。「只今一寸失念して言ひ落しましたから、申します。當夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれた樣であるが、あれは以ての外の事と考へます。苟も自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを幸ひに、場所もあらうに温泉抔へ入湯に行く抔と云ふのは大きな失體である。生徒は生徒として、此點に就いては校長からとくに責任者に御注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいて居る。おれは何の氣もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉迄行つて仕舞つたんだが、成程さう云はれて見ると、これはおれが惡かつた。攻撃されても仕方がない。そこでおれは又起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。是は全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同が又笑ひ出した。おれが何か云ひさへすれば笑ふ。つまらん奴等だ。貴樣等は是程自分のわるい事を公にわるかつたと斷言出來るか、出來ないから笑ふんだらう。

夫から校長は、もう大抵御意見もない樣でありますから、よく考へた上で處分しませうと云つた。序だから其結果を云ふと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければ其時辭職して歸る所だつたがなまじひ、おれの云ふ通りになつたのでとう／＼大變な事になつて仕舞つた。夫はあとから話すが、校長は此時會議の引き續きだと號してこんな事を云つた。生徒の風儀は、教師の感化で正していかなくてはならん、其一着手として、教師は可成飲食店抔に出入しない事にしたい。尤も送別會抔の節は特別であるが、單獨にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとへば蕎麥屋だの、團子屋だの——と云ひかけたら又一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合はなかつた。いゝ氣味だ。

おれは腦がわるいから、狸の云ふことなんかよく分らないが、蕎麥屋や團子屋へ行つて、中學の教師が勤まらなくつちや、おれ見た樣な食ひ心棒にや到底出來つ子ないと思つた。それなら、夫でいゝから、初手から蕎麥と團子の嫌ひなものと注文して雇ふがいゝ。だんまりで辭令を下げて置いて、蕎麥を食ふな、團子を食ふな

と罪な御布令を出すのは、おれの樣な外に道樂のないものに取つては大變な打撃だ。すると赤シャツが又口を出した。「元來中學の教師なぞは社會の上流に位するものだからして、單に物質的の快樂ばかり求める可きものでない。其方に耽るとつい品性にわるい影響を及ぼす樣になる。然し人間だから、何か娯樂がないと、田舍へ來て狹い土地では到底暮らせるものでない。其で釣に行くとか、文學書を讀むとか、又は新體詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娯樂を求めなくつてはいけない——」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルキが露西亞の文學者だつたり、馴染の藝者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯樂なら、天麩羅を食つて團子を吞み込むのも精神的娯樂だ。そんな下さらない娯樂を授けるより赤シャツの洗濯でもするがいゝ。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢ふのも精神的娯樂ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑はない。妙な顏をして互に眼と眼を見合はせてゐる。赤シャツ自身は苦しさうに下を向いた。夫見ろ。利いたらう。只氣の毒だつたのはうらなり君で、おれがかう云つたら蒼い顏を益蒼くした。

七

おれは卽夜下宿を引き拂つた。宿へ歸つて荷物をまとめて居ると、女房が何か不都合でも御座いましたか、御腹の立つ事があるなら、云つて御呉れたら改めますと云ふ。どうも驚く。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてるんだらう。出て貰ひたいんだか居て貰ひたいんだか分りやしない。丸で氣狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたつて江戸つ子の名折れだから、車屋をつれて來てさつさと出て來た。

出た事は出たが、どこへ行くといふあてもない。車屋がどちらへ參りますと云ふから、だまつて尾いて來い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて來た。面倒だから山城屋へ行かうかとも考へたが、又出なければならないから、つまり手數だ。かうして歩行いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目附け出すだらう。さうしたら、そこが天意に叶つたわが宿と云ふ事にしよう。とぐる／＼、閑靜で住みよささうな所をあるいてるうち、とう／＼鍛冶屋町へ出て仕舞つた。こゝは士族屋敷で下宿屋抔のある町でないから、もつと賑やかな方へ引き返さうかとも思つたが、不圖いゝ事を考へ附いた。おれが敬愛するうらなり君は此町内に住んで居る。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控へてゐるから、此邊の事情には通じて居るに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よささうな下宿を教へてくれるかも知れない。幸ひ一度挨拶に來て勝手は知つてるから、搜してあるく面倒はない。こゝだらうと、いゝ加減に見當をつけて、御免／＼と二返許り云ふと、奥から五十位な年寄が古風な紙燭をつけて、出て來た。おれは若い女も嫌ひではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方淸がすきだから、其魂が方々の御婆さんに乘り移るんだらう。是は大方うらなり君の御母さんだらう、切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似て居る。まあ御上がりと云ふ所を、一寸御目にかゝりたいからと、主人を玄關迄呼び出して實は是々だが君どこか心當りはありませんか、と尋ねて見た。うらなり先生夫は嘸御困りで御座いませう、としばらく考へて居たが、此裏町に萩野と云つて老人夫婦ぎりで暮らして居るものがある、いつぞや座敷を明けて置いても無駄だから、慥かな人があるなら貸してもい

いから周旋してくれと賴んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあ一所に行つて聞いて見ませうと、親切に連れて行つてくれた。

　其夜から萩野の下宿人となつた。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き拂ふと翌日から入れ違ひに野だが平氣な顏をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれも是にはあきれた。世の中はいかさま師計りで、御互に乘せつこをして居るのかも知れない。いやになつた。

　世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並にしなくちや遣り切れない譯になる。巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事が極まればかうして、生きてるのも考へ物だ。と云つてぴん／＼した達者なからだで、首を縊つちや先祖へ濟まない上に、外聞が惡い。考へると物理學校抔へ這入つて、數學なんて役にも立たない藝を覺えるよりも、六百圓を資本にして牛乳屋でも始めればよかつた。さうすれば淸もおれの傍を離れずに濟むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮らされる。一所に居るうちは、さうでもなかつたが、かうして田舍へ來て見ると淸は矢つ張り善人だ。あんな氣立のいゝ女は日本中さがして歩行いたつて滅多にはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いて居たが今頃はどうしてるか知らん。先達ての手紙を見たら嘸喜んだらう。それにしても、もう返事がきさうなものだが——おれはこんな事計り考へて二三日暮らして居た。氣になるから、宿の御婆さんに、東京から手紙は來ませんかと時々尋ねて見るが、聞くたんびに何も參りませんと氣の毒さうな顏をする。こゝの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、變な聲を出して謠をうたふには閉口するが、いか銀の樣に御茶を入れませうと無暗に出て來ないから大きに樂だ。御婆さんは時々部屋へ來て色々な話しをする。どうして奥さんをお連れなさつて、一所に御出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがある樣に見えますかね。可哀相に是でもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんが御有りなさるのは當り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十で御嫁を御貰ひたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人御持ちたのと、何でも例を半ダース許り擧げて反駁を試みたには恐れ入つた。それぢや僕も二十四で御嫁を御貰ひるけれ、世話をして御呉れんかなと田舍言葉を眞似て賴んで見たら、御婆さん正直に本當かなもしと聞いた。

「本當の本當のつて僕あ、嫁が貰ひ度くつて仕方がないんだ」

「左樣ぢやらうがな、もし。若いうちは誰もそんなものぢやけれ」此挨拶には痛み入つて返事が出來なかつた。

「然し先生はもう、御嫁が御有りなさるに極まつとらい。私はちやんと、もう、睨らんどるぞなもし」

「へえ、活眼だね。どうして、睨らんどるんですか」

「何故してゝ。東京から便りはないか、便りはないかてゝ、毎日便りを待ち焦がれて御いでるぢやないかなもし」

「こいつあ驚いた。大變な活眼だ」

「中りましたらうがなもし」

「さうですね。中つたかも知れませんよ」

「然し今時の女子は、昔と違うて油斷が出來んけれ、御氣を御附けたがえゝぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらへて居りますかい」

「いゝえ、あなたの奥さんは慥かぢやけれど……」

「それで、漸と安心した。夫ぢや何を氣を附けるんですい」

「あなたのは慥か——あなたのは慥かぢやが——」

「何處に不慥かのが居ますかね」

「こゝ等にも大分居ります。先生、あの遠山の御孃さんを御存知かなもし」

「いゝえ、知りませんね」

「まだ御存知ないかなもし。こゝらであなた一番の別嬪さんぢやがなもし。あまり別嬪さんぢやけれ、學校の先生方はみんなマドンナ／＼と言ふといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ藝者の名かと思つた」

「いゝえ、あなた。マドンナと云ふと唐人の言葉で別嬪さんの事ぢやらうがなもし」

「さうかも知れないね。驚いた」

「大方畫學の先生が御附けた名ぞなもし」

「野だが附けたんですかい」

「いゝえ、あの吉川先生が御附けたのぢやがなもし」

「其マドンナが不慥かなんですかい」

「其マドンナさんが不慥かなマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の附いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。さうかも知れませんよ」

「ほん當にさうぢやなもし。鬼神のお松ぢやの、妲妃のお百ぢやのてゝ怖い女が居りましたなもし」

「マドンナも其同類なんですかね」

「其マドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたを此所へ世話をして御呉れた古賀先生なもし——あの方の所へ御嫁に行く約束が出來て居たのぢやがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思はなかつた。人は見懸けによらない者だな。ちつと氣を附けよう」

「所が、去年あすこの御父さんが御亡くなりて、——夫迄は御金もあるし、銀行の株も持つて御出でるし、萬事都合がよかつたのぢやが——夫からと云ふものは、どう云ふものか急に暮し向きが思はしくなくつて——詰り古賀さんがあまり御人が好過ぎるけれ、御欺されたんぞなもし。それやこれやで御輿入も延びて居る所へ、あの教頭さんが御出でゝ、是非御嫁にほしいと御云ひるのぢやがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシャツは只のシャツぢやないと思つてた。それから?」

「人を賴んで掛け合うてお見ると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出來かねて——まあよう考へて見よう位の挨拶を御したのぢやがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしる樣になつて、どう／＼あなた、御孃さんを手馴附けてお仕舞ひたのぢやがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんぢやが、御孃さんも御孃さんぢやてゝ、みんなが惡く云ひますのよ。一旦古賀さんへ嫁に行くてゝ承知をしときながら、今更學士さんが御出でたけれ、其方に替へよてゝ、それぢや今日樣へ濟むまいがなもし、あなた」

「全く濟まないね。今日樣所か明日樣にも、明後日樣にも、いつ迄行つたつて濟みつこありませんね」

「夫で古賀さんに御氣の毒ぢやてゝ、御友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしに御行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りする積りはない。破約になれば貰ふかも知れ

んが、今の所は遠山家と只交際をして居る計りぢや、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうと御云ひるけれ、堀田さんも仕方がなしに御戻りたさうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以來折合がわるいと云ふ評判ぞなもし」

「よく色々な事を知つてますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狹いけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困る位だ。此容子ぢやおれの天麩羅や團子の事も知つてるかも知れない。厄介な所だ。然し御蔭樣でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの關係もわかるし大いに後學になつた。只困るのはどつちが惡者だか判然しない。おれの樣な單純なものには白とか黒とか片づけて貰はないと、どつちへ味方をしていゝか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どつちがいゝ人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐と云ふのは堀田の事ですよ」

「そりや强い事は堀田さんの方が强さうぢやけれど、然し赤シャツさんは學士さんぢやけれ働きはある方ぞなもし。夫から優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえゝといふぞなもし」

「つまり何方がいゝんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」

是ぢや聞いたつて仕方がないから、やめにした。夫から二三日して學校から歸ると御婆さんがにこ〳〵して、へえ御待遠さま。やつと參りました。と一本の手紙を持つて來てゆつくり御覽と云つて出て行つた。取り上げて見ると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるからよく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて來たのである。其上山城屋では一週間許り逗留して居る。宿屋丈に手紙迄泊める積りなんだらう。開いて見ると、非常に長いもんだ。坊つちやんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかかうと思つたが、生憎風邪を引いて一週間許り寐て居たものだから、つい遲くなつて済まない。其上今時の御孃さんの樣に讀み書きが達者でないものだから、こんなまづい字でも、かくのに餘つ程骨が折れる。甥に代筆を頼まうと思つたが、折角あげるのに自分でかかなくつちや、坊つちやんに済まないと思つてわざ〳〵下がきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下書きをするには四日かゝつた。讀みにくいかも知れないが、是でも一生懸命にかいたのだから、どうぞ仕舞ひ迄讀んでくれ。と云ふ冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。成程讀みにくい。字がまづい計りではない、大抵平假名だから、どこで切れてどこで始まるのだか句讀をつけるのに餘つ程骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は五圓やるから讀んでくれと頼まれても斷るのだが、此時ばかりは眞面目になつて、始めから終ひ迄讀み通した。讀み通した事は事實だが、讀む方に骨が折れて、意味がつながらないから又頭から讀み直して見た。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくくなつたから、とう〳〵椽鼻へ出て腰をかけながら丁寧に拜見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた歸りに、讀みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、仕舞ひぎはには四尺あまりの半切れがさらり〳〵と鳴つて、手を放すと、向うの生垣迄飛んで行きさうだ。おれはそんな事に構つて居られない。坊つちやんは竹を割つた樣な氣性だが、只肝癪が强過ぎてそ

れが心配になる。――ほかの人に無暗に渾名なんかつけるのは人に恨まれるもとになるから、矢鱈に使つちやいけない、もしつけたら、清丈に手紙で知らせろ。――田舍者は人がわるいさうだから、氣をつけて苛い目に遭はない樣にしろ。――氣候だつて東京より不順に極まつてるから、寐冷をして風邪を引いてはいけない。坊つちやんの手紙はあまり短か過ぎて、容子がよくわからないから、此次には責めて此手紙の半分位の長さのを書いてくれ。――宿屋へ茶代を五圓やるのはいゝが、あとで困りやしないか、田舍へ行つて賴りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、萬一の時に差支へない樣にしなくつちやいけない。――御小遣ひがなくて困るかも知れないから爲替で十圓あげる。――先達て坊つちやんからもらつた五十圓を、坊つちやんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けて置いたが、此十圓を引いてもまだ四十圓あるから大丈夫だ。――成程女と云ふものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考へ込んで居ると、しきりの襖をあけて、萩野の御婆さんが晩めしを持つてきた。まだ見て御出でるのかなもし。えつぽど長い御手紙ぢやなもし、と云つたから、えゝ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煑つけだ。こゝのうちは、いか銀よりも丁寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食ひ物がまづい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、から立てつゞけに芋を食はされては命がつゞかない。うらなり君を笑ふ所か、おれ自身が遠からぬうちに芋のうらなり先生になつちまふ。清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ燒を食はせるんだが、貧乏士族のけちん坊と來ちや仕方がない。どう考へても清と一所でなくつちあ駄目だ。もしあの學校に長くでも居る模樣なら、東京から召び呼せてやらう。天麩羅蕎麥を食つちやならない、團子を食つちやならない、夫で下宿に居て芋計り食つて黄色くなつて居ろなんて教育者はつらいものだ。禪宗坊主だつて、是よりは口に榮耀をさせて居るだらう。――おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗から生卵を二つ出して、茶碗の緣でたゝき割つて、漸く凌いだ。生卵ででも榮養をとらなくつちや一週二十一時間の授業が出來るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遲くなつた。然し毎日行きつけたのを一日でも缺かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乘つて出懸けようと、例の赤手拭をぶら下げて停車場迄來ると二三分前に發車した許りで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島を吹かして居ると、偶然にもうらなり君がやつて來た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君が猶更氣の毒になつた。平常から天地の間に居候をして居る樣に、小さく構へてゐるのが如何にも憐れに見えたが、今夜は憐れ所の騷ぎではない。出來るならば月給を倍にして、遠山の御孃さんと明日から結婚さして、一ケ月許り東京へでも遊びにやつて遣りたい氣がした矢先だから、や御湯ですか、さあ、こつちへ御懸けなさいと威勢よく席を讓ると、うらなり君は恐れ入つた體裁で、いえ構うておくれなさるな、と遠慮だか何だか矢つ張り立つてる。少し待たなくつちや出ません、草臥れますから御懸けなさいと又勸めて見た。實はどうかして、そばへ懸けて貰ひたかつた位に氣の毒で堪らない。それでは御邪魔を致しませうと漸くおれの云ふ事を聞いて呉れた。世の中には野だ見た樣に生意氣な、出ないで濟む所へ必ず顏を出す奴も居る。山

嵐の様におれが居なくつちや日本が困るだらうと云ふ様な面を肩の上へ載せてる奴もゐる。さうかと思ふと、赤シャツの様にコスメチックと色男の問屋を以て自ら任じてゐるのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云はぬ許りの狸もゐる。皆々夫相應に威張つてゐるんだが、このうらなり先生の様に在れどもなきが如く、人質に取られた人形の様に大人しくしてゐるのは見た事がない。顔はふくれて居るが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡くなんて、マドンナも餘つ程氣の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これ程立派な旦那様が出來るもんか。

「あなた何所か悪いんぢやありませんか。大分たいぎさうに見えますが……」

「いえ、別段是と云ふ持病もないですが――」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分御丈夫の様ですな」

「えゝ痩せても病氣はしません。病氣なんてものあ大嫌ひですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにや／＼と笑つた。所へ入口で若々しい女の笑聲が聞こえたから、何心なく振り反つて見るとえらい奴が來た。色の白い、ハイカラ頭の、脊の高い美人と、四十五六の奥さんとが竝んで切符を賣る窓の前に立つて居る。おれは美人の形容杯が出來る男でないから何も云へないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つて見た様な心持ちがした。年寄の方が脊は低い。然し顔はよく似て居るから親子だらう。おれは、今、來たなと思ふ途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見てゐた。すると、うらなり君が突然おれの隣から立ち上がつて、そろ／＼女の方へ歩行き出したんで、少し驚いた。マドンナぢやないかと思つた。三人は切符所の前で輕く挨拶してゐる。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で發車だ。早く汽車がくればいゝがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つて居ると、又一人あわてて場内へ馳け込んで來たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべら／＼然たる着物へ縮緬の帶をだらしなく巻きつけて、例の通り金鎖をぶらつかして居る。あの金鎖は贋物である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかして居るが、おれはちやんと知つてる。赤シャツは馳け込んだなり、何かきよろ／＼して居たが、切符賣下所の前に話して居る三人へ慇懃に御辭儀をして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例の如く猫足にあるいて來て、や、君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで來たら、まだ三四分ある。あの時計は慥かかしらんと、自分の金側を出して、二分程ちがつてると云ひながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちつとも見返らないで杖の上へ顋をのせて、正面ばかり眺めて居る。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いた儘である。いよいよマドンナに違ひない。

やがて、ピューと汽笛が鳴つて、車がつく。待ち合はせた連中はぞろ／＼吾勝ちに乗り込む。赤シャツはいの一番に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れる所ではない。住田まで上等が五錢で下等が三錢だから、僅か二錢違ひで上下の區別がつく。かう云ふおれでさへ上等を奮發して白い切符を握つてるんでもわかる。尤も田舎者はけちだから、たつた二錢の出入でも頗る苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナの御袋が上等へ這入り込んだ。うらなり君は活版で押した様に下等ばかりへ乗る男だ。先生、

下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の體であつたが、おれの顔を見るや否や思ひ切つて、飛び込んで仕舞つた。おれは此時何となく氣の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りて見たら、又うらなり君に逢つた。おれは會議や何かでいざと極まると、咽喉が塞がつて饒舌れない男だが、平常は随分辯ずる方だから、色々湯壺のなかでうらなり君に話しかけて見た。何だか憐れぽくつて堪らない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸つ子の義務だと思つてる。所が生憎うらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかも其えと、いえが大分面倒らしいので、仕舞ひにはとう／＼切り上げて、こつちから御免蒙つた。

湯の中では赤シャツに逢はなかつた。尤も風呂の数は澤山あるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢ふとは極まつて居ない。別段不思議にも思はなかつた。風呂を出て見るといい月だ。町内の兩側に柳が植わつて、柳の枝が丸い影を往來の中へ落として居る。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはづれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き當りが御寺で、左右が妓樓である。山門のなかに遊廓があるなんて、前代未聞の現象だ。一寸這入つて見たいが、又狸から會議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の竝びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが團子を食つて、しくじつた所だ。丸提灯に汁粉、御雑煮とかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしてゐる。食ひたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食ひたい團子の食へないのは情ない。然し自分の許嫁が他人に心を移したのは、猶情ないだらう。うらなり君の事を思ふと、團子は愚、三日位斷食しても不平をこぼせない譯だ。本當に人間程宛にならない者はない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしさうには思へないんだが――うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れの様な古賀さんが善良な君子なのだから、油斷が出來ない。淡白だと思つた山嵐は生徒を煽動したと云ふし。生徒を煽動したのかと思ふと、生徒の處分を校長に逼るし。厭味で練りかためた様な赤シャツが存外親切で、おれに餘所ながら注意をしてくれるかと思ふと、マドンナを胡魔化したり。胡魔化したのかと思ふと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云ふし。いか銀が難癖をつけて、おれを追ひ出すかと思ふと、すぐ野だ公が入れ替つたり――どう考へても宛にならない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だらう。箱根の向うだから化物が寄り合つてるんだと云ふかも知れない。

おれは、生來構はない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日迄凌いで來たのだが、此所へ來てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思ひ出した。別段際だつた大事件にも出逢はないのに、もう五つ六つ年を取つた様な氣がする。早く切り上げて東京へ歸るのが一番よからう。抔と夫から夫へ考へて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出た。川と云ふとえらさうだが實は一間位な、ちよろ／＼した流で、土手に沿うて十二丁程下ると相生村へ出る。村には觀音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が月の光の中にかゞいて居る。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流は淺いけれども早いから、神經質の水の様にやたらに光る。ぶら／＼土手の上をあ

るきながら、約三丁も來たと思つたら、向うに人影が見え出した。月に透かして見ると影は二つある。温泉へ來て村へ歸る若い衆かも知れない。夫れにしては唄もうたはない。存外靜かだ。段々歩行いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間位の距離に逼つた時、男が忽ち振り向いた。月は後からさして居る。其時おれは男の樣子を見て、はてなと思つた。男と女は又元の通りにあるき出した。おれは考へがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の氣もつかずに最初の通り、ゆる〳〵歩を移して居る。今は話し聲も手に取る樣に聞こえる。土手の幅は六尺位だから、並んで行けば三人が漸くだ。おれは苦もなく後から追ひ附いて、男の袖を擦り拔けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈の頭から顋の廻り迄、會釋もなく照らす。男はあつと小聲に云つたが、急に横を向いて、もう歸らうと女を促すが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

赤シャツは圖太くて胡魔化す積りか、氣が弱くて名乘り損なつたのかしら。所が狹くて困つてるのは、おれ許りではなかつた。

八

赤シャツに勸められて釣に行つた歸りから、山嵐を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ろと云はれた時は、愈不埒な奴だと思つた。所が會議の席では案に相違して滔々と生徒厳罰論を述べたから、おや變だなと首を捩つた。萩野の婆さんから、山嵐がうらなり君の爲に赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍つた。此樣子ではわる者は山嵐ぢやあるまい、赤シャツの方が曲がつてるんで、好い加減な邪推を實しやかに、しかも遠廻しに、おれの頭の中へ浸み込ましたのではあるまいかと迷つてる矢先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんかして居る姿を見たから、それ以來赤シャツは曲者だと極めて仕舞つた。曲者だか何だかよくは分らないが、とも角も善い男ぢやない。表と裏とは違つた男だ。人間は竹の樣に眞直でなくつちや頼母しくない。眞直なものは喧嘩をしても心持ちがいゝ。赤シャツの樣なやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパイプとを自慢さうに見せびらかすのは油斷が出來ない、滅多に喧嘩も出來ないと思つた。喧嘩をしても、回向院の相撲の樣な心持ちのいゝ喧嘩は出來ないと思つた。さうなると一錢五厘の出入で控所全體を驚かした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。會議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思つたが、あとで考へると、それも赤シャツのねち〳〵した猫撫聲よりはましだ。實はあの會議が濟んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけて見たが、野郎返事もしないで、まだ眼を剝つて見せたから、此方も腹が立つて其儘にして置いた。

夫以來山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一錢五厘は未だに机の上に乘つて居る。ほこりだらけになつて乘つて居る。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて歸らない。此一錢五厘が二人の間の墻壁になつて、おれは話さうと思つても話せない、山嵐は頑として默つてる。おれと山嵐には一錢五厘が祟つた。仕舞ひには學校へ出て一錢五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易へて、赤シャツとおれは依然として在來の關係を保つて、交際をつゞけて居る。野芹川で逢つた

翌日杯は、學校へ出ると第一番におれの傍へ來て、君今度の下宿はいゝですかの又一所に露西亞文學を釣りに行かうぢやないかのと色々な事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、昨夕は二返逢ひましたねと云つたら、えゝ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遲いぢやないかと云ふ。野芹川の土手でも御目に懸かりましたねと喰らはしてやつたら、いゝえ僕はあつちへは行かない、湯に這入つて、すぐ歸つたと答へた。何もそんなに隱さないでもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。是で中學の教頭が勤まるなら、おれなんか大學總長がつとまる。おれは此時から愈赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心して居る山嵐とは話しをしない。世の中は隨分妙なものだ。

ある日の事赤シャツが一寸君に話しがあるから、僕のうち迄來てくれと云ふから、惜しいと思つたが温泉行きを缺勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭丈に下宿はとくの昔に引き拂つて立派な玄關を構へて居る。家賃は九圓五拾錢ださうだ。田舍へ來て九圓五拾錢拂へばこんな家へ這入れるなら、おれも一つ奮發して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやらうと思つた位な玄關だ。頼むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て來た。此弟は學校で、おれに代數と算術を教はる至つて出來のわるい子だ。其癖渡りものだから、生れ附いての田舍者よりも人が惡い。

赤シャツに逢つて用事を聞いて見ると、大將例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が來てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがつて、校長も大いにいゝ人を得たと喜んで居るので——どうか學校でも信頼して居るのだから、其積りで勉強していたゞきたい」

「へえ、さうですか、勉強つて今より勉強は出來ませんが——」

「今の位で充分です。只先達て御話しした事ですね、あれを忘れずに居て下さればいゝのです」

「下宿の世話なんかするものあ劒呑だと云ふ事ですか」

「さう露骨に云ふと、意味もない事になるが——まあ善い、精神は君にもよく通じて居る事と思ふから。そこで君が今の樣に出精して下されば、學校の方でも、ちやんと見て居るんだから、もう少しして都合さへつけば、待遇の事も多少はどうにかなるだらうと思ふんですがね」

「へえ、俸給ですか。俸給なんかどうでもいゝんですが、上がれば上がつた方がいゝですね」

「それで幸ひ今度轉任者が一人出來るから——尤も校長に相談して見ないと無論受け合へない事だが——其俸給から少しは融通が出來るかも知れないから、それで都合をつける樣に校長に話して見ようと思ふんですがね」

「どうも難有う。だれが轉任するんですか」

「もう發表になるから話しても差し支へないでせう。實は古賀です」

「古賀さんは、だつてこゝの人ぢやありませんか」

「こゝの地の人ですが、少し都合があつて——半分は當人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上がつて行く事になりました」

「誰か代りが來るんですか」

「代りも大抵極まつてるんです。其代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。然し無理に上がらないでも構ひません」

「とも角も僕は校長に話す積りです。夫で校

長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂かなくてはならん樣になるかも知れないから、どうか今から其積りで覺悟をしてやつて貰ひたいですね」
「今より時間でも増すんですか」
「いゝえ、時間は今より減るかも知れませんが――」
「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」
「一寸聞くと妙だが、――判然とは今言ひにくいが――まあつまり、君にもつと重大な責任を持つて貰ふかも知れないと云ふ意味なんです」
おれには一向分らない。今より重大な責任と云へば、數學の主任だらうが、主任は山嵐だから、やつこさん中々辭職する氣遣ひはない。夫に、生徒の人望があるから轉任や免職は學校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領は得なくつても用事は是で濟んだ。夫から少し雜談をして居るうちに、うらなり君の送別會をやる事や、就いてはおれが酒を飲むかと云ふ問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云ふ事や――赤シャツは色々辯じた。仕舞ひに話をかへて君俳句をやりますかと來たから、こいつは大變だと思つて、俳句はやりません、左樣ならと、そこ〳〵に歸つて來た。發句は芭蕉か髮結床の親方のやるもんだ。數學の先生が朝顏やに釣瓶をとられて堪るもんか。

歸つてうんと考へ込んだ。世間には隨分氣の知れない男が居る。家屋敷は勿論、勤める學校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他國へ苦勞を求めに出る。夫も花の都の電車が通つてる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいゝ此所へ來てさへ、一ケ月立たないうちにもう歸りたくなつた。延岡と云へば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云ふ所によると船から上がつて、一日馬車へ乘つて、宮崎へ行つて、宮崎から又一日車へ乘らなくつては着けないさうだ。名前を聞いてさへ、開けた所とは思へない。猿と人とが半々に住んでる樣な氣がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだらうに、何と云ふ物數奇だ。

所へ不相變婆さんが夕食を運んで出る。今日も赤芋ですかいと聞いて見たら、いえ今日は御豆腐ぞなもしと云つた。どつちにしたつて似たものだ。

「御婆さん古賀さんは日向へ行くさうですね」
「ほん當に御氣の毒ぢやなもし」
「御氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」
「好んで行くて、誰がぞなもし」
「誰がぞなもしつて、當人がさ。古賀先生が物數奇に行くんぢやありませんか」
「そりやあなた、大違ひの勘五郎ぞなもし」
「勘五郎かね。だつて今赤シャツがさう云ひましたぜ。夫が勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ」
「教頭さんが、さう御云ひるのは尤もぢやが、古賀さんの御往きともないのも尤もぞなもし」
「そんなら兩方尤もなんですね。御婆さんは公平でいゝ。一體どう云ふ譯なんですい」
「今朝古賀の御母さんが見えて、段々譯を御話したがなもし」
「どんな譯を御話したんです」
「あそこも御父さんが御亡くなりてから、あたし達が思ふ程暮し向きが豐かにならうて御困りぢやけれ、御母さんが校長さんに御頼みて、もう四年も勤めて居るものぢやけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして御呉れんかてゝ、あなた」

「成程」
「校長さんが、ようまあ考へて見とかうと御云ひたげな。夫で御母さんも安心して、今に増給の御沙汰があろぞ、今月か來月かと首を長くし待つて御いでた所へ、校長さんが一寸來てくれと古賀さんに御云ひるけれ、行つて見ると、氣の毒だが學校は金が足りんけれ、月給を上げる譯にゆかん。然し延岡になら空いた口があつて、其方なら毎月五圓餘分にとれるから、御望み通りでよからうと思つて、其手續にしたから行くがえゝと云はれたげな。――」
「ぢや相談ぢやない、命令ぢやありませんか」
「左樣よ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元の儘でもえゝから、こゝに居りたい。屋敷もあるし、母もあるからと御頼みたけれど、もうさう極めたあとで、古賀さんの代りは出來て居るけれ仕方がないと校長が御云ひたげな」
「へん人を馬鹿にしてら、面白くもない。ぢや古賀さんは行く氣はないんですね。どうれで變だと思つた。五圓位上がつたつて、あんな山の中へ猿の御相手をしに行く唐變木はまづないからね」
「唐變木て、先生なんぞなもし」
「何でもいゝでさあ、――全く赤シャツの作略だね。よくない仕打だ。まるで欺撃ですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合な事があるものか。上げてやるつたつて、誰が上がつて遣るものか」
「先生は月給が御上がりるのかなもし」
「上げてやるつて云ふから、斷らうと思ふんです」
「何で、御斷りるのぞなもし」
「何でも御斷りだ。御婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑怯でさあ」
「卑怯でもあなた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いて置く方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものぢやが、年をとつてから考へると、も少しの我慢ぢやあつたのに惜しい事をした。腹立てた爲にこないな損をしたと悔むのが當り前ぢやけれ、お婆の言ふ事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろと御言ひたら、難有うと受けて御置きなさいや」
「年寄の癖に餘計な世話を燒かなくつてもいゝ。おれの月給は上がらうと下がらうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑氣な聲を出して謠をうたつてる。謠といふものは讀んでわかる所を、やに六づかしい節をつけて、わざと分らなくする術だらう。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの氣が知れない。おれは謠所の騷ぎぢやない。月給を上げてやらうと云ふから、別段欲しくもなかつたが、入らない金を餘して置くのも勿體ないと思つて、よろしいと承知したのだが、轉任したくないものを無理に轉任させて其男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出來るものか。當人がもとの通りでいゝと云ふのに延岡下り迄落ちさせるとは一體どう云ふ了見だらう。太宰權帥でさへ博多近邊で落ちついたものだ、河合又五郎だつて相良でとまつてるぢやないか。とにかく赤シャツの所へ行つて斷つて來なくつちやあ氣が濟まない。

小倉の袴をつけて又出掛けた。大きな玄關へ突つ立つて頼むと云ふと、又例の弟が取次に出て來た。おれの顏を見てまた來たかと云ふ眼附をした。用があれば二度だつて三度だつて來る。よる夜なかだつて叩き起こさないとは限らない。教頭の所へ御機嫌伺ひにくる樣なおれと見損なつてるか。是でも月給が入らないから返しに來たんだ。すると弟が今來客中だと云ふから、玄關でいゝから一寸御目にかゝ

りたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、疊附きの薄つぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう萬歳ですよと云ふ聲が聞こえる。御客とは野だだなと氣がついた。野だでなくては、あんな黄色い聲を出して、こんな藝人じみた下駄を穿くものはない。

　しばらくすると、赤シャツがランプを持つて玄關迄出て來て、まあ上がり給へ、外の人ぢやない吉川君だ、と云ふから、いえ此所で澤山です。一寸話せばいゝんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時の樣だ。野だ公と一杯飮んでると見える。

「さつき僕の月給をあげてやると云ふ御話しでしたが、少し考へが變つたから斷りに來たんです」

　赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、咄嗟の場合返事をしかねて茫然として居る。増給を斷る奴が世の中にたつた一人飛び出して來たのを不審に思つたのか、斷るにしても、今歸つた許りで、すぐ出直して來なくつてもよささうなものだと呆れ返つたのか、又は双方合併したのか、妙な口をして突つ立つた儘である。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で轉任すると云ふ話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば轉任するんです」

「さうぢやないんです、こゝに居たいんです。元の月給でもいゝから、鄕里に居たいのです」

「君は古賀君から、さう聞いたのですか」

「そりや當人から、聞いたんぢやありません」

「ぢや誰から御聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんの御母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「ぢや、下宿の婆さんがさう云つたのですね」

「まあさうです」

「それは失敬ながら少し違ふでせう。あなたの仰しやる通りだと、下宿屋の婆さんの云ふ事は信ずるが、教頭の云ふ事は信じないと云ふ樣に聞こえるが、さう云ふ意味に解釋して差し支へないでせうか」

　おれは一寸困つた。文學士なんてものは矢つ張りえらいもんだ。妙な所へこだはつて、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父から貴樣はそゝつかしくて駄目だ駄目だと云はれたが、成程少々そゝつかしい樣だ。婆さんの話しを聞いてはつと思つて飛び出して來たが、實はうらなり君にもうらなりの御母さんにも逢つて詳しい事情は聞いて見なかつたのだ。だから斯う文學士流に斬り附けられると、一寸受け留めにくい。

　正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに對して不信任を心の中で申し渡して仕舞つた。下宿の婆さんもけちん坊の慾張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツの樣に裏表はない。おれは仕方がないから、かう答へた。

「あなたの云ふ事は本當かも知れないですが——とにかく増給は御免蒙ります」

「それは益可笑しい。今君がわざ〳〵御出でに成つたのは増俸を受けるには忍びない理由を見出だしたからの樣に聞こえたが、其理由が僕の說明で取り去られたにも關はらず増俸を否まれるのは少し解しかねる樣ですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とに角斷りますよ」

「そんなに否なら强ひてと迄は云ひませんが、さう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹變しちや、將來君の信用にかゝはる」

「かゝはつても構はないです」

「そんな事はない筈です、人間に信用程大切なものはありません。よしんば今一歩讓つて、

下宿の主人が——」

「主人ぢやない、婆さんです」

「どちらでも宜しい。下宿の婆さんが君に話した事を事實とした所で、君の増給は古賀君の所得を削つて得たものではないでせう。古賀君は延岡へ行かれる。其代りがくる。其代りが古賀君よりも多少低給で來てくれる。其剩餘を君に廻すと云ふのだから、君は誰にも氣の毒がる必要はない筈です。古賀君は延岡で只今よりも榮進される、新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられゝば、是程都合のいゝ事はないと思ふですがね。いやなら否でもいゝが、もう一返うちでよく考へて見ませんか」

　おれの頭はあまりえらくないのだから、何時もなら、相手がかう云ふ巧妙な辯舌を揮へばおやさうかな、それぢや、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがるのだけれども、今夜はさうは行かない。こゝへ來た最初から赤シャツは何だか蟲が好かなかつた。途中で親切な女見た樣な男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなささうなので、反動の結果今ぢや餘つ程厭になつて居る。だから先がどれ程うまく論理的に辯論を逞しくしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構はない。議論のいゝ人が善人とはきまらない。遣り込められる方が惡人とは限らない。表向は赤シャツの方が重々尤もだが、表向がいくら立派だつて、腹の中迄惚れさせる譯には行かない。金や威力や理窟で人間の心が買へる者なら、高利貸でも巡査でも大學教授でも一番人に好かれなくてはならない。中學の教頭位な論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌ひで働くものだ。論法で働くものぢやない。

「あなたの云ふ事は尤もですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ斷ります。考へたつて同じ事です。左樣なら」と云ひすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かゝつて居る。

九

　うらなり君の送別會のあると云ふ日の朝、學校へ出たら、山嵐が突然、君先達てはいか銀が來て、君が亂暴して困るから、どうか出る樣に話して呉れと賴んだから、眞面目に受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いて見ると、あいつは惡い奴で、よく僞筆へ贋落款抔を押して賣りつけるさうだから、全く君の事も出鱈目に違ひない。君に懸物や骨董を賣りつけて、商賣にしようと思つてた所が、君が取り合はないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらへて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大變失敬した、勘辨し給へと長々しい謝罪をした。

　おれは何とも云はずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘をとつておれの蝦蟇口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審さうに聞くから、うん、おれは君に奢られるのがいやだつたから、是非返す積りで居たが、其後段々考へて見ると矢つ張り奢つて貰ふ方がいゝ樣だから、引き込ますんだと說明した。山嵐は大きな聲をしてアハヽヽと笑ひながら、そんなら、何故早く取らなかつたのだと聞いた。實は取らうと思つてたが、何だか妙だから其儘にして置いた。近來は學校へ來て一錢五厘を見るのが苦になる位いやだつたと云つたら、君は餘つ程負け惜しみの强い男だと云ふから、君は餘つ程剛情張りだと答へてやつた。それから二人の間にこんな問答が起こつた。

「君は一體どこの產だ」

「おれは江戸つ子だ」

「うん江戸つ子か、道理で負け惜しみが强いと思つた」

「君はどこだ」
「僕は會津だ」
「會津つぽか、強情な譯だ。今日の送別會へ行くのかい」
「行くとも、君は？」
「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、濱迄見送りに行かうと思つてる位だ」
「送別會は面白いぜ、出て見玉へ。今日は大いに飲む積りだ」
「勝手に飲むがいゝ。おれは肴を食つたらすぐ歸る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」
「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。成程江戸つ子の輕佻な風を、よく、あらはしてる」
「何でもいゝ、送別會へ行く前に一寸おれのうちへ御寄り、話しがあるから」
山嵐は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれは此間から、うらなり君の顔を見る度に氣の毒で堪らなかつたが、愈送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出來る事なら、おれが代りに行つてやりたい樣な氣がしだした。それで送別會の席上で、大いに演說でもして其行を盛にしてやりたいと思ふのだが、おれのべらんめえ調子ぢや、到底物にならないから、大きな聲を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒膽を挫いでやらうと考へ附いたから、わざ／＼山嵐を呼んだのである。

おれは先づ冒頭としてマドンナ事件から說き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つて居る。おれが野芹川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐が君は誰を捕まへても馬鹿呼ばはりをする。今日學校で自分の事を馬鹿と云つたぢやないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿ぢやない。自分は赤シャツの同類ぢやないと主張した。夫ぢや赤シャツは腑拔の呆助だと云つたら、さうかも知れないと山嵐は大いに贊成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知つて居ない。會津つぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだらう。

夫から增給事件と將來重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふゝんと鼻から聲を出して、それぢや僕を免職する考へだなと云つた。免職する積りだつて、君は免職になる氣かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツも一所に免職させてやると大いに威張つた。どうして一所に免職させる氣かと押して尋ねたら、そこはまだ考へて居ないと答へた。山嵐は強さうだが、智慧はあまりなささうだ。おれが增給を斷つたと話したら、大將大きに喜んで流石江戸つ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつてゐるなら、何故留任の運動をしてやらなかつたと聞いて見たら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつて仕舞つて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判して見たが、どうする事も出來なかつたと話した。夫に就いても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、斷然斷るか、一應考へて見ますと逃げればいゝのに、あの辯舌に胡魔化されて、即席に許諾したものだから、あとから御母さんが泣きついても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に殘念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだらうとおれが云つたら、無論さうに違ひない。あいつは大人しい顔をして、惡事を働いて、人が何か云ふと、ちやんと逃道を拵へて待つてるんだから、餘つ程奸物だ。あんな奴にかゝつては鐵拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつて見せた。おれは序だから、君の腕は強さうだな柔術でもやるかと聞いて見た。す

ると大將二の腕へ力瘤を入れて、一寸攫んで見ろと云ふから、指の先で揉んで見たら、何の事はない湯屋にある輕石の樣なものだ。

おれは餘り感心したから、君その位の腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだらうと聞いたら、無論さと云ひながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるり／＼と皮のなかで廻轉する。頗る愉快だ。山嵐の證明する所によると、かんじん綯りを二本より合はせて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるさうだ。かんじんよりなら、おれにも出來さうだと云つたら、出來るものか、出來るならやつて見ろと來た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合はせた。

君どうだ、今夜の送別會に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勸めて見たら、山嵐はさうだなと考へて居たが、今夜はまあよさうと云つた。何故と聞くと、今夜は古賀に氣の毒だから――それにどうせ撲る位なら、あいつらの惡い所を見屆けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるからと、分別のありさうな事を附加した。山嵐でもおれよりは考へがあると見える。

ぢや演說をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸つ子のぺら／＼になつて重みがなくていけない。さうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲が起つて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて來て言葉が出ないから、君に讓るからと云つたら、妙な病氣だな、ぢや君は人中ぢや口は利けないんだね、困るだらう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答へて置いた。

さうかうするうち時間が來たから、山嵐と一所に會場へ行く。會場は花晨亭と云つて、當地で第一等の料理屋ださうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買ひ入れて、其儘開業したと云ふ話だが、成程見懸けからして厳めしい構だ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織を縫ひ直して、胴着にする樣なものだ。

二人が着いた頃には、人數ももう大概揃つて、五十疊の廣間に二つ三つ人間の塊まりが出來て居る。五十疊丈に床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五疊敷の床とは比較にならない。尺を取つて見たら二間あつた。右の方に赤い模樣のある瀨戸物の瓶を据ゑて其中に松の大きな枝が插してある。松の枝を插して何にする氣か知らないが、何ケ月立つても散る氣遣ひがないから、錢が懸からなくつて、よからう。あの瀨戸物はどこで出來るんだと博物の敎師に聞いたら、あれは瀨戸物ぢやありません、伊萬里ですと云つた。伊萬里だつて瀨戸物ぢやないかと、云つたら、博物はえへゝゝと笑つて居た。あとで聞いて見たら、瀨戸で出來る燒物だから、瀨戸と云ふのださうだ。おれは江戸つ子だから、陶器の事を瀨戸物といふのかと思つて居た。床の眞中に大きな懸物があつて、おれの顔位な大きさな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味いから、漢學の先生に、なぜあんなまづいものを麗々と懸けて置くんですと尋ねた所、先生があれは海屋と云つて有名な書家のかいた物だと敎へてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つて居る。

やがて書記の川村がどうか御着席をと云ふから、柱があつて靠りかゝるのに都合のいゝ所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は今日の主人公だと云ふのでうらなり先生、是も日本服で控へて居る。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だつたから、

すぐ胡坐をかいた。隣の體操教師は黒ずぼんで、ちやんとかしこまつて居る。體操の教師丈にいやに修業が積んで居る。やがて御膳が出る。徳利が竝ぶ。幹事が立つて、一寸開會の辭を述べる。夫から狸が立つ、赤シャツが起つ。悉く送別の辭を述べたが、三人共申し合はせた樣にうらなり君の、良教師で、好人物な事を吹聽して、今回去られるのは洵に殘念である、學校としてのみならず、個人として大いに惜しむ所であるが、御一身上の御都合で切に轉任を御希望になつたのだから致し方がないと云ふ意味を述べた。こんな嘘をついて送別會を開いて、それでちつとも恥づかしいとも思つて居ない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。此良友を失ふのは實に自分に取つて大なる不幸であると迄云つた。しかも其いひ方がいかにも尤もらしくつて、例のやさしい聲を一層やさしくして述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でも屹度だまされるに極まつてる。マドンナも大方此手で引つ掛けたんだらう。赤シャツが送別の辭を述べ立ててゐる最中、向う側に坐つて居た山嵐がおれの顏を見て一寸稻光をさした。おれは返電として人指し指でべつかんこうをして見せた。

　赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がつたから、おれは嬉しかつたので、思はず手をぱち〳〵と拍つた。すると狸を始め一同が悉くおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云ふかと思ふと只今校長始め、ことに教頭は古賀君の轉任を非常に殘念がられたが、私は少々反對で古賀君が一日も早く當地を去られるのを希望して居ります。延岡は僻遠の地で、當地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代樸直の氣風を帶びて居るさうである。心にもない御世辭を振り蒔いたり、美しい顏をして君子を陷れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き溫良篤厚の士は必ず其地方一般の歡迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君の爲に此轉任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、其地の淑女にして、君子の好逑となるべき資格あるものを擇んで一日も早く圓滿なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なる御轉婆を事實の上に於て慚死せしめん事を希望します。えへん〳〵と二つばかり大きな咳拂ひをして席に着いた。おれは今度も手を叩かうと思つたが、又みんながおれの面を見るといやだから、やめにして置いた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生は御丁寧に、自席から、座敷の端の末座迄行つて、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ參る事になりましたに就いて、諸先生方が小生の爲に此の盛大なる送別會を御開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪へぬ次第で――殊に只今は校長、教頭其他諸君の送別の辭を頂戴して、大いに難有く服膺する譯であります。私は是から遠方へ參りますが、何卒從前の通り御見捨なく御愛顧の程を願ひます。とへえつく張つて席に戾つた。うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆ど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされてゐる校長や、教頭に恭しく御禮を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの樣子や、あの言葉つきや、あの顏つきから云ふと、心から感謝してゐるらしい。こんな聖人に眞面目に御禮を云はれたら、氣の毒になつて、赤面しさうなものだが狸も赤シャツも眞面目に謹聽して居る計りだ。

　挨拶が濟んだら、あちらでもチュー、こちらでもチューと云ふ音がする。おれも眞似をして汁を飮んで見たがまづいもんだ。口取に蒲鉾は

ついてるが、どす黑くて竹輪の出來損ひである。刺身も竝んでるが、厚くつて鮪の切身を生で食ふと同じ事だ。それでも隣近所の連中はむしや〳〵旨さうに食つて居る。大方江戸前の料理を食つた事がないんだらう。

　其うち燗徳利が頻繁に往來し始めたら、四方が急に賑やかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃を頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に獻酬をして、一巡周る積りと見える。甚だ御苦勞である。うらなり君がおれの前へ來て、一つ頂戴致しませうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にずぼんの儘かしこまつて、一盃差し上げた。折角參つて、すぐ御別れになるのは殘念ですね。御出立はいつです、是非濱迄御見送りをしませうと云つたら、うらなり君はいえ御用多の所決して夫には及びませんと答へた。うらなり君が何と云つたつて、おれは學校を休んで送る氣で居る。

　夫から一時間程するうちに席上は大分亂れて來る。まあ一杯、おや僕が飮めと云ふのに……などと呂律の巡りかねるのも一人二人出來て來た。少々退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めて居ると山嵐が來た。どうだ最前の演說はうまかつたらう。と大分得意である。大贊成だが一ケ所氣に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不贊成だと聞いた。

「美しい顏をして人を陷れる樣なハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は云つたらう」

「うん」

「ハイカラ野郎丈では不足だよ」

「ぢや何と云ふんだ」

「ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の、猫つ被りの、香具師の、モヽンガーの、岡つ引きの、わん〳〵鳴けば犬も同然な奴とでも云ふがいゝ」

「おれには、さう舌は廻らない。君は能辯だ。第一單語を大變澤山知つてる。それで演說が出來ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩のときに使はうと思つて、用心の爲に取つて置く言葉さ。演說となつちや、かうは出ない」

「さうかな、然しぺら〳〵出るぜ。もう一遍やつて見給へ」

「何遍でもやるさ、いゝか。――ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」

と云ひかけて居ると、椽側をどたばた云はして、二人ばかり、よろ〳〵しながら馳け出して來た。

「兩君そりやひどい、――逃げるなんて、――僕が居るうちは決して逃さない、さあのみ玉へ。――いかさま師……面白い、いかさま面白い。――さあ飮み玉へ」

　とおれと山嵐をぐい〳〵引つ張つて行く。實は此兩人共便所に來たのだが、醉つてるもんだから、便所へ這入るのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。醉つ拂ひは目の中る所へ用事を拵へて、前の事はすぐ忘れて仕舞ふんだらう。

「さあ、諸君いかさま師を引つ張つて來た。さあ飮ましてくれ玉へ。いかさま師をうんと云ふ程、醉はしてくれ玉へ。君逃げちやいかん」

　と逃げもせぬ、おれを壁際へ壓し付けた。諸方を見廻して見ると、膳の上に滿足な肴の乘つて居るのは一つもない。自分の分を綺麗に食ひ盡して、五六間先へ遠征に出た奴も居る。校長はいつ歸つたか姿が見えない。

　所へ御座敷はこちら？と藝者が三四人這入つて來た。おれも少し驚いたが、壁際へ押し附けられて居るんだから、凝として只見て居

た。すると今迄床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢さうに啣へて居た、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかゝつた。向うから這入つて來た藝者の一人が、行き違ひながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番綺麗な奴だ。遠くて聞こえなかつたが、おや今晩は位云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追つ懸けて歸つたんだらう。

　藝者が來たら座敷中急に陽氣になつて、一同が鬨の聲を揚げて歡迎したのかと思ふ位、騷騷しい。さうして或奴はなんこを攫む。その聲の大きな事、丸で居合拔の稽古の樣だ。こつちでは拳を打つてる。よつ、はつ、と夢中で兩手を振る所は、ダーク一座の操り人形より餘つ程上手だ。向うの隅ではおい御酌だ、と徳利を振つて見て、酒だ／＼と言ひ直して居る。どうも八釜しくて騷々しくつて堪らない。其うちで手持無沙汰に下を向いて考へ込んでるのはうらなり君計りである。自分の爲に送別會を開いてくれたのは、自分の轉任を惜しんでくれるんぢやない。みんなが酒を呑んで遊ぶ爲だ。自分獨りが手持無沙汰で苦しむ爲だ。こんな送別會なら開いてもらはない方が餘程ましだ。

　しばらくしたら銘々胴間聲を出して何か唄ひ始めた。おれの前へ來た一人の藝者が、あんた、なんぞ唄ひなはれ、と三味線を抱へたから、おれは唄はない、貴樣唄つて見ろと云つたら、鉦や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちやんちきりん、叩いて廻つて逢はれるものならば、わたしなんぞも、鉦や太鼓でどんどこ、どんのちやんちきりんと叩いて廻つて逢ひたい人がある、と二息にうたつて、おゝしんどと云つた。おゝしんどなら、もつと樂なものをやればいゝのに。

　すると、いつの間にか傍へ來て坐つた、野だが、鈴ちやん逢ひたい人に逢つたと思つたら、すぐ御歸りで、御氣の毒さま見た樣でげすと相變らず噺し家見た樣な言葉使ひをする。知りまへんと藝者はつんと澄ました。野だは頓着なくたま／＼逢ひは逢ひながら……と、いやな聲を出して義太夫の眞似をやる。おきなはれと藝者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてる。此藝者は赤シャツに挨拶をした奴だ。藝者に叩かれて笑ふなんて、野だも御目出度い者だ。鈴ちやん僕が紀伊の國を踊るから、一つ彈いて頂戴と云ひ出した。野だは此上まだ踊る氣で居る。

　向うの方で漢學の御爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞こえません傳兵衞さん、お前とわたしのその中は……と迄は無事に濟ましたが、それから？　と藝者に聞いて居る。爺さんなんて物覺えのわるいものだ。一人が博物を捕まへて、近頃こないのが、でけましたぜ、彈いて見まほうか。よう聞いて居なはれや——花月卷、白いリボンのハイカラ頭、乘るは自轉車彈くはヴイオリン、半可の英語でぺら／＼と、I am glad to see you と唄ふと、博物は成程面白い、英語入りだねと感心して居る。

　山嵐は馬鹿に大きな聲を出して、藝者、藝者と呼んで、おれが劍舞をやるから、三味線を彈けと號令を下した。藝者はあまり亂暴な聲なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構はず、ステッキを持つて來て、踏破千山萬岳烟と眞中へ出て、獨りで隱し藝を演じて居る。所へ野だが既に紀伊の國を濟まして、かつぽれを濟まして、棚の達磨さんを濟まして、丸裸の越中褌一つになつて、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで氣狂だ。

　おれはさつきから苦しさうに袴も脱がず控

へて居るうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別會だつて、越中褌の裸踊迄羽織袴で我慢して見て居る必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう歸りませうと退去を勸めて見た。するとうらなり君は今日は私の送別會だから、私が先へ歸つては失禮です、どうぞ御遠慮なくと動く氣色もない。なに構ふもんですか、送別會なら、送別會らしくするがいゝです、あの樣を御覽なさい氣狂會です、さあ行きませうと、進まないのを無理に勸めて、座敷を出かゝる所へ、野だが箒を振り／＼進行して來て、や御主人が先へ歸るとはひどい。日清談判だ。歸せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癪が起こつて居る所だから、日清談判なら貴樣はちやん／＼だらうと、いきなり拳骨で、野だの頭をぽかりと喰はしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を拔かれた體で、ぽんやりして居たが、おや是はひどい。御撲ちになつたのは情ない。この吉川を御打擲とは恐れ入つた。愈以て日清談判だ。とわからぬ事をならべて居る所へ、うしろから山嵐が何か騷動が始まつたと見て取つて、劍舞をやめて、飛んで來たが、此ていたらくを見て、いきなり頸筋をうんと攫んで引き戻した。日清……いたい。いたい。どうも是は亂暴だと振りもがく所を横に捩つたら、すとんと倒れた。あとはどうなつたか知らない。途中でうらなり君に別れて、うちへ歸つたら十一時過ぎだつた。

十

　祝勝會で學校は御休みだ。練兵場で式があると云ふので、狸は生徒を引率して參列しなくてはならない。おれも職員の一人として一所にくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしい位である。學校の生徒は八百人もあるのだから、體操の教師が隊伍を整へて、一組一組の間を少しづゝ明けてそれへ職員が一人か二人宛監督として割り込む仕掛である。仕掛だけは頗る巧妙なものだが、實際は頗る不手際である。生徒は子供の上に、生意氣で、規律を破らなくつては生徒の體面にかゝはると思つてる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと譯もないのに鬨の聲を揚げたり、丸で浪人が町内をねり歩いてる樣なものだ。軍歌も鬨の聲も揚げない時はがや／＼何か喋舌つてる。喋舌らないでも歩行けさうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云つたつて聞きつこない。喋舌るのも只喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあ是ならよからうと思つて居た。所が實際は大違ひである。下宿の婆さんの言葉を借りて云へば、正に大違ひの勘五郎である。生徒があやまつたのは心から後悔してあやまつたのではない。只校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭計りさげて、狡い事をやめないと一般で生徒も謝罪丈はするが、いたづらは決してやめるものでない。よく考へて見ると世の中はみんな此生徒の樣なものから成立して居るかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、眞面目に受けて勘辨するのは正直過ぎる馬鹿と云ふんだらう。あやまるのも假りにあやまるので、勘辨するのも假りに勘辨するのだと思つてれば差し支へはない。本當にあやまらせる氣なら、本當に後悔する迄叩きつけなくてはいけない。

　おれが組と組の間に這入つて行くと、天麩羅だの、團子だの、と云ふ聲が絶えずする。而も大勢だから、誰が云ふのだか分らない。よし分

つてもおれの事を天麩羅と云つたんぢやありません、團子と申したのぢやありません、それは先生が神經衰弱だから、ひがんでさう聞くんだ位云ふに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から養成した、此土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教へてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この眞似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言ひ抜けられる樣な手段で、おれの顔を汚すのを抛つて置く、樗蒲一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、づう體はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくては義理がわるい。所がこつちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆捩ぢを食はして來る。貴樣がわるいからだと云ふと、初手から逃げ路が作つてある事だから、滔々と辯じ立てる。辯じ立てゝ置いて、自分の方を表向き丈立派にして夫から、こつちの非を攻撃する。もと〱、返報にした事だから、こつちの辯護は向うの非が擧がらない上は辯護にならない。つまりは向うから手を出して置いて、世間體はこつちが仕掛けた喧嘩の樣に、見做されて仕舞ふ。大變な不利益だ。夫なら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んで居れば、向うは益増長する計り、大きく云へば世の中の爲にならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用ひて捕まへられないで、手の附け樣のない返報をしなくてはならなくなる。さうなつては江戸つ子も駄目だ。駄目だが一年もかうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でも左樣ならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ歸つて清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは堕落しに來て居る樣なものだ。新聞配達をしたつて、こゝ迄堕落するよりはましだ。

かう考へて、いや〱、附いてくると、何だか先鋒が急にがや〱騒ぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。變だから、列を右へはづして、向うを見ると、大手町を突き當たつて藥師町へ曲がる角の所で、行き詰まつたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉み合つて居る。前方から靜かに靜かにと聲を嗄らして來た體操教師に何ですと聞くと、曲り角で中學校と師範學校が衝突したんだと云ふ。

中學と師範とはどこの縣下でも犬と猿の樣に仲がわるいさうだ。なぜだかわからないが、丸で氣風が合はない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだらう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に駈け出して行つた。すると前の方に居る連中は、しきりに何だ地方税の癖に、引き込めと、大きな聲を出す。後からは押せ押せと怒鳴つてる。おれは邪魔になる生徒の間をくゞり抜けて、曲り角へもう少しで出ようとした時に、前へ！と云ふ高い鋭い號令が聞こえたと思つたら師範學校の方は粛々として進行を始めた。先を爭つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中學校が一歩を讓つたのである。資格から云ふと師範學校の方が上ださうだ。

祝勝の式は頗る簡單なものであつた。旅團長が祝詞を讀む、知事が祝詞を讀む。參列者が萬歳を唱へる。それで御仕舞ひだ。餘興は午後にあると云ふ話だから、一先づ下宿へ歸つて、此間から氣に掛かつてゐた、清への返事を書きかけた。今度はもつと詳しく書いてくれとの注文だから、可成念入に認めなくつちやならない。然しいざとなつて、半切を取り上げると、書く事は澤山あるが、何から書き出していゝか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭い。これにしようか、是は詰まらない。

何か、すら〱と出て、骨が折れなくつて、さうして清が面白がる樣なものはないかしらん、と考へて見ると、そんな注文通りの事件は一つもなささうだ。おれは墨を磨つて、筆をしめして、巻紙を眺めて、――巻紙を眺めて、筆をしめして、墨を磨つて――同じ所作を同じ樣に何返も繰り返したあと、おれにはとても手紙はかけるものではないと、諦めて硯の蓋をして仕舞つた。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。矢つ張り東京迄出掛けて行つて、逢つて話しをする方が簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙をかくのは三七日の斷食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと轉がつて肱枕をして庭の方を眺めて見たが、矢つ張り清の事が氣にかゝる。其時おれはかう思つた。かうして遠くへ來て迄、清の身の上を案じてゐてやりさへすれば、おれの眞心は清に通じるに違ひない。通じさへすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮らしてると思つてるだらう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起こつた時にやりさへすればいい譯だ。

庭は十坪程の平庭で、是と云ふ植木もない。只一本の蜜柑があつて、塀のそとから、目標になる程高い。おれはうちへ歸ると、いつでも此蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つてる所は頗る珍しいものだ。あの青い實が段々熟してきて、黄色になるんだらうが、定めて綺麗だらう。今でも最う半分色の變つたのがある。婆さんに聞いて見ると、頗る水氣の多い、旨い蜜柑ださうだ。今に熟れたら、たんと召し上がれと云つたから、毎日少し宛食つてやらう。もう三週間もしたら、充分食へるだらう。まさか三週間内に此所を去る事もなからう。

おれが蜜柑のことを考へて居るところへ、偶然山嵐が話しにやつて來た。今日は祝勝會だから、君と一所に御馳走を食はうと思つて牛肉を買つて來たと、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の眞中へ抛り出した。おれは下宿で芋責め豆腐責めになつてる上、蕎麦屋行き、團子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかゝつた。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが藝者に馴染のある事を知つてるかと聞くから、知つてるとも、此間うらなりの送別會の時に來た一人がさうだらうと云つたら、さうだ僕は此頃漸く勘づいたのに、君は中々敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娛樂だのと云ふ癖に、裏へ廻つて、藝者と關係なんかつけとる、怪しからん奴だ。夫もほかの人が遊ぶのを寛容するならいゝが、君が蕎麦屋へ行つたり、團子屋へ這入るのさへ取締上害になると云つて、校長の口を通じて注意を加へたぢやないか」

「うん、あの野郎の考へぢや藝者買ひは精神的娛樂で、天麩羅や、團子は物質的娛樂なんだらう。精神的娛樂なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの樣は。馴染の藝者が這入つてくると、入れ代りに席をはづして逃げるなんて、どこ迄も人を胡魔化す氣だから氣に食はない。さうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文學だとか、俳句が新體詩の兄弟分だとか云つて、人を烟にまく積りなんだ。あんな弱蟲は男ぢやないよ。全く御殿女中の生れ變りか何かだぜ。ことによると、彼奴のおやぢは湯島のかげまかも知れない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。――君そこ

の所はまだ煮えて居ないぜ。そんなのを食ふと絛蟲が湧くぜ」
「さうか、大抵大丈夫だらう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋へ行つて、藝者と會見するさうだ」
「角屋つて、あの宿屋か」
「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこます爲には彼奴が藝者をつれて、あすこへ這入り込む所を見届けて置いて面詰するんだね」
「見届けるつて、夜番でもするのかい」
「うん、角屋の前に枡屋と云ふ宿屋があるだらう。あの表二階をかりて障子へ穴をあけて見て居るのさ」
「見て居るときに來るかい」
「來るだらう。どうせ一晩ぢやいけない。二週間許りやる積りでなくつちや」
「隨分疲れるぜ。僕あおやぢの死ぬとき一週間許り徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱つた事がある」
「少し位身體が疲れたつて構はんさ、あんな奸物をあの儘にして置くと、日本の爲にならないから、僕が天に代つて誅戮を加へるんだ」
「愉快だ。さう事が極まれば、おれも加勢してやる。夫で今夜から夜番をやるのかい」
「まだ枡屋に懸け合つてないから、今夜は駄目だ」
「それぢやいつから始める積りだい」
「近々のうちにやるさ。いづれ君に報知をするから、さうしたら加勢して呉れ給へ」
「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくると是で中々すばしこいぜ」
　おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談して居ると、宿の婆さんが出て來て學校の生徒さんが一人、堀田先生に御目にかゝりたいて、御出でたぞなもし。今御宅へ參じたのぢやが、御留守ぢやけれ、大方こゝぢやらうて、捜し當てて御出でたのぢやがなもしと閾の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はさうですかと玄關迄出て行つたが、やがて歸つて來て、君、生徒が祝勝會の餘興を見に行かないかつて誘ひに來たんだ。今日は高知から何とか踊をしに、わざわざこゝ迄多人數乘り込んで來てゐるのだから、是非見物しろ滅多に見られない踊だと云ふんだ、君も一所に行つて見給へと山嵐は大いに乘り氣で、おれに同行を勸める。おれは踊なら東京で澤山見て居る。毎年八幡樣の御祭には屋臺が町内へ廻つてくるんだから汐酌でも何でもちやんと心得て居る。土佐つぽの馬鹿踊なんか見たくもないと思つたけれども、折角山嵐が勸めるもんだから、つい行く氣になつて門へ出た。山嵐を誘ひに來たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が來たもんだ。
　會場へ這入ると回向院の相撲か本門寺の御會式の樣に幾旒となく長い旗を所々に植ゑ附けた上に、世界萬國の國旗を悉く借りて來た位、繩から繩、綱から綱へ渡しかけて、大きな空がいつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞臺を設けて、こゝで所謂高知の何とか踊をやるんださうだ。舞臺を右へ半町許りをくると葭簀の圍ひをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めて居るが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、脊蟲の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。
　舞臺とは反對の方面で、頻りに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝國萬歳とかいてある。天主の松の上をふは〳〵飛んで營所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして黒い團子がしゆつと秋の空を射拔く樣に揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟が傘の骨の樣に開いて、だら〳〵と空中に流れ込ん

だ。風船がまた上がつた。今度は陸海軍萬歳と赤地に白く染め拔いた奴が風に搖られて、温泉の町から相生村の方へ飛んでいつた。大方觀音樣の境内へでも落ちたらう。
　式の時は左程でもなかつたが、今度は大變な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかと驚いた位うぢや〳〵して居る。利口な顔はあまり見當たらないが、數から云ふと慥かに馬鹿に出來ない。其うち評判の高知の何とか踊が始まつた。踊といふから藤間か何ぞのやる踊かと早合點して居たが、是は大間違ひであつた。
　いかめしい後鉢巻をして、立つ附け袴を穿いた男が十人許り宛、舞臺の上に三列に並んで、其三十人が悉く拔き身を携げて居るには魂消た。前列と後列の間は僅か一尺五寸位だらう、左右の間隔は夫より短かいとも長くはない。たつた一人列を離れて舞臺の端に立つてるのがある許りだ。此仲間外れの男は袴丈はつけて居るが、後鉢巻は倹約して、拔き身の代りに、胸へ太鼓を懸けて居る。太鼓は太神樂の太鼓と同じ物だ。此男がやがて、いやあ、はあゝと呑氣な聲を出して、妙な謠をうたひながら、太鼓をぼこぽん、ぼこぽんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河萬歳と普陀洛やの合併したものと思へば大した間違ひにはならない。
　歌は頗る悠長なもので、夏分の水飴の樣に、だらしがないが、句切りをとる爲にぼこぽんを入れるから、のべつの樣でも拍子は取れる。此拍子に應じて三十人の拔き身がぴか〳〵と光るのだが、是は又頗る迅速な御手際で、拜見して居ても冷々する。隣も後も一尺五寸以内に生きた人間が居て、其人間が又切れる拔き身を自分と同じ樣に振り舞はすのだから、餘程調子が揃はなければ、同志擊ちを始めて怪我をする事になる。夫も動かないで刀丈前後とか上下とかに振るのなら、まだ危險もないが、三十人が一度に足踏をして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣のものが一秒でも早過ぎるか遲過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣の頭はそがれるかも知れない。拔き身の動くのは自由自在だが、其動く範圍は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、中々以て汐酌や關の戸の及ぶ所でない。聞いて見ると、是は甚だ熟練の入るもので容易な事では、かう云ふ風に調子が合はないさうだ。ことに六づかしいのは、かの萬歳節のぼこぽん先生ださうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、悉くこのぼこぽん君の拍子一つで極まるのださうだ。傍で見て居ると、此大將が一番呑氣さうに、いやあ、はあゝと氣樂にうたつてるが、其實は甚だ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。
　おれと山嵐が感心のあまり此踊を餘念なく見物して居ると、半町許り、向うの方で急にわつと云ふ鬨の聲がして、今迄穩やかに諸所を縱覽して居た連中が、俄かに波を打つて、右左に搖ぎ始める。喧嘩だ喧嘩だと云ふ聲がすると思ふと、人の袖を潜り拔けて來た、赤シャツの弟が、先生又喧嘩です、中學の方で、今朝の意趣返しをするんで、又師範の奴と決戰を始めた所です、早く來て下さいと云ひながら又人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行つて仕舞つた。
　山嵐は世話の焼ける小僧だ又始めたのか、いい加減にすればいゝのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見て居る譯にも行かないから取り鎭める積りだらう。おれは無論の事逃げる氣はない。山嵐の踵をふんであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が眞最中であ

る。師範の方は五六十人もあらうか、中學は慥かに三割方多い。師範は制服をつけてゐるが、中學は式後大抵は日本服に着換へてゐるから、敵味方はすぐわかる。然し入り亂れて組んづ、解れつ戰つてるから、どこから、どう手を附けて引き分けていゝか分らない。山嵐は困つたなと云ふ風で、暫らく此の亂雜な有樣を眺めて居たが、からなつちや仕方がない。巡査がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云ふから、おれは返事もしないでいきなり一番喧嘩の烈しさうな所へ躍り込んだ。止せ〳〵そんな亂暴をすると學校の體面に關はる。よさないかと、出る丈の聲を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、中々さう旨くは行かない。一二間這入つたら、出る事も引く事も出來なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中學生と組み合つてゐる。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持つて、無理に引き分けようとする途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握つた肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乘つた奴がある。兩手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乘つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がつて見ると、三間許り向うに山嵐の大きな身體が生徒の間に挾まりながら、止せ〳〵、喧嘩は止せ〳〵と揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つて見たが聞こえないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで來た石が、いきなりおれの頰骨へ中つたなと思つたら、後からも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出て居る、打て打てと云ふ聲がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げろ。と云ふ聲もする。おれは、なに生意氣な事をぬかすな、田舍者の癖にと、いきなり傍に居た師範生の頭を張りつけてやつた。石が又ひゆうと來る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後の方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。からなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめに這入つたんだがどやされたり、石をなげられたりして恐れ入つて引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長は小さくつても喧嘩の本場で修業を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり張り飛ばされたりして居ると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云ふ聲がした。今迄葛練りの中で泳いで居る樣に身動きも出來なかつたのが、急に樂になつたと思つたら、敵も味方も一度に引き上げて仕舞つた。田舍者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨い位である。

山嵐はどうしたかと見ると、紋附の一重羽織をずた〳〵にして、向うの方で鼻を拭いて居る。鼻柱をなぐられて大分出血したんださうだ。鼻がふくれ上がつて眞赤になつて頗る見苦しい。おれは飛白の袷を着て居たから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織程な損害はない。然し頰ぺたがぴり〳〵して堪らない。山嵐は大分血が出て居るぜと教へてくれた。

巡査は十五六名來たのだが、生徒は反對の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐丈である。おれらは姓名をつげて、一部始終を話したら、とも角も警察迄來いと云ふから警察へ行つて署長の前で事の顚末を述べて下宿へ歸つた。

十一

あくる日眼が覺めて見ると身體中痛くて堪らない。久しく喧嘩をしつけなかつたからこんなに答へるんだらう。これぢやあんまり自慢も出來ないと床の中で考へて居ると、婆さんが四國新聞を持つて來て枕元へ置いてくれた。實は

新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕樣があるものかと無理に腹這ひになつて、寐ながら、二頁を開けて見ると、驚いた。昨日の喧嘩がちやんと出て居る。喧嘩の出て居るのは驚かないのだが、中學の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意氣なる某とが、順良なる生徒を使嗾して、此騷動を喚起せるのみならず、兩人は現場にあつて生徒を指揮したる上漫りに師範生に向つて暴行を擅にしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本縣の中學は昔時より善良温順の氣風を以て全國の羨望する所なりしが、輕薄なる二豎子の爲に吾校の特權を毀損せられて、此不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つて其責任を問はざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に當局者は相當の處分を此無賴漢の上に加へて、彼等をして再び教育界に足を入るゝ餘地なからしむる事を。さうして一字毎にみんな黑點を加へて、御灸を据ゑた積りで居る。おれは床の中で、糞でも喰らへと云ひながら、むつくり飛び起きた。不思議な事に今迄身體の關節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れた樣に輕くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛げつけたが、まだ氣に入らなかつたから、わざ〳〵後架へ持つて行つて棄てて來た。新聞なんて無暗な嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺を吹くと云つて、新聞程の法螺吹きはあるまい。おれの云つて然る可き事をみんな向うで並べて居やがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云ふ名前の人があるか。考へて見ろ。是でも歷然とした姓もあり名もあるんだ。系圖が見たけりや多田滿仲以來の先祖を一人殘らず拜ましてやらあ。――顏を洗つたら、頰ぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞を御見たかなもしと聞く。讀んで後架へ棄てて來た。欲しけりや拾つて來いと云つたら、驚いて引き下がつた。鏡で顏を見ると昨日と同じ樣に傷がついてゐる。是でも大事な顏だ、顏へ傷まで附けられた上、生意氣なる某などと某呼ばはりをされゝば澤山だ。

今日の新聞に辟易して學校を休んだ抔と云はれちや一生の名折れだから、飯を食つていの一番に出頭した。出てくる奴も、出て來る奴もおれの顏を見て笑つてゐる。何が可笑しいんだ。貴樣達にこしらへて貰つた顏ぢやあるまいし。其うち、野だが出て來て、いや昨日は御手柄で、――名譽の御負傷でげすか、と送別會の時に擲つた返報と心得たのか、いやに冷かしたから、餘計な事を言はずに繪筆でも舐めて居ろと云つてやつた。するとこりや恐れ入りやした。然し嘸御痛い事でげせうと云ふから、痛からうが痛くなからうがおれの面だ。貴樣の世話になるもんかと怒鳴りつけてやつたら、向う側の自席へ着いて矢つ張りおれの顏を見て隣の歷史の教師と何か內所話しをして笑つてゐる。

夫から山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、紫色に膨脹して、掘つたら中から膿が出さうに見える。自惚の所爲か、おれの顏より餘つ程手ひどく遣られてゐる。おれと山嵐は机を並べて、隣同志の近しい仲で、御負けに其机が部屋の戸口から眞正面にあるんだから運がわるい。妙な顏が二つ塊まつてゐる。ほかの奴は退屈にさへなると乾度此方ばかり見る。飛んだ事でと口で云ふが、心のうちでは此馬鹿がと思つてるに相違ない。夫でなければあゝ云ふ風に私語き合つてはくす〳〵笑ふ譯がない。教場へ出ると生徒は拍手を以て迎へた。先生萬歲と云ふものが二三人あつた。景氣がいゝんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の燒點となつてるなかに、赤シヤツ許りは平常の通り傍へ來て、どうも飛んだ災

譲でした。僕は君等に對して御氣の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手續にして置いたから、心配しなくてもいゝ。僕の弟が堀田君を誘ひに行つたから、こんな事が起つたので、僕は實に申し譯がない。それで此件に就いては飽く迄盡力する積りだから、どうかあしからず、抔と半分謝罪的な言葉を竝べて居る。校長は三時間目に校長室から出て來て、困つた事を新聞がかき出しましたね。六づかしくならなければいゝがと多少心配さうに見えた。おれには心配なんかない。先で免職をするなら、免職される前に辭表を出して仕舞ふ丈だ。然し自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋を益增長させる譯だから、新聞屋を正誤させておれが意地にも務めるのが順當だと考へた。歸りがけに新聞屋に談判に行かうと思つたが、學校から取消の手續はしたと云ふから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計らつて、嘘のない所を一應説明した。校長と教頭はさうだらう、新聞屋が學校に恨を抱いて、あんな記事をことさらに掲げたんだらうと論斷した。赤シャツはおれらの行爲を辯解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいて居た。ことに自分の弟が山嵐を誘ひ出したのを自分の過失であるかの如く吹聽して居た。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、兩君は實に災難だと云つた。

歸りがけに山嵐は「君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられるぜ」と注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんぢやなからうと云ふと「君まだ氣が附かないか、きのふわざ／＼僕等を誘ひ出して、喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜ」と教へてくれた。成程そこ迄は氣がつかなかつた。山嵐は粗暴な樣だが、おれより智慧のある男だと感心した。

「あゝやつて喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかゝせたんだ。實に奸物だ」

「新聞迄も赤シャツか。そいつは驚いた。然し新聞が赤シャツの云ふ事をさう容易く聽くかね」

「聽かなくつて。新聞屋に友達が居りや譯はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても譯ないさ。嘘をついて、事實是々だと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本當に赤シャツの策なら、僕等は此事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辭表を出して直ぐ東京へ歸つちまはあ。こんな下等な所に頼んだつて居るのはいやだ」

「君が辭表を出したつて、赤シャツは困らない」

「それもさうだな。どうしたら困るだらう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも證據の擧がらない樣に、擧がらない樣にと工夫するんだから反駁するのは六づかしいね」

「厄介だな。それぢや濡衣を着るんだね。面白くもない。天道是耶非耶だ」

「まあ、もう二三日樣子を見ようぢやないか。夫で愈となつたら、溫泉の町で取つて抑へるより仕方がないだらう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「さうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑へるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手なんだから、萬事宜しく頼む。いざとなれば何でもする」

おれと山嵐は是で分かれた。赤シャツが果し

て山嵐の推察通りをやつたのなら、實にひどい奴だ。到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくつちや駄目だ。成程世界に戰爭は絶えない譯だ。個人でも、とゞの詰りは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披いて見ると、正誤所か取消も見えない。學校へ行つて狸に催促すると、あした位出すでせうと云ふ。明日になつて六號活字で小さく取消が出た。然し新聞屋の方で正誤は無論して居らない。又校長に談判すると、あれより手續のしやうはないのだと云ふ答だ。校長なんて狸の樣な顏をして、いやにフロック張つてゐるが存外無勢力なものだ。虚僞の記事を掲げた田舍新聞一つ詫らせる事が出來ない。あんまり腹が立つたから、それぢや私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すれば又惡口を書かれる計りだ。つまり新聞屋にかゝれた事は、うそにせよ、本當にせよ、詰りどうする事も出來ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説諭を加へた。新聞がそんな者なら、一日も早く打つ潰して仕舞つた方が、われ／＼の利益だらう。新聞にかゝれるのと、泥鼈に喰ひつかれるとが似たり寄つたりだとは今日只今狸の説明に因つて始めて承知仕つた。

夫から三日許りして、ある日の午後、山嵐が憤然とやつて來て、愈時機が來た、おれは例の計畫を斷行する積りだと云ふから、さうかそれぢやおれもやらうと、即座に一味徒黨に加盟した。所が山嵐が、君はよす方がよからうと首を傾けた。何故と聞くと君は校長に呼ばれて辭表を出せと云はれたかと尋ねるから、いや云はれない。君は？と聽き返すと、今日校長室で、まことに氣の毒だけれども、事情已むを得んから處決してくれと云はれたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓を叩き過ぎて、胃の位置が顛倒したんだ。君とおれは、一所に祝勝會へ出てさ、一所に高知のぴか／＼踴を見てさ、一所に喧嘩をとめに這入つたぢやないか。辭表を出せといふなら公平に兩方へ出せと云ふがいゝ。なんで田舍の學校はさう理窟が分らないんだらう。焦慮いな」

「それが赤シャツの指金だよ。おれと赤シャツとは今迄の行き掛り上到底兩立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思つてるんだ」

「おれだつて赤シャツと兩立するものか。害にならないと思ふなんて生意氣だ」

「君はあまり單純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化されると考へてるのさ」

「猶惡いや。誰が兩立してやるものか」

「夫に先達て古賀が去つてから、まだ後任が事故の爲に到着しないだらう。其上に君と僕を同時に追ひ出しちや、生徒の時間に明きが出來て、授業にさし支へるからな」

「夫ぢやおれを間のくさびに一席伺はせる氣なんだな。こん畜生、だれが其手に乘るものか」

翌日おれは學校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。

「何で私に辭表を出せと云はないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られて居る。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云ふ法がありますか」

「それは學校の方の都合で……」

「其都合が間違つてまさあ。私が出さなくつて濟むなら堀田だつて、出す必要はないでせう」

「其邊は説明が出來かねますが――堀田君は去られても已むを得んのですが、あなたは辭表を御出しになる必要を認めませんから」

成程狸だ、要領を得ない事ばかり竝べて、しかも落ち附き拂つてる。おれは仕樣がないから

「それぢや私も辭表を出しませう。堀田君一人辭職させて、私が安閑として留まつて居られると思つて入らつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出來ません」

「それは困る。堀田君も去りあなたも去つたら、學校の數學の授業が丸で出來なくなつて仕舞ふから……」

「出來なくなつても私の知つた事ぢやありません」

「君さう我儘を云ふものぢやない、少しは學校の事情も察して與れなくちや困る。夫に來てから一月立つか立たないのに辭職したと云ふと、君の將來の履歷に關係するから、其邊も少しは考へたらい〻でせう」

「履歷なんか構ふもんですか、履歷より義理が大切です」

「そりや御尤も——君の云ふ所は一々御尤もだが、わたしの云ふ方も少しは察して下さい。君が是非辭職すると云ふなら辭職されてもいゝから、代りのある迄どうかやつて貰ひたい。とにかく、うちでもう一返考へ直して見て下さい」

考へ直すつて、直し樣のない明々白々たる理由だが、狸が蒼くなつたり、赤くなつたりして、可哀相になつたから一先づ考へ直す事として引き下がつた。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つ附けるなら塊めて、うんと遣つ附ける方がいゝ。

山嵐に狸と談判した模樣を話したら、大方そんな事だらうと思つた。辭表の事はいざとなる迄其儘にして置いても差し支へあるまいとの話だつたから、山嵐の云ふ通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利口らしいから萬事山嵐の忠告に從ふ事にした。

山嵐は愈辭表を出して、職員一同に告別の挨拶をして濱の港屋迄下がつたが、人に知れない樣に引き返して、溫泉の町の枡屋の表二階へ潛んで障子へ穴をあけて覗き出した。是を知つてるものはおれ許りだらう。赤シャツが忍んで來ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒や其他の目があるから少くとも九時過ぎに極まつてる。最初の二晩はおれも十一時頃迄張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半迄覗いたが矢張り駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ歸る程馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奧さんの御有りるのに、夜遊びはおやめたがえゝぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ふ。こつちのは天に代つて誅戮を加へる夜遊びだ。とは云ふもの〻一週間も通つて、少しも驗が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をするが、其代り何によらず長持ちのした試しがない。如何に天誅黨でも飽きる事に變りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休まうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から十二時過ぎ迄は眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を睨めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人と色々な統計を示すのには驚いた。どうも來ない樣ぢやないかと云ふと、うん、慥かに來る筈だがと時々腕組をして溜息をつく。可哀相に、もし赤シャツが此所へ一度來てくれなければ、山嵐は、生涯天誅を加へる事は出來ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、先づ緩りと湯に入つて、夫から町で鷄卵を八つ買つた。是は下宿の婆さんの芋責めに應ずる策である。其玉子を四つ宛左右の袂へ入れて、例の赤手拭を肩へ乘せて、懷手をしながら、枡屋の階子段を登つて山嵐の座敷の障子をあけると、お

い有望有望と韋駄天の樣な顏は急に活氣を呈した。昨夜迄は少し寒ぎの氣味で、はたで見て居るおれさへ、陰氣臭いと思つた位だが、此顏色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴と云ふ藝者が角屋へ這入つた」

「赤シャツと一所か」

「いゝや」

「それぢや駄目だ」

「藝者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、あゝ云ふ狡い奴だから藝者を先へよこして後から忍んでくるかも知れない」

「さうかも知れない。もう九時だらう」

「今九時十二分許りだ」と帶の間からニッケル製の時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が寫つては可笑しい。狐はすぐ疑ぐるから」

おれは一閑張の机の上にあつた置き洋燈をふつと吹きけした。星明りで障子丈は少々あかるい。月はまだ出て居ない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息を凝らして居る。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。

「おい來るだらうかな。今夜來なければ僕はもう厭だぜ」

「おれは錢のつゞく限りやるんだ」

「錢つていくらあるんだい」

「今日迄で八日分五圓六十錢拂つた。いつ飛び出しても都合のいゝ樣に毎晩勘定するんだ」

「夫は手廻しがいゝ。宿屋で驚いてるだらう」

「宿屋はいゝが、氣が放せないから困る」

「其代り晝寐をするだらう」

「晝寐はするが、外出が出來ないんで窮屈で堪らない」

「天誅も骨が折れるな。是で天網恢々疎にして洩らしちまつたり、何かしちや、詰まらないぜ」

「なに今夜は屹度くるよ。——おい見ろ見ろ」と小聲になつたから、おれは思はずどきりとした。黑い帽子を戴いた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げた儘暗い方へ通り過ぎた。違つて居る。おや〳〵と思つた。其うち帳場の時計が遠慮もなく十時を打つた。今夜もとう〳〵駄目らしい。

世間は大分靜かになつた。遊廓で鳴らす太鼓が手に取る樣に聞こえる。月が溫泉の山の後からのつと顏を出した。往來はあかるい。すると、下の方から人聲が聞こえだした。窓から首を出す譯には行かないから、姿を突き留める事は出來ないが、段々近附いて來る模樣だ。からん〳〵と駒下駄を引き擦る音がする。眼を斜にするとやつと二人の影法師が見える位に近附いた。

「もう大丈夫ですね。邪魔ものは追つ拂つたから」正しく野だの聲である。「强がる許りで策がないから、仕樣がない」是は赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似て居ますね。あのべらんめえと來たら、勇み肌の坊つちやんだから愛嬌がありますよ」「增給がいやだの辭表が出したいのつて、ありやどうしても神經に異狀があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思ふ樣打ちのめして遣らうと思つたが、やつとの事で辛抱した。二人はハヽヽヽと笑ひながら、瓦斯燈の下を潛つて、角屋の中へ這入つた。

「おい」

「おい」

「來たぜ」

「とう〳〵來た」

「是で漸く安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊つちやん

だと抜かしやがつた」
「邪魔物と云ふのはおれの事だぜ、失敬千萬な」
　おれと山嵐は二人の歸路を要撃しなければならない。然し二人はいつ出て來るか見當がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られる樣にして置いてくれと頼んで來た。今思ふとよく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違へられる所だ。
　赤シャツの來るのを待ち受けたのはつらかつたが、出て來るのを凝として待つてるのは猶つらい。寐る譯には行かないし、始終障子の隙から睨めて居るのもつらいし、どうも、かうも心が落ちつかなくつて、是程難儀な思ひをした事は未だにない。いつその事角屋へ踏みこんで現場を取つて抑へようと發議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、亂暴者だと云つて途中で遮られる。譯を話して面會を求めれば居ないと逃げるか別室へ案内をする。不用意の所へ踏み込めると假定した所で何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云ふから、漸くの事でとう／＼朝の五時迄我慢した。
　角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下迄あるかなければならない。温泉の町をはづれると一丁許りの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすとこゝかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下迄通る土手へ出る。町さへはづれゝば、どこで追ひ附いても構はないが、可成なら、人家のない、杉並木で捕まへてやらうと、見えがくれについて來た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやての樣に後から追ひ附いた。何が來たかと驚いて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の氣味で逃げ出さうと云ふ氣色だつたから、おれが前へ廻つて行手を塞いで仕舞つた。
「教頭の職をもつてるものが何で角屋へ行つて泊まつた」と山嵐はすぐ詰りかけた。
「教頭は角屋へ泊まつて悪いといふ規則がありますか」と赤シャツは依然として丁寧な言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。
「取締上不都合だから、蕎麦屋や團子屋へさへ這入つて行かんと、云ふ位謹直な人が、なぜ藝者と一所に宿屋へ泊まり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出さうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊つちやんた何だ」と怒鳴り附けたら「いえ君の事を云つたんぢやないんです、全くないんです」と鐵面皮に言譯がましい事をぬかした。おれは此時氣がついて見たら兩手で自分の袂を握つてる。追つかける時に袂の中の卵がぶら／＼して困るから、兩手で握りながら來たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云ひながら、野だの面へ擲き附けた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だは餘つ程仰天した者と見えて、わつと言ひながら、尻持をついて、助けて吳れと云つた。おれは食ふ爲に玉子は買つたが、打つける爲に袂へ入れてる譯ではない。只肝癪のあまりに、ついぶつけるともなしに打つけて仕舞つたのだ。然し野だが尻持を突いた所を見て始めて、おれの成功した事に氣がついたから、此畜生、此畜生と云ひながら殘る六つを無茶苦茶に擲き附けたら、野だは顔中黄色になつた。
　おれが玉子をたゝきつけて居るうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。
「藝者を連れて僕が宿屋へ泊まつたと云ふ證

據がありますか」
「宵に貴樣のなじみの藝者が角屋へ這入つたのを見て云ふ事だ。胡魔化せるものか」
「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊まつたのである。藝者が宵に這入らうが、這入るまいが、僕の知つた事ではない」
「だまれ」と山嵐は拳骨を食らはした。赤シャツはよろ／＼したが「是は亂暴だ、狼藉である。理非を辨じないで腕力に訴へるのは無法だ」
「無法で澤山だ」とまたぽかりと撲る。「貴樣の樣な奸物はなぐらなくつちや、答へないんだ」とぽか／＼なぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据ゑた。仕舞ひには二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちら／＼するのか逃げようともしない。
「もう澤山か、澤山でなけりや、まだ撲つてやる」とぽかん／＼と兩人でなぐつたら「もう澤山だ」と云つた。野だに「貴樣も澤山か」と聞いたら「無論澤山だ」と答へた。
「貴樣等は奸物だから、かうやつて天誅を加へるんだ。これに懲りて以來つゝしむがいゝ。いくら言葉巧みに辯解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつてゐた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。
「おれは逃げも隱れもせん。今夜五時迄は濱の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云ふから、おれも「おれも逃げも隱れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてるから警察へ訴へたければ、勝手に訴へろ」と云つて、二人してすた／＼あるき出した。
　おれが下宿へ歸つたのは七時少し前である。部屋へ這入るとすぐ荷造りを始めたら、婆さんが驚いて、どう御爲るのぞなもしと聞いた。御婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答へて勘定をすまして、すぐ汽車へ乗つて濱へ來て港屋へ着くと、山嵐は二階で寐て居た。おれは早速辭表を書かうと思つたが、何と書いていゝか分らないから、私儀都合有之辭職の上東京へ歸り申候につき左樣御承知被下度候以上とかいて、校長宛にして郵便で出した。
　汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐう／＼寐込んで眼が覺めたら、午後二時であつた。下女に巡査は來ないかと聞いたら參りませんと答へた。「赤シャツも野だも訴へなかつたなあ」と二人で大きに笑つた。
　其夜おれと山嵐は此の不淨な地を離れた。船が岸を去れば去る程いゝ心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出た樣な氣がした。山嵐とはすぐ分かれたぎり今日迄逢ふ機會がない。
　清の事を話すのを忘れて居た。――おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げた儘、清や歸つたよと飛び込んだら、あら坊つちやん、よくまあ早く歸つて來て下さつたと涙をぽたぽたと落とした。おれも餘り嬉しかつたから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。
　其後ある人の周旋で街鐵の技手になつた。月給は二十五圓で、家賃は六圓だ。清は玄關附きの家でなくつても至極滿足の樣子であつたが氣の毒な事には今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら、坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

草枕

一

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣にちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容げて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも璆鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を淸くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく淸淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の覊絆を掃蕩するの點に於て、――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。――喜びの深きとき憂ひ愈深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寐る間も心配だらう。戀はうれしい、嬉しい戀が積もれば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかろ。閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考へがこゝ迄漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損なつた。平衡を保つ爲に、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せた樣な峰が聳えて居る。杉か檜か分らないが根本から頂き迄悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續ぎ目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿

山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る氣色はない。向うで聞かぬ上は乘り越すか、廻らなければならん。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら／＼と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下ろしたが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞こえる。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たたまれない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ氣が濟まんと見える。其上どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下ろすと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上がる雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上がる時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の聲を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ暗誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其二三句のなかにこんなのがある。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that
[tell of saddest thought.

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑ひといへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などと云ふ字がある。詩人だから萬斛で素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあらうが、無量

の悲しみも多からう。そんならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へのして眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣を取られて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭座して居る。呑氣なものだ。又考へをつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持ちになれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍る許りだ。蒲公英も其通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貰つて、開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂しませつゝあるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

戀はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當たれば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。從つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲には、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小說も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小說を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。

それすら、普通の芝居や小說では人情を免れぬ。苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ點に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽き〳〵した上に芝居や小說で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絕した小說は少からう。どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脫する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脫したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。獨坐幽篁裏、

彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寐込む樣な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人もみんな、西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を泛べて此桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分にはかう云ふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になる樣に思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも難有く考へられる。かうやつて、只一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵あるくのも全く之が爲である。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寐た男でもなからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢ふ。じん〳〵端折りの頰冠りや、赤い腰卷の姉さんや、時には人間より顏の長い馬に迄逢ふ。百萬本の檜に取り圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。夫所か、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の溫泉場だ。

唯、物は見樣でどうでもなる。レオナルド・ダ・ギンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見樣次第で如何樣とも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狹苦しく暮らした時とは違ふだらう。よし全く人情を離れる事が出來んでも、責めて御能拜見の時位な淡い心持ちにはなれさうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保證が出來ん。然しあれは情三分藝七分で見せるわざだ。我等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に寫す手際から出てくるのではない。其儘の上へ藝術といふ着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出來事と、旅中に出逢ふ人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう。丸で人情を棄てる譯には行くまいが、根が詩的に出來た旅だから、非人情のやり序に、可成節儉してそこ迄は漕ぎ附けたいものだ。南山や幽篁とは性の違つたものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事も出來まいが、可成元に近づけて、近づき得る限りは同じ觀察點から人間を視てみたい。芭蕉と云ふ男は枕元へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立てゝ發句にした。余も是から逢ふ人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——悉く大自然の點景として描き出されたものと假定して取りこなして見よう。尤も畫中の人物と違つて、彼等はおのがじゝ勝手な眞似をするだらう。然し普通の小說家の樣に其勝手な眞似の根本を探つて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。畫中の人間が動くと見れば差し支へない。畫中の人物はどう動いても平面

以外に出られるものでない。平面以外に飛び出して立方的に動くと思へばこそ、此方と衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなる程美的に見て居る譯に行かなくなる。是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電氣が無暗に双方で起らない樣にする。さうすれば相手がいくら動いても、こちらの懐には容易に飛び込めない譯だから、つまりは畫の前へ立つて、畫中の人物が畫面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ譯になる。間三尺も隔てて居れば落付いて見られる。あぶな氣なしに見られる。言を換へて云へば、利害に氣を奪はれないから、全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出來る。餘念もなく美か美でないかと鑑識する事が出來る。

こゝ迄決心をした時、空があやしくなつて來た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸かつて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過ごして、今は山と山の間を行くのだが、雨の絲が濃やかで殆ど霧を欺く位だから、隔りはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく／＼顔を出す。出すかと思ふと、隱れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外廣くなつて、且平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり／＼と落つる頃、五六間先から、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の樣に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋毎に風に捲かれる樣迄が目に入る。羽織はとくに濡れ盡して肌着に浸み込んだ水が、身體の温度で生暖く感ぜられる。氣持ちがわるいから、帽を傾けてすた／＼歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも咏まれる。有體なる己を忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮ばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めは帽を傾けて歩行いた。後には唯足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る／＼歩行いた。雨は滿目の樹梢を搖かして四方より孤客に逼る。非人情がちと强過ぎた樣だ。

二

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から釣るされて、屈託氣にふらり／＼と揺れる。下に駄菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せて

ある臼の上に、ふくれて居た鷄が、驚いて眼をさます。クヽヽ、クヽヽと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が、今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。鷄は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄驅けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。丸で余を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。床几の上には一升桝程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に歇まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るには極まつてゐる。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつ迄も待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。こゝらが非人情で面白い。其上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸りを五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞むに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、其表情はぴしやりと心のカメラへ燒き附いて仕舞つた。茶店の婆さんの顔は此寫眞に血を通はした程似て居る。

「お婆さん、此所を一寸借りたよ」

「はい、是は一向、存じませんで」

「大分降つたね」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おゝ／＼大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ」

「そこをもう少し燃し附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しつ／＼と二聲で鷄を追ひ下げる。こゝゝゝと驅け出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか刳り拔き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に燒き附けられて居る。

「御菓子を」と今度は鷄の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り殘されてゐた。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懐から寫生帖を取り出して、婆さんの横顔を寫しながら、話しをしかける。

「閑靜でいゝね」

「へえ、御覽の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「えゝ毎日の樣に鳴きます。此邊は夏も鳴きます」

「聞きたいな、ちつとも聞こえないと猶聞きたい」

「生憎今日は――先刻の雨で何處ぞへ逃げまし

た。

折から、竈のうちが、ぱち／＼と鳴つて、赤い火が颯と風を起こして一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。嘸御寒かろ」と云ふ。軒端を見ると青い烟が、突き當たつて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持ちだ。御蔭で生き返つた」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に𡽶岏と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。

余はまづ天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に兩方を見比べた。畫家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の媼と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪の圖を見たとき、理想の婆さんは物凄いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考へた。寶生の別會能を觀るに及んで、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めて名人の刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落としたが、老人もかうあらはせば、豐かに、穏やかに、あたゝかに見える。金屏にも、春風にも、あるは櫻にもあしらつて差し支へない道具である。余は天狗巖よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指さしてゐる、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が寫生帖を取り上げて、今暫らくといふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に寫生帖を、火にあてて乾かしながら、

「御婆さん、丈夫さうだね」と訊ねた。

「はい難有い事に達者で――針も持ちます、苧もうみます、御團子の粉も磨きます」

此御婆さんに石臼を挽かして見たくなつた。然しそんな注文も出來ぬから、

「こゝから那古井迄は一里足らずだつたね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合はなければ、少し逗留しようかと思ふが、まあ氣が向けばさ」

「いえ、戰爭が始まりましてから、頓と參るものは御座いません。丸で締め切り同樣で御座います」

「妙な事だね。それぢや泊めて呉れないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたつた一軒だつたね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隱居所だかわかりません」

「ぢや御客がなくても平氣な譯だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前一寸行つた事がある」

會話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鷄を靜かに寫生して居ると、落ち附いた耳の底へちやらん／＼と云ふ馬の鈴が聞こえ出した。此聲がおのづと、拍子をとつて頭の中に一種の調子が出來る。眠りながら、夢に隣の臼の音に誘はれる樣な心持ちである。余は鷄の寫生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六疋逢つた。逢つた五六疋は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らして居る。今の世の馬とは思はれない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に氣樂な響がこもつて、どう考へても畫にかいた聲だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と今度は斜に書き附けたが、書いて見て、是は自分の句でないと氣が附いた。

「又誰ぞ來ました」と婆さんが半ば獨り言の樣に云ふ。

只一條の春の路だから、行くも歸るも皆近附きと見える。最前逢うた五六疋のちやらん／＼も悉く此婆さんの腹の中で又誰ぞ來たと思はれては山を下り、思はれては山を登つたのだらう。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭へば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からちやらん／＼を數へ盡して、今日の白頭に至つたのだらう。

馬子唄や白髮も染めで暮るゝ春

と次のページへ認めたが、是では自分の感じを云ひ終せない、もう少し工夫のありさうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考へた。何でも白髮といふ字を入れて、幾代の節と云ふ句を入れて、馬子唄といふ題も入れて、春の季も加へて、それを十七字に纏めたいと工夫して居るうちに、

「はい、今日は」と實物の馬子が店先に留まつて大きな聲をかける。

「おや源さんか。又城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「さうさ、鍛冶町を通つたら、娘に靈巖寺の御札を一枚もらつてきて御呉れなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。――お秋さんは善い所へ片附いて仕合せだ。な、叔母さん」

「難有い事に今日には困りません。まあ仕合せと云ふのだらうか」

「仕合せとも、御前。あの那古井の孃さまと比べて御覽」

「本當に御氣の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合がいゝかい」

「なあに、相變らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。

枝繁き山櫻の葉も花も、深い空から落ちた儘なる雨の塊りを、しつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たゝまれずに、假りの住居を、さら／＼と轉げ落ちる。馬は驚いて、長い鬣を上下に振る。

「コーラッ」と叱り附ける源さんの聲が、ちやらん、ちやらんと共に余の冥想を破る。

御婆さんが云ふ。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼先に散らついて居る。裾模樣の振袖に、高島田で、馬に乘つて……」

「さうさ、船ではなかつた。馬であつた。矢張り此所で休んで行つたな、叔母さん」

「あい、其櫻の下で孃樣の馬がとまつたとき、櫻の花がほろ／＼と落ちて、折角の島田に斑が出來ました」

余は又寫生帖をあける。此景色は畫にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、當時の樣を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書き附ける。不思議な事には衣裳も髮も馬も櫻もはつきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思ひつけなかつた。しばらくあの顔か、この顔か、と思案して居るうちに、ミレーのかいた、オフエリヤの面影が忽然と出て來て、高島田の下へすぽりとはまつた。是は駄目だと、折角の圖面を早速取り崩す。衣裳も髮も馬も櫻も一瞬間に心の道具立から綺麗に立ち退いたが、オフエリヤの合掌して水の上を流れて行く姿丈は、朦朧と胸の底に殘つて、棕梠箒で烟を拂ふ樣に、さつぱりしなかつた。空に尾を曳く彗星の何となく妙な氣になる。

「それぢや、まあ御免」と源さんが挨拶する。

「歸りに又御寄り。生憎の降りで七曲りは難儀だろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行き出す。源さんの馬も歩行き出す。ぢやらん〳〵。
「あれは那古井の男かい」
「はい、那古井の源兵衞で御座んす」
「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乘せて、峠を越したのかい」
「志保田の孃樣が城下へ御輿入のときに、孃樣を青馬に乘せて、源兵衞が轡綱を牽いて通りました。――月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」
鏡に對ふときのみ、わが頭の白きを喞つものは幸の部に屬する人である。指を折つて始めて、五年の流光に、轉輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としては寧ろ仙に近づける方だらう。余は斯う答へた。
「嘸美しかつたらう。見にくればよかつた」
「ハヽヽ今でも御覽になれます。湯治場へ御越しなされば、屹度出て御挨拶をなされませう」
「はあ、今では里に居るのかい。矢張り振袖を着て、高島田に結つて居ればいゝが」
「たのんで御覽なされ。着て見せましよ」
余はまさかと思つたが、婆さんの樣子は存外眞面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云ふ。
「孃樣と長良の乙女とはよく似て居ります」
「顏がかい」
「いゝえ。身の成り行きがで御座んす」
「へえ、其長良の乙女と云ふのは何者かい」
「昔此村に長良の乙女と云ふ、美しい長者の娘が御座りましたさうな」
「へえ」
「所が其娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」
「なる程」
「さゝだ男に靡かうか、さゝべ男に靡かうかと、娘はあけくれ思ひ煩つたが、どちらへも靡きかねて、とう〳〵

あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも

と云ふ歌を咏んで、淵川へ身を投げて果てました」
余はこんな山里へ來て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉で、こんな古雅な話をきかうとは思ひがけなかつた。
「是から五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。序に長良の乙女の墓を見て御行きなされ」
余は心のうちに是非見て行かうと決心した。
婆さんは、そのあとを語りつゞける。
「那古井の孃樣にも二人の男が祟りました。一人は孃樣が京都へ修行に出て御出での頃御逢ひなさつたので、一人はこゝの城下で隨一の物持で御座んす」
「はあ、御孃さんはどつちへ靡いたかい」
「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由もありましたろが、親御樣が無理にこちらへ取り極めて……」
「目出度、淵川へ身を投げんでも濟んだ譯だね」
「所が――先方でも器量望みで御貰ひなさつたのだから、隨分大事にはなすつたかも知れませぬが、もと〳〵強ひられて御出でなさつたのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御心配の樣子で御座んした。所へ今度の戰爭で、旦那樣の勤めて御出での銀行がつぶれました。それから孃樣は又那古井の方へ御歸りになります。世間では孃樣の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内氣の優しいかたが、此頃では大分氣が荒くなつて、何だか心配だと源兵衞が來るたびに申します。……」
是からさきを聞くと、折角の趣向が壞れる。漸く仙人になりかけた所を、誰か來て羽衣を

返せ〳〵と催促する樣な氣がする。七曲りの險を冒して、やつとの思ひで、こゝ迄來たものを、さう無暗に俗界に引きずり下ろされては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭ひが毛孔から染み込んで、垢で身體が重くなる。
「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十錢銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。
「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁程の近道になります。路はわるいが、御若い方には其方がよろしかろ。――是は多分に御茶代を――氣を附けて御越しなされ」

三

昨夕は妙な氣持ちがした。
宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭の作り方は無論、東西の區別さへわからなかつた。何だか廻廊の樣な所をしきりに引き廻されて、仕舞ひに六疊程の小さな座敷に入れられた。昔來た時とは丸で見當が違ふ。晩餐を濟まして、湯に入つて、室へ歸つて茶を飲んで居ると、小女が來て床を延べよかと云ふ。
不思議に思つたのは、宿へ着いた時の案内も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒も、悉く此小女一人で辨じて居る。それで口は滅多にきかぬ。と云うて、田舍染みても居らぬ。赤い帶を色氣なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下の樣な、梯子段の樣な所をぐる〳〵廻らされた時、同じ帶の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、既に自分ながら、カンヷスの中を往來して居る樣な氣がした。
給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つて居る部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい言葉を述べて、出て行つたが、其足音が、例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠ざかつた時に、あとがひつそりとして、人の氣がしないのが氣になつた。
生れてから、こんな經驗はたゞ一度しかない。昔房州を館山から向うへ突き拔けて、上總から銚子迄濱傳ひに歩行いた事がある。其時ある晩、ある所へ宿まつた。ある所と云ふより外に言ひ樣がない。今では土地の名も宿の名も、丸で忘れて仕舞つた。第一宿屋へとまつたのかが問題である。棟の高い大きな家に女がたつた二人居た。余がとめるかと聞いたとき、年を取つた方がはいと云つて、若い方が此方へと案内をするから、ついて行くと、荒れ果てた、廣い間をいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入らうとすると、板庇の下に傾きかけて居た一叢の修竹が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、既にひやりとした。椽板は既に朽ちかゝつて居る。來年は筍が椽を突き拔いて座敷のなかは竹だらけにならうと云つたら、若い女が何も云はずににや〳〵と笑つて、出て行つた。
其晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寐られない。障子をあけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明らかなるに、眼を走らせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に續いて居る。草山の向うはすぐ大海原でどゝん〳〵と大きな濤が人の世を威嚇かしに來る。余はとうと夜の明ける迄一睡もせずに、怪し氣な蚊帳のうちに辛抱しながら、丸で草双紙にでもありさうな事だと考へた。
其後旅も色々したが、こんな氣持になつた事は、今夜この那古井へ宿まる迄はかつて無かつた。
仰向けに寐ながら、偶然眼を開けて見ると欄

間に、朱塗の縁をとつた額がかゝつてゐる、文字は寐ながらも竹影拂階塵不動と明かに讀まれる。大徹といふ落款も慥かに見える。余は書に於ては皆無鑑識のない男だが、平生から、黄檗の高泉和尚の筆致を愛して居る。隱元も即非も木庵も夫々に面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今此七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思はれない。しかし現に大徹とあるからには別人だらう。ことによると黄檗に大徹といふ坊主が居たかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかゝつてゐる若冲の鶴の圖が目につく。是は商賣柄丈に、部屋に這入つた時、既に逸品と認めた。若冲の圖は大抵精緻な彩色ものが多いが、此鶴は世間に氣兼なしの一筆がきで、一本足ですらりと立つた上に、卵形の胴がふはつと乘つかつてゐる樣子は、甚だ吾意を得て、飄逸の趣は、長い嘴のさき迄籠つてゐる。床の隣は違ひ棚を略して、普通の戸棚につづく。戸棚の中には何があるか分らない。

すや〳〵と寐入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乘つて、峠を越すと、いきなり、さゝだ男と、さゝべ男が飛び出して兩方から引つ張る。女が急にオフエリヤになつて、柳の枝へ上つて、河の中を流れながら、うつくしい聲で歌をうたふ。救つてやらうと思つて、長い竿を持つて、向島を追つ懸けて行く。女は苦しい樣子もなく、笑ひながら、うたひながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おい〳〵と呼ぶ。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出てゐる。妙に雅俗混淆な夢を見たものだと思つた。昔宋の大慧禪師と云ふ人は、悟道の後、何事も意の如くに出來ん事はないが、只夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたさうだが、成程尤もだ。文藝を生命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢では大部分畫にも詩にもならんと思ひながら、寐返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜に影をひたしてゐる。冴える程の春の夜だ。

氣の所爲か、誰か小聲で歌をうたつてる樣な氣がする。夢のなかの歌が、此世へ拔け出したのか、或は此世の聲が遠き夢の國へ、うつゝながらに紛れ込んだのかと耳を峙てる。慥かに誰かうたつてゐる。細く且低い聲には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷の脈をかすかに搏たせつゝある。不思議な事に、其調子はとにかく、文句をきくと――枕元でやつてるのでないから、文句のわかりやうはない。――其の聞こえぬ筈のものが、よく聞こえる。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良の乙女の歌を、繰り返し繰り返す樣に思はれる。

初めのうちは椽に近く聞こえた聲が、次第次第に細く遠退いて行く。突然と已むものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふつつりと思ひ切つたる聲をきく人の心には矢張りふつつりと思ひ切つたる感じが起る。是と云ふ句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われも亦秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫の如く、消えんとしては、消えんとする燈火の如く、今已むか已むかとのみ心を惱す此歌の奥には、天下の春の恨みを悉く萃めたる調べがある。

今迄は床の中に我慢して聞いて居たが、聞く聲の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるると知りつゝも、其聲を追ひかけたくなる。細くなればなる程、耳丈になつても、あとを慕つ

て飛んで行きたい氣がする。もうどう焦慮つても五官に應へはあるまいと思ふ一刹那の前、余は堪らなくなつて、われ知らず布團をすり拔けると共にさらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜に月の光を浴びる。寐卷の上にも木の影が搖れながら落ちた。

障子をあけた時には、そんな事には氣が附かなかつた。あの聲はと、耳の走る見當を見破ると――向うに居た。花ならば海棠かと思はるゝ幹を背に、よそ〳〵しくも月の光を忍んで朦朧たる影法師が居た。あれかと思ふ意識さへ、確とは心にうつらぬ間に、黑いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わが居る部屋つゞきの棟の角が、すらりと動く、春の高い女姿を、すぐに遮つて仕舞ふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつた儘、しばらく茫然として居たが、やがて我に歸ると、山里の春は中々寒いものと悟つた。ともかくもと拔け出でた布團の穴に、再び歸參して考へ出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考へ出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるひは此家の御孃さんかも知れない。然し出歸りのお孃さんとしては夜なかに山つゞきの庭へ出るのがちと不穩當だ。何にしても中中寐られない。枕の下にある時計迄がちく〳〵口をきく。今迄懷中時計の音の氣になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考へろ、さあ考へろと催促する如く、寐るな寐るなと忠告する如く口をきく。怪しからん。

怖いものも只怖いもの其儘の姿と見れば詩になる。凄い事も、己を離れて、只單獨に凄いのだと思へば畫になる。失戀が藝術の題目となるのも全くその通りである。失戀の苦しみを忘れて、其のやさしい所やら、同情の宿る所やら、憂のこもる所やら、一歩進めて云へば失戀の苦しみ其物の溢るゝ所やらを、單に客觀的に眼前に思ひ浮べるから文學美術の材料になる。世には有りもせぬ失戀を製造して、自ら強ひて煩悶して、愉快を貪るものがある。常人は之を評して愚だと云ふ、氣違ひだと云ふ。然し自ら不幸の輪廓を描いて好んで其中に起臥するのは、自ら烏有の山水を刻畫して壺中の天地に歡喜すると、其の藝術的の立脚地を得たる點に於て全く等しいと云はねばならぬ。この點に於て世上幾多の藝術家は　日常の人としてはいざ知らず）藝術家として常人よりも愚である、氣違ひである。われ〳〵は草鞋旅行をする間、朝から晩迄苦しい、苦しいと不平を鳴らしつゞけて居るが、人に向つて曾遊を說く時分には、不平らしい樣子は少しも見せぬ。面白かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさへ得意に喋々して、したり顏である。これは敢て自ら欺くの、人を僞るのと云ふ了見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときは既に詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起る。して見ると、四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して、三角のうちに住むのを藝術家と呼んでもよからう。

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の辟易して近づき難しとなす所に於て、藝術家は無數の琳琅を見、無上の寶璐を知る。俗に之を名づけて美化と云ふ。其實は美化でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に實在して居る。只一翳眼に在つて空花亂墜するが故に、俗累の羈絏牢として絶ち難きが故に、榮辱得喪のわれに逼る事、念々切なるが故に、ターナーが汽車を寫す迄は汽車の美を解せず、應擧が幽靈を描く迄は幽靈の美を知らずに打ち過ぎるのである。

余が今見た影法師も、只それ限りの現象とす

れば、誰が見ても、誰に聞かしても饒かに詩趣を帶びて居る。――孤村の溫泉、――春宵の花影、――月前の低誦、――朧夜の姿――どれも是も藝術家の好題目である。此好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮議立てをして、餘計な探りを投げ込んで居る。折角の雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、氣味の惡さが踏み附けにして仕舞つた。こんな事なら、非人情も標榜する價値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも畫家とも人に向つて吹聽する資格はつかぬ。昔以太利亞の畫家サルヷトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危險を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と畫帖を懷にして家を出でたからには、余にも其位の覺悟がなくては恥づかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に歸れるかと云へば、おのれの感じ、其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一歩退いて有體に落ち附いて、他人らしく之を檢査する餘地さへ作ればいゝのである。詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、其病狀を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめて見るのが一番いゝ。十七字は詩形として尤も輕便であるから、顏を洗ふ時にも、厠に上つた時にも、電車に乘つた時にも、容易に出來る。十七字が容易に出來ると云ふ意味は安直に詩人になれると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから輕便だと云つて侮蔑する必要はない。輕便であればある程功德になるから却つて尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所をすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちが既に他人に變じて居る。腹を立つたり、俳句を作つたり、さう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす。此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出來る男だと云ふ嬉しさ丈の自分になる。

是が平生から余の主張である。今夜も一つ此主張を實行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出來たら書きつけないと散漫になつて行かぬと、念入りの修業だから、例の寫生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と眞先に書き附けて讀んで見ると、別に面白くもないが、さりとて氣味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやつたが、是は季が重なつて居る。然し何でも構はない、氣が落ち附いて呑氣になればいゝ。夫から「正一位、女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分ながら可笑しくなつた。

此調子なら大丈夫と乘氣になつて出る丈の句をみなかき附ける。

春の星を落して夜半のかざしかな
春の夜の雲に濡らすや洗ひ髮
春や今宵歌つかまつる御姿
海棠の精が出てくる月夜かな
うた折々月下の春をちこちす
思ひ切つて更け行く春の獨りかな

と、試みて居るうち、いつしか、うと／＼眠くなる。

恍惚と云ふのが、こんな場合に用ひるべき形容詞かと思ふ。熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覺の際には誰あつて外界を忘るゝものはなからう。只兩域の間に縷の如き幻境が横たはる。醒めたりと云ふには餘り朧にて、眠ると評せんには少しく生氣を剩す。起臥の二界を同瓶裏に盛りて、詩歌の彩管を以て、ひたすらに攪き雜ぜたるが如き狀態を云ふの

である。自然の色を夢の手前迄ぼかして、有の儘の宇宙を一段、霞の國へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、ありとある實相の角度を滑らかにすると共に、かく和らげられたる乾坤に、われからと微かに鈍き脈を通はせる。地を這ふ煙の飛ばんとして飛び得ざる如く、わが魂の、わが殼を離れんとして離るゝに忍びざる態である。拔け出でんとして逡巡ひ、逡巡ひては拔け出でんとし、果ては魂と云ふ個體を、もぎどうに保ちかねて、氤氳たる瞑氣が散るともなしに四肢五體に纏綿して、依々たり戀々たる心持ちである。

余が寤寐の境にかく逍遙して居ると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしの如く女の影がふうと現はれた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。只心地よく眺めて居る。眺めると云うては些と言葉が強過ぎる。余が閉ぢて居る瞼の裏に幻影の女が斷りもなく滑り込んで來たのである。まぼろしはそろり／＼と部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、疊の上には人らしい音も立たぬ。閉づる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髮の濃い、襟足の長い女である。近頃はやる、ぼかした寫眞を灯影にすかす樣な氣がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべつて暗闇のなかにほのめいた。戸棚が又しまる。疊の波がおのづから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉た。余が眠りは次第に濃やかになる。人の死して、まだ牛にも馬にも生れ變らない途中はこんなであらう。

いつ迄人と馬の相中に寐てゐたかわれは知らぬ。耳元にきゝつと女の笑ひ聲がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落とされて、天下は隅から隅迄明るい。うらゝかな春日が丸窓の竹格子を黑く染めぬいた樣子を見ると、世の中に不思議と云ふものの潛む餘地はなささうだ。神秘は十萬億土へ歸つて、三途の川の向ふ側へ渡つたのだらう。

浴衣の儘、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顏を浮かして居た。洗ふ氣にも、出る氣にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになつたのだらう。晝と夜を界にかう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身體を拭くさへ退儀だから、いゝ加減にして、濡れた儘上がつて、風呂場の戸を内から開けたら、又驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寐られましたか」

戸を開けるのと、此言葉とは殆ど同時にきた。人の居るさへ豫期して居らぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る遑さへないうちに、

「さあ、御召しなさい」

と後へ廻つて、ふはりと余の背中へ柔らかい着物をかけた。漸くの事「是は難有う……」丈出して、向き直る途端に、女は二三歩退いた。

昔から小說家は必ず主人公の容貌を極力描寫することに相場が極まつてる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列擧したならば、大藏經と其量を爭ふかも知れぬ。此辟易すべき多量の形容詞中から、余と三歩の隔りに立つ、體を斜に捩つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めて居る女を、尤も適當に敍すべき用語を拾ひ來つたなら、どれ程の數になるか知れない。然し生れて三十餘年の今日に至るまで未だかつて、かゝる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に歸するさうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思ふ。動けばどう變化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬ所に餘韻が縹緲

と存するから含蓄の趣を百世の後に伝ふるのであらう。世上幾多の尊厳と威儀とは此湛然たる可能力の裏面に伏在して居る。動けばあらはれる。あらはれれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、既に一となり、二となり、三となつた暁には、拖泥帯水の陋を遺憾なく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。此故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の漫画も全く此動の一字で失敗して居る。動か静か。是がわれ等画工の運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵此二大範疇のいづれにか打ち込む事が出来べき筈だ。

所が此女の表情を見ると、余はいづれとも判断に迷つた。口は一文字に結んで静かである。眼は五分のすきさへ見出だすべく動いて居る。顔は下膨れの瓜実形で、豊かに落ち付きを見せてゐるに引き替へて、額は狭苦しくも、こせ付いて、所謂富士額の俗臭を帯びて居る。のみならず眉は両方から逼つて、中間に数滴の薄荷を点じたる如く、ぴく〳〵焦慮て居る。鼻ばかりは軽薄に鋭くもない、遅鈍に丸くもない。画にしたら美しからう。かやうに別れ〳〵の道具が皆一癖あつて、乱調にどや〳〵と余の双眼に飛び込んだのだから迷ふのも無理はない。

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起つて、全体が思はず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどらうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつゞけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有様が――そんな有様がもしあるとすれば丁度此女を形容する事が出来る。

それだから軽侮の裏に、何となく人に縋りたい気色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ、気を負へば百人の男子を物の数とも思はぬ勢の下から温和しい情が吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷ひが一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る体だ。此女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、此女の世界に統一がなかつたのだらう。不幸に圧しつけられながら、其不幸に打ち勝たうとしてゐる顔だ。不仕合せな女に違ひない。

「難有う」と繰り返しながら、一寸会釈した。

「ほゝ、御部屋は掃除がしてあります。往つて御覧なさい。いづれ後程」

と云ふや否や、ひらりと、腰をひねつて、廊下を軽気に馳けて行つた。頭は銀杏返しに結つてゐる。白い襟がたぼの下から見える。帯の黒繻子は片側丈だらう。

四

ぽかんと部屋へ帰ると、成程綺麗に掃除がしてある。一寸気がゝりだから、念の為め戸棚をあけて見る。下には小さな用箪笥が見える。上から友禅の扱帯が半分垂れかゝつて居るのは、誰か衣類でも取り出して、急いで出て行つたものと解釈が出来る。扱帯の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隠和尚の遠良天釜と、伊勢物語の一巻が並んでる。昨夕のうつゝは事実かも知れないと思つた。

何気なく座布団の上へ坐ると、唐木の机の上に例の写生帖が、鉛筆を挟んだ儘、大事さうにあけてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だらうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝烏」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる、男にしては柔らか過ぎる。おやと

又吃驚する。次を見ると「花の影、女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」の下には「御曹子女に化けて朧月」とある。真似をした積りか、添削した気か、風流の交はりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思はず首を傾けた。

後程と云つたから、今に飯の時にでも出て来るかも知れない。出て来たら様子が少しは解るだらう。ときに何時だなと時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寝たものだ。是では午飯丈で間に合はせる方が胃の為めによからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名残はどの辺かなと眺める。海棠と鑑定したのは、果して海棠であるが、思つたよりも庭は狭い。五六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよささうだ。左は山つゞきの崖に赤松が斜に岩の間から庭の上へさし出して居る。海棠の後には一寸した茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠を春の日に曝して居る。右手は屋の棟で遮られて、見えぬけれども、地勢から察すると、だら〳〵下りに風呂場の方へ落ちて居るに相違ない。

山が尽きて、岡となり、岡が尽きて、幅三丁程の平地となり、其平地が尽きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ行つて又隆然と起き上がつて、周囲六里の摩耶島となる。是が那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来る丈崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ囲ひ込んだ一構であるから、前面は二階でも、後は平屋になる。椽から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は階子段を無暗に上つたり、下つたり、異な仕掛の家と思つた筈だ。

今度は左側の窓をあける。自然と凹む二畳許りの岩のなかに春の水がいつともなく、たまつて静かに山桜の影を蘸して居る。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向うに枸杞とも見える生垣があつて、外は浜から岡へ上る岨道か、時々人声が聞こえる。往来の向うはだら〳〵と南下がりに蜜柑を植えて、谷の窮まる所に又大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとは此時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石磴が五六段手にとる様に見える。大方御寺だらう。

入口の襖をあけて椽へ出ると、欄干が四角に曲がつて、方角から云へば海の見ゆべき筈の所に、中庭を隔てて、表二階の一間がある。わが住む部屋も、欄干に倚れば矢張り同じ高さの二階なのには興が催される。湯壺は地の下にあるのだから、入湯と云ふ点から云へば、余は三層楼上に起臥する訳になる。

家は随分広いが、向う二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室台所は知らず、客間と名がつきさうなのは大抵閉て切つてある。客は、余をのぞくの外、殆ど皆無なのだらう。締めた部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。是では表の戸締りさへ、するかしないか解らん。非人情の旅にはもつて来いと云ふ屈強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯を食はせる気色は更にない。漸く空腹を覚えて来たが、空山不見人と云ふ詩中にあると思ふと、一かたけ位倹約しても遺憾はない。画をかくのも面倒だ、俳句は作らんでも既に俳三昧に入つて居るから、作る丈野暮だ。読まうと思つて三脚几に括りつけて来た二三冊の書籍もほどく気にならん。かうやつて、煦々たる春日に背中をあぶつて、椽側に花の影と共に寝ころんで居るのが、天下の至楽である。考へれば外道に堕ちる。動くと危ない。出来るならば鼻から呼吸もしたくない。畳から根の生えた植物のやうになつて二週間許り暮らして見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か

上がつてくる。近づくのを聞いてゐると、二人らしい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人は何も云はず、元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、矢張り昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。
「遅くなりました」と膳を据ゑる。朝食の言譯も何も言はぬ。焼肴に青いものをあしらつて、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め抜かれた海老を沈ませてある。あゝ好い色だと思つて、椀の中を眺めて居た。
「御嫌ひか」と下女が聞く。
「いゝや、今に食ふ」と云つたが實際食ふのは惜しい氣がした。ターナーが或晩餐の席で、皿に盛るサラドを見詰めながら、涼しい色だ、是がわしの用ひる色だと傍の人に話したと云ふ逸事をある書物で讀んだ事があるが、此の海老と蕨の色を一寸ターナーに見せてやりたい。一體西洋の食物で色のいゝものは一つもない。あればサラドと赤大根位なものだ。滋養の點から云つたらどうか知らんが、畫家から見ると頗る發達せん料理である。そこへ行くと日本の獻立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物綺麗に出來る。會席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めた儘歸つても、目の保養から云へば、御茶屋へ上がつた甲斐は充分ある。
「うちに若い女の人が居るだらう」と椀を置きながら、質問をかけた。
「へえ」
「ありや何だい」
「若い奥樣で御座んす」
「あの外にまた年寄の奥樣が居るのかい」
「去年御亡くなりました」
「旦那さんは」
「居ります。旦那さんの娘さんで御座んす」
「あの若い人がかい」
「へえ」
「御客は居るかい」
「居りません」
「わたし一人かい」
「へえ」
「若い奥さんは毎日何をして居るかい」
「針仕事を……」
「夫から」
「三味を彈きます」
是は意外であつた。面白いから又
「夫から」と聞いて見た。
「御寺へ行きます」と小女郎が云ふ。
是は又意外である。御寺と三味線は妙だ。
「御寺詣りをするのかい」
「いゝえ、和尚樣の所へ行きます」
「和尚さんが三味線でも習ふのかい」
「いゝえ」
「ぢや何をしに行くのだい」
「大徹樣の所へ行きます」
なある程、大徹と云ふのは此額を書いた男に相違ない。此句から察すると何でも禪坊主らしい。戸棚に遠良天釜があつたのは、全くあの女の所持品だらう。
「此部屋は普段誰か這入つて居る所かね」
「普段は奥樣が居ります」
「それぢや、昨夕、わたしが來る時迄こゝに寐たのだね」
「へえ」
「それは御氣の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのだい」
「知りません」
「それから」
「何で御座んす」
「それから、まだ外に何かするのだらう」
「それから、色々……」
「色々つて、どんな事を」
「知りません」

會話は是で切れる。飯は漸く了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開けたら、中庭の栽込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳觀音の樣に下を見詰めて居た。今朝に引き替へて、甚だ靜かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通はないから、相好に斯程な變化を來したものであらうか。昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云つたさうだが、成程人焉んぞ廋さんや、人間のうちで眼程活きて居る道具はない。寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる。途端にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余の方に轉じた。視線は毒矢の如く空を貫いて、會釋もなく余が眉間に落ちる。はつと思ふ間に、小女郎が、又はたと襖を立て切つた。あとは至極呑氣な春となる。
余は又ごろりと寐ころんだ。忽ち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,
Lost ere the kindling of dawn,
To travellers journeying on,
The shutting of thy fair face from [my sight.

と云ふ句であつた。もし余があの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢はんと思ふ矢先に、今の樣な一瞥の別れを、魂消ゆる迄に、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだらう。其上に

Might I look on thee in death,
With bliss I would yield my breath.

と云ふ二句さへ、附け加へたかも知れぬ。幸ひ、普通ありふれた、戀とか愛とか云ふ境界は既に通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。然し今の刹那に起つた出來事の詩趣はゆたかに此五六行にあらはれて居る。余と銀杏返しの間柄にこんな切ない思ひはないとしても、二人の今の關係を、此詩の中に適用めて見るのは面白い。或は此詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釋しても愉快だ。二人の間には、ある因果の細い絲で、此詩にあらはれた境遇の一部分が、事實となつて、括りつけられて居る。因果も此位絲が細いと苦にはならぬ。其上、只の絲ではない。空を横切る虹の絲、野邊に棚引く霞の絲、露にかゞやく蜘蛛の絲、切らうとすれば、すぐ切れて、見て居るうちは勝れてうつくしい。萬一此絲が見る間に太くなつて井戸繩の樣にかたくなつたら？ そんな危險はない。余は畫工である。先は只の女とは違ふ。
突然襖があいた。寐返りを打つて入口を見ると、因果の相手の其銀杏返しが敷居の上に立つて青磁の鉢を盆に乘せたまゝ佇んで居る。
「また寐て入らつしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたらう。何返も御邪魔をして、ほゝゝゝ」と笑ふ。臆した氣色も、隠す氣色も――恥づる氣色は無論ない。只こちらが先を越されたのみである。
「今朝は難有う」と又禮を云つた。考へると、丹前の禮を是で三返云つた。しかも、三返ながら只難有うと云ふ三字である。
女は余が起き返らうとする枕元へ早くも坐つた。
「まあ寐て入らつしやい。寐て居ても話しは出來ませう」と、さも氣作に云ふ。余も全くだと考へたから、一先づ腹這ひになつて、兩手で顎を支へ、しばし疊の上へ肘壺の柱を立てる。
「御退屈だらうと思つて、御茶を入れに來ました」
「難有う」又難有うが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでゐる。余は凡ての菓

子のうちで尤も羊羹が好きだ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける工合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げ方は、玉と蠟石の雑種の様で、甚だ見て心持ちがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れた様につや〳〵して、思はず手を出して撫でて見たくなる。西洋の菓子で、これ程快感を與へるものは一つもない。クリームの色は一寸柔らかだが、少し重苦しい。ジェリは、一見寶石の様に見えるが、ぶる〳〵顫へて、羊羹程の重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至つては、言語道斷の沙汰である。

「うん、中々美事だ」

「今しがた、源兵衛が買つて歸りました。是ならあなたに召し上がられるでせう」

源兵衛は昨夕城下へ留まつたと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見て居た。どこで誰が買つて來ても構ふ事はない。只美しければ、美しいと思ふ丈で充分滿足である。

「此青磁の形は大變いゝ。色も美事だ。殆ど羊羹に對して遜色がない」

女はふゝんと笑つた。口元に侮りの波が微かに搖れた。余の言葉を洒落と解したのだらう。成程洒落とすれば、輕蔑される價は慥かにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云ふものだ。

「是は支那ですか」

「何ですか」と相手は丸で青磁を眼中に置いて居ない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せませうか」

「えゝ、見せて下さい」

「父が骨董が大好きですから、大分色々なものがあります。父にさう云つて、いつか御茶でも上げませう」

茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人程勿體振つた風流人はない。廣い詩界をわざとらしく窮屈に繩張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせゝこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるものは所謂茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかへるだらう。廻れ右、前への連中は悉く大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、丸で趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見當が附かぬ所から、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、是で大方風流なんだらう、と却て眞の風流人を馬鹿にする爲の藝である。

「御茶つて、あの流儀のある茶ですかな」

「いゝえ、流儀も何もありやしません。御厭なら飲まなくつてもいゝ御茶です」

「そんなら、序に飲んでもいゝですよ」

「ほゝゝゝ。父は道具を人に見て頂くのが大好きなんですから……」

「褒めなくつちあ、いけませんか」

「年寄だから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」

「へえ、少しなら褒めて置きませう」

「負けて、澤山御褒めなさい」

「はゝゝゝ、時にあなたの言葉は田舎ぢやない」

「人間は田舎なんですか」

「人間は田舎の方がいゝのです」

「それぢや幅が利きます」

「然し東京に居た事がありませう」

「えゝ、居ました、京都にも居ました。渡りものですから、方々に居ました」

「こゝと都と、どつちがいゝですか」

「同じ事ですわ」

「かう云ふ靜かな所が、却て氣樂でせう」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ち様一つでどうでもなります。蚤の國が厭になつたつて、蚊の國へ引つ越しちや、何にもなりません」

「蚤も蚊も居ない國へ行つたら、いゝでせう」

「そんな國があるなら、こゝへ出して御覧なさい。さあ出して頂戴」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出して上げませう」と例の寫生帖をとつて、女が馬へ乘つて、山櫻を見て居る心持ち――無論咄嗟の筆使ひだから、畫にはならない。只心持ち丈をさら〳〵と書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊も居ません」と鼻の前へ突き附けた。驚くか、恥づかしがるか、此樣子では、よもや、苦しがる事はなからうと思つて、一寸氣色を伺ふと、

「まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりぢやありませんか。そんな所が御好きなの、丸で蟹ね」

と云つて退けた。余は

「わはゝゝゝ」と笑ふ。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で聲を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと對話をやめて、しばらく耳を峙てたが、一旦啼き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衛に御逢ひでしたらう」

「えゝ」

「長良の乙女の五輪塔を見て入らしつたか」

「えゝ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌丈述べた。何の爲か知らぬ。

「其歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが教へましたか。あれはもと　私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に　」と云ひかけて、是はと余の顏を見たから、余は知らぬ風をして居た。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが來るたびに、長良の話をして聞かせてやりました。うた丈は中々覺えなかつたのですが、何遍も聽くうちに、たうとう何も蚊も諳誦して仕舞ひました」

「だうれで、六づかしい事を知つてると思つた。――然しあの歌は憐れな歌ですね」

「憐れでせうか。私ならあんな歌は詠みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないぢやありませんか」

「成程つまらないですね。あなたなら如何しますか」

「どうするつて、譯ないぢやありませんか。さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許りですわ」

「兩方ともですか」

「えゝ」

「えらいな」

「えらかあない、當り前ですわ」

「成程夫ぢや蚊の國へも、蚤の國へも、飛び込まずに濟む譯だ」

「蟹の樣な思ひをしなくつても、生きてゐられるでせう」

　ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯が、いつ勢を盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逆しまにして、ふくらむ咽喉の底を震はして、小さき口の張り裂くる許りに、

　ほーう、ほけきよーう。ほーう、ほけつーきようー

と、つゞけ樣に囀る。

「あれが本當の歌です」と女が余に教へた。

五

「失禮ですが旦那は、矢つ張り東京ですか」

「東京と見えるかい」
「見えるかいつて、一目見りやあ、――第一言葉でわかりまさあ」
「東京は何所だか知れるかい」
「さうさね。東京は馬鹿に廣いからね。――何でも下町ぢやねえやうだ。山の手だね。山の手は麴町かね。え？　それぢや、小石川？　でなければ牛込か四谷でせう」
「まあそんな見當だらう。よく知つてるな」
「かう見えて、私も江戸つ子だからね」
「道理で生粋だと思つたよ」
「えへゝゝゝ。からつきし、どうも、人間もかうなつちや、みじめですぜ」
「何で又こんな田舎へ流れ込んで來たのだい」
「ちげえねえ、旦那の仰しやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食ひ詰めつちまつて……」
「旧から髪結床の親方かね」
「親方ぢやねえ、職人さ。え？　所かね。所は神田松下町でさあ。なあに猫の額見た樣な小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえ筈さ。あすこに龍閑橋てえ橋がありませう。え？　そいつも知らねえかね。龍閑橋や、名代な橋だがね」
「おい、もう少し、石鹼を塗けて吳れないか、痛くつて、いけない」
「痛うがすかい。私や癇性でね、どうも、かうやつて、逆剃をかけて、一本々々髭の穴を掘らなくつちや、氣が濟まねえんだから、――なあに今時の職人なあ、剃るんぢやねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」
「我慢はさつきから、もう大分したよ。御願ひだから、もう少し湯か石鹼をつけとくれ」
「我慢しきれねえかね。そんなに痛かあねえ筈だが。全體、髭があんまり延び過ぎてるんだ」
　やけに頰の肉をつまみ上げた手を、殘念さうに放した親方は、棚の上から、薄つ片な赤い石鹼を取り卸して、水のなかに一寸浸したと思つたら、夫なり余の顏をまんべんなく一應撫で廻した。裸石鹼を顏へ塗り附けられた事はあまりない。然もそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きかと考へると、餘りぞつとしない。
　既に髪結床である以上は、御客の權利として、余は鏡に向はなければならん。然し余はさつきから此權利を放棄したく考へて居る。鏡と云ふ道具は平に出來て、なだらかに人の顏を寫さなくては義理が立たぬ。もし此性質が具はらない鏡を懸けて、之に向へと强ひるならば、强ひるものは下手な寫眞師と同じく、向ふものの器量を故意に損害したと云はなければならぬ。虚榮心を挫くのは修養上一種の方便かも知れぬが、何も己れの眞價以下の顏を見せて、是があなたですよと、此方を侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合ふべく餘儀なくされて居る鏡は慥かに最前から余を侮辱して居る。右を向くと顏中鼻になる。左を出すと口が耳元迄裂ける。仰向くと蟇蛙を前から見た樣に眞平に壓し潰され、少しこゞむと福祿壽の祈誓兒の樣に頭がせり出してくる。苟も此鏡に對する間は一人で色々な化物を兼勤しなくてはならぬ。寫るわが顏の美術的ならぬは先づ我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剝げ落ちて、光線が通り拔ける模樣抔を總合して考へると、此道具其の物からが醜體を極めて居る。小人から罵詈されるとき、罵詈其自身は別に痛痒を感ぜぬが、其小人の面前に起臥しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だらう。
　其上此親方が只の親方ではない。そとから覗いたときは、胡坐をかいて、長煙管で、おもちやの日英同盟國旗の上へ、しきりに煙草を吹きつけて、さも退屈氣に見えたが、這入つて、わ

が首の所置を託する段になつて驚いた。髭を剃る間は首の所有權は全く親方の手にあるのか、將た幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑ひ出した位、容赦なく取り扱はれる。余の首が肩の上に釘付けにされて居るにしても是では永く持たない。
　彼は髪剃を揮ふに當つて、毫も文明の法則を解して居らん。頰にあたる時はがりゝと音がした。揉み上げの所ではぞきりと動脈が鳴つた。顋のあたりに利刃がひらめく時分にはごり、ごり〳〵と霜柱を踏みつける樣な怪しい聲が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方を以て自任して居る。
　最後に彼は醉つ拂つてゐる。旦那えと云ふたんびに妙な臭ひがする。時々は異な瓦斯を余が鼻柱へ吹き掛ける。是ではいつ何時、髪剃がどう間違つて、何所へ飛んで行くか解らない。使ふ當人にさへ判然たる計畫がない以上は、顏を貸した余に推察の出來よう筈がない。得心づくで任せた顏だから、少しの怪我なら苦情は云はない積りだが、急に氣が變つて咽喉笛でも搔き切られては事だ。
「石鹼なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云ひながら親方は裸石鹼を、裸の儘棚の上へ放り出すと、石鹼は親方の命令に背いて地面の上へ轉がり落ちた。
「旦那え、餘り見受けねえ樣だが、何ですかい、近頃來なすつたのかい」
「二三日前來た許りさ」
「へえ、どこに居るんですい」
「志保田に逗まつてるよ」
「うん、あすこの御客さんですか。大方そんな事たらうと思つてた。實あ、私もあの隱居さんを賴つて來たんですよ。――なにね、あの隱居が東京に居た時分、わつしが近所にゐて、――それで知つてるのさ。いゝ人でさあ。ものの解つたね。去年御新造が死んぢまつて、今ぢや道具ばかり捻くつてるんだが――何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。賣つたら餘程な金目だらうつて話さ」
「綺麗な御孃さんが居るぢやないか」
「あぶねえね」
「何が？」
「何がつて。旦那の前だが。あれで出返りですぜ」
「さうかい」
「さうかい所の騷ぎぢやねえんだね。全體なら出て來なくつてもいゝ所をさ。――銀行が潰れて贅澤が出來ねえつて、出ちまつたんだから、義理が惡いやね。隱居さんがあゝして居るうちはいゝが、もしもの事があつた日にや、頰返しがつかねえ譯になりまさあ」
「さうかな」
「當り前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」
「本家があるのかい」
「本家は岡の上にありまさあ。遊びに行つて御覽なさい。景色のいゝ所ですよ」
「おい、もう一遍石鹼をつけてくれないか。又痛くなつて來た」
「よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭ぢや、三日に一度は是非剃を當てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃で痛けりや、何所へ行つたつて、我慢出來つこねえ」
「是から、さうしよう。何なら毎日來てもいゝ」
「そんなに長く逗留する氣なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事た。碌でもねえものに引つかゝつて、どんな目に逢ふか解りませんぜ」
「どうして」
「旦那あの娘は面はいゝ樣だが、本當にき印ですぜ」

「なぜ」
「なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて云つてるんでさあ」
「そりや何かの間違ひだらう」
「だつて、現に證據があるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」
「おれは大丈夫だが、どんな證據があるんだい」
「可笑しな話さ。まあゆつくり、煙草でも呑んで御出でなせえ話すから。――頭あ洗ひませうか」
「頭はよさう」
「頭垢丈落として置くかね――」
親方は垢の溜まつた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に竝べて、斷りもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此爪が、黒髮の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する。余が頭に何十萬本の髮の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こぎにされて、殘る地面がべた一面に蚯蚓腫れにふくれ上がつた上、餘勢が地盤を通して、骨から腦味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を掻き廻した。
「どうです好い心持ちでせう」
「非常な辣腕だ」
「え？　かうやると誰でも薩張りするからね」
「首が拔けさうだよ」
「そんなに倦怠うがすかい。全く陽氣の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身體がなまけやがつて――まあ一ぷく御上がんなさい。一人で志保田に居ちや、退屈でせう。ちと話しに御出でなせえ。どうも江戸つ子は江戸つ子同志でなくつちや、話しが合はねえものだから。何ですかい、矢つ張りあの御孃さんが、御愛想に出てきますかい。どうも薩ばし、見境のねえ女だから困つちまはあ」
「御孃さんが、どうとか、爲た所で頭垢が飛んで、首が拔けさうになつたつけ」
「違えねえ、がんがらがんだから、殼切、話しに締りがねえつたらねえ。――そこで其坊主が逆せちまつて……」
「其坊主たあ、どの坊主だい」
「觀海寺の納所坊主がさ……」
「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て來ないんだ」
「さうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出來さうな坊主だつたが、そいつが御前さん、レコに參つちまつて、とう／＼文をつけたんだ。――おや待てよ。口說いたんだつけかな。いんにや文だ。文に違えねえ。すると――から――何だか、行きさつが少し變だぜ。うん、さうか、矢つ張りさうか。するてえと奴さん、驚いちまつてからに……」
「誰が驚いたんだい」
「女がさ」
「女が文を受け取つて驚いたんだね」
「所が驚く樣な女なら、殊勝らしいんだが、驚くどころぢやねえ」
「ぢや誰が驚いたんだい」
「口說いた方がさ」
「口說かないのぢやないか」
「え丶、焦心つてえ。間違つてらあ。文をもらつてさ」
「それぢや矢つ張り女だらう」
「なあに男がさ」
「男なら、其坊主だらう」
「え丶、其坊主がさ」
「坊主がどうして驚いたのかい」
「どうしてつて、本堂で和尚さんと御經を上げてると、突然あの女が飛び込んで來て――ウフ……。どうしても狂印だね」
「どうかしたのかい」

「そんなに可愛いなら、佛樣の前で、一所に寐ようつて、出し拔けに、泰安さんの頸つ玉へかじりついたんでさあ」
「へえ丶」
「面喰らつたなあ、泰安さ。氣狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とう／＼、其晩こつそり姿を隱して死んぢまつて……」
「死んだ？」
「死んだらうと思ふのさ。生きちや居られめえ」
「何とも云へない」
「さうさ、相手が氣狂ぢや、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」
「中々面白い話だ」
「面白いの、面白くないのつて、村中大笑ひでさあ。所が當人丈は、根が氣が違つてるんだから、洒唖々々して平氣なもんで――なあに旦那の樣に確乎してゐりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大變な目に逢ひますよ」
「ちつと氣を附けるかね。はゝゝゝゝ」
生溫い磯から、鹽氣のある春風がふはり／＼と來て、親方の暖簾を眠たさうに煽る。身を斜にして其下をくゞり拔ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向うの家では六十許りの爺さんが、軒下に蹲踞り乍ら、だまつて貝をむいて居る。かちやりと、小刀があたる度に、赤い身が笊のなかに隱れる。殼はきらりと光を放つて、二尺あまりの陽炎を向うへ横切る。丘の如くに堆く、積み上げられた、其殼は牡蠣か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた幾分は、砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗い國へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行方を考ふる暇さへなく、唯空しき殼を陽炎の上へ放り出す。彼の笊には支ふべき底なくして、彼の春の日は無盡藏に長閑と見える。
砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、濱の方へ春の水をそゝぐ。春の水が春の海と出合ふあたりには、參差として幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微温を與へつゝあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀を溶かして、氣長にのたくらせた樣に見えるのが海の色だ。
此景色と此親方とは到底調和しない。もし此親方の人格が強烈で四邊の風光と拮抗する程の影響を余の頭腦に與へたならば、余は兩者の間に立つて頗る圓枘方鑿の感に打たれたであらう。幸ひにして親方は左程偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸つ子でも、どれ程たんかを切つても、此の渾然として駘蕩たる天地の大氣象には叶はない。滿腹の饒舌を弄して、あく迄此調子を破らうとする親方は、早くも微塵となつて、怡々たる春光の裏に浮游して居る。矛盾とは、力に於て、量に於て、若しくは意氣體躯に於て氷炭相容るゝ能はずして、しかも同程度に位する物若しくは人の間に在つて始めて、見出だし得べき現象である。兩者の間隔が甚しく懸絶するときは、此矛盾は漸く漸盡磨滅して、却て大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足となつて才子が活動し、才子の股肱となつて昧者が活動し、昧者の心腹となつて牛馬が活動し得るのは是が爲である。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じてゐる。長閑な春の感じを壞すべき筈の彼は、却て長閑な春の感じを刻意に添へつゝある。余は思はず彌生半ばに呑氣な彌次と近附になつた樣な氣持ちになつた。此の極めて安價なる氣熖家は、太平の象を具したる春の日に尤も調和せる一彩色である。
かう考へると、此親方も中々畫にも、詩にもなる男だから、とうに歸るべき所を、わざと尻を据ゑて四方八方の話しをして居た。所へ

暖簾を滑つて小さな坊主頭が
「御免、一つ剃つて貰はうか」
と這入つて來る。白木綿の着物に同じ丸絎の帶をしめて、上から蚊帳の樣に粗い法衣を羽織つて、頗る氣樂に見える小坊主であつた。
「了念さん。どうだい、此間あ道草あ、食つて、和尚さんに叱られたらう」
「いんにや、褒められた」
「使に出て、途中で魚なんか、とつて居て、了念は感心だつて、褒められたのかい」
「若いに似ず了念は、よく遊んで來て感心ぢや云うて、老師が褒められたのよ」
「道理で頭に瘤が出來てらあ。そんな不作法な頭あ、剃るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘辨するから、此次から、捏ね直して來ねえ」
「捏ね直す位なら、ますこし上手な床屋へ行きます」
「はゝゝ頭は凹凹だが、口丈は達者なもんだ」
「腕は鈍いが、酒丈強いのは御前だろ」
「箆棒め、腕が鈍いつて……」
「わしが云うたのぢやない。老師が云はれたのぢや。さう怒るまい。年甲斐もない」
「ヘン、面白くもねえ。——ねえ、旦那」
「えゝ?」
「全體坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがつて、屈託がねえから、自然に口が達者になる譯ですかね。こんな小坊主迄中々口幅つてえ事を云ひますぜ——おつと、もう少し頭を寐かして——寐かすんだてえのに、——言ふ事を聽かなけりや、切るよ、いゝか、血が出るぜ」
「痛いがな。さう無茶をしては」
「此位な辛抱が出來なくつて坊主になれるもんか」
「坊主にはもうなつとるがな」
「まだ一人前ぢやねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだつけな、御小僧さん」
「泰安さんは死にはせんがな」
「死なねえ? はてな。死んだ筈だが」
「泰安さんは、其後發憤して、陸前の大梅寺へ行つて、修行三昧ぢや。今に智識になられよう。結構な事よ」
「何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃げをして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく氣をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印は矢つ張り和尚さんの所へ行くかい」
「狂印と云ふ女は聞いた事がない」
「通じねえ、味噌擂だ。行くのか、行かねえのか」
「狂印は來んが、志保田の娘さんなら來る」
「いくら、和尚さんの御祈禱でもあれ計りや、癒るめえ。全く先の旦那が祟つてるんだ」
「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めて居られる」
「石段をあがると、何でも逆樣だから叶はねえ。和尚さんが、何て云つたつて、氣狂は氣狂だらう。——さあ剃れたよ。早く行つて和尚さんに叱られて來ねえ」
「いやもう少し遊んで行つて賞められよう」
「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」
「咄この乾屎橛」
「何だと?」
青い頭は既に暖簾をくゞつて、春風に吹かれて居る。

六

夕暮の机に向ふ。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞ふ境を、幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩ひにはならぬ。今日は一層靜かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間

に、われを殘して、立ち退いたかと思はれる。立ち退いたとすれば唯の所へ立ち退きはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近附いて、舵をとるさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、果ては帆みづからが、いづこに己を雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思はれる。夫でなければ卒然と春のなかに消え失せて、是迄の四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名殘を留めぬ樣になつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。又は永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、蕊に凝る甘き露を吸ひ損ねて、落椿の下に伏せられ乍ら、世を香ばしく眠つて居るかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

空しき家を、空しく拔ける春風の、拔けて行くは迎へる人への義理でもない。拒むものへの面當でもない。自ら來りて、自ら去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支へたる余の心も、わが住む部屋の如く空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き拔けるであらう。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも起る。戴くは天と知る故に、稻妻の米嚙に震ふ怖れも出來る。人と爭はねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免かれぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事實の戀は讐である。目に見る富は土である。握る名と奪へる譽とは、小賢しき蜂が甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜の如きものであらう。所謂樂は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。但詩人と畫客なるものあつて、飽くまで此待對世界の精華を嚼んで、徹骨徹髓の淸きを知る。霞を餐し、露を嚥み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼等の樂は物に着するのではない。同化して其物になるのである。其物になり濟ました時に、我を樹立すべき餘地は茫々たる大地を極めても見出し得ぬ。自在に泥團を放下して、破笠裏に無限の靑嵐を盛る。いたづらに此境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭兒を鬼嚇して、好んで高く標置するが爲ではない。只這裏の福音を述べて、縁ある衆生を麾くのみである。有體に云へば詩境と云ひ、畫界と云ふも皆人々具足の道である。春秋に指を折り盡して、白頭に呻吟するの徒と雖も、一生を回顧して、閲歷の波動を順次に點檢し來るとき、嘗ては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし、拍手の興を喚び起こす事が出來よう。出來ぬと云はば生き甲斐のない男である。

去れど一事に卽し、一物に化するのみが詩人の感興とは云はぬ。ある時は一瓣の花に化し、あるときは一雙の蝶に化し、あるはウォーヅウォースの如く、一團の水仙に化して、心を澤風の裏に撩亂せしむる事もあらうが、何とも知れぬ四邊の風光にわが心を奪はれて、わが心を奪へるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣に觸るゝと云ふだらう。ある人は無絃の琴を靈臺に聽くと云ふだらう。又ある人は知りがたく、解しがたきが故に無限の域に儃佪して、縹緲のちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云ふも其人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぼかんとした心裡の狀態は正にこれである。

余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥かに何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。去れども吾は動いて居る。世の中に動いても居らぬ、世の

外にも動いて居らぬ。只何となく動いて居る。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、只恍惚と動いて居る。

強ひて説明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の日で蒸發せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覺せぬうちに飽和されて仕舞つたと云ひたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、窈然として名狀しがたい樂がある。風に揉まれて上の空なる波を起こす、輕薄で騷々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸迄動いてゐる滄洋たる蒼海の有様と形容する事が出來る。只夫程に活力がない許りだ。然しそこに反つて幸福がある。偉大なる活力の發現は、此活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴なはぬ。常よりは淡きわが心の、今の狀態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却して居る。淡しとは單に捕へ難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は尤も此境を切實に言ひ了せたものだらう。

此境界を畫にして見たらどうだらうと考へた。然し普通の畫にはならないに極まつてゐる。われ等が俗に畫と稱するものは、只眼前の人事風光を有りの儘なる姿として、若しくは之をわが審美眼に濾過して、繪絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、畫の能事は終つたものと考へられて居る。もし此上に一頭地を拔けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、畫布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕へたる森羅の裡に溶するのが此種の技術家の主意であるから、彼等の見たる物象觀が明瞭に筆端に迸つて居らねば、畫を製作したとは云はぬ。己はしか〳〵の事を、しか〳〵に觀、しか〳〵に感じたり、その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古來の傳説に支配せられたるにあらず、しかも尤も正しくして、尤も美しきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢てせぬ。

此二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。去れど今、わが描かんとする題目は、左程に分明なものではない。あらん限りの感覺を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方圓の形、紅綠の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から來たのではない、たとひ來たとしても、わが視界に横たはる、一定の景物でないから、是が原因だと指を擧げて明かに人に示す譯に行かぬ。あるものは只心持ちである。此心持ちを、どうあらはしたら畫になるだらう――否此心持ちを如何なる具體を藉りて、人の合點する樣に髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の畫は感じはなくても物さへあれば出來る。第二の畫は物と感じと兩立すれば出來る。第三に至つては存するものは只心持ち丈であるから、畫にするには是非共此心持ちに恰好なる對象を擇ばなければならん。然るに此對象は容易に出て來ない。出て來ても容易に纏まらない。纏まつても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。從つて普通の人から見れば畫とは受け取れない。描い

た當人も自然界の局部が再現したものとは認めて居らん、只感興のさした刹那の心持ちを幾分でも傳へて、多少の生命を惝怳しがたきムードに與ふれば大成功と心得て居る。古來から此難事業に全然の績を收め得たる畫工があるかないか知らぬ。ある點迄此流派に指を染め得たるものを擧ぐれば、文與可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の畫家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を占めて居るから、此種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは果して幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村等の力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純で且あまりに變化に乏しい。筆力の點から云へば到底此等の大家に及ぶ譯はないが、今わが畫にして見ようと思ふ心持ちはもう少し複雜である。複雜である丈にどうも一枚のなかへは感じが收まりかねる。頬杖をやめて、兩腕を机の上に組んで考へたが矢張り出て來ない。色、形、調子が出來て、自分の心が、あゝ此處に居たなと、忽ち自己を認識する樣にかゝなければならない。生き別れをした吾子を尋ね當てる爲、六十餘州を回國して、寢ても寤めても、忘れぬ間がなかつたある日、十字街頭に不圖邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ、此所に居た、と思ふ樣にかかなければならない。それが六づかしい。此調子さへ出れば、人が見て何と云つても構はない。畫でないと罵られても恨はない。苟も色の配合が此心持ちの一部を代表して、線の曲直が此氣合の幾分を表現して、全體の配置が此風韻のどれ程かを傳へるならば、形にあらはれたものは、牛であれ馬であれ、乃至は牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭はない。厭はないがどうも出來ない。寫生帖を机の上へ置いて、兩眼が帖のなかへ落ち込む迄、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考へた。こんな抽象的な興趣を畫にしようとするのが、抑もの間違ひである。人間にさう變りはないから、多くの人のうちには屹度自分と同じ感興に觸れたものがあつて、此感興を何等の手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすれば其手段は何だらう。

忽ち「音樂」の二字がぴかりと眼に映つた。成程音樂は斯かる時、斯かる必要に逼られて生れた自然の聲であらう。樂は聽くべきもの、習ふべきものであると、始めて氣が附いたが、不幸にして、その邊の消息は丸で不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云ふ男は、時間の經過を條件として起る出來事を、詩の本領である如く論じて、詩畫は不一にして兩樣なりとの根本義を立てた樣に記憶するが、さう詩を見ると、今余の發表しようとあせつて居る境界も到底物になりさうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の狀況には、時間はあるかも知れないが、時間の流に沿うて、遞次に展開すべき出來事の内容がない。一が去り、二が來り、二が消えて三が生まるゝが爲に嬉しいのではない。初めから窈然として同所に把住する趣で嬉しいのである。既に同所に把住する以上は、よし之を普通の言語に飜譯した所で、必ずしも時間の材料を按排する必要はあるまい。矢張り繪畫と同じく空間的に景物を配置したのみで出來るだらう。只如何なる景情を詩中に持ち來つて、此曠然として倚託なき有樣を寫すかが問題で、既に之を捕へ得た以上はレッシングの説に從はんでも詩として成功する譯だ。ホーマーがどうでも、ヷージルがどうでも構はない。もし詩が一種のムードをあらはすに適して

居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを藉らずとも、単純に空間的なる絵画上の要件を充たしさへすれば、言語を以て描き得るものと思ふ。

議論はどうでもよい。ラオコーン抔は大概忘れて居るのだから、よく調べたら、此方が怪しくなるかも知れない。兎に角、画にしそくなつたから、一つ詩にして見ようと、写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖つた所を、どうにか運動させたい許りで、毫も運動させる訳に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉迄出かかつて居るのに、出てくれない様な気がする。そこで諦めると、出損なつた名は、遂に腹の底へ収まつて仕舞ふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さら／＼して箸に手応へがないものだ。そこを辛抱すると、漸く粘着が出て、攪き淆ぜる手が少し重くなる。それでも構はず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。仕舞ひには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、争つて箸に附着してくる。詩を作るのは正に是だ。

手掛りのない鉛筆が少しづゝ動く様になるのに勢を得て、彼是二三十分したら、

青春二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴横虚堂。蠨蛸掛不動。篆煙繞竹梁。

と云ふ六句丈出来た。読み返して見ると、みな画になりさうな句許りである。是なら始めから、画にすればよかつたと思ふ。なぜ画よりも詩の方が作り易かつたかと思ふ。こゝ迄出たら、あとは大した苦もなく出さうだ。然し画に出来ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末とう／＼、

独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得一日静。正知百年忙。遐懐寄何処。緬邈白雲郷。

と出来た。もう一返最初から読み直して見ると、一寸面白く読まれるが、どうも自分が今しがた入つた神境を写したものとすると、索然として物足りない。序だから、もう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つた儘、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間をちらりと、綺麗な影が通つた。はてな。

余が眼を転じて、入口を見たときは、綺麗なものが、既に引き開けた襖の陰に半分かくれかけて居た。しかも其姿は余が見ぬ前から、動いて居たものらしく、はつと思ふ間に通り越した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらはれて来た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行いて行く。余は覚えず鉛筆を落として、鼻から吸ひかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天からずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空気のなかに蕭寥と見えつ、隠れつする。

女は固より口も利かぬ。傍目も振らぬ。椽に引く裾の音さへおのが耳に入らぬ位静かに歩行いて居る。腰から下にぱつと色づく裾模様は、何を染め抜いたものか、遠くて解らぬ。只無地と模様のつながる中が、おのづから暈されて、夜と昼との境の如き心地である。女は固より夜と昼との境をあるいて居る。

此の長い振袖を着て、長い廊下を何度往き何度戻る気か、余には解らぬ。いつ頃から此の不思議な装をして、此の不思議な歩行をつゞけつゝあるかも、余には解らぬ。其主意に至つては固より解らぬ。固より解るべき筈ならぬ事

を、かく迄も端正に、かく迄も静粛に、かく迄も度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらはれては消え、消えてはあらはるゝ時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨を訴ふる所作ならば何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅を飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むる程の帯地は金襴か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつゝまれて、幽闃のあなた、遼遠のかしこへ一分毎に消えて去る。燦めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に陥る趣である。

太玄の闕おのづから開けて、此の華やかなる姿を、幽冥の府に吸ひ込まんとするとき、余はかう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さゞめき暮らしてこそ然るべき此装の、厭ふ気色もなく、争ふ様子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある点に於て超自然の情景である。刻々と逼る黒き影をすかして見ると、女は粛然として、焦きもせず、狼狽もせず、同じ程の歩調を以て、同じ所を徘徊して居るらしい。身に落ちかゝる災を知らぬとすれば無邪気の極である。知つて、災と思はぬならば物凄い。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元の儘なる冥漠の裏に収めればこそ、かやうに閑靚の態度で、有と無の間に逍遥してゐるのだらう。女のつけた振袖に、紛たる模様の尽きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかして居る。

またかう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りに就いて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚の儘で、此世の呼吸を引き取るときに、枕元に病を護るわれ等の心は嘸つらいだらう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生き甲斐のない本人は固より、傍に見て居る親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。然しすや／＼と寝入る児に、死ぬべき何の科があらう。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をまだせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果たすと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念仏を唱へたい。死ぬべき条件が具はらぬ先に、死ぬる事実のみが、有り／＼と確められるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出る位なら、其声でおうい／＼と、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮の眠りから、いつの間とも心附かぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかゝつた煩悩の綱を無暗に引かるゝ様で苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んで呉れるな、穏やかに寝かして呉れと思ふかも知れぬ。それでも、われ／＼は呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらはれたなら、呼びかけて、うつゝの裡から救つてやらうかと思つた。然し夢の様に、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が利けなくなる。今度はと心を定めて居るうちに、すうと苦もなく通つて仕舞ふ。なぜ何とも云へぬかと考ふる途端に、女は又通る。こちらに窺ふ人があつて、其人が自分の為にどれ程やきもき思うて居るか、微塵も気に掛からぬ有様で通る。面倒にも気の毒にも、初手から、余の如きものに、気をかねて居らぬ有様で通る。今度は今度はと思うて居るうちに、こらへかねた雲の層が、持ち切れぬ雨の絲を、しめやかに落とし出して、女の影を、蕭々と封じ了る。

七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、

八疊程な風呂場へ出る。石に不自由せぬ國と見えて、下は御影で敷き詰めた、眞中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋程の湯槽を据ゑる。槽とは云ふものゝ矢張り石で疊んである。鑛泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへふくんで見るが別段の味も臭もない。病氣にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固より別段の持病もないから、實用上の價値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。只這入る度に考へ出すのは、白樂天の温泉水滑洗凝脂と云ふ句丈である。温泉と云ふ名を聞けば必ず此句にあらはれた樣な愉快な氣持ちになる。又此氣持ちを出し得ぬ温泉は、温泉として全く價値がないと思つてる。此理想以外に温泉に就いての注文は丸でない。

すぽりと浸かると、乳のあたり迄這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の縁を綺麗に越して居る。春の石は乾くひまなく濡れて、あたゝかに、踏む足の、心は穏やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤ほす程のしめやかさであるが、軒のしづくは、漸く繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞こえる。立籠められた湯氣は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さへあれば、節穴の細きを厭はず洩れ出でんとする氣色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく霞は長閑に、夕餉炊く、人の烟は青く立つて、大いなる空に、わが果敢なき姿を託す。樣々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇り許りは、浴するものゝ肌を、柔らかにつゝんで、古き世の男かと、われを疑はしむる。眼に寫るものゝ見えぬ程、濃くまつはりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己を見出だす樣に、淺きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り盡すとも此烟から出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に醉ふと云ふ言葉はあるが、烟に醉ふと云ふ語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使へぬ、霞には少し強過ぎる。只此靄に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥當なるを覺える。

余は湯槽のうちに仰向けの頭を支へて、透きとほる湯のなかの輕き身體を、出來る丈抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふはり、ふはりと魂がくらげの樣に浮いて居る。世の中もこんな氣になれば樂なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、温泉のなかで、温泉と同化して仕舞ふ。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂迄流して居れば、基督の御弟子となつたより難有い。成程此調子で考へると、土左衛門は風流である。スヰンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉れがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤも、かう觀察すると大分美しくなる。何であんな不愉快な所を擇んだものかと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り畫になるのだ。水に浮んだ儘、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘の姿で苦なしに流れる有樣は美的に相違ない。夫で兩岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、屹度畫になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆ど神話か比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より、全幅の精神をうち壞すが、全然色氣のない平氣な顔では人情が寫らない。どんな顔をかいたら成功するだらう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレ

ー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。然し思ふ樣な顔はさう容易く心に浮んで來さうもない。

湯のなかに浮いた儘、今度は土左衛門の贊を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小聲に誦しつゝ漫然と浮いて居ると、何所かで彈く三味線の音が聞こえる。美術家だのにと云はれると恐縮するが、實の所、余が此樂器に於ける知識は頗る怪しいもので二が上がらうが、三が下がらうが、耳には餘り影響を受けた試しがない。しかし、靜かな春の夜に、雨さへ興を添へる、山里の湯槽の中で、魂迄春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。遠いから何を唄つて、何を彈いて居るか無論わからない。そこに何だか趣がある。音色の落ち附いて居る所から察すると、上方の撿校さんの地唄にでも聽かれさうな太棹かとも思ふ。

子供の時分、門前に萬屋と云ふ酒屋があつて、そこにお倉さんと云ふ娘が居た。此お倉さんが、靜かな春の晝過ぎになると、必ず長唄の御浚ひをする。御浚ひが始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪餘りを前に控へて、三本の松が、客間の東側に並んで居る。此松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形づくつてゐた。子供心に此松を見ると好い心持ちになる。松の下に黒くさびた鐵燈籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺の樣にかたく坐つて居る。余は此燈籠を見詰めるのが大好きであつた。燈籠の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、獨り匂うて獨り樂しんで居る。余は此草のなかに、纔かに膝を容るゝの席を見出だして、ぢつと、しやがむのが此時分の癖であつた。此の三本の松の下に、此燈籠を睨めて、此草の香を嗅いで、さうしてお倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。

お倉さんはもう赤い手絡の時代さへ通り越して、大分と世帶じみた顔を、帳場へ曝してるだらう。聟とは折合がいゝか知らん。燕は年々歸つて來て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしてゐるか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離せない。

三本の松は未だに好い恰好で残つて居るかしらん。鐵燈籠はもう壞れたに相違ない。春の草は、昔しやがんだ人を覺えて居るだらうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知らう筈がない。お倉さんの旅の衣は鈴懸のと云ふ、日毎の聲もよも聞き覺えがあるとは云ふまい。

三味の音が思はぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む、頑是なき小僧と、成り濟ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

誰か來たなと、身を浮かした儘、視線丈を入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乘せて居るから、槽に下る段々は、間二丈を隔てて斜に余が眼に入る。然し見上げたる余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音のみが聞こえる。三味線は何時の間にか已んで居た。

やがて階段の上に何物かあらはれた。廣い風呂場を照らすものは、只一つの小さき釣り洋燈のみであるから、此隔りでは澄み切つた空氣を

控へてさへ、朦と物色はむづかしい。況して立ち上がる湯氣の、濃やかなる雨に抑へられて逃場を失ひたる今宵の風呂に、立つを誰とは固より定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも聲は掛けられぬ。

黒いものが一歩を下へ移した。踏む石は天鵞絨の如く柔らかと見えて、足音を證に之を律すれば、動かぬと評しても差し支へない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は畫工丈あつて人體の骨格に就いては、存外視覺が鋭敏である。何とも知れぬものの一段動いた時、余は女と二人、此風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらはれた。漲り渡る湯烟の、やはらかな光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾はす黑髮を雲とながして、あらん限りの脊丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、禮儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは悉く、わが腦裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい畫題を見出だし得たとのみ思つた。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今世佛國の畫家が命と賴む裸體畫を見る度に、あまりに露骨な肉の美を、極端迄描き盡さうとする痕迹が、あり〳〵と見えるので、どことなく氣韻に乏しい心持ちが、今迄われを苦しめてならなかつた。然し其折々はたゞどことなく下品だと評する迄で、何故下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答へを得るに煩悶して今日に至つたのだらう。肉を蔽へば、うつくしきものが隱れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは只かくさぬと云ふ卑しさに、技巧を留めて居らぬ。衣を奪ひたる姿を、其儘に寫す丈にては、物足らぬと見えて、飽く迄も裸體を、衣冠の世に押し出さうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸に凡ての權能を附與せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこ迄も進んで、只管に、裸體であるぞと云ふ感じを強く描出しようとする。技巧が此極端に達したる時、人は其の觀者を強ふるを陋とする。うつくしきものを、彌が上に、うつくしくせんと焦るとき、うつくしきものは却て其度を減ずるが例である。人事に就いても滿は損を招くとの諺は是が爲である。

放心と無邪氣とは餘裕を示す。餘裕は畫に於て、詩に於て、もしくは文章に於て、必須の條件である。今代藝術の一大弊竇は、所謂文明の潮流が、徒らに藝術の士を驅つて、拘々として隨處に齷齪たらしむるにある。裸體畫は其好例であらう。都會に藝妓と云ふものがある。色を賣りて、人に媚びるを商賣にして居る。彼等は嫖客に對する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目錄は此藝妓に似たる裸體美人を以て充滿して居る。彼等は一秒時も、わが裸體なるを忘るゝ能はざるのみならず、全身の筋肉をむづつかして、わが裸體なるを觀者に示さんと力めて居る。

今余が面前に娉婷と現はれたる姿には、一塵も此俗埃の眼に遮るものを帶びて居らぬ。常の人の纏へる衣裳を脱ぎ捨てたる樣と云へば既に人界に墮在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を雲のなかに呼び起こしたるが如く自然である。

室を埋むる湯烟は、埋めつくしたる後から、絕えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し擴げて、部屋一面の虹霓の世界が濃やかに搖れるなかに、朦朧と、黑きかとも思はるゝ程の髮を暈して、眞白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて來る。其輪廓を見よ。

頸筋を輕く內輪に、双方から責めて、苦もなく

肩の方へなだれ落ちた線が、豐かに、丸く折れて、流るゝ末は五本の指と分かれるのであらう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、又滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後へ拔いて、勢の盡くるあたりから、分かれた肉が平衡を保つ爲に少しく前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、凡ての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する。世の中に是程錯雜した配合はない。是程統一のある配合もない。是程自然で、是程柔らかで、是程抵抗の少い、是程苦にならぬ輪廓は決して見出だせぬ。

しかも此姿は普通の裸體の如く露骨に、余が眼の前に突きつけられては居らぬ。凡てのものを幽玄に化する一種の靈氛のなかに髣髴として、十分の美を奧床しくもほのめかして居るに過ぎぬ。片鱗を潑墨淋漓の間に點じて、虬龍の怪を、楮毫の外に想像せしむるが如く、藝術的に觀じて申し分のない、空氣と、あたゝかみと、冥邈なる調子とを具へて居る。六々三十六鱗を丁寧に描きたる龍の、滑稽に落つるが事實ならば、赤裸々の肉を淨洒々に眺めぬうちに神往の餘韻はある。余は此輪廓の眼に落ちた時、桂の都を遁れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り圍まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一歩を踏み出せば、折角の嫦娥が、あはれ、俗界に墮落するよと思ふ刹那に、綠の髮は、波を切る靈龜の尾の如くに風を起こして、莽と靡いた。渦捲く烟を劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホヽホヽと鋭く笑ふ女の聲が、廊下に響いて、靜かなる風呂場を次第に向うへ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ儘槽の中に突つ立つ。驚いた波が、胸へあたる。緣を越す温泉の音がさあ〳〵と鳴る。

八

御茶の御馳走になる。相客は僧一人、觀海寺の和尚で名は大徹と云ふさうだ。俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き當つて、左へ折れた行き留りにある。大きさは六疊もあらう。大きな紫檀の机を眞中に据ゑてあるから、思つたより狹苦しい。それへと云ふ席を見ると、布團の代りに花毯が敷いてある。無論支那製だらう。眞中を六角に仕切つて、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周圍は鐵色に近い藍で、四隅に唐草の模樣を飾つた茶の輪を染め拔いてある。支那では之を座敷に用ひたものか疑はしいが、かうやつて布團に代用して見ると頗る面白い。印度の更紗とか、ペルシャの壁掛とか號するものが、一寸間が拔けて居る所に價値がある如く、此花毯もこせつかない所に趣がある。花毯ばかりではない、凡て支那の器具は皆拔けて居る。どうしても馬鹿で氣の長い人種の發明したものとほか取れない。見て居るうちに、ぼおつとする所が尊い。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、さうしてどこ迄も娑婆氣がとれない。先づかう考へながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半ばを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の臀の下に敷かれて居る。老人は頭の毛を悉く拔いて、頰と頸へ移植した樣に、白い髯をむしや〳〵と生やして、茶托へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使をありがたう。わしも、大分御無

沙汰をしたから、今日位来て見ようかと思つた所ぢや」と云ふ。此僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩した様な容貌を有してゐる。老人は平常からの昵懇と見える。

「此方が御客さんかな」

老人は首肯きながら、朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、二三滴づゝ、茶碗の底へしたゝらす。清い香がかすかに鼻を襲ふ気分がした。

「こんな田舎に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はあゝ」と何とも鼓とも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云へば、偽りである。淋しからずと云へば、長い説明が入る。

「なんの、和尚さん。此かたは画を書かれる為めに来られたのぢやから、御忙しい位ぢや」

「おゝ左様か、それは結構だ。矢張り南宗派かな」

「いゝえ」と今度は答へた。西洋画だ抔と云つても、此和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋画ぢや」と老人は、主人役に、又半分引き受けてくれる。

「はゝあ、洋画か。すると、あの久一さんのやられる様なものかな。あれは、わし此間始めて見たが、随分綺麗にかけたなう」

「いえ、詰まらんものです」と若い男が此時漸く口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見て頂いたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見て頂いたんぢやないですが、鏡が池で写生して居る所を和尚さんに見附かつたのです」

「ふん、さうか――さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗は頗る大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかゝつた所か、一寸見当の附かないものが、べたに描いてある。

「杢兵衛です」と老人が簡単に説明した。

「是は面白い」と余も簡単に賞めた。

「杢兵衛はどうも偽物が多くて、――その糸底を見て御覧なさい。銘があるから」と云ふ。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かさうに写つて居る。首を曲げて、覗き込むと、杢の字が小さく見える。銘は鑑賞の上に於て、左のみ大切のものとは思はないが、好事者は余程是が気にかゝるさうだ。茶碗を下へ置かないで、其儘口へつけた。濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しづくづゝ落として味はつて見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得て居るが、あれは間違ひだ。舌頭へぽたりと載せて、清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液は殆どない。只馥郁たる匂が食道から胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用ひるは卑しい。水はあまりに軽い。玉露に至つては濃やかなる事、淡水の境を脱して、顎を疲らす程の硬さを知らず、結構な飲料である。眠られぬと訴ふるものあらば、眠らぬも、茶を用ひよと勧めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚くべきものと思ふ。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだ儘、逃れ出づる路を失つた様な感じである。中には何も盛らぬがいゝ。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちと許り見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を――うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好きぢや。時にあなた、西洋画では襖抔はかけんものかな。かけるなら一つ頼み

たいがな」

かいて呉れなら、かゝぬ事もないが、此和尚の気に入るか入らぬかわからない。折角骨を折つて、西洋画は駄目だ抔と云はれては、骨の折り栄がない。

「襖には向かないでせう」

「向かんかな。さうさな、此間の久一さんの画の様ぢや、少し派手過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれは丸でいたづらです」と若い男はしきりに、恥づかしがつて謙遜する。

「その何とか云ふ池はどこにあるんですか」と余は若い男に念の為め尋ねて置く。

「一寸観海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。――なあに学校に居る時分、習つたから、退屈まぎれに、やつて見た丈です」

「観海寺と云ふと……」

「観海寺と云ふと、わしの居る所ぢや。いゝ所ぢや、海を一目に見下ろしての――まあ逗留中に一寸来て御覧。なに、此所からはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるぢやらうが」

「いつか御邪魔に上がつてもいゝですか」

「あゝいゝとも、何時でも居る。こゝの御嬢さんも、よう、来られる。――御嬢さんと云へば今日はお那美さんが見えんやうだが――どうかされたかな、隠居さん」

「どこぞへ出ましたかな。久一、御前の方へ行きはせんかな」

「いゝや、見えません」

「又独り散歩かな、ハヽヽヽ。お那美さんは中々足が強い。此間法用で礪並迄行つたら、姿見橋の所で――どうも、善く似とると思つたら、お那美さんよ。尻を端折つて、草履を穿いて、和尚さん、何を愚図々々、どこへ行きなさると、いきなり、驚かされたて、ハヽヽヽ。御前はそんな形姿で、地体どこへ、行つたのぞいと聴くと、今芹摘みに行つた戻りぢや、和尚さん少しやらうかと云うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んで、ハヽヽヽヽ」

「どうも、……」と老人は苦笑ひをしたが、急に立つて「実は是を御覧に入れる積りで」と話しを又道具の方へそらした。

老人が紫檀の書架から、恭しく取り下ろした紋緞子の古い袋は、何だか重さうなものである。

「和尚さん、あなたには、御目に懸けた事があつたかな」

「なんぢや、一体」

「硯よ」

「へえ、どんな硯かい」

「山陽の愛蔵したと云ふ……」

「いゝえ、そりや未だ見ん」

「春水の替へ蓋がついて……」

「そりや、未だのやうだ。どれ／＼」

老人は大事さうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。

「いゝ色合ぢやなう。端渓かい」

「端渓で鴝鵒眼が九つある」

「九つ？」と和尚大いに感じた様子である。

「是が春水の替へ蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。

「成程。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手ぢやて」

「矢張り杏坪の方がいゝかな」

「山陽が一番まづい様だ。どうも才子肌で俗気があつて、一向面白うない」

「ハヽヽヽ。和尚さんは、山陽が嫌ひだから、今日は山陽の幅を懸け替へて置いた」

「ほんに」と和尚さんは後を振り向く。床は平床を鏡の様にふき込んで、錆気を吹いた古銅瓶

には、木蘭を二尺の高さに活けてある。軸は底光りのある古錦襴に、裝幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついて居るから、字の巧拙に論なく、紙の色が周圍のきれ地とよく調和して見える。あの錦襴も織りたては、あれ程のゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて、金絲が沈んで、華麗な所が滅り込んで、澁い所がせり出して、あんないゝ調子になつたのだと思ふ。焦茶の砂壁に、白い象牙の軸が際立つて、兩方に突つ張つて居る手前に、例の木蘭がふはりと浮き出されて居る外は、床全體の趣は落ち附き過ぎて寧ろ陰氣である。
「徂徠かな」と和尚が、首を向けた儘云ふ。
「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善からうと思うて」
「それは徂徠の方が遙かにいゝ。享保頃の學者の字はまづくても、何處ぞに品がある」
「廣澤をして日本の能書ならしめば、われは則ち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だつたかな、和尚さん」
「わしは知らん。さう威張る程の字でもないて、ワハヽヽヽ」
「時に和尚さんは、誰を習はれたのかな」
「わしか。禪坊主は本も讀まず、手習もせんから、なう」
「しかし、誰ぞ習はれたらう」
「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりぢや。それでも人に頼まれゝばいつでも、書きます。ワハヽヽヽ。時に其端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。
　とう〳〵緞子の袋を取り除ける。一座の視線は悉く硯の上に落ちる。厚さは殆ど二寸に近いから、通例のものの倍はあらう。四寸に六寸の幅も長さも先づ並と云つてよろしい。蓋には、鱗のかたに研きをかけた松の皮を其儘用ひて、上には朱漆で、わからぬ書體が二字許り書いてある。
「此蓋が」と老人が云ふ。「此蓋が、只の蓋ではないので、御覽の通り、松の皮には相違ないが……」
　老人の眼は余の方を見て居る。然し松の皮の蓋に如何なる因緣があらうと、畫工として余はあまり感服は出來んから、
「松の蓋は少し俗ですな」
と云つた。老人はまあと云はぬ許りに手を擧げて、
「只松の蓋と云ふ許りでは、俗でもあるが、是はその何ですよ。山陽が廣島に居つた時に庭に生えて居た松の皮を剝いで山陽が手づから製したのですよ」
　成程山陽は俗な男だと思つたから、
「どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れさうなものですな。わざと此鱗のかた抔をぴかぴか研ぎ出さなくつても、よささうに思はれますが」と遠慮のない所を云つて退けた。
「ワハヽヽヽ。左樣よ、此蓋はあまり安つぽい樣だな」と和尚は忽ち余に贊成した。
　若い男は氣の毒さうに、老人の顏を見る。老人は少々不機嫌の體に蓋を拂ひのけた。下から愈硯が正體をあらはす。
　もし此硯に就いて人の眼を峙つべき特異の點があるとすれば、其表面にあらはれたる匠人の刻である。眞中に袂時計程な丸い肉が、縁とすれ〳〵の高さに彫り殘されて、是を蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各鴝鵒眼を抱へて居る。殘る一個は背の眞中に、黄な汁をしたゝらした如く煮染んで見える。背と足と縁を殘して餘る部分は殆ど一寸餘の深さに掘り下げてある。墨を湛へる所は、よもや此塹壕の底ではあるまい。たとひ一合の水を注ぐとも此深さ

を充たすには足らぬ。思ふに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨に磨り去るのだらう。夫でなければ、名は硯でも、其實は純然たる文房用の裝飾品に過ぎぬ。
　老人は涎の出さうな口をして云ふ。
「此肌合と、此眼を見て下さい」
　成程見れば見る程いゝ色だ。寒く潤澤を帶びたる肌の上に、はつと、一息懸けたなら、直ちに凝つて、一朶の雲を起こすだらうと思はれる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云はんより、眼と地の相交はる所が、次第に色を取り替へて、いつ取り替へたか、殆ど吾眼の欺かれたるを見出だし得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹の奥に、隱元豆を、透いて見える程の深さに嵌め込んだ樣なものである。眼と云へば一個二個でも大變に珍重される。九個と云つたら、殆ど類はあるまい。しかも其九個が整然と同距離に按排されて、恰も人造のねりものと見違へらるゝに至つては固より天下の逸品を以て許さざるを得ない。
「成程結構です。觀て心持ちがいゝ許りぢやありません。かうして觸つても愉快です」と云ひながら、余は隣の若い男に硯を渡した。
「久一に、そんなものが解るかい」と老人が笑ひながら聞いて見る。久一君は、少々自棄の氣味で、
「分りやしません」と打ち遣つた樣に云ひ放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めて居ては、勿體ないと氣が附いたものか、又取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻した後、とう〳〵之を恭しく禪師に返却した。禪師は篤と掌の上で見澄ました末、夫では飽き足らぬと考へたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の背へこすりつけて、光澤の出た所を頻りに賞翫して居る。
「隱居さん、どうも此色が實に善いな。使うた事があるかの」
「いゝや、滅多には使ひたうないから、まだ買うたなりぢや」
「さうぢやろ。此樣なのは支那でも珍しからうな、隱居さん」
「左樣」
「わしも一つ欲しいものぢや。何なら久一さんに頼まうか。どうかな、買うて來て御呉れかな」
「へヽヽヽ。硯を見附けないうちに、死んで仕舞ひさうです」
「本當に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」
「二三日うちに立ちます」
「隱居さん。吉田迄送つて御やり」
「普段なら、年は取つとるし、まあ見合はす所ぢやが、ことによると、もう逢へんかも、知れんから、送つてやらうと思つて居ります」
「伯父さんは送つて呉れんでもいゝです」
　若い男は此老人の甥と見える。成程どこか似て居る。
「なあに、送つて貰ふがいゝ。川船で行けば譯はない。なあ隱居さん」
「はい、山越しでは難儀だが、廻り路でも船なら……」
　若い男は今度は別に辭退もしない。只默つて居る。
「支那の方へ御出でですか」と余は一寸聞いて見た。
「えゝ」
　えゝの二字では少し物足らなかつたが、其上掘つて聞く必要もないから控へた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を變へて居る。
「なあに、あなた。矢張り今度の戰爭で――これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は當人に代つて、滿洲の野に日ならず出征すべき此青年の運命を余に語げた。此の夢の樣な詩の樣な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めて居たのは間違ひである。現實世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古したる孤村に迄逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何萬分の一かは、此青年の動脈から迸る時が來るかも知れない。此青年の腰に吊る長き劍の先から煙となつて吹くかも知れない。而して其青年は、夢みる事より外に、何等の價値を、人生に認め得ざる一畫工の隣りに坐つて居る。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臟の鼓動さへ聞き得る程近くに坐つて居る。其鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮が今既に響いて居るかも知れぬ。運命は卒然として此二人を一堂のうちに會したるのみにて、其他には何事をも語らぬ。

九

「御勉強ですか」と女が云ふ。部屋に歸つた余は、三脚几に縛り附けた、書物の一册を抽いて讀んで居た。

「御這入りなさい。ちつとも構ひません」

女は遠慮する氣色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいゝ頸の色が、あざやかに、抽き出て居る。女が余の前に坐つた時、此頸と此半襟の對照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、六づかしい事が書いてあるでせうね」

「なあに」

「ぢや何が書いてあるんです」

「さうですね。實はわたしにも、よく分らないんです」

「ホヽヽヽ。それで御勉強なの」

「勉強ぢやありません。只机の上へ、かう開けて、開いた所をいゝ加減に讀んでるんです」

「夫で面白いんですか」

「夫が面白いんです」

「何故？」

「何故つて、小說なんか、さうして讀む方が面白いです」

「餘つ程變つて入らつしやるのね」

「えゝ、些と變つてます」

「初めから讀んぢや、どうして惡いでせう」

「初めから讀まなけりやならないとすると、仕舞ひ迄讀まなけりやならない譯になりませう」

「妙な理窟だ事。仕舞ひ迄讀んだつていゝぢやありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を讀む氣なら、わたしだつて、左樣します」

「筋を讀まなけりや何を讀むんです。筋の外に何か讀むものがありますか」

余は、矢張り女だなと思つた。多少試驗してやる氣になる。

「あなたは小說が好きですか」

「私が？」と句を切つた女は、あとから「さうですねえ」と判然しない返事をした。あまり好きでもなささうだ。

「好きだか、嫌ひだか自分にも解らないんぢやないですか」

「小說なんか讀んだつて、讀まなくつたつて……」と眼中には丸で小說の存在を認めて居ない。

「それぢや、初めから讀んだつて、仕舞ひから讀んだつて、いゝ加減な所をいゝ加減に讀んだつて、いゝ譯ぢやありませんか。あなたの樣にさう不思議がらないでもいゝでせう」

「だつて、あなたと私とは違ひますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試驗をするのは此所だと思つたが、女の眸は少しも動かない。

「ホヽヽヽ解りませんか」

「然し若いうちは隨分御讀みなすつたらう」余は一本道で押し合ふのを已めにして、一寸裏へ廻つた。

「今でも若い積りですよ。可哀相に」放した鷹はまたそれかゝる。すこしも油斷がならん。

「そんな事が男の前で云へれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「さう云ふあなたも隨分の御年ぢやありませんか。そんなに年をとつても、矢つ張り、惚れたの、腫れたの、にきびが出來たのつてえ事が面白いんですか」

「えゝ、面白いんです、死ぬ迄面白いんです」

「おやさう。それだから畫工なんぞになれるんですね」

「全くです。畫工だから、小說なんか初めから仕舞ひ迄讀む必要はないんです。けれども、どこを讀んでも面白いのです。あなたと話しをするのも面白い。こゝへ逗留して居るうちは毎日話しをしたい位です。何ならあなたに惚れ込んでもいゝ。さうなると猶面白い。然しいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小說を初めから仕舞ひ迄讀む必要があるんです」

「すると不人情な惚れ方をするのが畫工なんですね」

「不人情ぢやありません。非人情な惚れ方をするんです。小說も非人情で讀むから、筋なんかどうでもいゝんです。かうして、御籤を引くやうに、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と讀んでるのが面白いんです」

「成程面白さうね。ぢや、今あなたが讀んで入らつしやる所を、少し話して頂戴。どんな面白い事が出てくるか伺ひたいから」

「話しちや駄目です。畫だつて話しにしちや一文の價値もなくなるぢやありませんか」

「ホヽ、夫ぢや讀んで下さい」

「英語でですか」

「いゝえ日本語で」

「英語を日本語で讀むのはつらいな」

「いゝぢやありませんか、非人情で」

これも一興だらうと思つたから、余は女の乞に應じて、例の書物をぽつりぽつりと日本語で讀み出した。もし世界に非人情な讀み方があるとすれば正にこれである。聽く女も固より非人情で聽いてゐる。

「情の風が女から吹く。聲から、眼から、肌から吹く。男に扶けられて艫に行く女は、夕暮のヹニスを眺むる爲か、扶くる男はわが脈に稻妻の血を走らす爲か。——非人情だから、いゝ加減ですよ。所々脫けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足しなすつても構ひません」

「女は男とならんで舷に倚る。二人の隔りは、風に吹かるゝリボンの幅よりも狹い。女は男と共にヹニスに去らばと云ふ。ヹニスなるドージの殿樓は今、第二の日沒の如く、薄赤く消えて行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔ヹニスを支配した人間の名ですよ。何代つゞいたものですかね。其御殿が今でもヹニスに殘つてるんです」

「それで其男と女と云ふのは誰の事なんでせう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。夫だから面白いのですよ。今迄の關係なんかどうでもいいでさあ。只あなたとわたしの樣に、かう一所に居るところなんで、其場限りで面白味があるでせう」

「そんなものですかね。何だか船の中の樣ですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいゝんです。